

東京都国分寺市

多喜窪遺跡発掘調査報告書

(武蔵国分寺跡第 758 次調査)

—西元町二丁目分譲住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査—



2024. 3

国分寺市教育委員会
国分寺市遺跡調査会

東京都国分寺市

多喜窪遺跡発掘調査報告書

(武蔵国分寺跡第 758 次調査)

—西元町二丁目分譲住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2024. 3

国分寺市教育委員会

国分寺市遺跡調査会



1. 調査地点遠景（南上空から）



2. 竪穴建物 SI827J 全景（北東から）



3. 竪穴建物 SI827J 出土縄文土器



4. 多喜窪遺跡（武蔵国分寺跡第 274 次調査）出土の縄文時代の土偶



5. 昭和20年代調査第二号竪穴住居趾出土土器の3D計測(口縁部基準展開)



6. 昭和20年代調査第二号竪穴住居趾出土土器の3D計測(胴部基準展開)



7. 昭和 20 年代出土と推定される土器の 3D 計測（口縁部基準展開）



8. 昭和 20 年代出土と推定される土器の 3D 計測（胴部基準展開）

序 文

国分寺市内では、現在 46 か所の埋蔵文化財包蔵地が把握されています。これらの遺跡で掘削を伴う土木工事を行う場合は、文化財保護法に基づいて届出や通知を提出し、工事の内容によっては地下に眠る遺構や遺物が壊されることがあります。土地に埋蔵されている文化財は、本来は地下でそのままの状態が保存されることが望ましい姿ですが、やむを得ず開発により壊してしまうことになる場合は、事前に発掘調査を行い、遺跡の状況を図面や写真等に記録し、出土した遺物は市で適切に保管します。そして、調査した成果は発掘調査報告書を刊行することで広く周知し、後世に継承していきます。

本書は、このような目的で令和 2 年度に西元町二丁目地内で分譲住宅建設に伴い実施した多喜窪遺跡の発掘調査（武蔵国分寺跡第 756・758 次調査）の成果を報告するものです。多喜窪遺跡は、国分寺崖線上の標高約 70 m の武蔵野段丘面上に立地し、戦後間もない昭和 20 年代に、都立国立高等学校の考古学研究部を指導し、国立音楽大学に人類学の教員として赴任していた甲野勇が縄文時代や奈良・平安時代の竪穴住居を発見したことで世に知られるようになった遺跡です。

特に、当時、国分寺の住職であった星野亮勝が掘り当てた多喜窪遺跡第一号竪穴住居跡から出土した勝坂式土器類は、昭和 53 年に国の重要文化財に指定され、現在は上野の東京国立博物館に常設展示されています。

近年も多喜窪遺跡の周辺では古い住宅の建て替えに伴う各種開発工事により、遺跡の発掘調査が行われる機会が増えてきています。これらの成果を本書で報告するにあたり、発掘調査から本書の刊行に至るまで多大な御協力をいただいた事業者ならびに施主の皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方、調査で御指導を賜りました有識者の皆様、そして日頃より埋蔵文化財の調査に御理解・御協力をいただいている市民の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

令和 6 年（2024） 3 月 31 日

国分寺市教育委員会
国分寺市遺跡調査会

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町二丁目 15 - 19 において令和 2 年度に実施した武蔵国分寺跡第 756・758 次調査の発掘調査に加え、昭和 20 年代に行われた多喜窪遺跡の成果をまとめた報告書である。
2. 第 758 次調査は分譲住宅建設を計画する事業者から、文化財保護法第 93 条に基づく届出が国分寺市教育委員会（以下、市教委と略）へ提出されたことを受けて実施した。市教委は届出内容から判断し、まず確認調査を公費で行ったところ（武蔵国分寺跡第 756 次調査）、区域内から縄文時代の竪穴建物が発見されたため事業者と協議を行い、遺構を破壊する範囲を対象として事業者負担による本調査を行うこととなった（武蔵国分寺跡第 758 次調査）。
3. 確認調査にかかる経費は、国分寺市が文化庁の「国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金」の採択を得て、費用の 1/2 を国、1/4 を東京都と国分寺市が負担し、本調査にかかる経費は、事業者が負担した。なお、確認調査の成果は、『令和 2 年度国分寺市埋蔵文化財調査概報』（令和 4 年 3 月、国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会発行）にて、すでに報告を行っている。
4. 本報告書の編集・印刷にかかる経費は国分寺市が負担した。
5. 令和 2 年度の発掘調査は、国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課の桂弘美・平塚恵介が担当した。
6. 本書の編集は坂詰秀一・国分寺市遺跡調査会調査団長の指導のもと、ふるさと文化財課の依田亮一が行い、寺前めぐみ・江里口省三・平塚恵介・野田悠真・富山宏水の協力を得た。執筆は下記の通り分担した。
依田亮一（国分寺市教育委員会） 第 1 章、第 2 章第 1・2 節、第 3 節（4）以外、第 3 章
中山真治（日本考古学協会会員） 第 2 章第 3 節（4）、第 4 章、第 6 章第 1・2 節
富田陽子（国分寺市遺跡調査会） 第 2 章第 3 節（1）～（3）・（5）・（6）※共著
野口 淳（公立小松大学次世代考古学研究センター特任准教授）・津田富夢（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、上山敦史（横浜市埋蔵文化財センター） 第 6 章第 3 節（3D 測量）
足立とも与（坂戸市教育委員会）・新免歳靖（東京学芸大学） 第 5 章第 1 節
株式会社パリノ・サーヴェイ 第 5 章第 2 節
7. 発掘調査における測量は、システムプログラム「リプログラフ」（株式会社こうそく）、本書の挿図・表等の作成には Microsoft®Word®・Excel®、Adobe®Illustrator®・Photoshop®・Indesign® の各ソフトを用いた。
8. 遺物や各種図面・写真類は、一括して国分寺市教育委員会で保管している。
9. 多喜窪遺跡の学史的記述箇所に関しては、吉田 1952 論考に基づいて、竪穴建物を「竪穴住居趾」、加曾利 E 式土器の細別型式を「加曾利 E I～III 式」の表記としている。
10. 発掘調査および出土品整理作業、報告書作成業務に従事した者は下記の通りである。なお、縄文土器の復元個体の一部については、接合・復元作業および実測・トレースを有限会社アルケー・リサーチに委託した。また、個別の遺物写真撮影は小野祐子・富田陽子、表紙および巻頭写真の遺物集合写真は富山宏水が撮影した。
桂 弘美・小野祐子・酒井美帆・田端栄治・高橋由見江・富田陽子・山下加奈子・津田富夢・上山淳史・林 析（国分寺市遺跡調査会）、梅山伸二・上村雄三（国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティア）
11. 発掘調査・出土品等整理作業・報告書作成作業では、下記の諸氏・関係機関から御指導・御協力を賜った（順不同・敬称略）。
大網信良・上敷領久・黒尾和久・小林謙一・小林尚子・合田恵美子・中根聖可・中野 純・山本孝司
トキオ文化財株式会社・株式会社 CEL・株式会社こうそく・有限会社アルケーリサーチ・東京都埋蔵文化財センター・東京学芸大学教育学部教育支援課程文化財科学分野・東京都教育庁地域教育支援部管理課・くにたち郷土文化館・国分寺市文化財保護審議会

国分寺市遺跡調査会構成員名簿

令和6年3月31日現在

—— 役員および監事 ——

会 長	坂誥 秀一	国分寺市文化財保護審議会会長
副 会 長	福嶋 司	国分寺市文化財保護審議会副会長
理 事	太田 和子	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	光永 功嗣	東京都教育庁地域教育支援部管理課長
専務理事	可児 泰則	国分寺市教育委員会教育部長
監 事	鈴木 徳子	東京都教育庁地域教育支援部管理課課長代理
監 事	真田 康幸	元国分寺市職員

—— 顧問および参与 ——

顧 問	井澤 邦夫	国分寺市長
参 与	古屋 真宏	国分寺市教育委員会教育長

—— 武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会 ——

委 員 長	坂誥 秀一	(考 古 学) 立正大学特別荣誉教授
委 員	藤井 恵介	(建 築 史) 東京大学名誉教授
委 員	佐藤 信	(古 代 史) 東京大学名誉教授
委 員	酒井 清治	(考 古 学) 駒澤大学名誉教授
委 員	松井 敏也	(保存科学) 筑波大学芸術系教授

—— 事務局 ——

事務局長	新出 尚三	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課長
事務局員	勝山 俊也	同課文化財普及担当係長
事務局員	松崎亜希子	同課文化財保護係主任
事務局員	宮崎 俊男	同課史跡係主任
事務局員	仲野 克彦	国分寺市遺跡調査会事務総括(出納員)

—— 調査団 ——

団 長	坂誥 秀一	立正大学特別荣誉教授
主任調査員	依田 亮一	ふるさと文化財課市史編さん担当係長(学芸員)
主任調査員	増井 有真	同課文化財保護係長(学芸員)
主任調査員	寺前めぐみ	同課史跡係長(学芸員)
調 査 員	中道 誠	同課文化財保護係主任(学芸員)
調 査 員	平塚 恵介	同課史跡係(遺跡調査員)
調 査 員	野田 悠真	同課史跡係(遺跡調査員・学芸員)
調 査 員	富山 宏水	同課史跡係(遺跡調査員・学芸員)
調 査 員	江里口省三	同課史跡係(史跡保存整備担当・学芸員)
調 査 員	早坂まゆ美	同課史跡係(史跡保存整備担当・学芸員)

本文目次

序文	i
例言	iii
国分寺市遺跡調査会構成員名簿	iv
本文目次	v
挿図目次・写真目次・表目次	vi
凡例	ix
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 調査地点をめぐる地理的・歴史的環境	2
第1節 遺跡の立地と地理的環境	2
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	5
第3節 多喜窪遺跡の学史的整理	10
第3章 調査の経過	24
第1節 調査の方法と基本層序	24
第2節 調査の経過	25
第4章 発見された遺構と遺物	26
第1節 縄文時代	26
(1) 竪穴建物と遺物の出土状態	26
(2) 土坑と遺物の出土状態	26
第5章 自然科学分析	81
第1節 植物珪酸体分析・炭化材同定・微細物分析・骨同定	81
第2節 黒曜石の産地推定分析	86
第6章 総括	95
第1節 多喜窪遺跡出土の縄文土器・石器の様相	95
第2節 多喜窪遺跡の竪穴建物と土坑の分布	99
第3節 多喜窪遺跡出土縄文土器の3D計測	111
あとがき	125
引用・参考文献	128
抄録	
奥付	

挿 図 目 次

第 1 図	武蔵国分寺跡第 756・758 次調査対象地	1	第 45 図	石器 (2)	54
第 2 図	武蔵野台地の地形区分と調査地点の位置	3	第 46 図	多喜窪遺跡出土黒曜石のクラスター分析結果	92
第 3 図	調査地点位置図	4	第 47 図	黒曜石の原産地	94
第 4 図	調査地点と周辺の埋蔵文化財包蔵地	6	第 48 図	多喜窪遺跡 (本地点) 出土の縄文時代石器組成	97
第 5 図	野川流域を中心とした縄文時代中期 の遺跡分布	8	第 49 図	打製石斧の形状投影図	98
第 6 図	多喜窪遺跡周辺の旧地形	10	第 50 図	打製石斧の長さ別分布図	98
第 7 図	昭和 20 年代に甲野勇が調査した多喜窪遺跡 位置図	12	第 51 図	短冊形・撥形打製石斧の石材別点数	98
第 8 図	第二号竪穴住居跡実測図	14	第 52 図	短冊形打製石斧の大きさ	98
第 9 図	多喜窪遺跡 昭和 20 年代調査出土土器	17	第 53 図	打製石斧の重さ (重量と長さの散布図)	98
第 10 図	多喜窪遺跡における発掘調査状況	18	第 54 図	重量の箱ひげ図	98
第 11 図	多喜窪遺跡・武蔵台東遺跡の縄文時代 竪穴建物分布図	21	第 55 図	多喜窪遺跡における縄文時代の遺構分布	100
第 12 図	昭和 61 年 (1986) 発行の『国分寺市史』 に示された多喜窪遺跡 A~D 地点の範囲	23	第 56 図	本地点周辺における土坑の土器出土状況	104
第 13 図	グリッドシステムおよび標準土層堆積状況図	24	第 57 図	本地点周辺における土坑の石器・石製品・ 土製品の出土状況	105
第 14 図	竪穴建物 SI827J	27	第 58 図	多喜窪遺跡 (武蔵国分寺跡第 274 次調査) 出土縄文土偶実測図	110
第 15 図	SI827J 柱穴の細別時期区分	28	第 59 図	アラインメント状況 (0001) その 1	114
第 16 図	土坑 SK3524J	28	第 60 図	アラインメント状況 (0001) その 2	114
第 17 図	SI827J 柱穴断面図	29	第 61 図	座標系と原点 (0001)	116
第 18 図	SI827J 杭状小穴	30	第 62 図	3D 計測データの概要	116
第 19 図	SI827J 遺物出土分布図①-全点-	33	第 63 図	計測部位	116
第 20 図	SI827J 遺物出土分布図②-石器 1-	33	第 64 図	5 面展開図・縦断面図・半截図 (カラーテクスチャー) (0001)	117
第 21 図	SI827J 遺物出土分布図③-石器 2-	34	第 65 図	5 面展開図 (陰影図: EDL フィルター) (0001)	117
第 22 図	SI827J 遺物出土分布図④-石器 3-	34	第 66 図	5 面展開図・縦断面図・半截図 (カラーテクスチャー) (0002)	118
第 23 図	SI827J 遺物出土分布図⑤-石材別-	35	第 67 図	5 面展開図 (陰影図: EDL フィルター) (0002)	118
第 24 図	SI827J 遺物出土分布図⑥-土器時期別 1-	35	第 68 図	5 面展開図・縦断面図・半截図 (カラーテクスチャー) (0003)	118
第 25 図	SI827J 遺物出土分布図⑦-土器時期別 2-	36	第 69 図	5 面展開図 (陰影図: EDL フィルター) (0003)	118
第 26 図	SI827J 遺物出土分布図⑧-土器時期別 3-	36	第 70 図	5 面展開図・縦断面図・半截図 (カラーテクスチャー) (0004)	119
第 27 図	SI837J 遺物出土分布図⑨-土器重量別-	37	第 71 図	5 面展開図 (陰影図: EDL フィルター) (0004)	119
第 28 図	SI827J 遺物出土分布図⑩-土器個体別 1-	37	第 72 図	円筒展開図 (カラーテクスチャー) (0001)	120
第 29 図	SI827J 遺物出土分布図⑪-土器個体別 2-	38	第 73 図	円筒展開図 (陰影図) (0001)	120
第 30 図	確認調査・本調査全体の遺物出土状況	39	第 74 図	円筒展開図 (カラーテクスチャー・陰影図) (0002)	120
第 31 図	土器 (1)	40	第 75 図	円筒展開図 (カラーテクスチャー) (0003)	121
第 32 図	土器 (2)	41	第 76 図	円筒展開図 (陰影図) (0003)	121
第 33 図	土器 (3)	42	第 77 図	円筒展開図 (カラーテクスチャー) (0004)	121
第 34 図	土器 (4)	43	第 78 図	円筒展開図 (陰影図) (0004)	121
第 35 図	土器 (5)	44	第 79 図	文様細部の陰影図と連続横断面 (0001)	122
第 36 図	土器 (6)	45	第 80 図	円筒展開データ (斜め俯瞰: 0001)	122
第 37 図	土器 (7)	46	第 81 図	円筒展開データの厚みの段彩図 (0001)	122
第 38 図	土器 (8)	47			
第 39 図	土器 (9)	48			
第 40 図	土器 (10)	49			
第 41 図	土器 (11)	50			
第 42 図	土器 (12)	51			
第 43 図	土器 (13)・土製品	52			
第 44 図	石器 (1)	53			

第 82 図	円筒展開データの傾斜方位角図 (0001) ……………	123	第 84 図	口縁部内外面の文様・突起の対応関係 (0001: 陰影図) ……………	124
第 83 図	口縁部内外面の文様・突起の対応関係 (0001: カラーテクスチャー) ……………	124	第 85 図	吉田格著『武蔵野の石器時代』 ……………	126

写 真 目 次

巻頭写真 1	調査地点遠景 (南上空から)		写真 14	遺物出土状況・覆土堆積状況 (北西から) ……………	55
巻頭写真 2	竪穴建物 SI827J 全景 (北東から)		写真 15	遺物出土状況・覆土堆積状況 (西から) ……………	55
巻頭写真 3	竪穴建物 SI827J 出土縄文土器		写真 16	遺物出土状況 (東から) ……………	56
巻頭写真 4	多喜窪遺跡 (武蔵国分寺跡第 274 次調査) 出土の 縄文時代の土偶		写真 17	遺物出土状況 (東から) ……………	56
巻頭写真 5	昭和 20 年代調査第二号竪穴住居跡出土土器の 3D 計測 (口縁部基準展開)		写真 18	炉焼土検出状況 (東から) ……………	56
巻頭写真 6	昭和 20 年代調査第二号竪穴住居跡出土土器の 3D 計測 (胴部基準展開)		写真 19	土坑 SK3524J 土層堆積状況 (南から) ……………	56
巻頭写真 7	昭和 20 年代出土と推定される縄文土器の 3D 計測 (口縁部基準展開)		写真 20	土坑 SK3524J (南から) ……………	56
巻頭写真 8	昭和 20 年代出土と推定される縄文土器の 3D 計測 (胴部基準展開)		写真 21	SI827J ピット 10・23 土層堆積状況 (西から) ……………	56
写真 1	国指定重要文化財多喜窪遺跡第一号竪穴住居跡 出土勝坂式土器〔現在、東京国立博物館所蔵・ 常設展示〕 ……………	12	写真 22	SI827J ピット 15 土層堆積状況 (南から) ……………	56
写真 2	国分寺市指定重要有形文化財 (考古資料) 国分寺 所蔵資料 (旧国分寺市文化財保存館資料) 〔現在、武蔵国分寺跡資料館にて保管・展示〕 ……	12	写真 23	SI827J ピット 19 土層堆積状況 (南から) ……………	56
写真 3	第二号竪穴住居跡 (中央は炉体土器) ……………	14	写真 24	土器 (1) ……………	57
写真 4	第一号竪穴住居跡出土の復元した土器 ……………	14	写真 25	土器 (2) ……………	58
写真 5	多喜窪遺跡出土の復元土器 (左から 1・3・6 つ目の土器は第一号竪穴住居跡、2つ目は [X 住 -1]、4つ目は [X 住 -2]、5つ目は [X 住 -3]) ……	14	写真 26	土器 (3) ……………	59
写真 6	第一号竪穴住居跡出土勝坂式土器 ……………	14	写真 27	土器 (4) ……………	60
写真 7	第一・二号以外の竪穴住居跡※写真 3～7 : [画像提供] くにたち郷土文化館 ……………	14	写真 28	土器 (5) ……………	61
写真 8	調査地点近景 (南東から、奥は府中街道) ……………	55	写真 29	土器 (6) ……………	62
写真 9	確認調査区北端部遺物出土状況 (南から) ……………	55	写真 30	土器 (7) ……………	63
写真 10	表土機械掘削作業 (南東から) ……………	55	写真 31	土器 (8) ……………	64
写真 11	竪穴建物出土遺物取り上げ作業 (北西から) ……	55	写真 32	土器 (9)・土製品 ……………	65
写真 12	竪穴建物覆土掘削作業 (北東から) ……………	55	写真 33	石器 (1) ……………	66
写真 13	遺物出土状況・覆土堆積状況 (西から) ……………	55	写真 34	石器 (2) ……………	67
			写真 35	石器 (3) ……………	68
			写真 36	石器 (4) ……………	69
			写真 37	石器 (5) ……………	70
			写真 38	木材・植物珪酸体・炭化種実・骨 ……………	85
			写真 39	黒曜石分析資料 (1) ……………	87
			写真 40	黒曜石分析資料 (2) ……………	88
			写真 41	竪穴建物 SI854J 推定プラン (白い点線は建物推定範囲) ……………	102
			写真 42	撮影機材のセッティング ……………	111
			写真 43	正位置の撮影例 (0001) ……………	112
			写真 44	逆位置の撮影例 (0003) ……………	112
			写真 45	横位置の撮影例 (0001) ……………	113

表 目 次

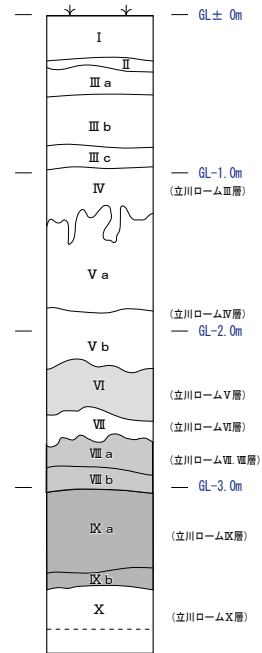
表 1	多喜窪遺跡と周辺の埋蔵文化財包蔵地一覧	7	表 14	多喜窪遺跡検出縄文時代竪穴建物一覧表	101
表 2	多喜窪遺跡における発掘調査一覧	19～20	表 15	次数別土坑検出数と遺物出土の土坑数	103
表 3	竪穴建物 SI827J 柱穴覆土観察表	31～32	表 16	多喜窪遺跡検出縄文時代土坑一覧表	106～108
表 4	土器観察表	71～77	表 17	対象資料一覧	111
表 5	SI827J 出土土製品（土製円板）観察表	77	表 18	撮影機材	111
表 6	石器観察表	78～80	表 19	撮影時の設定（共通）	112
表 7	植物珪酸体分析結果	81	表 20	撮影枚数と時間	112
表 8	種実同定結果	83	表 21	フォトグラメトリのソフトと機材	113
表 9	分析資料リスト	89～91	表 22	解析処理の設定（共通）	114
表 10	各生産地黒曜石の分析値と平均値	93	表 23	フォトグラメトリの結果 （計測精度・解像度、処理時間）	115
表 11	産地内訳	94	表 24	フォトグラメトリの結果（データサイズ）	115
表 12	6元素の平均値	94			
表 13	打製石斧の部位別点数	98			

凡 例

1. 基本層序

市域で慣例的に用いる標準層序区分は、表土（Ⅰ層）下の黒褐色土を黒色味が強い上層（Ⅱ層）と、暗褐色でローム層への漸移層を含む下層（Ⅲ層）とに細分しており、完新世富士テフラをⅡ層、ソフトローム層以下をⅢ層以下に充てる武蔵野台地の一般的な層序区分とは呼称が異なっている。本書で報告する調査対象地は、武蔵野段丘面と立川段丘面とに跨るが、堆積土層はほぼ共通した層序区分を呈している。

- Ⅰ 層 現表土及び旧表土。近世～現代の盛土、および耕作土。層厚約 30～50 cm。
- Ⅱ 層 黒褐色土。粒子が粗い。締まりはやや弱い。粘性は弱い。古代～中世の遺物を包含し、古代の遺構覆土に似る。層厚約 10～15 cmだが、市内では削平されていることが多い。
- Ⅲ a 層 黒褐色土。粒子はやや粗い。粘性はやや弱い。層厚約 10～15 cm。同層上面が本来的な古代の遺構確認面であるが、Ⅱ層と類似した土質であることから、この下層において遺構確認作業を行うことが多い。市内では遺存状況が悪い。縄文時代の遺物を包含する。
- Ⅲ b 層 暗褐色土。Ⅲ a 層より明るく、褐色味が強くなる。軟質で粘性はやや弱いが、Ⅲ c 層に近づくに連れて粘性が強くなる。縄文時代中期の遺物を包含する。層厚約 30～40 cm。本層上面が本来的な縄文時代の遺構確認面であるが、暗めの色調のためこの下層において遺構を確認することが多い。
- Ⅲ c 層 茶褐色土・暗黄褐色土。縄文時代早～前期の遺物を包含する。ローム層への漸移層で、赤色スコリアを多量に含む。層厚約 10～15 cm。本層上面で縄文時代の遺構を確認作業を行うことが多い。
- Ⅳ 層 黄褐色土。ソフトローム。Ⅴ層との境は凹凸が激しい。隙間が多いが、しまりがある。層厚約 15～25 cm。武蔵野台地の標準的な土層区分では立川ローム層（以下、立川ローム）Ⅲ層に相当する。
- Ⅴ a 層 黄褐色土。ハードローム。色調によって a・b の 2 層に分けられる。下層にいくに従い黄色味が薄くなる。その色調は漸移的に変化する。赤色・黒色スコリアを多量に含む。よくしまる。立川ロームⅣ a 層に相当する。
- Ⅴ b 層 暗灰褐色土。ハードローム。色調はⅤ a 層とⅥ層の間。立川ロームⅣ b 層に相当する。
- Ⅵ 層 暗褐色土。第一黒色帯。スコリアは細かく、全体に粒子が緻密。やや粘性を増す。しまりあり。立川ロームⅤ層に相当する。
- Ⅶ 層 黄褐色土。黄色味が強く、明るい。Ⅷ層へは漸移的に移行し、境界はやや不明瞭。しまりあり。削るとジャリジャリする。始良カルデラ由来の火山灰（A T 層）を含む。立川ロームⅥ層に相当する。
- Ⅷ a 層 褐色土。第二黒色帯上部。Ⅶ層下部に似て、やや暗くなり始めるところから本層とする。しまりあり。削るとジャリジャリする。黒色・赤色スコリアを含む。立川ロームⅦ a～Ⅶ b 層・Ⅷ層に相当する。
- Ⅷ b 層 暗褐色土。第二黒色帯上部。Ⅷ a 層よりさらに色調が暗くなる。粒子が細かく、緻密で粘性がある。しまりあり。黒色・赤色スコリアを多く含む。立川ロームⅧ a～b 層に相当する。
- Ⅸ a 層 暗褐色土。第二黒色帯下部。Ⅷ b 層よりさらに黒色味を増す。粒子は細かく、緻密で粘性が強くなる。しまりあり。立川ロームⅨ c 層に相当する。
- Ⅸ b 層 暗褐色土。第二黒色帯下部。成分はⅨ a 層と同じで、粒子は細かく、緻密で粘性が強い。しまりあり。下部 5～10 cm はⅨ a 層より明るい部分もある。立川ロームⅨ d 層に相当する。
- Ⅹ 層 黄褐色土。粒子極めて細かく、緻密で粘性のあるローム土。しまり強い。色調により上下に分層することもある。立川ロームⅩ層に相当する。



市内の標準的な層序

2. 遺跡略記号

遺跡名を表記する際、国分寺市No. 10・19遺跡（武蔵国分寺跡）は「MK」（武蔵国分寺の略称）、その他の遺跡は「K」（国分寺の略）に遺跡番号を付け、その後ハイフンを介して調査を手がけた順番（回数）を付けている。
表記例 「MK748」は、国分寺市No. 10・19（武蔵国分寺跡）第748次調査を意味する。

「K2-100」は、国分寺市No. 2（恋ヶ窪遺跡）第100次調査を意味する。

3. 遺構図面

調査地点位置図は、図面上が座標北を示す。グリッド表記は世界測地系第9系による。
特記のない限り、柱状図の縮尺は1/40に統一した。

4. 遺構略記号

遺構は下記の略記号を冠し、遺跡ごとに原則発見した順で連続番号を付して表記した。

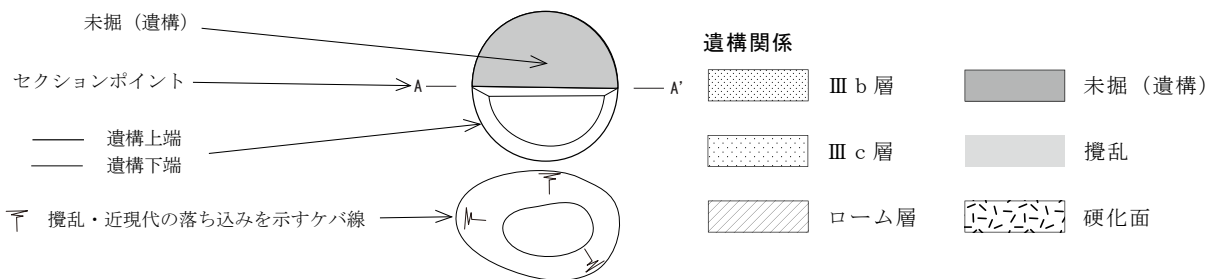
旧石器時代 ST：石器集中部（ユニット） SR：礫群 SC：炭化物・焼土集中部 SK(数字)P：土坑・小穴
縄文時代 SI(数字)J：竪穴建物 SU：屋外埋甕 SS：配石、集石、集石土坑 SK(数字)J：屋外炉、落とし穴、土坑、倒木痕 SX(数字)J：特殊遺構、性格不明遺構 PJ：小穴
歴史時代 SB：礎石建物、掘立柱建物 SA：塀（築地塀、掘立柱塀、柵列、柱穴列） SI：竪穴建物 SD：溝 SK：土坑 SE：井戸 SF：道路状遺構 SX：特殊遺構、性格不明遺構 SZ：墳墓（横穴墓、地下式横穴墓、火葬墓、土坑墓） P：小穴

5. 遺構写真

各写真のキャプションに併記した方位は、撮影視点からの方向を示す。

6. 用語

- 遺 構 … 遺跡中に残されている不動産的な生活痕跡。集落では、建物・井戸・溝・土坑などを指す。
可動性のある遺物とは区別される。
なお、「竪穴住居」という考古学用語については、本書では基本的に「竪穴建物」として扱うが、過去の研究史・学史的記述をする際に、原典の表記をそのまま引用しているところもある。
- 遺 物 … 可動性のある物質で、遺構とともに遺跡を構成する。石器・土器・陶磁器・木製品・骨角器・金属製品・石製品など様々な道具や装飾品を指す。
- 竪 穴 建 物 … 住居以外の用途（工房など）に使用した可能性もあることから「竪穴建物」とした。
- ト レ ン チ … 地表下の遺跡を探すために掘った溝状の発掘調査区で、試掘坑ともいう。
- 未 掘 … 検出された遺構を平面形（プラン）のみ確認して、掘削をしていない箇所。
- 攪 乱 … 後世に掘りこまれ、地山や遺物包含層、遺構等を壊している範囲。耕作による削平や、地下構造物（水道・ガス管等）を敷設するために掘り込まれた穴・溝等も含まれる。
- セクションポイント … 土層の堆積状況を観察するために設定したラインを示す。



遺物関係

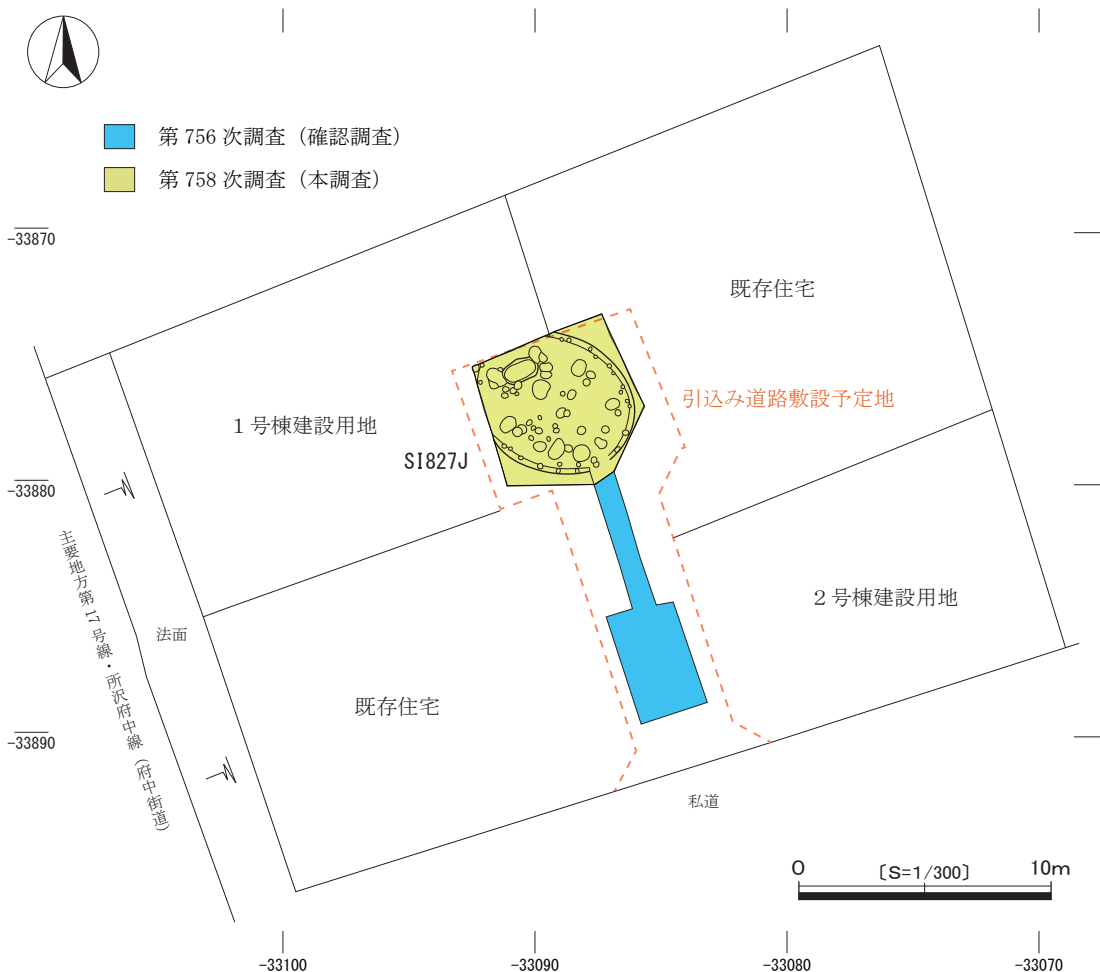
被熱 赤彩 剥落箇所 石器（磨面・砥面）

第1章 調査に至る経緯

調査地点周辺の市内西元町二丁目一帯は、昭和30年代以降に宅地開発が進み、現在も多くの戸建て・集合住宅が建ち並ぶ地域である。こうしたなか、令和2年6月1日付けで、開発事業者（以下、事業者）より国分寺市教育委員会（以下、市教委）へ文化財保護法第93条に基づく届出が提出された（国教教ふ収第146号）。届出に示された工事内容は、約400㎡の敷地に対して木造2階建ての分譲住宅を2棟建設するもので、個々の建物部分は現地表面より最深でも40cm程度の根切を計画しているのに対して、敷地南側の下水道本管へ接続するための埋設管付設予定部分（引込み道路）は約1.5～2.0mの掘削を予定するものであった。

当該地は、後述するように多喜窪遺跡（国分寺市No.11遺跡）と武蔵国分寺跡（市No.19遺跡）という周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内に含まれているため、市教委では過去に行われた発掘調査成果との照合から、少なくとも掘削工事が深くおよぼ引込み道路部分については、遺跡の存否を確認する必要があると判断して、その旨を東京都教育委員会（以下、都教委）ならびに事業者へ伝えた。その後、事業者・市教委は都教委から令和2年6月23日付けで開発行為に先駆けて確認調査を実施するよう通知を受理するとともに（国教教ふ収第173号）、現地で調査を開始すべく協議を並行して進めた。

敷地内は戸建て住宅が建つ4つのブロックに分割されているが、このうち南西と北東ブロックには既存住宅があり、本工事では北西（1号棟）と南東（2号棟）のブロックに住宅を建設し、敷地中央に南



第1図 武蔵国分寺跡第756・758次調査対象地

北方向へ道路を引き込む計画であったため、この道路部分と重なるように幅 1.0 m×延長 12.5 m のトレンチを設定した（第 1 図）。確認調査は 6 月 16～25 日までの実働 6 日間行い、調査にかかる費用は公費にて対応することとした（「武蔵国分寺跡第 756 次調査」として実施）。

確認調査では、重機を投入して地表から約 60cm の瓦礫を主体に含む表土層を取り除くと、表土直下から縄文土器を包含する暗褐色土が現われた。同層上面で精査しても遺構の存在は明確に捉えられることができなかったため、遺物を取り上げながら丁寧に人力で掘り下げていくと、トレンチ北端部分を中心として遺物が密集する黒味の強い土層が広がることを確認した。層中から出土した遺物のなかには、接合・復元が可能なほどの大型破片も含まれていたことから、黒味の強い範囲は縄文時代の竪穴建物であろうとの判断に至った。

そこで市教委は、確認調査期間中に事業者の視察を踏まえて、計画されている工事で竪穴建物を破壊する範囲については本調査（発掘調査）にかかる費用負担を事業者へ協力を求めたところ、承諾を得ることが叶い、確認調査に引き続き、そのまま本調査へと移行することとなった（以降の本調査は、確認調査と区別するために「武蔵国分寺跡第 758 次調査」と命名して実施した）。調査実務は確認調査・本調査ともに、市教委から国分寺市遺跡調査会（以下、調査会）に委託し、本調査にかかる契約も事業者・調査会間で締結した。

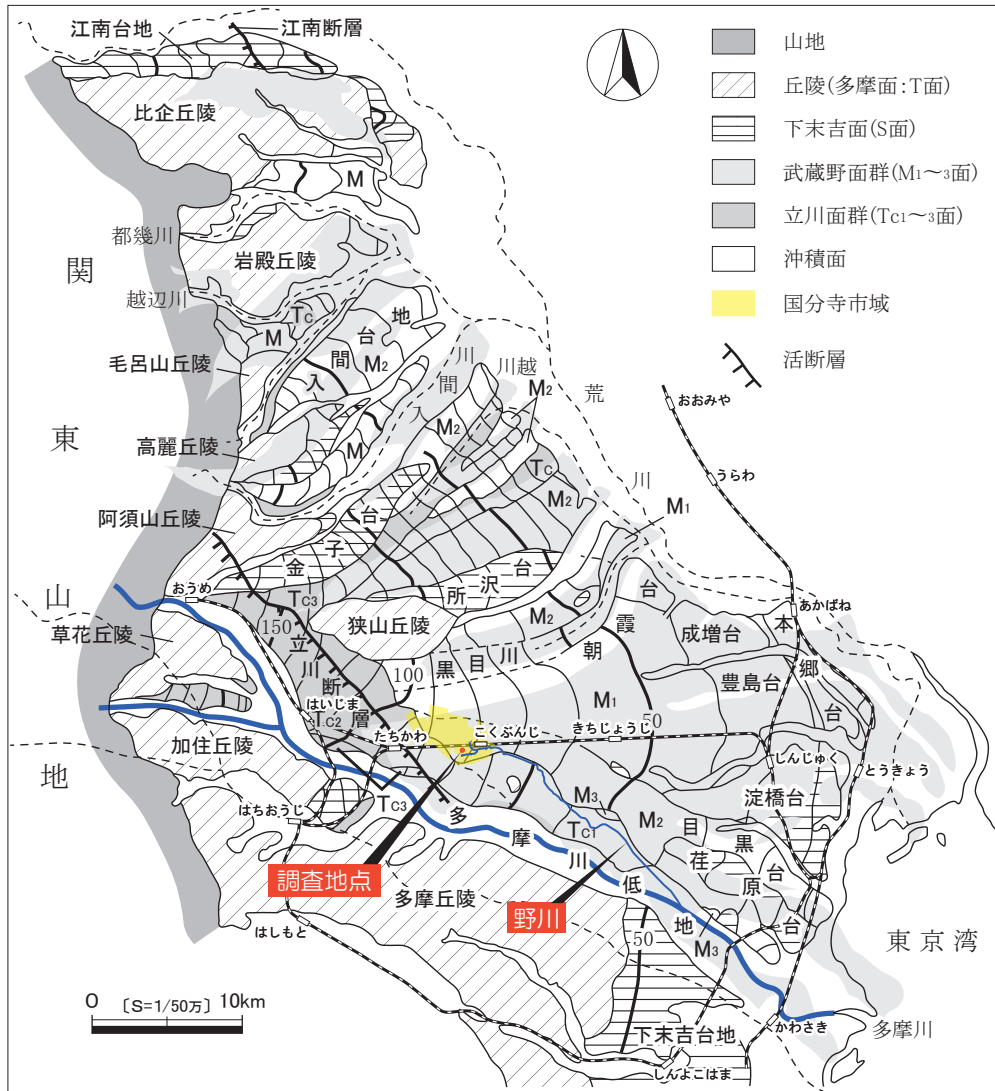
なお、確認調査では、市道に近接するトレンチ南側を中心に、工事で掘削が予定されている深度まで調査を行い、国分寺市の基本層序Ⅲb層から、Ⅳ層（ソフトローム）およびⅤb層（ハードローム）まで掘り下げを進めたところ、ローム層中から旧石器時代の遺構・遺物は検出されなかったため、本調査の対象も確認調査で把握した縄文時代の地層までとした。また、確認調査の概要については、別途、『令和 2 年度国分寺市埋蔵文化財調査概報』（令和 4 年 3 月、国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会発行）に掲載しているので、あわせて参照されたい。

第 2 章 調査地点をめぐる地理的・歴史的環境

第 1 節 遺跡の立地と地理的環境

調査地点は、東京都国分寺市西元町二丁目 15 番 19 に所在する。国分寺市は東京都のほぼ中央に位置し、東は小金井市、南は府中市・国立市、西は立川市、北は小平市とそれぞれ接している（第 3 図）。市域は東西 5.68km に対して南北約 3.86km と東西にやや長く、面積は 11.46 km² を有する。都心から JR 中央線で 30 分前後という地の利も手伝って、最近 10 年間でも微増の傾向にある市内人口は令和 5 年 8 月 1 日現在で 128,766 人を数え、都市近郊の住宅都市として発展を遂げている地域である。調査地点の周辺一帯は昭和 30 年代から早くも住宅建設が進み、とくに昭和 48 年の武蔵野線開通・西国分寺駅開業に伴って、駅に程近い立地から現在は多くの住宅が立ち並ぶ居住環境を形成している地域である。

ところで、都内多摩地域に含まれる国分寺市域は、巨視的には関東平野の南西部一帯に広がる武蔵野台地上に立地する。この台地は青梅市付近を頂点として扇形に形成された国内最大級の洪積台地で、北東を荒川、北西を荒川支流の入間川、南を多摩川の各河川と沖積低地によって画され、東西 50km、南北 20km の広がりを持つが、台地の南側は後期更新世（約 12 万年前～1 万年前）に多摩川が形成した扇状地を起源として、特に最終間氷期～最終氷期の海面変動に伴って多摩川流路沿いに河岸段丘が幾段も発達している（貝塚 1979・貝塚他編 2000、第 2 図）。こうしたなか市域の地勢は、貝塚らの地形区分に基づけば、北側の大部分が武蔵野段丘（M面）上の平坦地が占め、段丘の南端で急激に下降する「国

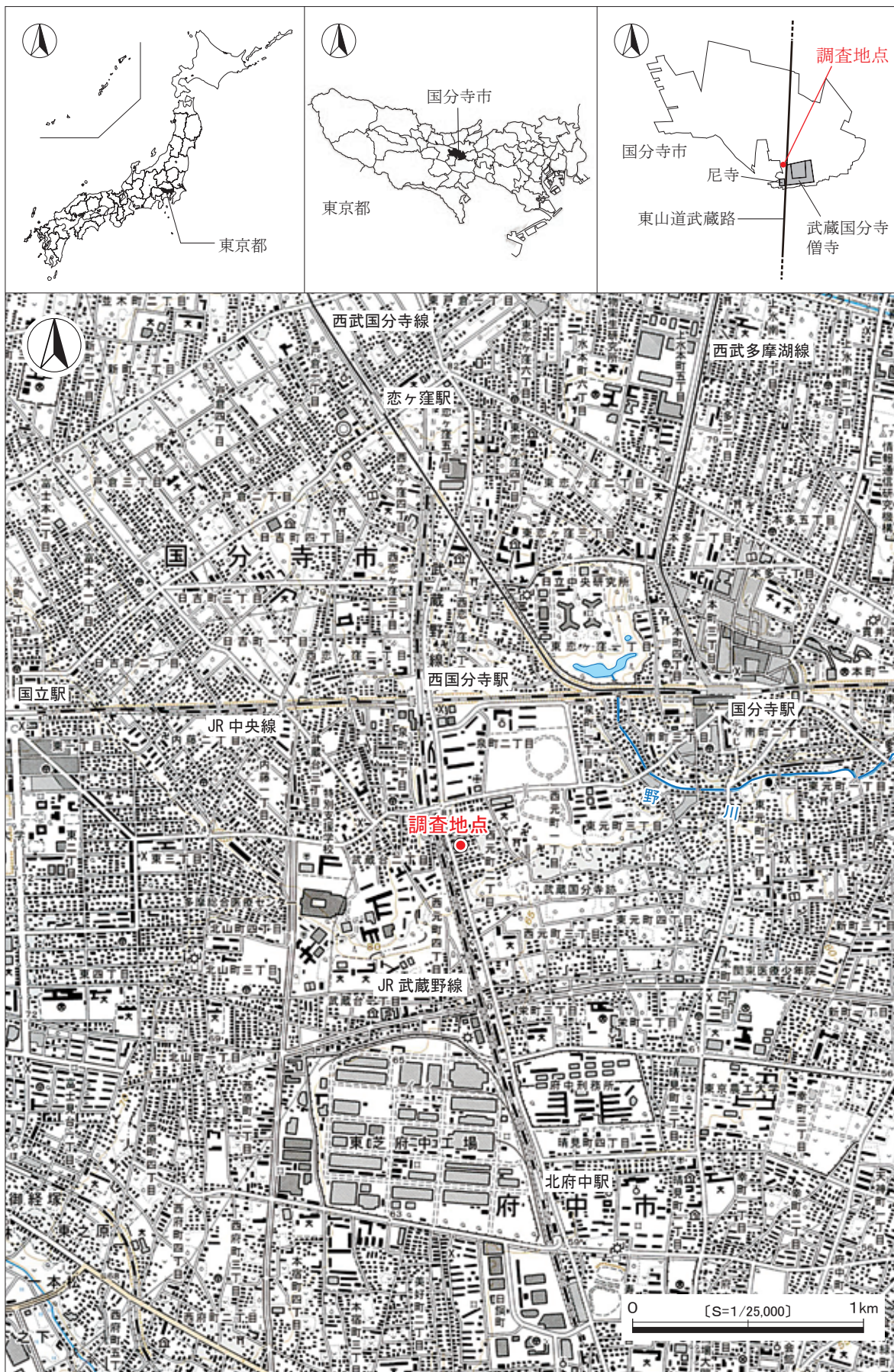


第2図 武蔵野台地の地形区分と調査地点の位置（基図は、貝塚他 2000 をトレース・加筆）

分寺崖線」を挟んで低位の立川段丘面（Tc 面）に連続する。そして関東ローム層の堆積厚から、武蔵野段丘面はM1～M3面、立川段丘面はTc1～Tc3面まで細分されるが、M1面は約8万年前、M2面は約6万年前、Tc1面は約4万年前、Tc3面は約1.5万年前に、それぞれ離水しており、主としてM2面とTc1面の境界である国分寺崖線は約6～4万年前に形成されたことになる。

また、通称「ハケ」と呼ばれる国分寺崖線の下には現在も湧水地が点在し、これらの湧水が集積して多摩川支流である野川の源流となっている。全体的に西高東低の緩やかな傾斜をもつ武蔵野台地上にあって、国分寺市域の標高は武蔵野段丘面上で約70～92m、立川段丘面上で約55～66mをはかり、国分寺崖線の比高差は調査地点の周辺で約15m程である。そして、付近の武蔵野段丘縁辺部には多摩川の名残川の影響から小支谷が幾筋も開析され、現在でこそ視覚的な湧水は枯渇しているが、調査地点から西方約100m離れた「黒鐘谷」に端を発して現在の国分寺本堂・おたかの道湧水園・真姿の池湧水群等の湧水を集めた清水川（元町用水）が国分寺崖線に沿って東流している。さらに、調査地点の北東約600m離れた「押切間」付近で、日立製作所中央研究所構内の東西両脇に走る「恋ヶ窪谷」・「さんや谷」からの湧水が集まって元町用水と合流し野川を形成する（滝口 1986a、第4図）。

上記のような市域をとりまく地理・地形的な環境にあって、調査地点は現況標高78.5mを有する国分寺崖線以北の武蔵野段丘面上に立地している。



第3図 調査地点位置図

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

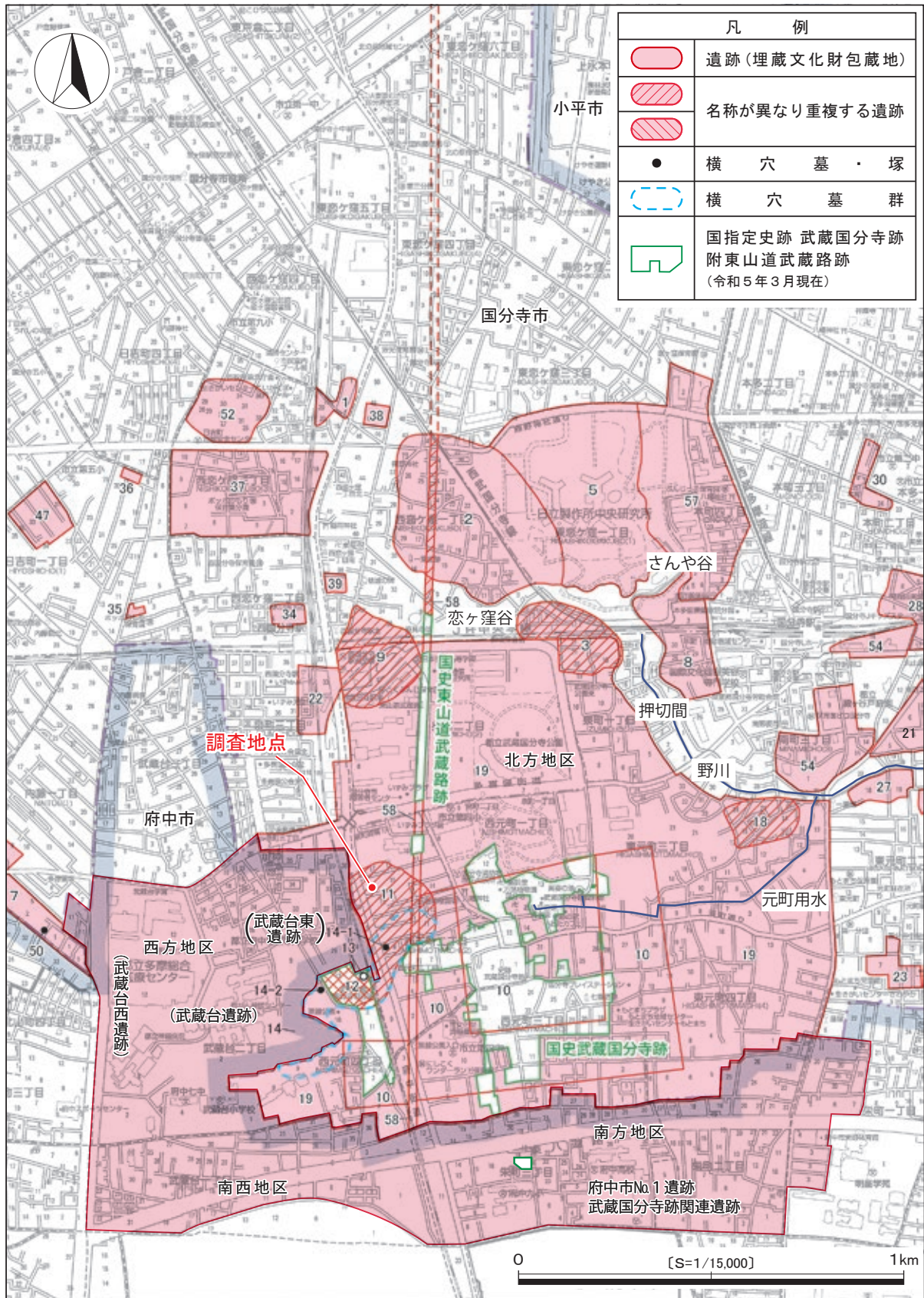
国分寺市内では、現在 46 か所に及ぶ周知の埋蔵文化財包蔵地が存在し、令和 6 年現在までに約 900 箇所を超える地点で発掘調査が行われている。このうち、本書で報告する多喜窪遺跡（国分寺市 No. 11 遺跡）は、国分寺崖線縁辺の武蔵野段丘面上を中心として東西 350 m×南北 350 m にわたって周知された遺跡である。包蔵地の西端は、先の「黒鐘谷」と称する開析谷が深く台地を浸食し、崖線下からは現在も時折水が染み出る湧水環境が存在する。縄文時代中期の遺跡として周知されている多喜窪遺跡であるが、奈良・平安時代の武蔵国分寺の主要堂舎が立ち並ぶ北方の台地上に位置しており、武蔵国分寺に関連する遺跡も広がっていることから、主に包蔵地の東側では武蔵国分寺跡（市 No. 19 遺跡）としても二重に登録されている。同様に包蔵地の南西側も、中世寺院跡ならびに塚として周知している伝祥応寺跡（市 No. 13 遺跡）や市 No. 14 遺跡とも登録が重複している。

一方、包蔵地の西端は、国分寺市と府中市の行政境が南北直線状に走行しており、府中市側では武蔵国分寺関連遺跡・武蔵台東遺跡として周知されているが、多喜窪遺跡とは地形的には連続しており、本来は一体の遺跡として把握できる。そこで、以下では行政境の有無に関わらず、多喜窪遺跡周辺の調査状況から時代ごとに歴史的環境を概観することとしたい。

【旧石器時代】

野川源流域にあたる国分寺市～府中市北部一帯では、武蔵野段丘縁辺部で旧石器時代の調査が数多く行われているが、立川ローム層第 X 層まで調査が及び、約 35,000 年前に比定される石器が出土した遺跡としては、多摩蘭坂遺跡（市 No. 7 遺跡）・日影山遺跡（武蔵国分寺跡北方地区、市 No. 9 遺跡）・府中市武蔵台遺跡（多摩総合医療センター地区）などがある。なかでも、都営住宅建設に伴う多摩蘭坂遺跡第 5 地点の調査では、立川ローム層第 X c～X a 層で 3 か所の石器集中が発見されて局部磨製石斧や大型打製石斧等が出土したが、このうち長さ 25.5cm、幅 13.5cm、厚さ 6.6cm、重量 1,646.2 g の大型打製石斧を含む 6 点の石斧群は、一括して国分寺市指定の重要文化財となっている（上敷領 1999）。同じく X a 層から剥片・石刃を出土した日影山遺跡（市 No. 9 遺跡、板野他 1999）、X c 層上部～X a 層で石斧を含む石器集中が 3 箇所発見された武蔵台遺跡（伊藤他 2010）とともに、周辺地域における萌芽期の人的活動を考えるうえで貴重な成果が上がっている。

また、武蔵国分寺跡（市 No. 19 遺跡）では、恋ヶ窪谷寄りの北方地区で、平成 4～13 年度にかけて JR 西国分寺駅周辺再開発事業に伴う発掘調査を東京都埋蔵文化財センター・西国分寺地区遺跡調査会・国分寺市遺跡調査会の 3 つの組織が分担して行い、それぞれの調査地点から旧石器時代の生活痕跡を検出している（福島他 2003・板野他 1999・上村他 2002・2003、板倉他 2006 等）。このなかで東京都埋蔵文化財センターの調査地点では、IX 層下部・VII 層・VI 層（AT 層含む）・V 層・IV b 層・IV a 層・III 層で 10 枚の文化層を捉え、第 2 文化層に比定する IV a 層からは黒曜石主体の尖頭器・ナイフ形石器をはじめ、石器 7,694 点と礫 1,197 点が出土するなど、最も資料数豊富な文化層と位置付けている（福島前掲）。その一方で、西側に接する日影山遺跡（西国分寺地区遺跡調査会）の様相を分析した国武貞克氏は、武蔵国分寺跡北方地区の第 2 文化層期は武蔵台遺跡・多摩蘭坂遺跡における活動の縮小期にあたり、野川源流域における旧石器時代の活動拠点が時代によって移動している様相を指摘している（国武 1999）。なお、立川段丘面上では、府中市側の武蔵国分寺跡南西地区の調査において、立川ローム層第 IV 層よりチャート製剥片を含む炭化物集中部、第 III 層から尖頭器・ナイフ形石器等 6 点の石器を伴う炭化物集中・自然湧出礫群、ローム漸移層から硬質頁岩の彫器・搔器を含む炭化物集中が確認されている（小川他 1999）。



第4図 調査地点と周辺の埋蔵文化財包蔵地 (2024年現在)

表1 多喜窪遺跡と周辺の埋蔵文化財包蔵地一覧

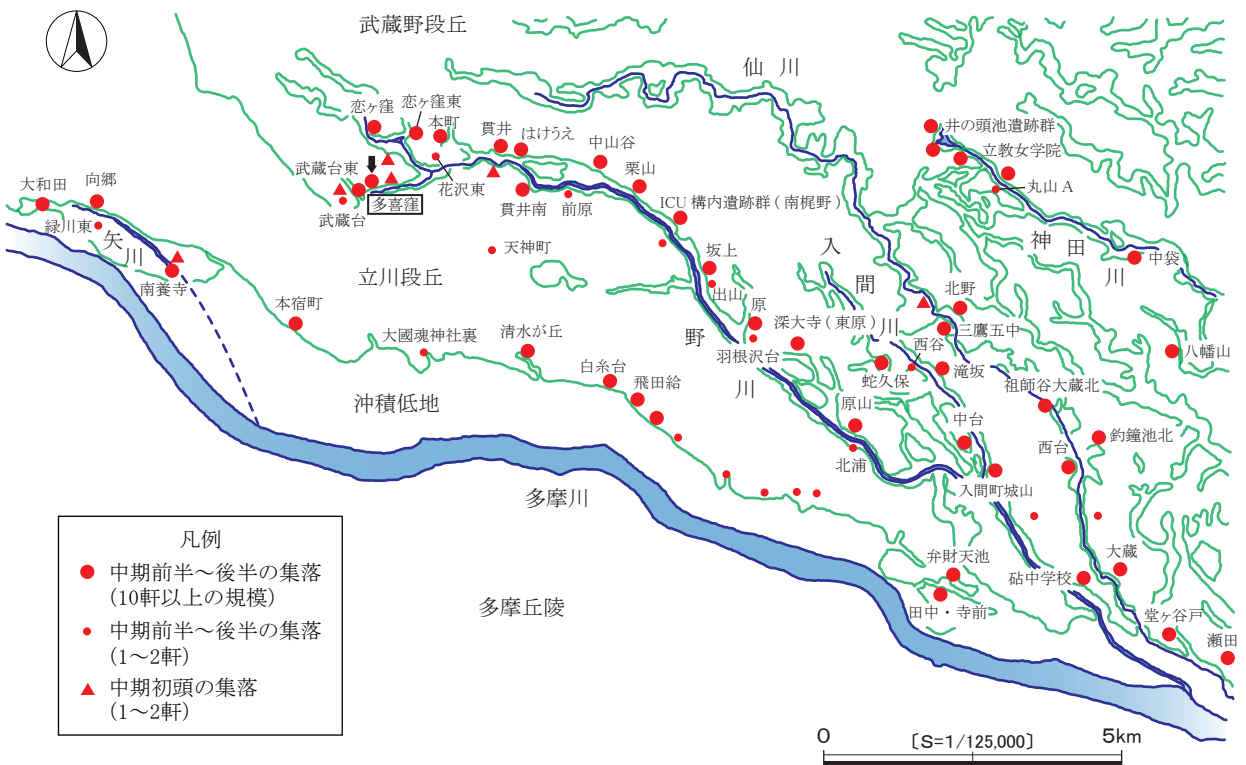
No	名称	種別	所在地	時代
1	熊之郷遺跡	集落跡	西恋ヶ窪三丁目19・20 西恋ヶ窪四丁目1・6・7付近	旧石器・縄文
2	恋ヶ窪遺跡	集落跡	西恋ヶ窪一丁目3・11～30、47～51 東恋ヶ窪一丁目・三丁目20・21付近	旧石器・縄文(早・中・後期) 奈良・平安・中世
3	恋ヶ窪南遺跡	集落跡	西恋ヶ窪一丁目1～5・51 東恋ヶ窪一丁目、泉町一丁目16～21	旧石器・縄文(早・中期)
5	羽根沢遺跡	集落跡	東恋ヶ窪一丁目付近 三丁目1～3・5・18～20付近	縄文(早・中期)・奈良・平安
7	多摩蘭坂遺跡	集落跡	内藤一丁目1・2・5・8～10 二丁目1・2・11付近	旧石器・縄文・奈良
8	花沢西遺跡	集落跡	南町三丁目24・26～30、本町四丁目2～3 泉町一丁目14、東恋ヶ窪一丁目付近	旧石器・縄文・弥生
9	日影山遺跡	散布地(包蔵地)	泉町二丁目8～10 西恋ヶ窪一丁目4・8・34～36付近	旧石器・縄文(中期) 奈良・平安・中世
10	武蔵国分寺跡 (僧尼寺)	社寺跡	西元町一丁目1・2・13～15 西元町二丁目1～7・9～14 西元町三丁目2～31 西元町四丁目1～5・9～10 東元町三丁目9・18～20 東元町四丁目6～10・19・20付近	奈良・平安
11	多喜窪遺跡	集落跡	西元町二丁目4・7～16 四丁目11・12付近	旧石器・縄文(中期)
12	伝祥応寺跡	社寺跡	西元町四丁目11・12付近	中世
13	No.13遺跡	塚	西元町四丁目11付近	中世
14 14-1 14-2	多喜窪横穴墓群 多喜窪横穴墓群1号 多喜窪横穴墓群2号	横穴墓	西元町二丁目7～12付近 西元町四丁目8～12付近	奈良
18	八幡前遺跡	散布地(包蔵地)	東元町三丁目12・14～16、24～27付近	縄文(中・後期)
19	武蔵国分寺跡	集落跡	東元町二丁目5～8・13～15・18 三丁目1～27・30～34、四丁目 西元町一丁目～四丁目 泉町一丁目5～11・17～21 泉町二丁目、三丁目1～4・6・16付近	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世
21	殿ヶ谷戸遺跡	集落跡	南町二丁目1～11・13・14付近 東元町一丁目13・38～40 二丁目19付近	旧石器・縄文(早・中期)
22	恋ヶ窪廃寺跡	社寺跡	泉町三丁目16・17・27・30～33・35・36付近	縄文・平安・中世
23	No.23遺跡	散布地(包蔵地)	東元町二丁目3・7・9付近	縄文・奈良・平安
27	No.27遺跡	散布地(包蔵地)	東元町二丁目18付近	縄文(中期)
28	本町(国分寺村石器時代) 遺跡	集落跡	南町二丁目17付近 本町二丁目1～9	旧石器・縄文(中期)・奈良・平安
30	No.30遺跡	散布地(包蔵地)	本多一丁目3・4 本町二丁目20・24・25付近	縄文・奈良・平安
34	No.34遺跡	散布地(包蔵地)	西恋ヶ窪二丁目3付近	縄文・奈良・平安
35	No.35遺跡	散布地(包蔵地)	日吉町一丁目3付近	縄文(中期)
36	No.36遺跡	散布地(包蔵地)	日吉町一丁目27・28付近	縄文
37	No.37遺跡	散布地(包蔵地)	西恋ヶ窪三丁目1～3・5～18付近	旧石器・縄文・奈良・平安
38	No.38遺跡	散布地(包蔵地)	西恋ヶ窪一丁目49付近	縄文・奈良・平安
39	No.39遺跡	散布地(包蔵地)	西恋ヶ窪一丁目37・38付近	縄文・奈良・平安
47	No.47遺跡	散布地(包蔵地)	日吉町一丁目31～33・35付近	縄文(中期)・奈良・平安
50	内藤新田横穴墓	横穴墓	内藤一丁目2	奈良
54	花沢東遺跡	集落跡	南町二丁目14～16・18 南町三丁目1・7～11付近	旧石器・縄文・奈良・平安
57	恋ヶ窪東遺跡	集落跡	本町四丁目4～12・14～25 東恋ヶ窪一丁目、二丁目1～3・5付近 三丁目1付近	旧石器・縄文(中期)・奈良・平安
58	東山道武蔵路	道路跡	西恋ヶ窪一丁目8・9・15～18・24・25・47 東恋ヶ窪三丁目21 泉町二丁目3・5～7・9・10 西元町二丁目3・4・7・10・11・13～17 三丁目7・8、四丁目1・2付近	奈良・平安

【縄文時代】

縄文時代の調査も旧石器時代と同様に武蔵野段丘縁辺部で数多くの調査実績がある。多喜窪遺跡は、考古学史的にも古くから調査が進められた遺跡であり、学史的な歩みは次節で触れることにしたいが、昭和20年代中頃に国分寺の前住職で郷土史家の星野亮勝らが調査を行ったところ、1軒の竪穴建物から完形の勝坂式土器12個体を発見した。これらの土器は共伴した石器7点・土偶1点・耳飾1点とともに国指定重要文化財となり、付近には中期を中心とする集落の広がり予測されることになった（吉田・土井1986）。その後の武蔵国分寺跡第251次調査等では、早期（撚糸文・押型文・条痕文）、前期（諸磯式）、中期（五領ヶ台・貉沢・阿玉台・勝坂・加曾利E・連弧文・曾利式）、後期（称名寺・堀之内・加曾利B式）の各時期に及んで遺物が出土し、竪穴建物8軒・屋外埋甕2基・土坑・ピット群等が報告されている（福田他2003、第11・55図）。

また、僧寺伽藍北側の武蔵国分寺跡北方地区でも、真姿の池湧水群を望む台地縁辺部の第563次調査では早期前半の撚糸文期を中心とする竪穴建物6軒と中期前半五領ヶ台式期の竪穴建物1軒（合田他2005）、現在の市立第四小学校建設に伴う第500次調査で五領ヶ台式期の竪穴建物2軒と加曾利E式期の竪穴建物1軒を確認し（上村他2002・2003）、遺物全体の時期様相は多喜窪遺跡と同様に早期から後期に至り、なかでも早期の遺物が豊富に出土している。このような傾向は台地一帯に及んでいるようで、JR西国分寺駅周辺再開発事業に伴う大規模調査においても、特に恋ヶ窪谷に面した台地北側の縁辺部では早期初頭撚糸文・押型文期の竪穴建物が51軒と密集して確認されている他（福島他2003）、少量ながら晩期（安行式）の遺物も認められた（福島他2003・板野他1999）。

一方、立川段丘面上における縄文時代の様相については、武蔵国分寺跡（市No.10・19遺跡）の東端部で八幡前遺跡（市No.18遺跡）として二重に周知している中～後期の遺跡が所在する以外、極めて断片的な調査状況でしかないが、下水道敷設に伴う調査で中枢伽藍北西付近の国分寺崖線下からは前期諸磯期の集石1基の他、中期（五領ヶ台・阿玉台・勝坂・加曾利E）、後期（称名寺・堀之内）の土器が出土し（上村他1982）、東僧坊の東方至近地では中期末～後期の北白川式上層に伴う敷石住居1軒・集



第5図 野川流域を中心とした縄文時代中期の遺跡分布

石土坑1基がそれぞれ確認されている（上敷領 1994）。また、府中市側の東八道路建設に伴う調査では、僧寺伽藍の南方地区で早期（野島・押型文・田戸上層・子母口式）の陥し穴状の土坑5基、前期（諸磯式）の石器集中・焼土、中期（五領ヶ台・貉沢・加曾利E・連弧文式）の遺物集中、後期（堀之内式）の土器が（岡崎 1985）、そして尼寺伽藍の南西地区でも前期（諸磯式）、中期（五領ヶ台・貉沢・阿玉台・勝坂式）、後期（称名寺・加曾利B式）の遺物とともに、土坑・集石・集石土坑・焼土・ピット群等の遺構が調査され（小川他 1999）、崖線際の湧水から約300～500m南へ離れた一帯にも縄文時代の土地利用が展開する様子が判明している。

【弥生・古墳時代】

国分寺市域における当該期の考古学的情報はきわめて少ない。弥生時代は、野川源流の恋ヶ窪谷を隔てた東側台地縁辺部にあたる花沢西遺跡（市No.8遺跡）で、昭和52年の第2地点の調査で遺物包含層中から中期前葉の壺形土器（須和田式）の破片が出土しているのみである（佐藤・上村 1986）。また続く古墳時代も土地利用は希薄であったようで、これまでのところ立川段丘面上では尼寺伽藍の周辺一帯から甕と壺形土器が1点ずつ、尼寺伽藍の北側で府中市域に含まれる武蔵野段丘面上では、武蔵台遺跡・武蔵台東遺跡からそれぞれ土坑に伴って甕・台付甕が数点出土している。これらはいずれも、器種や胎土、整形技法上の特徴から前期五領式期のもので、中期～後期にかけての遺物は現在までのところ発見されていない。ただ、武蔵国分寺創建期前夜の遺跡としては、崖線沿いに横穴墓が複数の地点で確認されている。そのうち、出土遺物から年代が想定できる横穴墓は2例あり、一つは昭和29年に松井新一によって調査が行われた尼寺伽藍北側の多喜窪横穴墓群（市No.14遺跡）で、玄室中央寄りに一辺1mほどの不整形形状の土坑を設け、底面に疎らに敷かれた木炭と礫の上から人骨と平安時代の緑釉陶器の唾壺が出土している。また、多喜窪横穴墓から西へ約500m離れた内藤新田横穴墓（市No.50遺跡）は、前庭・羨門・羨道・玄室まで全長8mを測る横穴墓で、前庭部から土師器坏2点、玄室から須恵器高台付坏2点と鉄釘が出土した。土師器坏の1点は灯明皿として転用され、須恵器は東海産で形態上の特徴から奈良時代前半頃の所産と考えられている（上村 1986）。

【奈良・平安時代～中世】

調査地点から南東へ約500m離れた立川段丘面上は、天平13年に聖武天皇が詔を發布して造営を進めた武蔵国分僧寺の中核伽藍域にあたる。昭和31・33年の日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会、ならびに昭和39～44年の国分寺市教育委員会による2度の学術調査によって主要堂塔の存在が明らかとされた武蔵国分寺は、北に聳える国分寺崖線を背にして東側に僧寺、西側に尼寺が建ち、武蔵国府と上野国府とを結ぶ古代官道（東山道武蔵路）が僧尼寺の間を南北に縦貫している。

僧寺は伽藍造営の設計の中心を金堂に据え、北から南へ講堂－金堂－中門－南門が中軸線を揃えながら並列し、僧房と鐘楼・経蔵は中軸線を介して左右シンメトリーに建ち、さらに中枢部・伽藍地・寺院地と称する周囲を溝と塀で囲繞した空間が三重に広がる。このうち最も外郭の寺院地は、その西側が東山道武蔵路の側溝を兼ね、約12mの道路幅員を挟んだ西側に尼寺は占地する。そして僧尼寺の周辺には国分寺を支えた人々が暮らす堅穴建物や掘立柱建物の集落域が、現在の国分寺市南部～府中市北部一帯に広がり、僧寺金堂を中心として東西約2km、南北約1.5kmの範囲に及んでいる。本調査地点は、僧寺寺院地の北西外にあたり、東山道武蔵路の西側に位置することになる（第4図）。次節でも触れるが、多喜窪遺跡の範囲はもとより、西側に隣接する府中市武蔵台東遺跡では多数の堅穴建物跡が検出されている。さらに、武蔵国分寺の伽藍認識が今日の理解にいたる以前は、尼寺の地はかつて西院跡と称して、僧寺を構成する「院」の一つに想定されていたが（稲村他 1923）、礎石・古瓦が散布する崖線上の伝祥応寺跡付近も有力な尼寺候補地であった（石村 1960）。そうしたなか、先の国分寺市教育委員会による昭和40年前後の調査で、崖線下から金堂と尼坊の発見におよんで尼寺の位置が確定するとともに、尼

寺北方の台地上でも発掘調査が行われ、板碑や中世陶器が出土したことから中世寺院跡の存在も想定された（滝口 1974）。多喜窪遺跡の包蔵地範囲のうち、南西部一帯は中世寺院跡・塚とも重畳しているが、調査では縄文土器も出土しており、未調査ながら下層には縄文時代の遺構・遺物の存在が想定される。

第3節 多喜窪遺跡の学史的整理

前節で触れたように、多喜窪遺跡は、本遺跡から出土した勝坂式土器が国の重要文化財に指定されるなど、縄文時代中期を代表する遺跡として全国的にも著名で、早くも戦後間もない時期から存在が知られていた。東京都建設局が昭和 28 年 3 月に測量した都市計画図「国分寺西南部」（縮尺 1/3,000）をみると、今回の調査地点を取り巻く周辺一帯の地は、現在のように宅地が進出している範囲は極めて疎らで、むしろ崖線斜面地から台地の縁辺部にかけて樹林地が広がる景観を呈していた様子がわかる（第6図）。今でこそ樹林地の殆どは切り開かれて一面の住宅地へ変貌し、建築工事等に伴う発掘調査も数多く行われてきているが、多喜窪遺跡における初期の調査を今一度振り返りながら、早くから本遺跡が着目されてきた学史的な経緯について、ここで整理しておくこととしたい。



第6図 多喜窪遺跡周辺の旧地形（基図は昭和 28 年 3 月東京都建設局測量 1/3,000 地形図「国分寺西南部」を使用）

(1) 昭和 20 年代の調査と縄文時代の「竪穴住居跡」発見地点

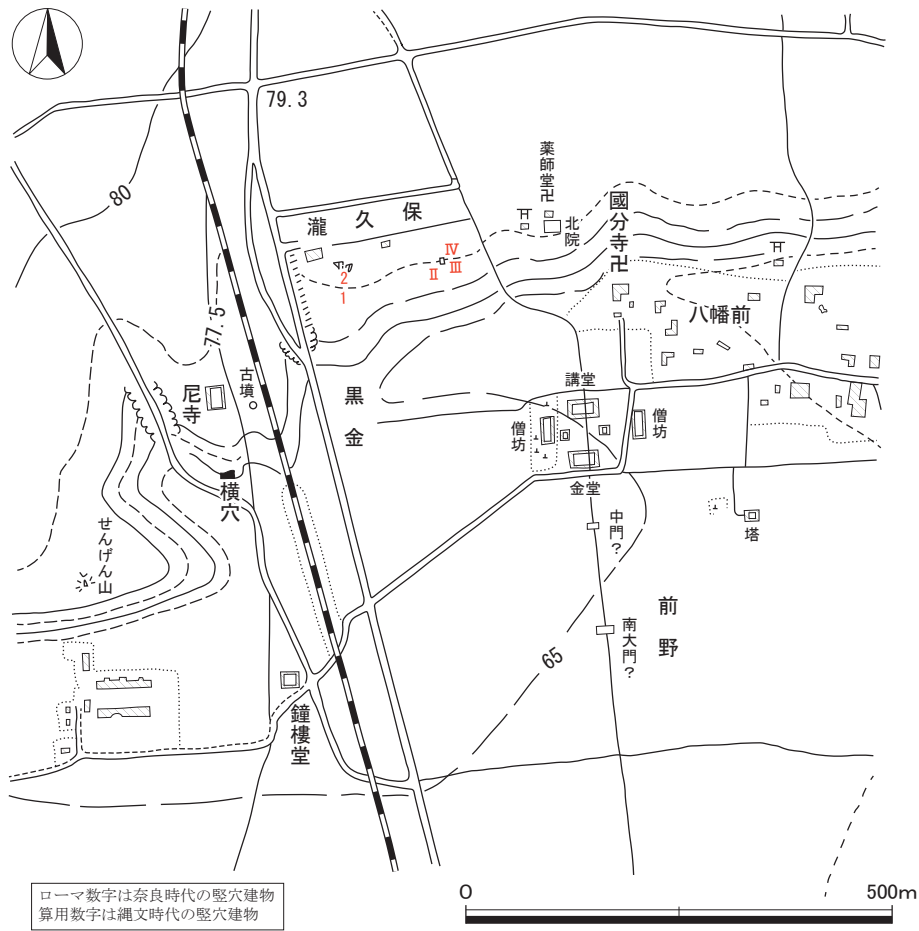
多喜窪遺跡がはじめて世に公表されたのは、昭和 25 年に甲野勇が雑誌『武蔵野』に著した「武蔵国分寺址附近の竪穴住居（豫報）」であった（甲野 1950）。武蔵国分寺北院址の西方約三町の丘の上には土師器や須恵器の破片が多く散布し、これらに混じって古瓦の破片も所々に散見されていたようで、昭和 23 年（1948）8 月 1 日から 2 日間にわたって武蔵野博物館と国立高等学校が共同で調査を実施したところ、古代の竪穴建物が 1 棟発見された⁽¹⁾。

竪穴建物は一辺約 4 m の方形を呈し、表土から床面までの深さは約 1 m、ローム層を約 30cm 掘り窪め、北壁中央には古代瓦をふんだんに使用したカマドを 1 基構築しており、出土した遺物は竪穴西北部付近を中心に鉢・皿・壺・甕等の土師器・須恵器が 10 数個体、そして鎌や鋤先・刀子等の鉄製品もみられたという。また、床面の各所に灰と焼土が堆積していることから焼失家屋の可能性を言及したことに加え、武蔵国分寺と寺院を支えた集落の関係性など多岐におよんで問題提起を投げかけた調査で、このように当初、多喜窪遺跡は古代の遺跡としての側面で見られた遺跡であった⁽²⁾。

そして、昭和 27 年には吉田格が同じ『武蔵野』誌上に、「東京都国分寺町中期縄文式竪穴住居跡調査概報」と題する論考を発表した（吉田 1952）。遺跡の名称は「東京都北多摩郡国分寺町大字瀧久保（多喜窪）にあるので瀧久保遺跡と稱する事にする」と命名され、甲野が豫報で述べた調査の「翌年（昭和 24 年）夏に引続き、同地点を発掘し、奈良時代の竪穴住居跡を発掘した際に、早期縄文式土器を少量発掘した」（括弧追記）と記した発掘調査の成果で、多喜窪遺跡は古代のみならず縄文時代の遺跡であることも認知されるようになった。そして、「昭和廿五年十一月三日より一週間に亘って、同じ台上の約百五〇米西方の地点を発掘して、中期縄文式竪穴と奈良時代竪穴を調査をし尚近くに中期の竪穴が存在するのを知ったので、昭和廿六年一月には勝坂式の竪穴住居を発掘調査した。昨年秋には立川市立高等学校の蒲田辰之氏も本遺跡を発掘して、竪穴を調査した」という経緯を触れている。つまり、甲野・吉田らの一連の記述による限りでは、昭和 23 年 8 月～昭和 26 年 1 月までの間に延べ 5 回にわたって発掘調査が行われた様子がうかがえる。

このうち、昭和 25 年 11 月の発掘調査では縄文時代の竪穴住居跡が見つかった。「第一号竪穴住居跡」と「第二号竪穴住居跡」は約 20 m を隔てた距離関係にあり、第二号が第一号の北東側に位置し、第一号からは多数の勝坂式が、片や奈良時代の竪穴と重複関係にあるという第二号からは加曾利 E II 式の土器がそれぞれ出土している。また、同論考中には炉跡と柱穴のみを発掘した「第三号竪穴住居跡」についても触れているが、「各種の事情で中止した」ようで、この遺構がいつ、どこの場所を調査して見つかった住居跡であるのか、さらには遺構自体の規模や特徴等の詳しい情報も不明であるが、吉田が「昭和廿六年一月には勝坂式の竪穴住居を発掘調査した」と述べた時の調査で発見された可能性は考えられる。なお、「第一号・二号竪穴住居跡」と古代の竪穴が発見された位置関係については、甲野勇が雑誌『武蔵野』第 32 巻第 3・4 号の「国分寺の史跡を訪ねる」で示した第 7 図のとおりである（甲野 1952）。

また、吉田は「昨年（昭和 25 年）秋には立川市立高等学校の蒲田辰之氏も本遺跡を発掘して、竪穴を調査した」（括弧追記）と紹介する発掘調査では、垂玉・扁平有孔硬玉の装飾具が 2 点出土している。その出土状況をめぐっては、「直径一米弱の円形の竪穴から発見され、竪穴の深さは表土から一米二、三十糎にして、ローム層を約三〇糎掘り下げ、床面は軟だから、土器を全然発見せず、この玉のみが発見されたのに重要な意義があり、この二つの玉は竪穴に恐らく人骨と共に埋葬されて、玉のみが残ったものではないかと考えられる」と報告しているが（吉田 1952）、遺構の規模や住居の貼り床を思わせるような硬い床面を形成していない調査時の所見を考慮すると、直径 1 m ほどの規模の土坑からこれらの装飾具は出土したものと思われる（第 57 図右上枠内参照）。



第7図 昭和20年代に甲野勇が調査した多喜窪遺跡位置図
(甲野1952をトレース・一部加筆)



写真1 国指定重要文化財 多喜窪遺跡第一号堅穴住居跡出土勝坂式土器〔現在、東京国立博物館所蔵・常設展示〕



写真2 国分寺市指定重要有形文化財(考古資料) 国分寺所蔵資料(旧国分寺市文化財保存館資料)〔現在、武蔵国分寺跡資料館にて保管・展示〕

(2) 第一～三号竪穴住居趾出土土器

さて、昭和 25～26 年の調査で発見された縄文時代の 3 軒の竪穴住居のうち、「第一号竪穴住居趾」から出土した国指定重要文化財の勝坂式土器（12 個体、写真 1）は、現在、東京国立博物館で所蔵・常設展示されており、実測図や写真等の詳細は昭和 61 年発行の『国分寺市史 上巻』で知ることができる（吉田・土井 1986）。また、その他の土器の多くは武蔵国分寺跡資料館で収蔵・保管し、市指定重要有形文化財（考古資料）「国分寺所蔵資料（旧国分寺市文化財保存館資料）」になっている（写真 2）⁽³⁾。これまで第一号竪穴住居趾出土土器類は、縄文時代中期の代表的な遺物として多くの書籍で紹介されているが、「第二号・三号竪穴住居趾」出土土器の詳細については不明な点が多かったのが現状であった⁽⁴⁾。

吉田格によると、加曾利 E II 式期の遺構であるという「第二号竪穴住居趾」は、「石器は打製石斧、磨石の外に土器は完形土器一個と、復元し得る土器二個を発掘し」、「爐趾には加曾利 E II 式土器の底部のない土器が埋めてあり、焼土がつまっていた」と報告されており（吉田 1952）、仮にこれら 3 個体の土器を〔2 住 -1〕、〔2 住 -2〕、〔2 住 -3〕と呼称して、現時点で資料の追跡調査を試みた結果について以下に紹介する。

〔2 住 -1〕

武蔵国分寺跡資料館所蔵資料（展示品）に、吉田が「第二号竪穴住居趾」出土土器として写真を掲げている深鉢と同じ個体を確認した（吉田 1952 の第 3 図 2）。また、甲野勇の『武蔵野を掘る』（甲野 1960）、『縄文土器大観 2』（小林 1988）にも多喜窪遺跡の土器として写真が掲載されている。ただし、土器そのものには多喜窪遺跡から出土したことを示す注記はない。

〔2 住 -2〕

武蔵国分寺跡資料館所蔵資料（展示品）に底部が欠損し、「市内出土」とキャプションが添えられた加曾利 E 式の深鉢がある。経緯は不明だが、『縄文土器大観 2』には本土器の写真が「多喜窪出土」のキャプション付きで紹介されている。吉田 1952 には写真は掲載されていない土器であるが、底部がないという特徴から「第二号竪穴住居趾」の爐趾に埋設された炉体土器そのものであろうか。

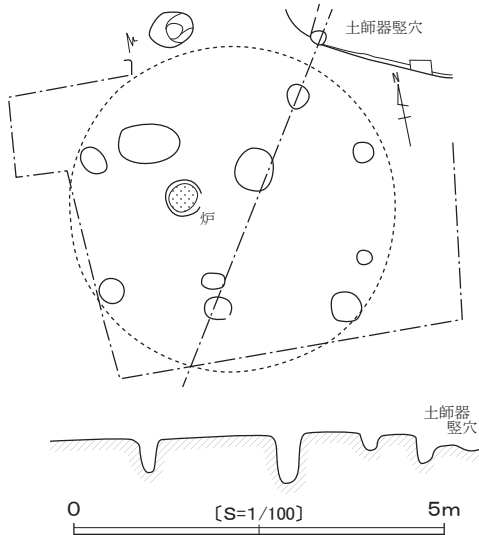
〔2 住 -3〕

武蔵国分寺跡資料館所蔵資料（展示品）のなかに「多喜窪出土」とキャプションが添えられた加曾利 E 式の深鉢がある。書籍等で写真が掲載されたこともなく、詳しい記録も残っていない。

〔2 住 -1〕以外の 2 個体は必ずしも積極的な確証を得られないものの、いずれも旧国分寺市文化財保存館資料で、かつ「多喜窪出土」の蓋然性の高い加曾利 E 式土器であることから、これら 3 点が吉田のいう「第二号竪穴住居趾」出土品と考えた。今回、3D 測量によって資料化を試みたので、その詳細は第 6 章第 3 節にて詳述する。

(3) 出土地点不詳の土器について

甲野 1960 では多喜窪出土土器の写真を 7 点掲載しているが（同書 P. 37 の加曾利 E 式 1 点：第二号竪穴住居趾、P. 39 の勝坂式 2 点：第 1 号竪穴住居趾、P. 41 の勝坂式 4 点：うち 1 点は第一号竪穴住居趾）、このうち P. 41 掲載の勝坂式 3 点は出土情報が不明である。くにたち郷土文化館所蔵の甲野勇寄贈資料のなかには、これらとほぼ同じ時期に撮影したと思われる、完形に復元された 6 個体の土器を板上に並べた集合写真があり（写真 3～7）、その内容と撮影時期から多喜窪遺跡の調査に関わるものであろう。出土情報不明の 3 点の勝坂式土器を便宜的に〔X 住 -1〕、〔X 住 -2〕、〔X 住 -3〕と命名して、資料の追跡調査した結果を以下に記すが、これらが第三号竪穴住居趾に帰属する遺物であるのか否かは判断できない。なお、くにたち郷土文化館で多喜窪関連資料の調査を行った際に、今まで知られていなかった竪穴建物の写真を発見した（写真 7）。吉田 1952 によると、「第三号の竪穴住居趾は奈良時代の竪穴と重複



第8図 第二号竪穴住居跡実測図
(甲野 1952 をトレース・一部加筆)



写真3 第二号竪穴住居跡 (中央は炉体土器)



写真4 第一号竪穴住居跡出土の復元した土器



写真6 第一号竪穴住居跡出土
勝坂式土器 (上下2枚とも)



写真5 多喜窪遺跡出土の復元土器 (左から1・3・6つ目の土器は第一号竪穴住居跡、2つ目は〔X住-1〕、4つ目は〔X住-2〕、5つ目は〔X住-3〕)



写真7 (左右とも) 第一・二号以外の竪穴住居跡



※写真3～7: [画像提供] くにたち郷土文化館

しているのので、炉趾と柱穴のみを発掘したが、各種の事情で中止をした」とあり、写真7に写る遺構も第3号竪穴住居趾とは考えづらいと推察した。

[X住-1]

武蔵国分寺跡資料館所蔵資料（展示品）に、集合写真に写る勝坂式土器の深鉢と同一個体を確認した。『縄文土器大観2』にも、「多喜窪出土」のキャプションを添えた写真が掲載されている。土器本体への注記やその他付属する記録類はなく、詳細な出土情報は得られないが、多喜窪遺跡出土とみて間違いなからう。岡本太郎の著書『日本の伝統』では胴部文様部分が掲載されており、本土器も3D測量で資料化を試みたので、詳細を第6章第3節にて後述する。

[X住-2]

武蔵国分寺跡資料館所蔵資料（特別収蔵庫内保管）のなかに所在を確認した。胴部以下を復元した石膏は破損し、さらに写真では確認できる把手は紛失している。本土器も岡本太郎の『日本の伝統』に写真が掲載されているが、資料の状態が悪く、今回は図化しなかった。

[X住-3]

土器自体が所在不明である。

(4) 昭和20年代調査出土土器の観察

昭和20年代調査の第二号竪穴住居趾出土土器と出土地点不詳の土器について解説する（第9図）。これらの土器は旧国分寺市文化財保存館資料であったが、現在は武蔵国分寺跡資料館資料となり常設展示に供されている。

[2住-1]

口径24.3cm、底径9.6cm、器高32.8cmを測るキャリパー形の深鉢形土器。色調はにぶい橙色（7.5YR）を呈する。口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯の3帯構成。口縁部にはRLの地紋縄文を施文後に2本単位の隆帯によりクランク文と渦巻文、剣先文が連結したモチーフを描く。胴部にはRLの地紋縄文を施文後、3か所から3本単位の沈線により、横位に区画する頸部から右斜方向に3箇所から懸垂する渦巻文を描く。加曾利E2式（11a期）。

[2住-2]

口径26.0cm、底径10.7cm、器高（推定高）37.2cmを測るキャリパー形の深鉢形土器。色調はにぶい黄褐色（10YR）を呈する。口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯の3帯構成。口縁部にはLの撚糸紋を横位に施文後、2本1単位の隆帯による横S字文が崩れて連結する渦巻文に変異する過程のモチーフを描く。2箇所残存するが欠損箇所があるため元は3単位であろう。胴部にはLの撚糸紋施文後、横位に区画する頸部から3本単位の細身の沈線による懸垂文（2箇所）と懸垂文を十字に繋ぐ渦巻文、懸垂文に接続しない横位の波状文、片流れの渦巻文などが施される。現状ではあたかも完形のように底部まで石膏復元されているが、先にも指摘したように、胴部中位以下残存部位が全く無く、下部が切断されていることから炉体土器として使用されていた蓋然性が高い。加曾利E1式（10a期）。

[2住-3]

口径17.0cm、底径6.6cm、器高（推定高）17.9cmを測るキャリパー形の小振りな深鉢形土器。胴下半～底部を欠損する。色調はにぶい黄褐色（10YR）を呈する。口縁部文様帯と胴部文様帯の2帯構成。器形は口縁がやや外傾ぎみとなり、胴部がやや寸詰まりとなる。法量の割に器壁はやや肉厚である。口縁部にはRの縄文施文後、1本隆帯とそれに沿わせるように粗雑な沈線による4単位の渦巻繫ぎ文を施す。渦巻間は半円状に区画される。胴部はRの縄文施文後、口縁部文様直下から2本1単位の懸垂文を垂下させる。加曾利E2式（11b期）。

[X住-1]

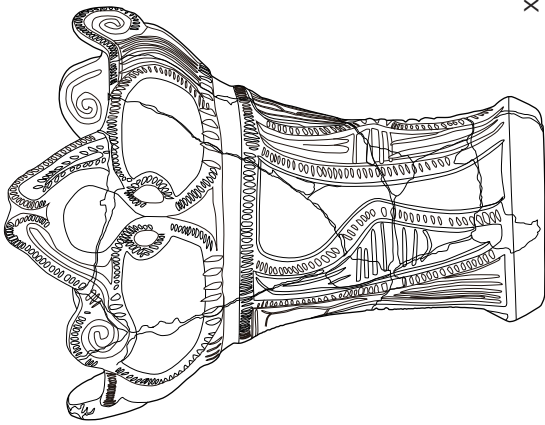
口径 29.0 cm、底径 16.0 cm、器高 37.1 cmを測る、底部がやや張り出すキャリパー形の深鉢形土器。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR) を呈する。本個体は岡本太郎が撮影した土器として知られ、既に石井匠により詳細な文様構造の分析が行われている (石井 2019)。口縁の文様は渦巻状の突起が全体に 4 単位に配され、1 か所に目、鼻、口の表現がない顔面把手風のやや大型の突起が付され、反対面にやや小さい突起が配される。いずれも口縁の突起から繋がる 2 個 1 単位の隆帯による楕円形区画文が配される。よって土器の正面と裏面の意識が読み取れる。通常楕円区画内には縦位沈線等を充填するのを通有とするが、本個体では無地としているため全体に簡素に見えるが、代わりに楕円区画外 1 か所にのみ縦位沈線を配する。口縁部と胴部文様の間は狭い無文帯を挟み、胴部には脇に沈線を沿わせる隆帯による 2 本 1 単位の弧状、蛇行状文を組み合わせた懸垂文を 4 か所に配するが、その他に弧状の懸垂文 1 本が配されている。しかもこの弧状文は他の 3 本とは向きが反転しており、石井は文様施文時の意識的行為とし「反復の拒否」と理解した。しかし、本個体は当初は 4 単位の区画の均等割を意図したが間が広く空き過ぎたため、その間を埋めるために止む無く 1 本追加したと解釈することも可能である。勝坂式では意図せず文様の均等割付に失敗した事例がみられる。全て懸垂文の下端は区画されることなく開放されている。胴部の懸垂文間には主に縦位、横位の集合沈線、三叉文を交互に充填するが 1 か所のみ三叉文と渦巻文が組み合わさる。また懸垂文間に沈線を充填しない区画が 1 か所ある。区画隆帯上にはほぼ全体に刻文が連続的に配されるが、口縁部付近に交互刺突文がわずかにみられるが、この時期によくみられる隆帯上に粗大化した交互刺突文がみられない。胴部文様はパネル文崩れの文様の系譜にあるとみられるものである。勝坂 3 式 (9 a 期)。

[X住-2]

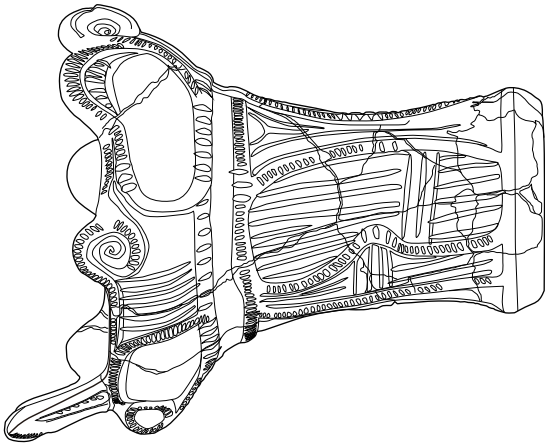
なお、現在破損しているため図示していない X 住 - 2 は、口縁部上端に 1 単位の大型の把手が付き、内弯する口縁部には 4 単位の横帯楕円区画文が配され、胴部には縦位の縄文が施されるもので 8 b ~ 9 a 期の所産である。形式的にも X 住 - 1 とほぼ同時期とみて良いため同一住居址から出土した蓋然性がある。

(5) 岡本太郎が撮影した多喜窪遺跡出土土器

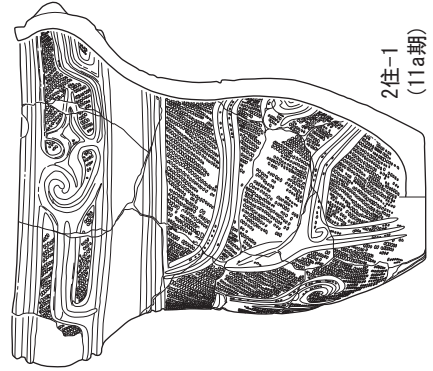
日本を代表する芸術家の岡本太郎は、縄文土器のダイナミックな造形美を評価したことでよく知られている。戦前、権威主義的な暗い日本美術界からの解放を求めて渡仏し、パリ大学で哲学、社会学、民族学等を学んだ岡本は、昭和 26 年に東京国立博物館の考古学資料ケースで縄文土器を見学した折、独特な器形や文様の造形に触れ、「激しく追いかぶさり重なりあって、隆起し、下降し、旋回する隆線紋、これでもかこれでもかと執拗に迫る緊張感、しかも純粹に透った神経の鋭さ、常々芸術の本質として超自然的激越を主張する私でさえ、思わず叫びたくなる凄みである」という衝撃に駆られ、縄文土器を日本古来の芸術美として捉えようとするセンセーショナルな言葉を残した。また、同級生でもあったという慶應義塾大学の考古学者江坂輝彌を尋ねて大学所蔵の考古学資料を見学したほか、それでも飽き足らずとばかりに近郊の博物館や他大学の考古学研究室を訪ね歩き、さらには長野県尖石や武蔵野台地などの発掘現場にも足を運んだ (岡本 1952・岡本敏 2005 など)。そのような一貫で、昭和 31 年 2 月 23 日には国分寺境内にあった文化財保存館 (武蔵国分寺跡資料館の前身となる展示施設) も訪問したようで、その時に岡本自らがカメラを構えて撮影した縄文土器の写真 5 点が、自著『日本の伝統』の巻頭に収められている (岡本 1956・石井 2019)。いずれも多喜窪遺跡の出土品で、3 点は国指定重要文化財となっている第一号竪穴住居址出土、2 点は武蔵国分寺跡資料館で所蔵している先の [X住-1]・[X住-2] としたものである。その構図は被写体となる土器全体の単なる記録用ではなく、胴部の文様のみを強調し



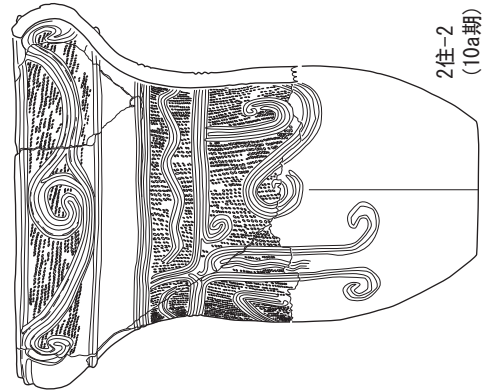
X住-1
(9a期)



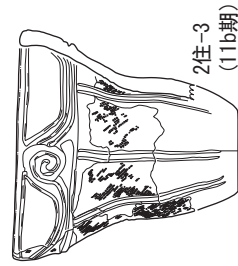
X住-1 (写真による図化)



2住-1
(11a期)

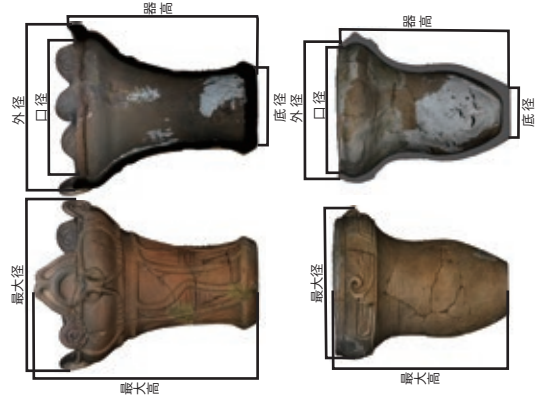


2住-2
(10a期)



2住-3
(11b期)

(3 D データからの図化)



第9図 多喜窪遺跡 昭和20年代調査出土土器[S=1/6]

表2 多喜窪遺跡における発掘調査一覧

次数	西暦	和暦	調査原因	住居表示 〔地番〕	内容	担当者	調査 面積 (㎡)	遺物 箱数	発見された遺構・遺物	文献
-	1950 ~ 1951	S25 ~ S26	学術	西元町2-13番地 周辺(注1)	発掘	吉田他	詳細 不明	-	【古代】SI(注2) 【縄文】SI(3):第一~三号/SK(1) //土器・石器・土製品・石製品	吉田1952 甲野1952 市史1986
2	1974	S49	水道	西元町3丁目	発掘	雪田他	190.0	72		滝口1977
37	1977	S52	下水道	西元町2丁目	発掘	有吉他	181.9	110	【古代】SD(1)/SX(2)	上村1982
41	1977	S52	学術	西元町2-13-19	確認	上村他	88.4	8	【古代】SB(1)/SI(1)/SK(1)/P(2)	平田他1982 早川1979
42	1977	S52	学術	西元町2-14-12	確認	西脇他	27.0	24	【古代】SI(1)/SD(1)/SK(1)/P(1)	平田他1982
48	1977	S52	個人宅造	西元町2-14-12	発掘	上村他	202.0	24	【古代】SI(1)/SD(4)/SK(9)/SF(1)	平田他1982 上村1979
79	1978	S53	市下水道	西元町2丁目	試掘	有吉	178.1	48		
79	1979	S54	市下水道	西元町2丁目	発掘	有吉他	178.1	-		
79	1980	S55	市下水道	西元町2丁目	発掘	有吉他	168.5	-	【古代】SI(24)/SK(23)/SD(14)/SX(5)/P(25) 【縄文】SI(5):210J・245J・246J・269J・272J/ SK(5):492J・559J・592J・597J・599J/ SS(1):14J/PJ(14) //土器(中期)・石器	上村他1990
79	1980	S55	市下水道	西元町2-10-13	発掘	上村	41.7	-		
79	1981	S56	市下水道	西元町2-13	発掘	上村	47.0	-		
79	1981	S56	市下水道	西元町2-11-17・ 2-14-17	発掘	上村	37.8	-		
79	1982	S57	市下水道	西元町2-15~17	発掘	上村	37.4	31		
101	1979	S54	集合住宅	西元町2-15-26	発掘	上村	216.0	1	【縄文】SK(7):495J~501J/PJ(1~)	未報告
116	1980	S55	個人宅造	西元町2-10-11	発掘	上村	72.0	2	【古代】SI(2)/P(12) 【縄文】SI(1):237J	未報告
140	1982	S57	集合住宅	西元町2-13-19	発掘	樋口	725.0	72	【古代】SA(1)/SI(4)/SD(1)/SK(2)/P(31) 【縄文】SK(23):646J・650J~654J・666J~680J・682J・ 686J/SS(2):22J・23J/PJ(多数)//土器・石器 【旧石器】SR(1)	福田他2003
142	1982	S57	個人宅造	西元町2-13-34	発掘	上村	44.4	1	【古代】SI(1)/P(4)	上敷領他2013
144	1982	S57	個人宅造	西元町2-15-9	発掘	上村	18.2	1	【古代】SK(1)	小野本2009
157	1982	S57	個人宅造	西元町2-15-12	発掘	上村	28.6	2	【古代】SI(1)/SK(1)	上敷領他2013
178	1983	S58	個人宅造	西元町2-11-23	発掘	上村	16.0	0		上敷領2007
181	1983	S58	個人宅造	西元町2-13-26	発掘	上村	13.6	3	【縄文】SI(1):312J/SK(1):SK765J //土器(中期)・石器	上敷領他2013
182	1983	S58	個人宅造	西元町2-15-5	発掘	上村	23.6	1	【古代】SI(1)/SD(2)/P(3)	小野本2009
188	1983	S58	個人宅造	西元町2-13-44	発掘	上村	18.5	6	【古代】SI(3) 【縄文】SI(4):245J・246J・317J・318J ※245J・246Jは79次で検出//土器(中期)・石器	上敷領他2013
189	1983	S58	個人宅造	西元町2-11-22	発掘	上村	45.0	0		上敷領2007
203	1984	S59	個人宅造	西元町2-11-25	発掘	上村	32.6	1		上敷領他2013
210	1984	S59	個人宅造	西元町2-13-7	発掘	上村	39.6	1	【古代】SD(1)/SK(1)/P(5)	小野本2009
213	1984	S59	個人住宅 集合住宅	西元町2-15-7	発掘	上村	52.1	15	【古代】SI(3)/SD(1)/SK(3)	小野本2009
222	1984	S59	個人宅造	西元町2-11-12	発掘	上村	8.0	0		上敷領2007
227	1985	S60	個人宅造	西元町2-15-12	発掘	上村	22.5	1	【古代】P(2) 【縄文】土器(中期)・石器・礫	上敷領他2013
240	1985	S60	個人宅造	西元町2-11-27	発掘	上村	11.2	1		上敷領他2013
247	1985	S60	個人宅造	西元町2-11-30	発掘	上村	10.0	1	【縄文】土器・石器	小野本2009
251	1985	S60	集合住宅	西元町2-13-17	発掘	福田	682.0	35	【縄文】SI(1):362J/SK(62):916J~933J・938J~981J //土器・石器	福田他2003
252	1986	S61	集合住宅	西元町2-13-15	発掘	福田	178.1	20	//土器・石器	福田他2003
253	1986	S61	分譲住宅	西元町2-13-10	発掘	上村	32.4	2	【古代】SB(1)/SI(1)/SK(1) 【縄文】SI(1):358J//土器	未報告
254	1986	S61	個人宅造	西元町2-11-15	発掘	上村	22.8	0		立川2008
256	1986	S61	個人宅造	西元町2-10-13	発掘	上村	36.1	1	【古代】P(4) 【縄文】PJ(9)//土器	未報告
258	1986	S61	個人宅造	西元町2-15-29	発掘	上村	22.5	1	【古代】SK(1)/P(4)	未報告
264	1986	S61	事務所・ 集合住宅	西元町2-9-29	発掘	福田	614.2	40	【縄文】SI(7):365J~367J・370J~373J/SK(10):982J~ 991J/PJ(48)//土器・石器	福田他2003
274	1986	S61	分譲住宅	西元町2-12-10	発掘	上村	22.5	4	【古代】SI(1) 【縄文】SS(1):43//礫・土器・土偶	未報告
275	1986	S61	個人宅造	西元町2-15-29	発掘	上村	41.7	1	【古代】P(4) 【縄文】SK(3):1009J~1011J/PJ(8)	未報告
282	1987	S62	個人宅造	西元町2-16-11	発掘	上村	63.0	1	【古代以降】SK(4)/防空壕(1) 【縄文】SK(2):1021J・1025J//土器	未報告
289	1987	S62	個人宅造	西元町2-15-29	発掘	上村	21.6	4	【古代】SB(1)/SI(1)/SK(2)/P(4) 【縄文】SS(1)44//焼礫	未報告
297	1987	S62	個人宅造	西元町2-11-11	発掘	上村	15.5	1		小野本2009
312	1988	S63	個人住宅 集合住宅	西元町2-13-14・ 15	発掘	上敷領	30.6	7	【縄文】SI(1):398J/SK(5):1138J~1142J/PJ(40)	未報告

次数	西暦	和暦	調査原因	住居表示 〔地番〕	内容	担当者	調査 面積 (㎡)	遺物 箱数	発見された遺構・遺物	文献
315	1988	S63	個人宅造	西元町2-10-2	発掘	上敷領	72.8	1	【縄文】SK(1):1147J	未報告
316	1988	S63	駐車場建設	西元町2-13-13	発掘	上村他	25.9	2	【古代】SB(3)/SI(1)/SK(3) 【縄文】SK(1):No.不明/PJ(22)//土器・石器・焼礫	未報告
321	1989	H1	個人宅造	西元町2-12-35	発掘	上敷領	77.6	1	【古代】SB(3)/SD(1)/P(17) 【縄文】SI(1):402J//土器・石器・礫	小野本2009
330	1989	H1	集合住宅	西元町2-11-22	発掘	上敷領	104.4	4	【古代】SI(1)/SD(1)/SK(1) 【縄文】SI(1):408J 【旧石器】ST(1)	未報告
354	1990	H2	個人宅造	西元町2-16-11	発掘	上敷領	6.7	1		未報告
358	1991	H3	個人宅造	西元町2-15-9	発掘	上敷領	4.1	1		未報告
359	1991	H3	個人宅造	西元町2-15-9	発掘	上敷領	10.4	0		立川2011
361	1991	H3	個人住宅 共同住宅	西元町2-15-29	発掘	上敷領	5.7	1		未報告
374	1992	H4	個人宅造	西元町2-15-6	発掘	上敷領	9.9	2	【古代】P(1)	小野本2009
405	1994	H6	個人宅造	西元町2-14-11	発掘	上敷領	2.3	0	【古代】P(6)	未報告
413	1995	H7	学術	西元町4-12	発掘	福田	593.4	111	【古代】SI(1)/P(3) 【縄文】SI(1):528J/SU(2) //土器(早期・前期・中期・後期)・石器	未報告
417	1995	H7	個人宅造	西元町2-16-45	発掘	木下	8.2	1	【古代】SI(6)	未報告
440	1997	H9	個人宅造	西元町2-14-8	発掘	木下	6.0	1	【古代】SD(1)/SK(2)/P(1)	小野本2009
452	1997	H9	個人宅造	西元町2-13-11	発掘	上敷領	6.1	1	【古代】P(1) 【縄文】土器・石器	未報告
472	1998	H10	個人宅造	西元町2-11-20	発掘	上敷領	25.0	0		立川2010
485	1999	H11	学術	西元町4-11	発掘	福田	213.7	34	【古代】SB(3)/SD(3)/SK(2)/SX(2)/P(22)	未報告
499	2000	H12	個人宅造	西元町2-12-11	発掘	木下	9.8	1	【古代】P(1) 【縄文】SX(1):177J//土器・石製品	未報告
548	2001	H13	個人宅造	西元町2-8-2	発掘	上敷領	3.3	0		立川2010
558	2002	H14	個人宅造	西元町2-7-18	発掘	上敷領	13.3	0		立川2010
562	2002	H14	個人宅造	西元町2-11-15	発掘	上敷領	10.6	0		立川2010
575	2004	H16	個人宅造	西元町2-15-27	発掘	中道	8.0	1	【縄文】SK(1):3173J//土器(中期)	上敷領2007
576	2004	H16	集合住宅	西元町2-15-27	発掘	中道	9.3	1	【古代】P(3) 【縄文】SK(1):3197J/PJ(1)//土器	未報告
582	2004	H16	個人宅造	西元町2-13-9	発掘	中道	21.5	1	【古代】P(9) 【縄文】SK(2):3231J・3232J/PJ(7) //土器・石器・礫	上敷領2007
615	2006	H18	個人宅造	西元町2-10-3	発掘	立川	8.2	1	【古代】P(2)	立川2008
617	2006	H18	貸店舗	西元町2-9-25	発掘	立川	184.8	1	【縄文】SX(1~):286J・287J	未報告
623	2007	H19	個人宅造	西元町2-12-8	発掘	立川	27.7	2	【古代】SB(1)/SI(1)/P(4) 【縄文】SI(1):795J・ SS(1):112/PJ(5)//土器・石器	立川2009
636	2008	H20	分譲住宅	西元町2-15-31	確認	立川	1.4	0		立川2010
639	2008	H20	分譲住宅	西元町2-15-32	確認	立川	0.7	1	【古代】P(1)	立川2010
687	2012	H24	分譲住宅	西元町2-10-5	確認	中道	6.1	0		上敷領他2014
702	2014	H26	集合住宅	西元町2-16-11	確認	上敷領	17.0	1	【古代】SB(1)/SI(2)/SK(2)/P(2) 【縄文】土器(中期)	増井2016
727	2017	H29	分譲住宅	西元町2-15-6	確認	増井	5.9	1	【縄文】PJ(5)//土器	島田他2019
731	2018	H30	集合住宅	西元町2-10-10	確認	寺前	18.4	1	【縄文】土器(中期) 【旧石器】ST(1)	島田他2020
733	2018	H30	分譲住宅	西元町2-11-17	確認	寺前	7.4	1	【古代】SX(1) 【縄文】土器・石器・礫	島田他2020
737	2018	H30	分譲住宅	西元町2-11-17	発掘	寺前	25.7	1	【古代】SX(1)/P(2) 【縄文】土器(中期・後期)・石器・礫	島田他2020
751	2019	R1	分譲住宅	西元町2-11-26	確認	依田	6.9	1	【縄文】土器・石器	桂他2021
立会 121	2019	R1	個人宅造	西元町2-10-17	立会			1	【古代】SI(2)	桂他2021
756	2020	R2	分譲住宅	西元町2-15-19	確認	平塚	21.9	1	【縄文】SI(1):827J//土器・石器	本書
758	2020	R2	分譲住宅	西元町2-15-19	発掘	平塚	34.2	10	【縄文】SI(1):827J/SK(1):3524J//土器・石器	本書
766	2021	R3	分譲住宅	西元町2-13-12	確認	寺前	26.2	1		未報告
769	2021	R3	分譲住宅	西元町2-13-12	発掘	寺前	28.3	2	【古代】SI(1)/SK(3)/SX(1) 【縄文】SI(1):846J/SK(1)3505J/PJ(11)	未報告
782	2022	R4	分譲住宅	西元町2-13-23	確認	平塚	37.9	2	【縄文】SI(1):853J/PJ(5)	未報告

※1 本表作成にあたり、第一号堅穴住居址の位置が記されている国分寺市史(1986)以前の資料をあたった。その結果、甲野文献(1952)に載っていることがわかり再検討したところ、本表記載の住所地の可能性の方が高いと判断した。

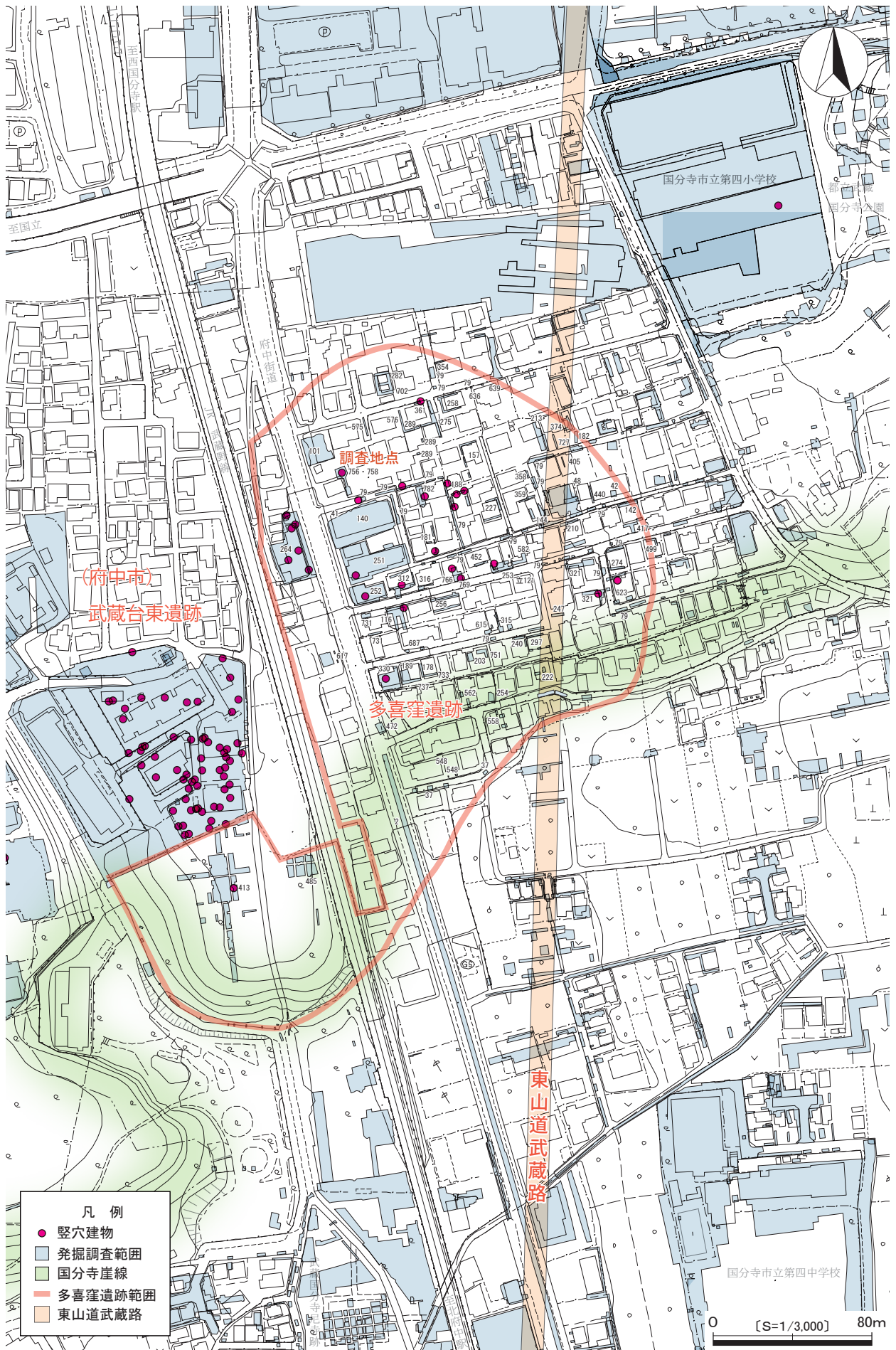
※2 吉田(1952)・甲野(1952)によると昭和23(1948)年~26(1951)年にかけて、多喜窪周辺では二つの地点が調査されている。一つめの地点は現在の多喜窪遺跡の範囲外と想定されるため本表には入れていないが奈良時代の堅穴住居が4件調査されたとの記載がある。

※ 左欄No.数字は武蔵国分寺跡(国分寺市No.19遺跡)の調査次数を示す〔例:「782」は「武蔵国分寺跡第782次調査」〕。

※ 内容欄のうち、「確認」は確認調査を、「発掘」は本調査をそれぞれ示している。

※ 遺物箱数欄には現地調査終了時点で出土した遺物を、凡そ幅34×長さ54×深さ20cmのプラスチック製コンテナに収納した数量を示した。

※ 発見された遺構・遺物欄の()内は基数を、縄文時代の遺構については個別に付与した遺構No.を明記した。



第 11 図 多喜窪遺跡・武蔵台東遺跡の縄文時代竪穴建物分布図

えるにいたった。これを踏まえて市内の縄文遺跡を俯瞰した『国分寺市史 上巻』によれば、甲野・吉田の調査地点の東側で、国分寺崖線沿いの武蔵野段丘上にも遺構・遺物が点在している状況から多喜窪遺跡をA～D地点の4つに細分化して捉え、A地点は先の甲野・吉田調査地点を包括する範囲、その東隣で早期燃糸文の遺物が多量に出土する国分寺薬師堂の周辺をB地点、また前期諸磯式を中心に草創期～中期の遺物を包含する都指定名勝真姿の池湧水群の北側台地上をC地点、かつて縄文早期～後期の遺物が採集された崖線東縁のD地点と命名した(福田・広瀬1986、第12図)。その後、周辺の発掘調査が進展してきたなかで、国分寺崖線を挟んだ上下両段丘面にも旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世の各遺跡が広く展開することが明らかとなり、現在は、B～D地点とした3箇所は独立した埋蔵文化財包蔵地とはせず消滅し、武蔵国分寺跡(市No.19遺跡)に包括して捉えるようになってきているが、一方のA地点に関しては学史上の経緯もあって、そのまま縄文時代中期の多喜窪遺跡(市No.11遺跡)として現在も残り、現在の府中街道以東は武蔵国分寺跡(市No.19遺跡)、以西は伝祥応寺跡(市No.12遺跡)および塚(市No.13遺跡)とそれぞれ重複するかたちで埋蔵文化財包蔵地が周知されている(第4図)。なお、その北側隣接地は府中市域で、遺跡の名称も武蔵国分寺関連遺跡・武蔵台東遺跡となっているが、連続する地形上にあり、多喜窪遺跡とは密接不可分の関係にあるとあって良い。

註

- (1) この調査豫報が掲載された『武蔵野』第31巻第3・4号は「昭和25年2月30日発行」と記されている。その一方で、後述するように吉田格は、「昭和24年の夏に武蔵国分寺薬師堂の並びの丘陵上に土師器、須恵器、布目瓦等が多数散布しているのを知り、武蔵野博物館に於て調査をし、多大の精華を取めたが、其の豫報は甲野勇先生に依り武蔵野臺第31巻3、4号に報告されたが、其の翌年夏に引続き、同地点を発掘し、奈良時代の堅穴住居跡を発掘した際に、早期縄文式土器を少量発掘した」と述べ(吉田1952)、最初の調査年が昭和23年なのか翌24年であるのか、記述によっては齟齬が認められる。
- (2) 吉田1952によると、「奈良時代の堅穴住居跡に就ては、武蔵野博物館学報第二冊に甲野先生が報告を書く予定になっている」と記されているが、その後詳細な報告はなされていない。
- (3) 吉田格は「多喜窪遺跡で現在「重文タイプ」と呼ばれている4つの大形把手をもつ土器が発見されたという知らせを同市在住の星野亮勝師から戴き、早速に追調査を進めたところ、その土器を含む一括の住居址内出土の資料が検出できた経緯がある」と述べ(吉田1992)、国分寺住職の星野亮勝も、同寺の所有地内で行われた発掘調査で四つの把手のついた土器が横倒しの状態で出土したことを回顧している(国分寺市史編さん室1993)。
- (4) 一例を挙げると、以下の文献などがある。
 - 岡本太郎1956『日本の伝統』光文社
 - 八幡一郎編1959『世界考古学大系1 日本I 先縄文・縄文時代』平凡社
 - 岡本太郎1964『日本の伝統』角川文庫2280
 - 児玉幸多他編1965『図説日本文化史大系1 縄文・弥生・古墳時代』小学館
 - 小山富士夫監修・八幡一郎編1966『陶器全集29 縄文土器土偶』平凡社
 - 鎌木義昌編1966『日本の考古学2 縄文時代』河出書房新社
 - 岡本太郎1973『日本の伝統』講談社現代新書304
 - 江坂輝彌1975『日本の美術2 縄文式土器』小学館BOOKofBOOKS
 - 岡本太郎1979『岡本太郎著作集4 日本の伝統』講談社
 - 岡本太郎1980「縄文文化の謎を解く 対話者 江坂輝彌」『岡本太郎著作集 第九巻 太郎対論』講談社
 - 永峯光一1981『縄文土器大成2 中期』講談社
 - 小林達雄1988『縄文土器大観2・3 中期1・2』小学館
 - 岡本太郎1999『岡本太郎の本 日本の伝統』みすず書房
 - 岡本敏子2005『岡本太郎の遊ぶ心』講談社
 - 石井 匠2019「武蔵野の縄文土器と岡本太郎—うつわの身体からつくり手の思考を探る—」『武蔵野樹林』VOL.2 2019春 公益財団法人角川文化振興財団
- (5) 第一号堅穴住居跡出土の土器は現在東京国立博物館に常設展示されている。第二号堅穴住居址出土と思われる加曾利E式土器、土坑出土の玉、岡本太郎が撮影し土器(X住-1のみ)は、武蔵国分寺跡資料館に展示されている。



第 12 図 昭和 61 年 (1986) 発行の『国分寺市史』に示された多喜窪遺跡 A～D 地点の範囲

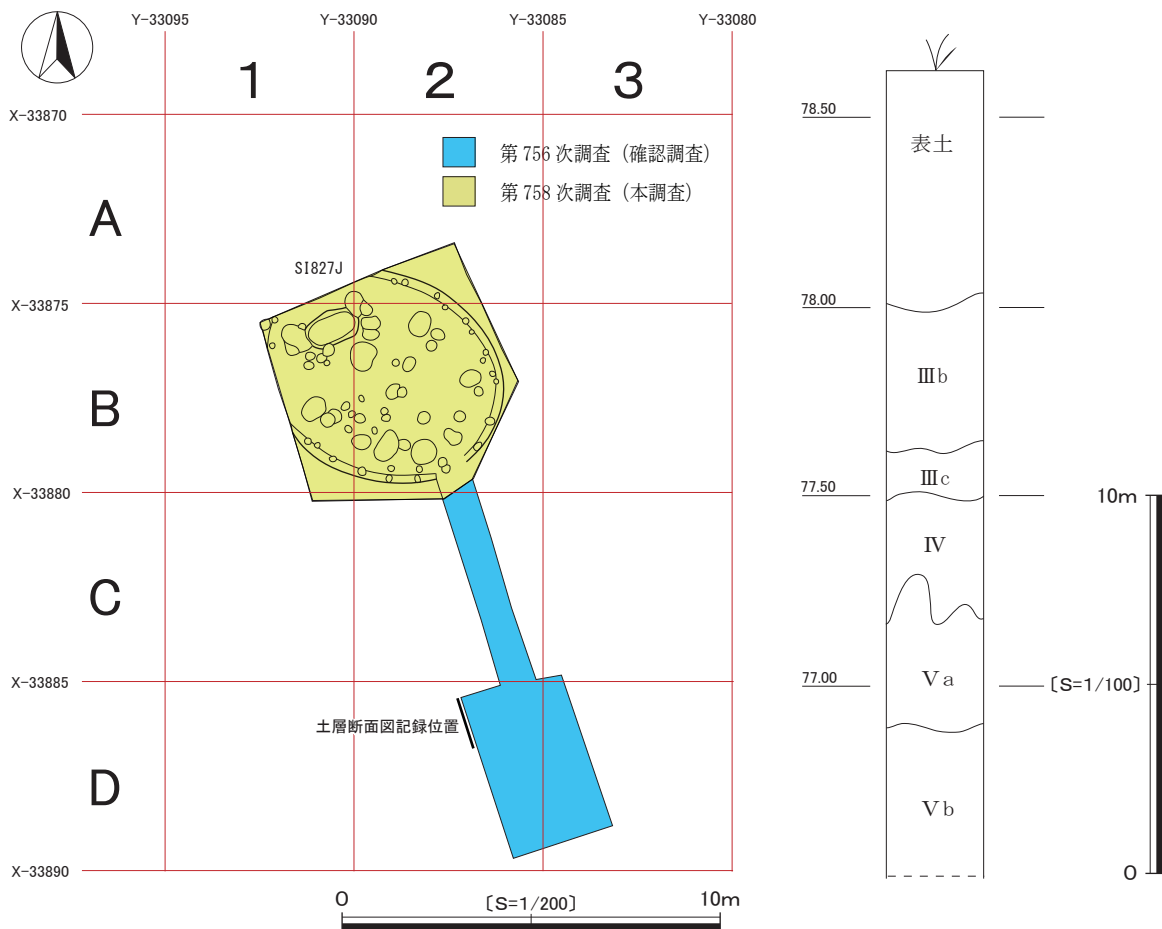
第3章 調査の経過

第1節 調査の方法と基本層序

本調査の実施にあたっては、第1章でも述べたように確認調査の現場状況を踏まえて、そのまま継続して本調査へと移行することにしたが、あくまでその対象範囲は工事によって滅失する恐れがある縄文時代の竪穴建物（SI827J）で、かつ、下水管付設に伴う掘削予定深度が深くなる部分に限定した。そこで、本調査では確認調査のトレンチは埋め戻さずに、竪穴建物のプランの広がりを見ながらトレンチ北端部を拡張していき、最終的には約5.5m四方の矩形に調査区を確保することにしたが、竪穴建物北西側の一部は調査の対象には含まれず、遺構の全体を検出し得た訳ではなかった。

また、表土は確認調査同様に重機を使用し、直下の地層からは人力で掘り下げ、出土した遺物や遺構図の作成は、国家座標のデータを搭載したトータルステーションを用いて順次記録作業を進めた。なお、遺構や遺物の出土位置を以下に記す都合から、確認調査・本調査の対象範囲全体を覆うように5mを基調としたグリッドメッシュを設定し、西から東は1～3の算用数字、北から南はA～Dのアルファベットを振って、A1グリッド北西隅は世界測地系の国家座標で $y = 33095$ 、 $x = -33870$ を充てることにした（第13図左）。

さて、市域で慣例的に用いている標準土層は、表土（I層）下の黒褐色土を、黒味が強い上層（II層）と暗褐色でローム層への漸移層を含む下層（III層）とに細分し、ソフトローム層をIV層と呼称しているのに対して、一般的に（市域外の）武蔵野台地の遺跡では、完新世富士テフラ全般を「II層」、ソフト



第13図 グリッドシステムおよび標準土層堆積状況図

ローム層を「Ⅲ層」に充てるのが通例であり、ソフトローム層以下の層序区分呼称に齟齬が認められるが、調査区内の基本層序については、市域の慣例に倣って確認調査時に記録したトレンチ南端部の柱状図で述べておく（第13図右）。

まず、表土層（Ⅰ層）は瓦礫を主体に含む造成土で、約60～70cmの堆積厚を有する。その直下は、周辺の台地上では古代～中世の遺物を包含する黒褐色土（Ⅱ層）と、Ⅱ層に類似して縄文時代の遺物を包含する黒褐色土（Ⅲa層）を確認できるが、調査範囲内ではいずれの土層も見当たらない。おそらく昭和30年代以降の宅地開発行為によって削平されているものと思われる。そのため表土層を取り除くと、縄文時代中期の遺物を主体に包含する暗褐色土（Ⅲb層）が現われ、その層厚は約30～40cmをはかる。以下、ローム層への漸移層である茶褐色土（Ⅲc層）が約10cmがみられ、黄褐色のソフトローム（Ⅳ層）、黄褐色のハードローム（Ⅴa・b層）の堆積が確認される。Ⅴb層はⅤa層に比べて赤色・黒色のスコリアの含有量が多く、色調もやや灰褐色基調となっている。

第2節 調査の経過

6月26日 再び重機を投入して、確認調査トレンチ北端部を拡張しながら表土掘削を開始した。

基本層序のⅢb層検出後は人力での作業へ移行し、遺物包含層を掘り下げながら出土した遺物は随時トータルステーションにより3次元情報を記録して取り上げを進めた。確認調査で把握していた縄文時代の竪穴建物SI827Jは、視覚的には周囲をⅢc層上面まで掘り下げることによって平面プランを認識し得たが、後述するように、遺物分布図はプランを把握するより上位の土層中から出土したものも含めて呈示している。

7月10日 初期に設定したセクションベルトを除き、建物の床面まで掘り下げが完了し、全景・土層堆積状況の写真を撮影して断面図の作成を行った。

7月15日 セクションベルト部分の掘り下げが終了。建物覆土下層から出土した縄文土器の大型個体の写真撮影。

7月16日 柱穴・炉等の付帯施設の調査。

7月22日 床面検出状況の写真撮影。

7月23・24日 休工

7月27日 貼り床を剥がし、杭状小ピットを検出。平面図作成・写真撮影。調査終了。

7月28日 重機により調査区の埋め戻し作業を行い、現地を撤収。 ※現場実働19日間実施。

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 縄文時代

第756次、758次調査では縄文時代中期前半の竪穴建物1棟、土坑1基が検出された。出土遺物は竪穴建物覆土を中心に縄文土器2382点(12236g)、石器451点(3313g)、土製品10点(105g)礫49点(5660g)が出土した。縄文土器は竪穴建物の覆土を中心に半完形個体、破片が出土しているがその大半は中期である。分類別点数では五領ヶ台式7点(210g)、阿玉台式111点(3930g)、勝坂式963点(65210g)、加曾利E式166点(8310g)、曾利式12点(390g)、連弧文土器9点(240g)、不明(無文部他)778点(2683g)が出土している。土製品はいずれも土器片を加工した土製円板である。

(1) 竪穴建物と遺物の出土状態

竪穴建物 SI827J (第14・15・17・18図)

縄文時代中期前半の竪穴建物(SI827J)1軒が検出された。A1・2～B1・2グリッドにまたがり、多喜窪遺跡の集落全体の中では北群に位置している。平面形は楕円形を呈し、規模は東西6.8m×南北5.4m、深さ61～67cmを計る。炉は地床炉で中央奥壁(西)寄りに構築されている。長さ約30cmの河原石が出土したが、床面よりやや浮いていたため炉の構築材(炉石)であるとは確認できなかった。

出入口は南東に想定される。炉と出入口部の床はやや硬化していた。柱穴などのピットは計66基を検出した。主柱穴と思われる柱穴は3期(A・B・C期)に亘るとみられ、A期6本→B期6本→C期7本と外側に広がっているため、その際外側に面積を広げ、壁の拡張が行われたとみられる。さらに壁に沿うように壁柱穴がみられる。床の硬化面を下げた段階で杭状の小穴37基を検出し記録した。深さは推定で示しているが(第18図)、一定していないことから竪穴建物の構築に関わる人為的な痕跡かどうかは不明である。

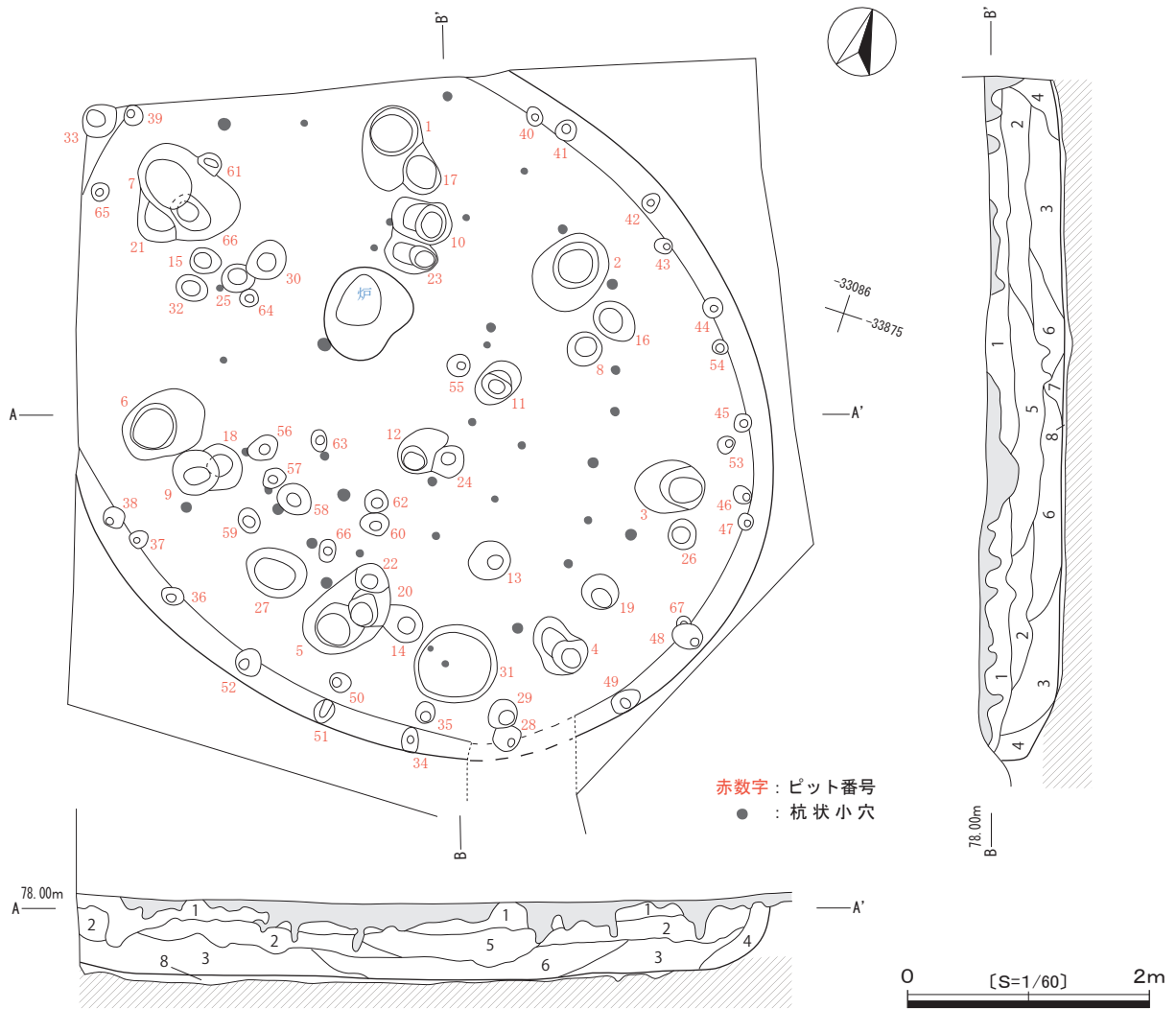
竪穴建物 SI827J の遺物出土状況 (第19～29図)

遺物の出土状況は石器、土器等の遺物を種別毎に11枚図示した。本竪穴建物の遺物出土状況は、廃絶した竪穴に廃棄された遺物群で石器、土器いずれも覆土中に遺存している。石器の出土状況は竪穴覆土の中では特に偏在していないようにみえる。土器は復元された半完形の主要な個体(18個体)の出土位置を示した(第28・29図)。特に大型破片個体(1、2、4～7、12、14)は竪穴のほぼ中央に廃棄されることから竪穴覆土の埋没過程にある凹地に投棄された状況を呈する。覆土中に散在する同一個体の破片が接合する個体(2、3、12、13、16など)がみられるが、いずれも完形に復元できるものはない。調査区が竪穴建物付近に限られたため、これらの個体の未回収の破片は本調査区域外に遺存する可能性もある。大半の個体は床面近くの覆土下層から中層にかけて遺存する。個体3の接合する破片(破片点数も多い)が最も床面に近い最下部から出土し、それ以外の個体が上部に散在するが、個体16の浅鉢は竪穴縁辺の覆土最上層から出土している。比較的まとまった個体が見られるにも関わらず口縁から底部まで遺存するのは個体2のみで、完形近くまで復元できた個体が少ない点が指摘できる。

(2) 土坑と遺物の出土状態

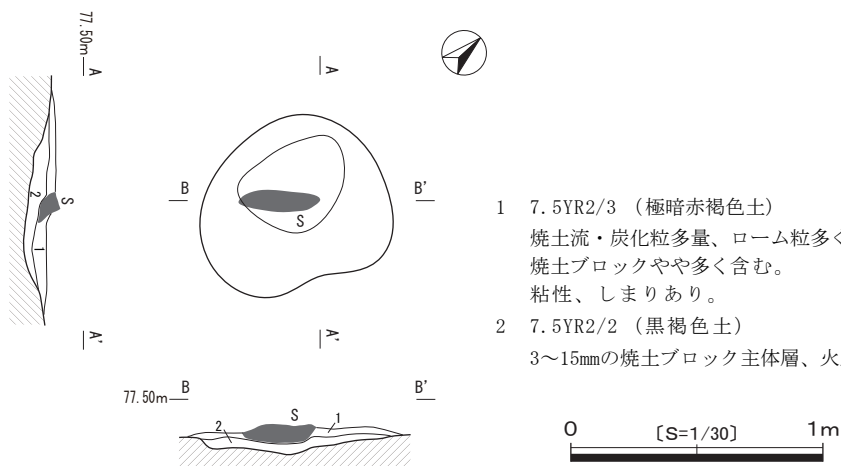
土坑 SK3524J (第16図)

縄文時代中期前半の土坑(SK3524J)が1基検出された。B1グリッドに位置し、竪穴建物と重複して検出されたが、竪穴建物に切られる。平面形は東西に長い長楕円形を呈し、長軸(1.3m)×短軸0.9m、深さ0.36mを計る。覆土中より中期前半藤内I式(7a期)の土器片2点(同一個体)が出土している。幅の広い連続角押文(キャタピラ文)に波状沈線に沿わせる。



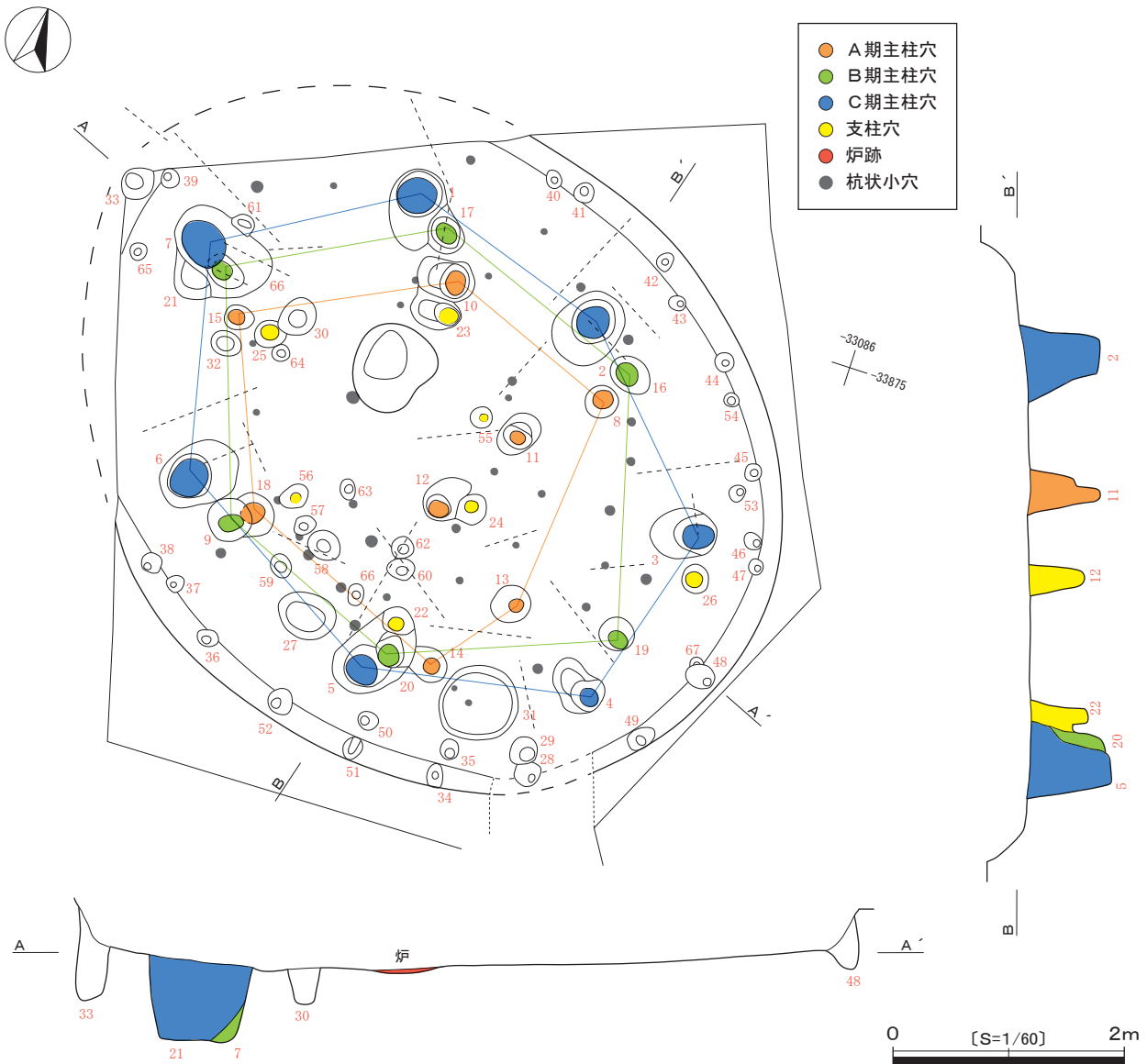
赤数字：ピット番号
●：杭状小穴

- | | | |
|---|------------------|---|
| 1 | 7.5YR3/1 (黒褐色土) | 赤色スコリア・炭化物微量、ローム粒極微量含む、土器・石器やや多く含む。粘性、しまりあり。 |
| 2 | 7.5YR2/2 (黒褐色土) | 赤色スコリア・炭化物・ローム粒少量含む、土器・石器やや多く含む。粘性、しまりあり。 |
| 3 | 7.5YR3/3 (暗褐色土) | ローム粒やや多く、赤色スコリア・炭化物少量、3~5mmのロームブロック微量含む。粘性、しまりあり。 |
| 4 | 7.5YR3/3 (暗褐色土) | ローム粒微量、赤色スコリア極微量含む。粘性、しまりあり。 |
| 5 | 7.5YR2/2 (黒褐色土) | 炭化物少量、ローム粒極微量含む、土器・石器やや多く含む。粘性、しまりあり。 |
| 6 | 7.5YR3/2 (黒褐色土) | ローム粒多く、炭化物やや多く、赤色スコリア微量含む、土器・石器少量含む。粘性、しまりあり。 |
| 7 | 5 YR3/2 (暗赤褐色土) | 焼土粒多量、炭化物やや多く含む。粘性、しまりあり。 |
| 8 | 7.5YR6/5 (明赤褐色土) | ローム粒・3~35mmのロームブロック多量含む。粘性、しまりあり。 |

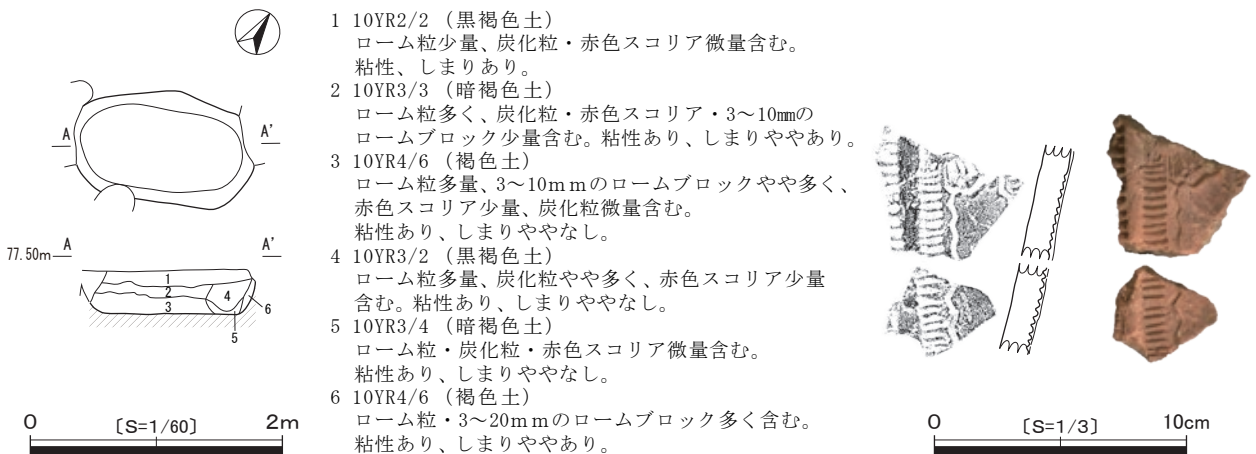


- | | | |
|---|-------------------|---|
| 1 | 7.5YR2/3 (極暗赤褐色土) | 焼土流・炭化物多量、ローム粒多く、3~5mmの炭化物・焼土ブロックやや多く含む。粘性、しまりあり。 |
| 2 | 7.5YR2/2 (黒褐色土) | 3~15mmの焼土ブロック主体層、火床面。 |

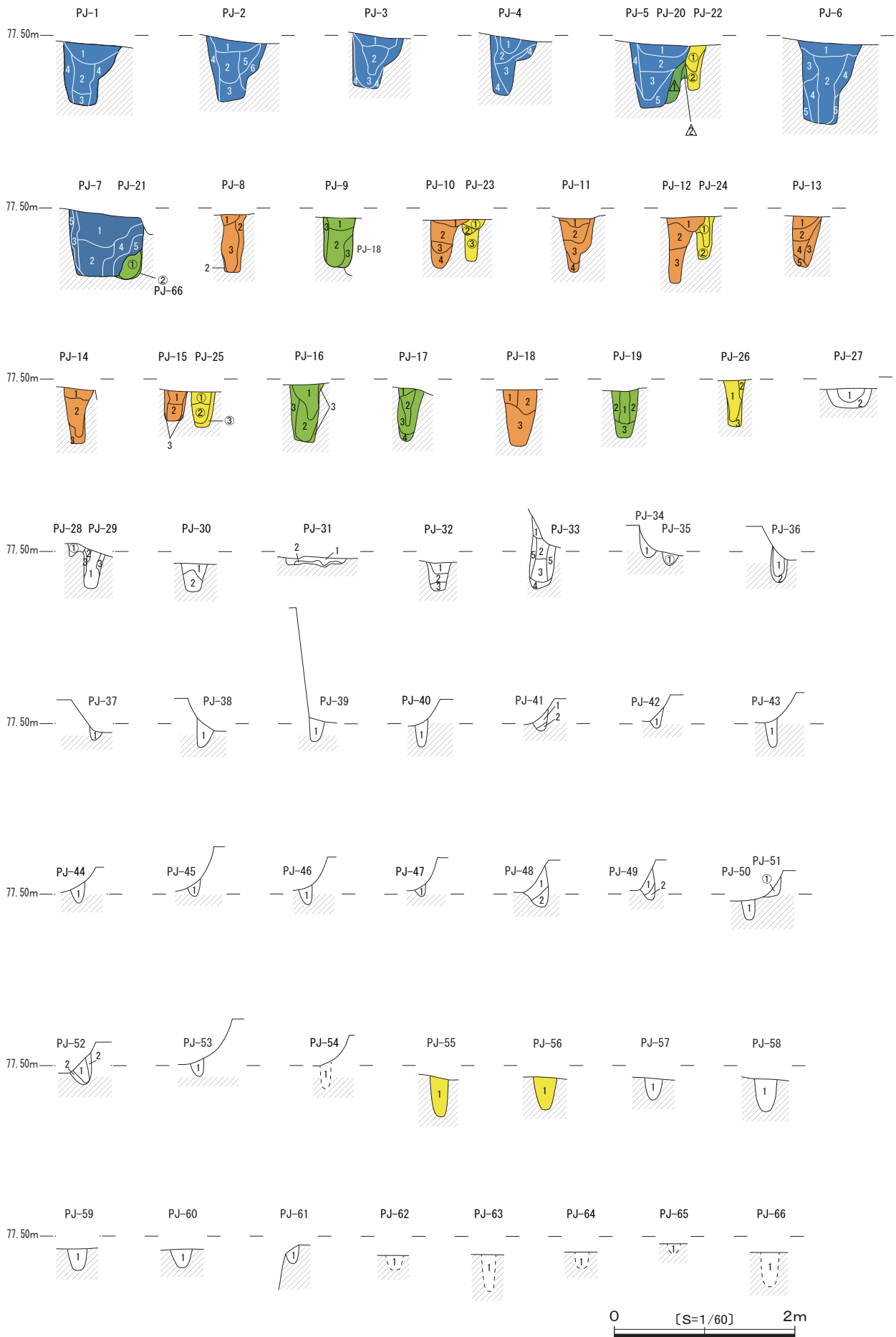
第14図 竪穴建物 SI827J



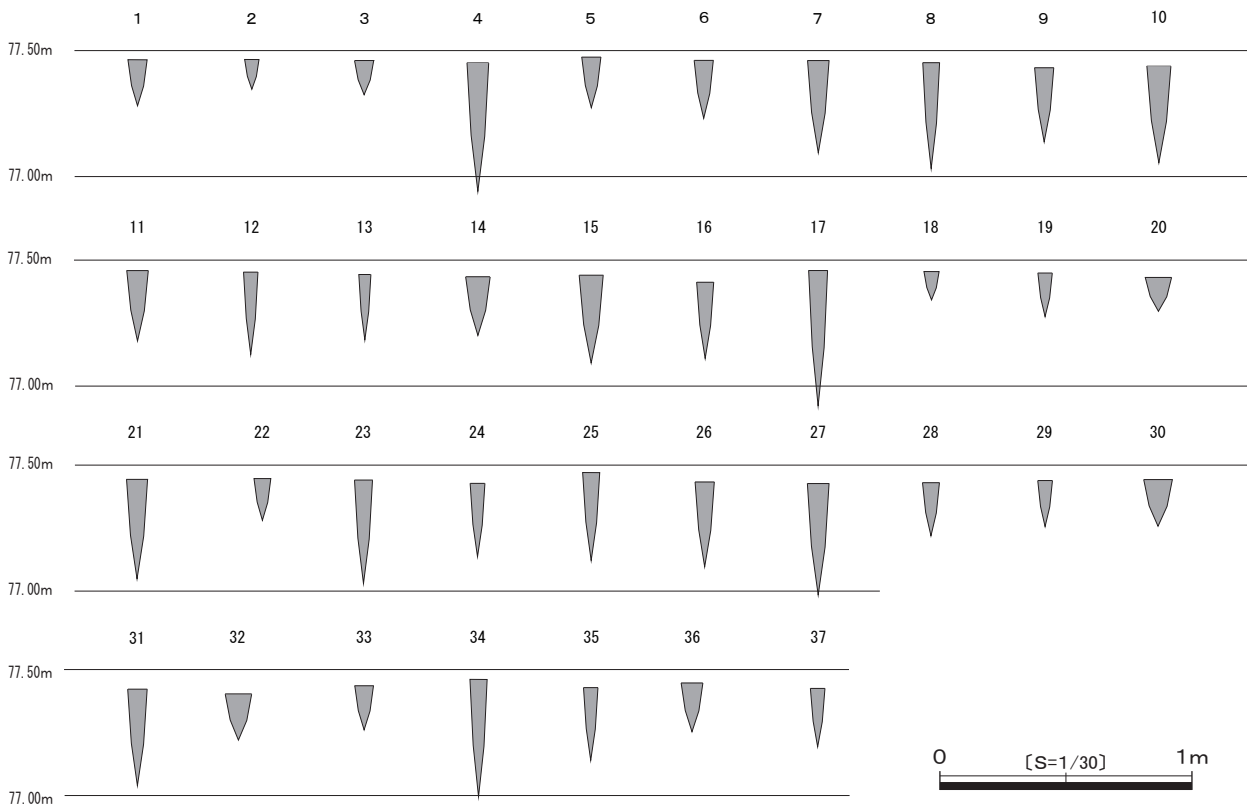
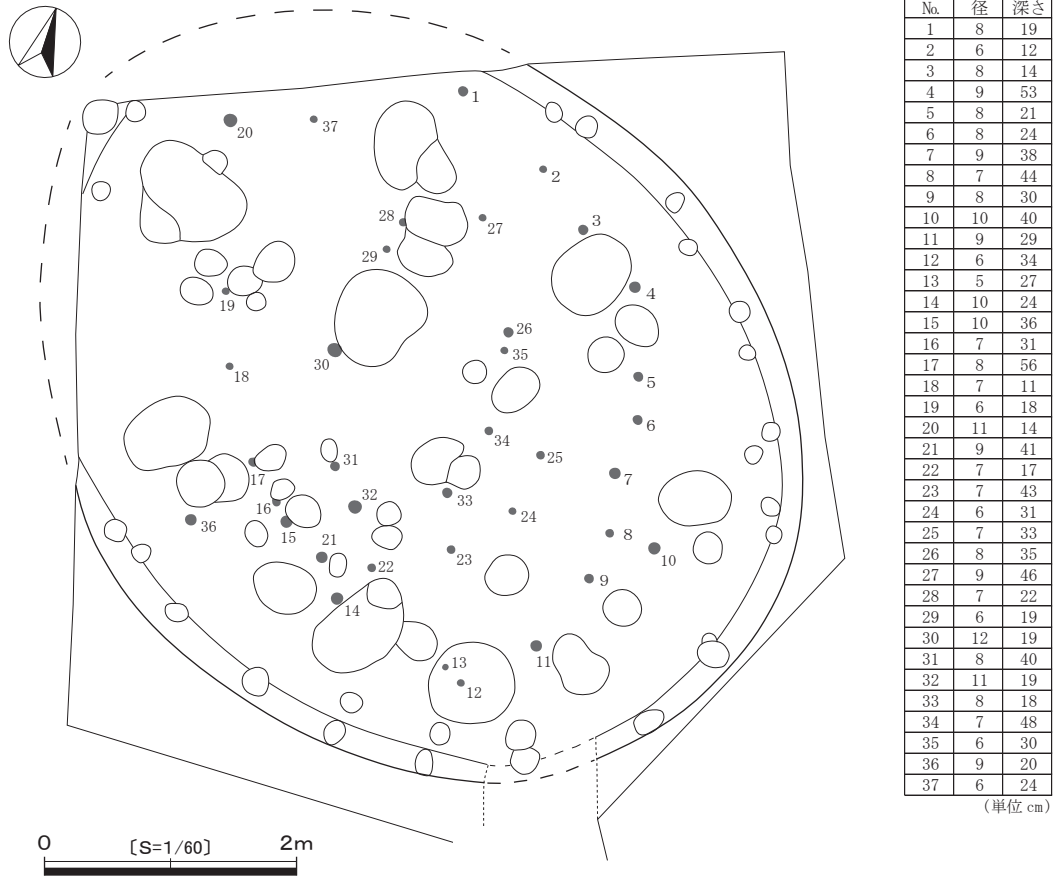
第15図 SI827J 柱穴の細別時期区分



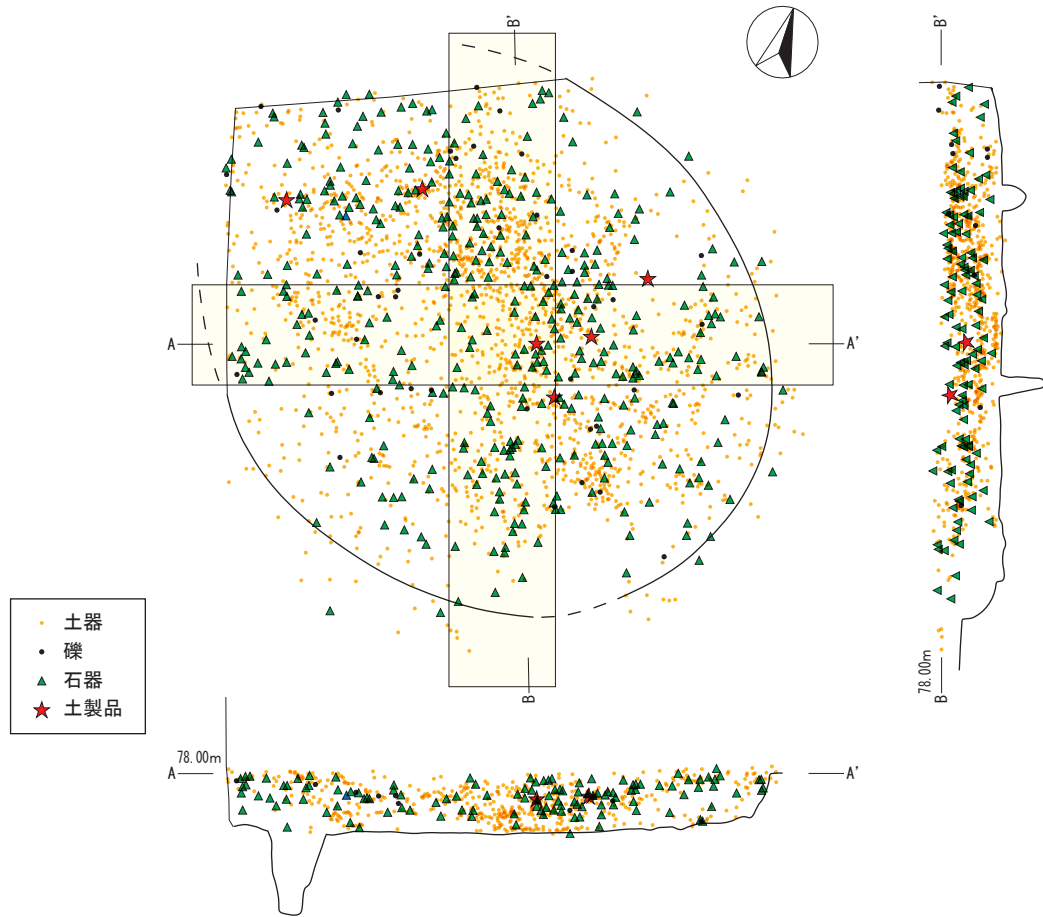
第16図 土坑 SK3524J



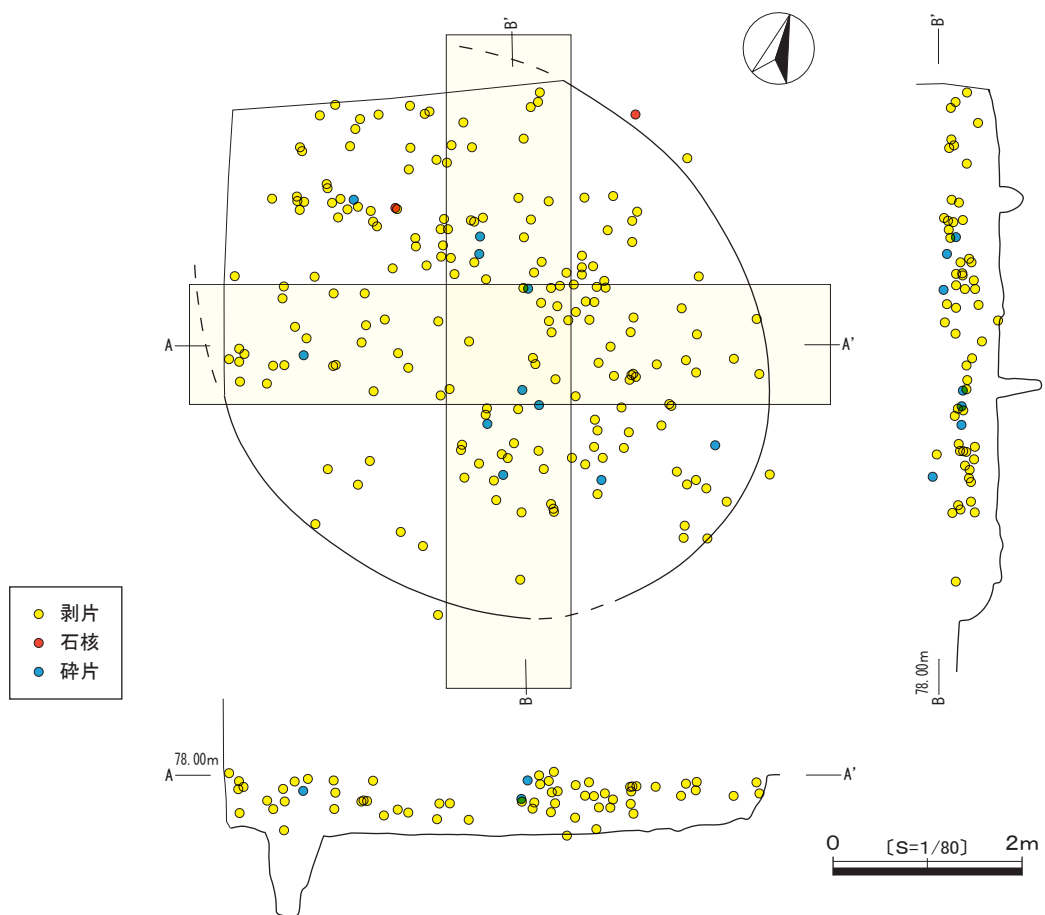
第 17 图 SI827J 柱穴断面图



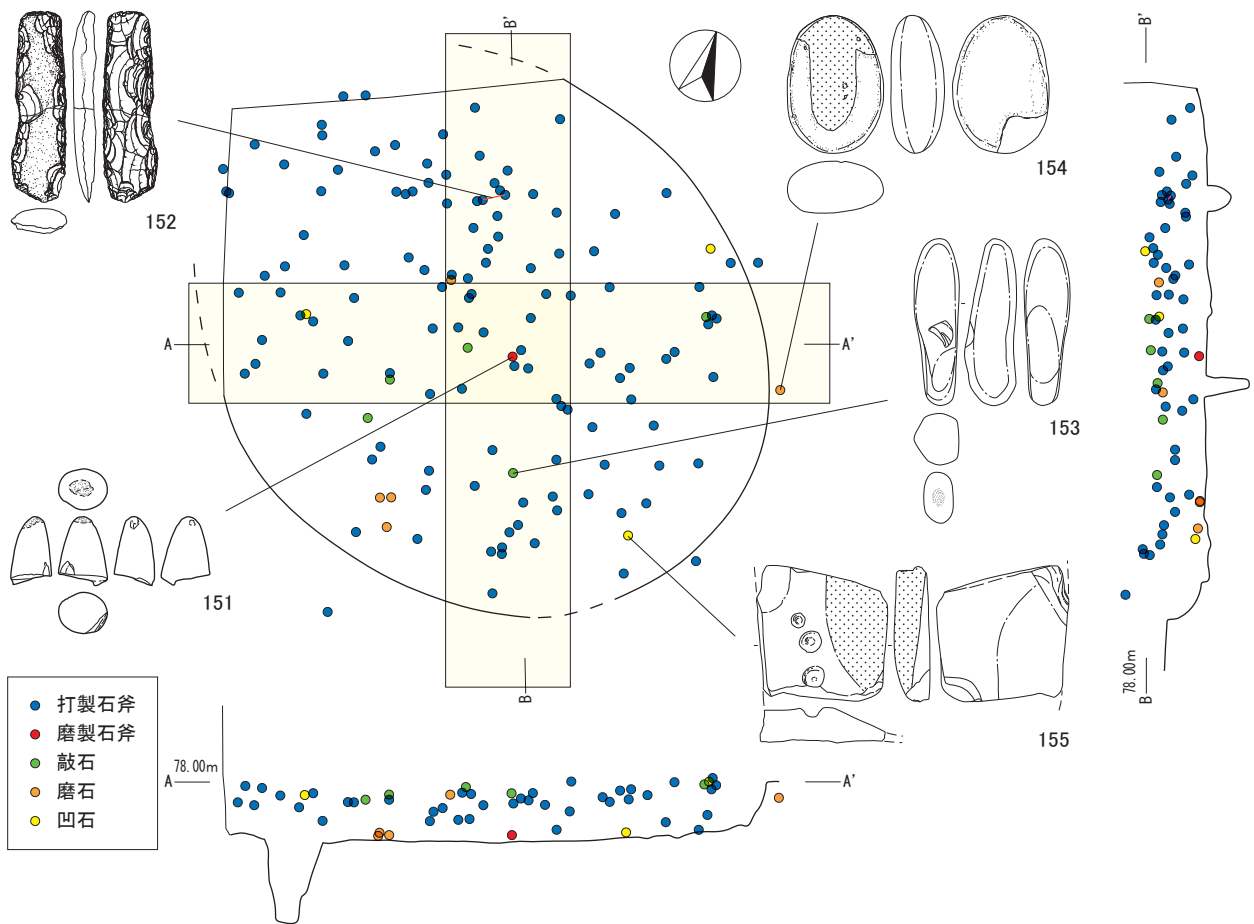
第 18 図 SI827J 杭状小穴



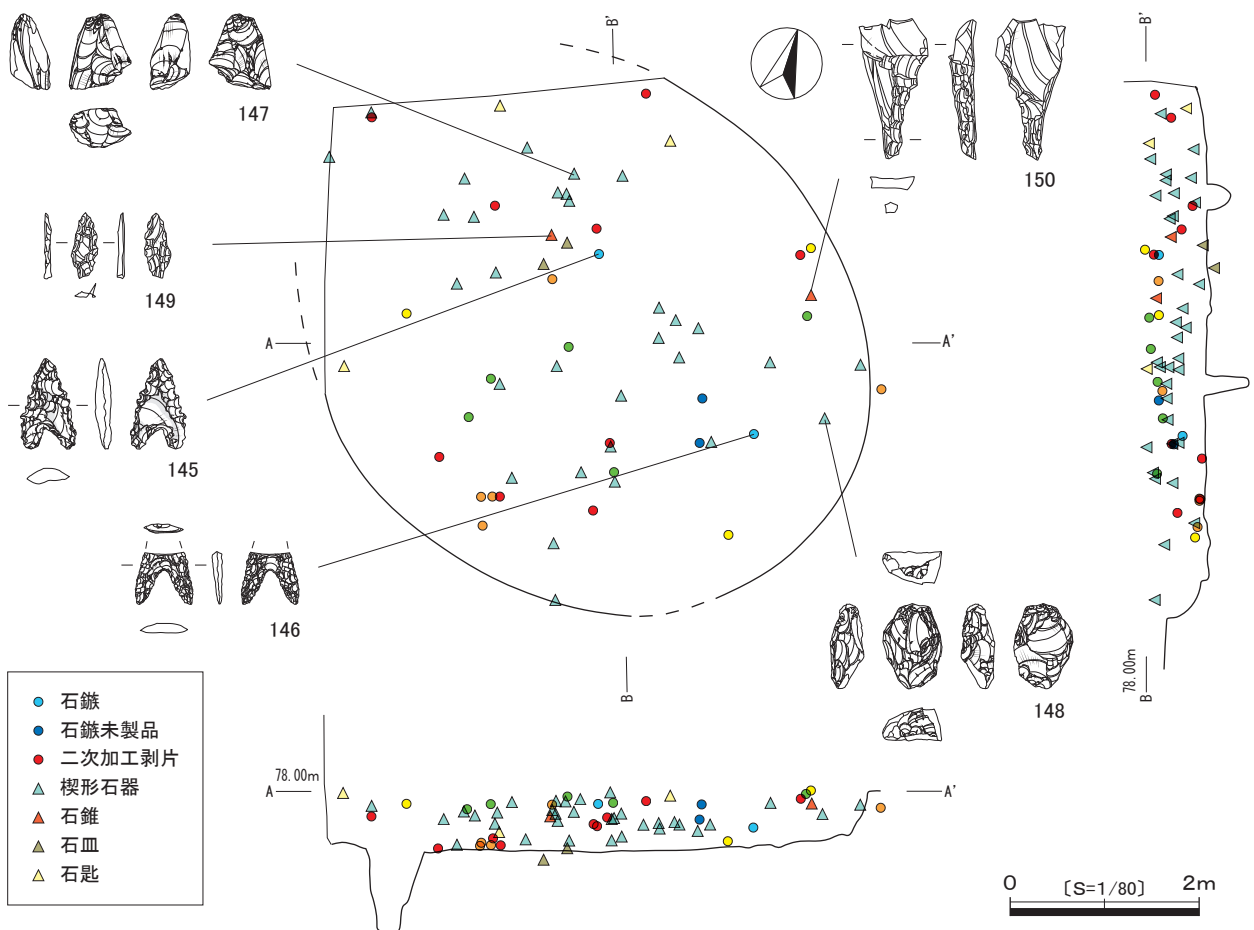
第 19 図 SI827J 遺物出土分布図①—全点—



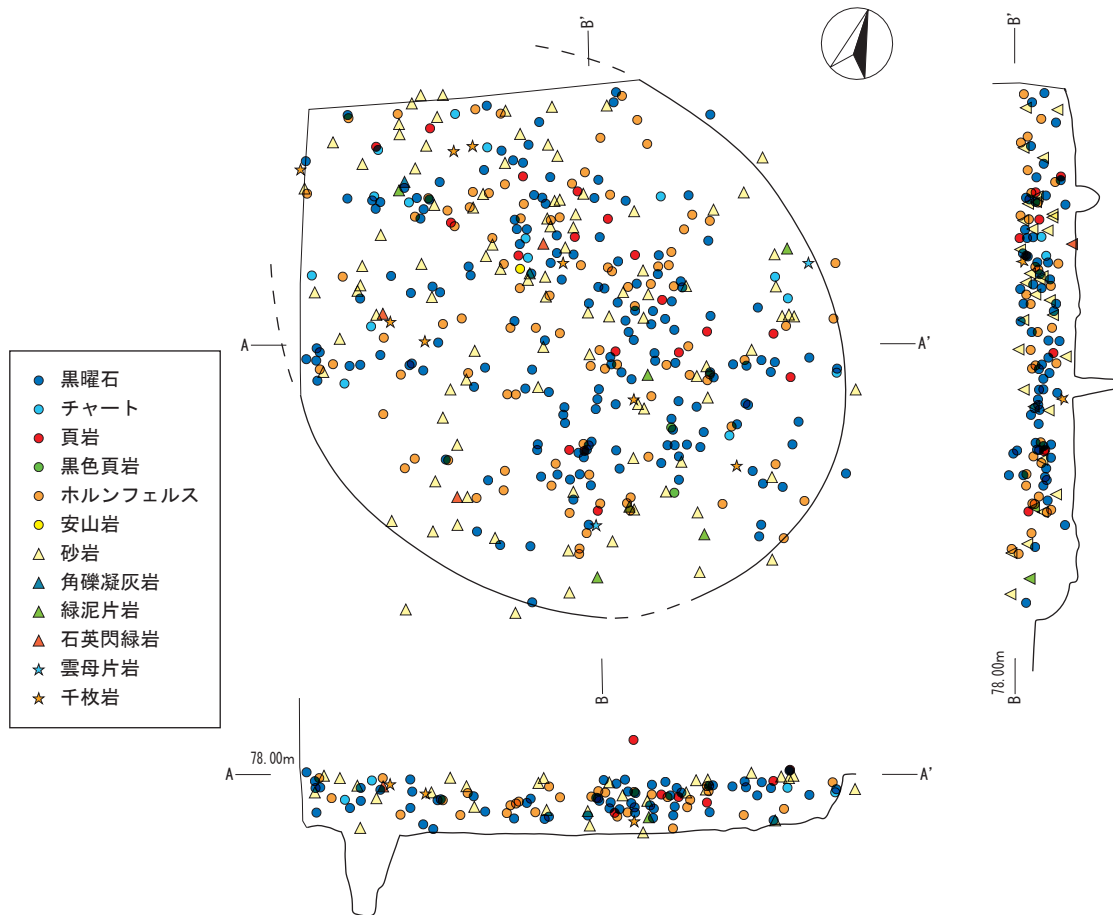
第 20 図 SI827J 遺物出土分布図②—石器 1—



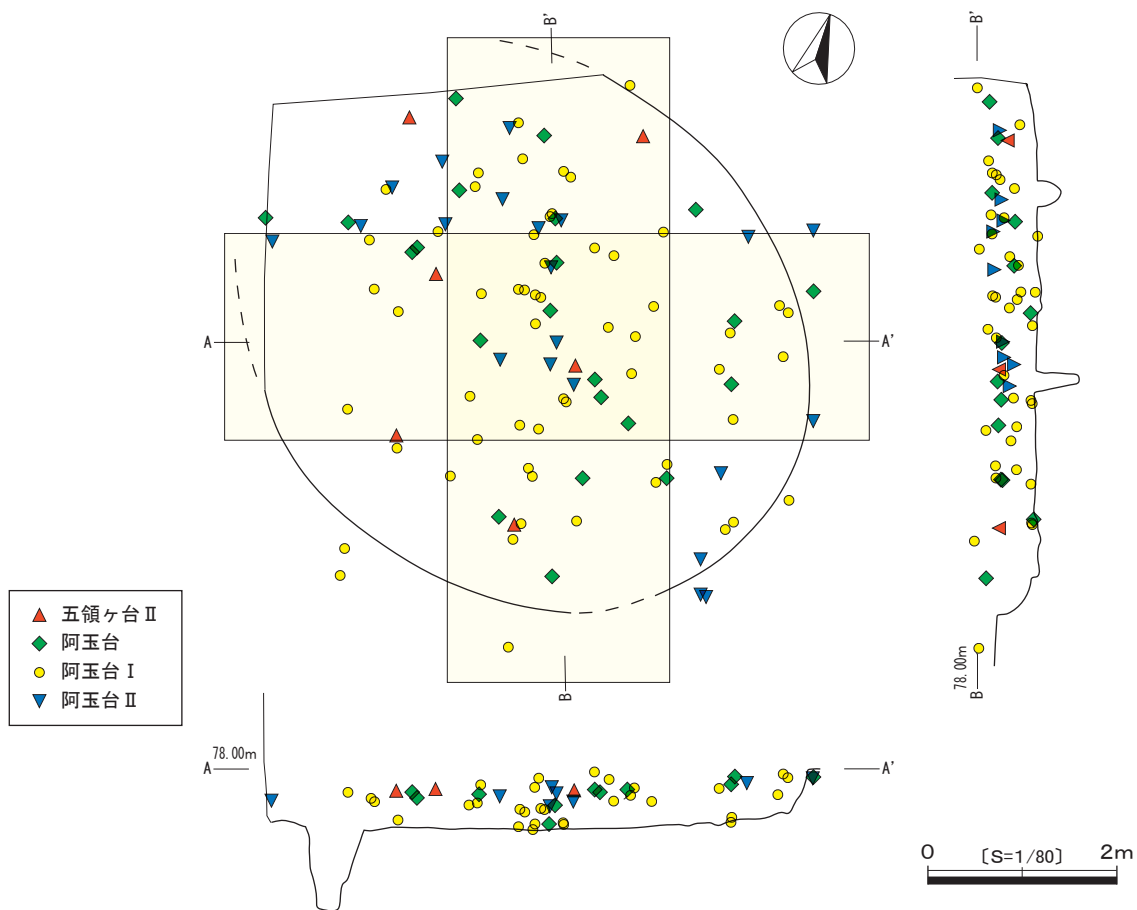
第 21 图 SI827J 遺物出土分布图③—石器 2—



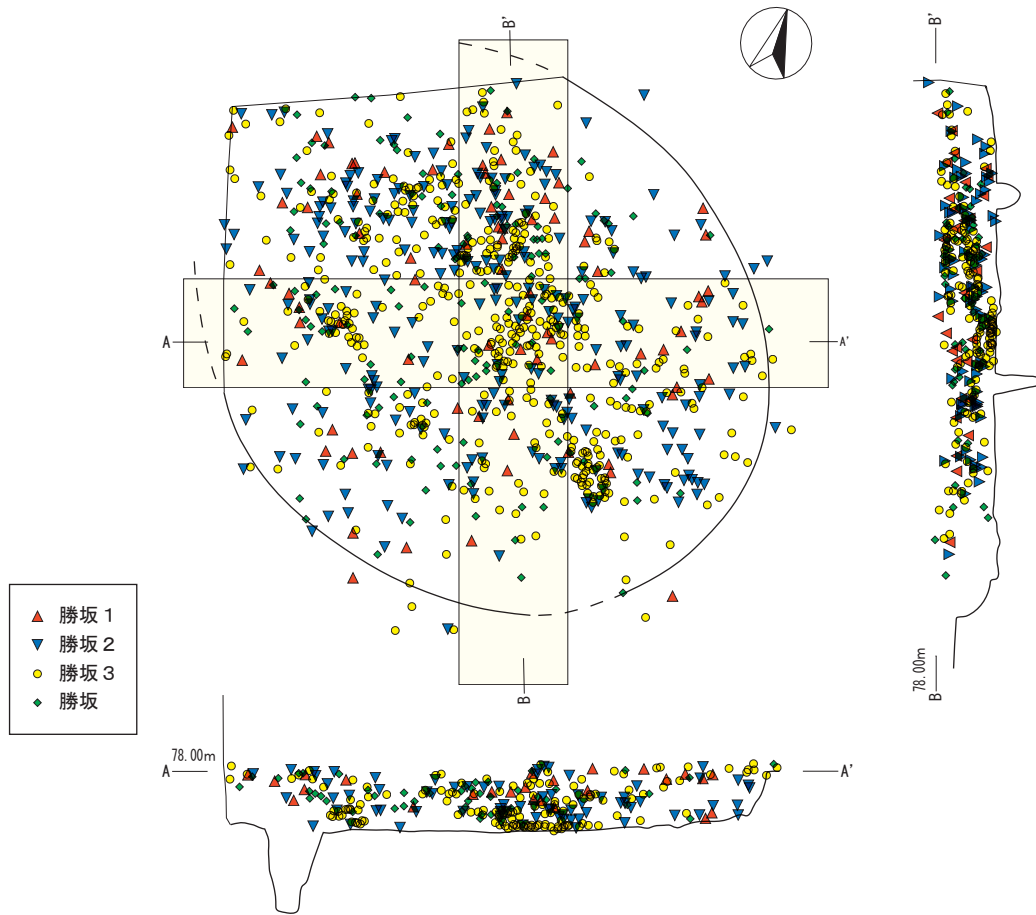
第 22 图 SI827J 遺物出土分布图④—石器 3—



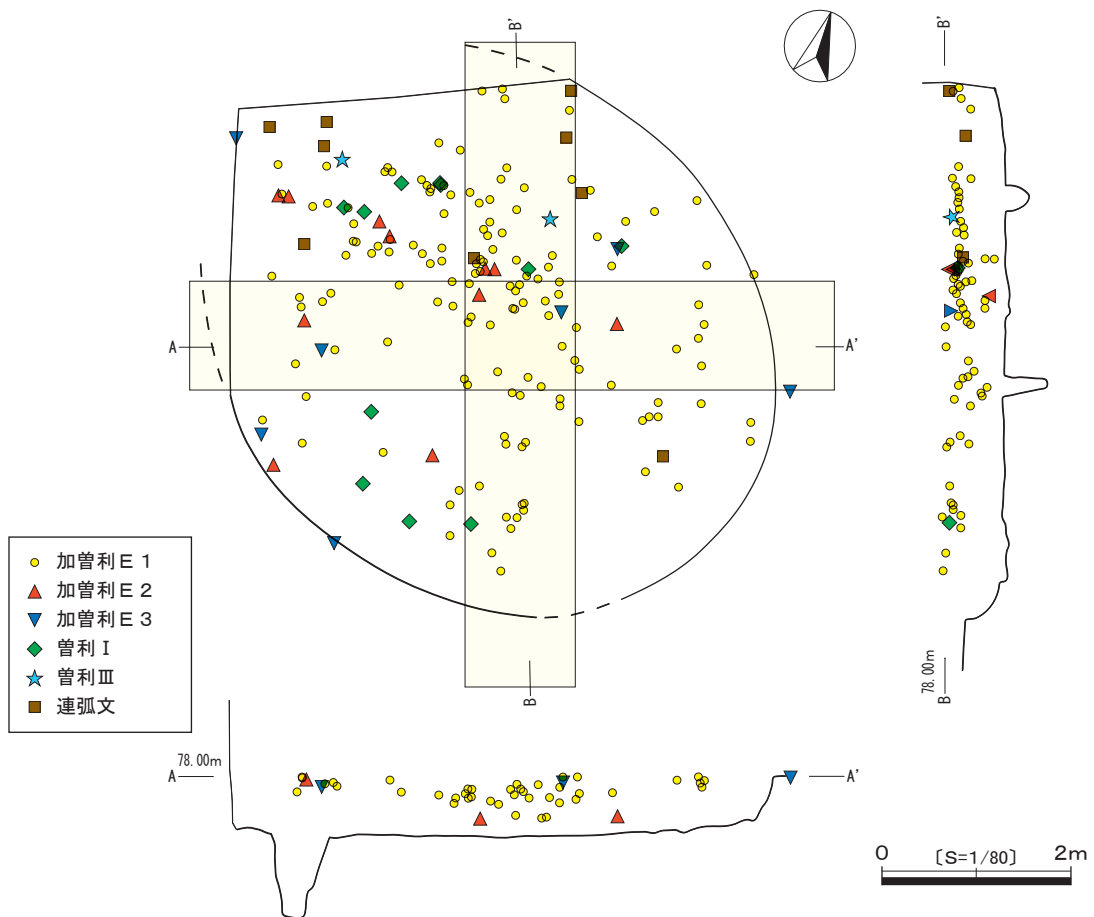
第 23 図 SI827J 遺物出土分布図⑤—石材別—



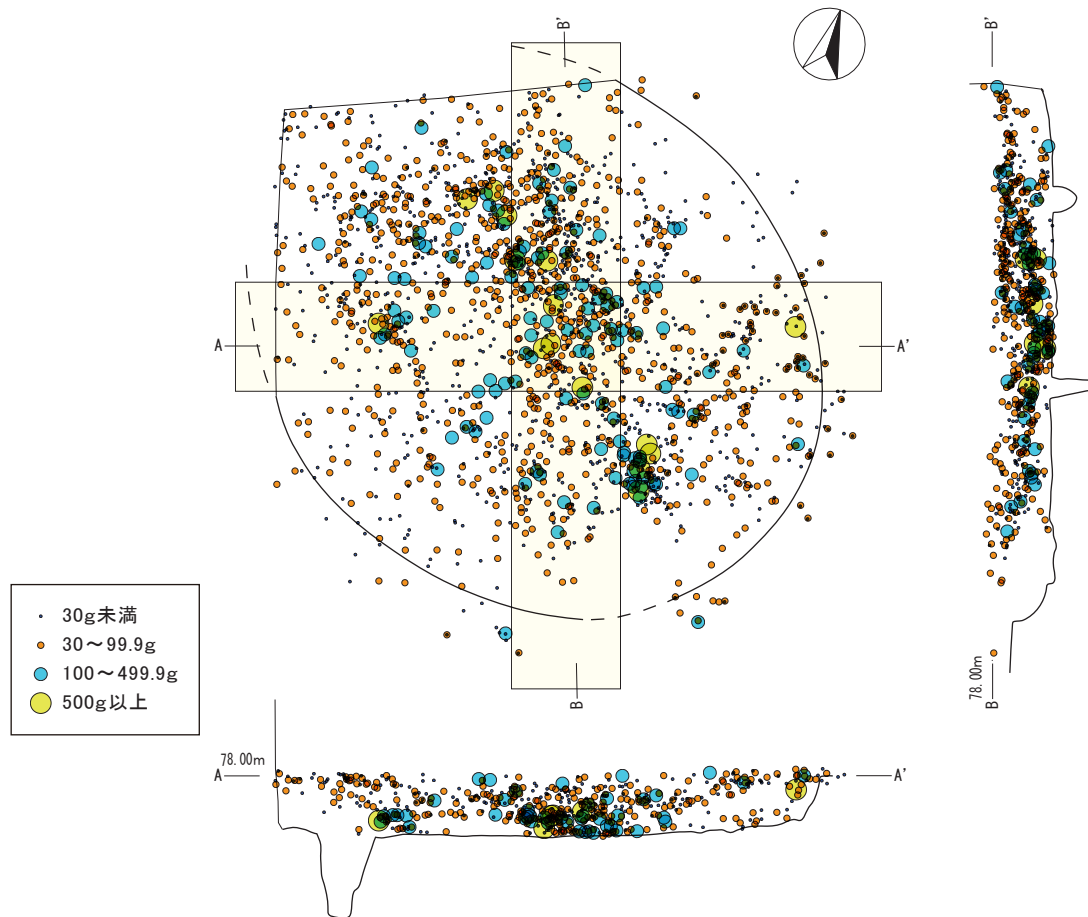
第 24 図 SI827J 遺物出土分布図⑥—土器時期別—



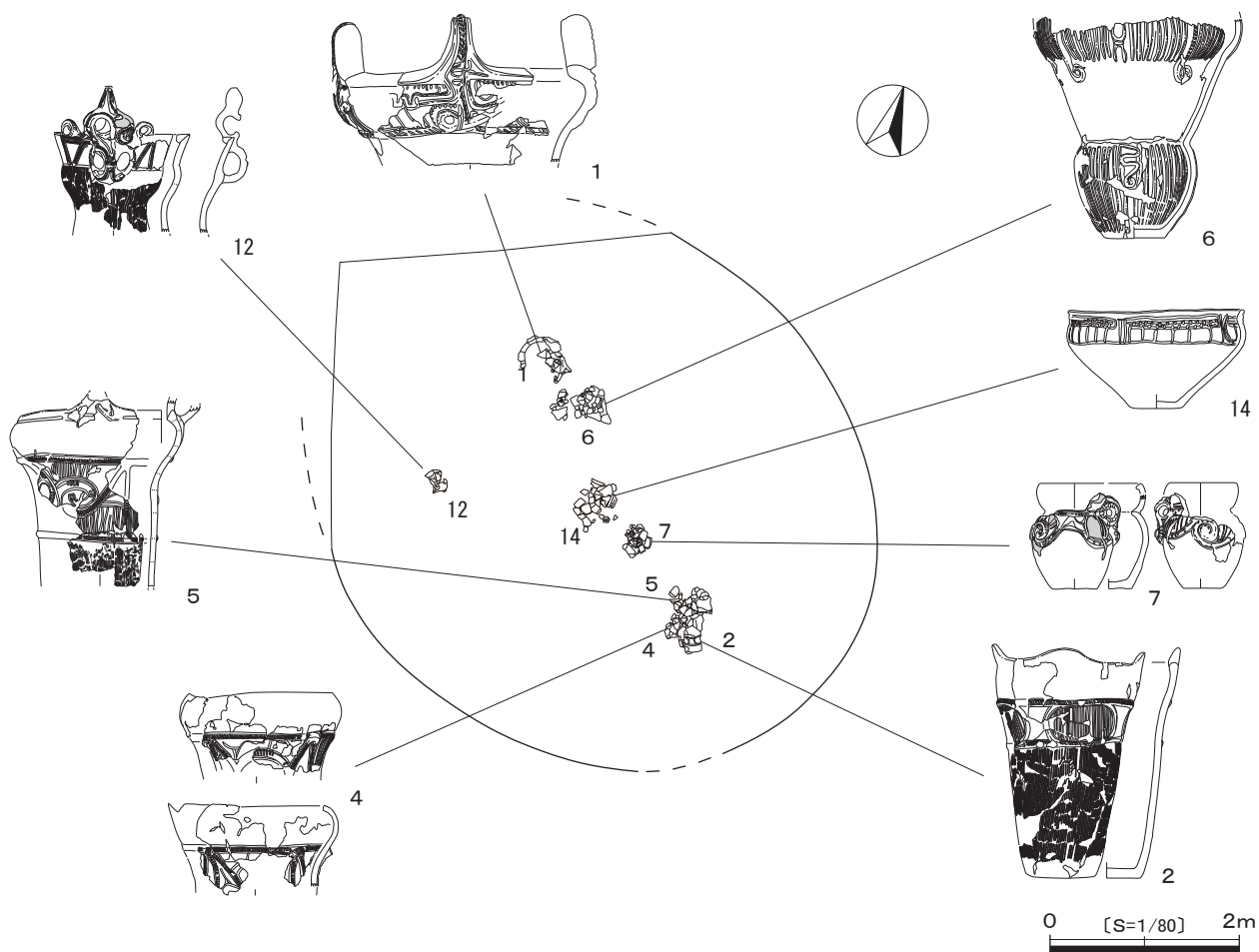
第 25 図 SI827J 遺物出土分布図⑦—土器時期別 2 —



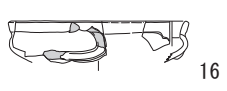
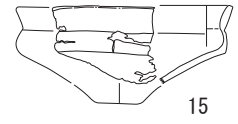
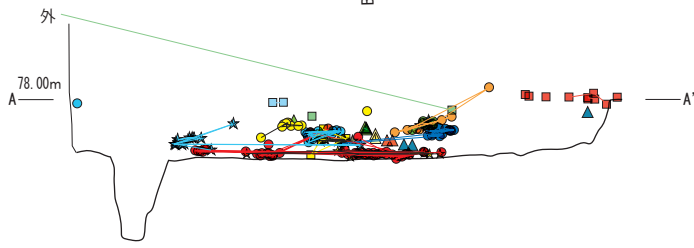
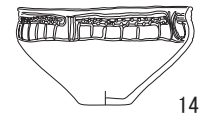
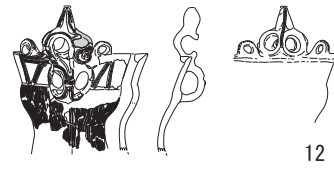
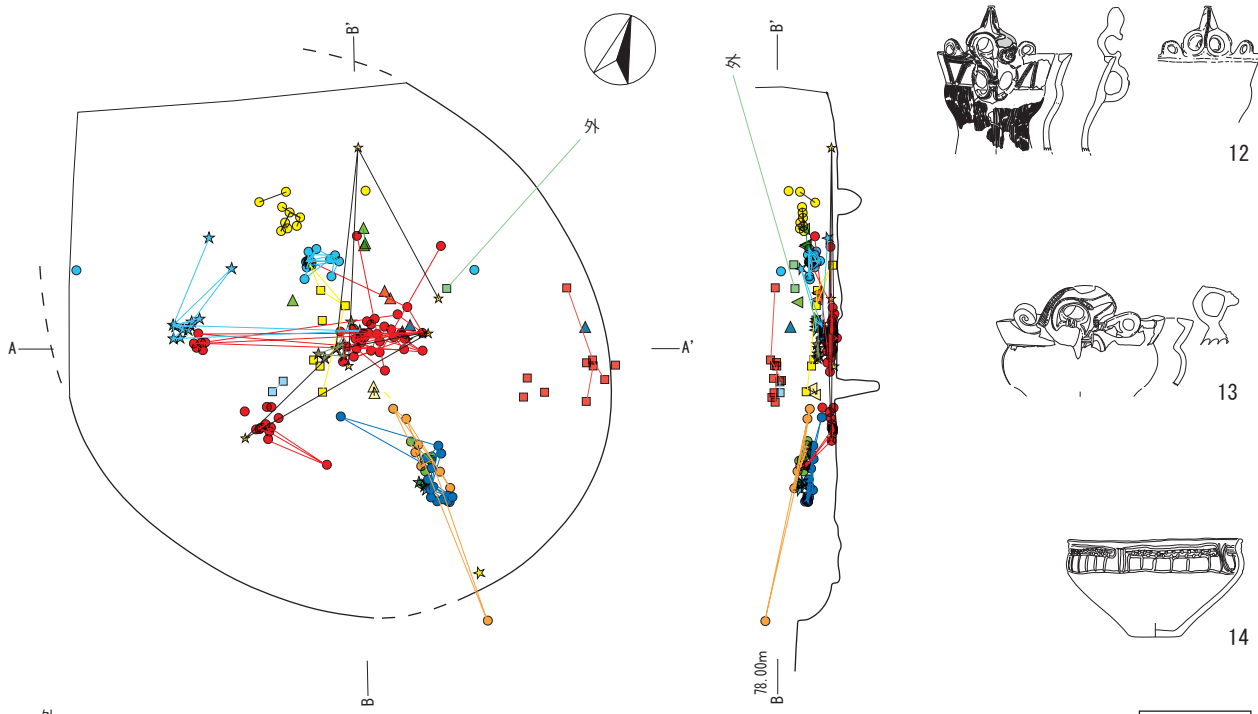
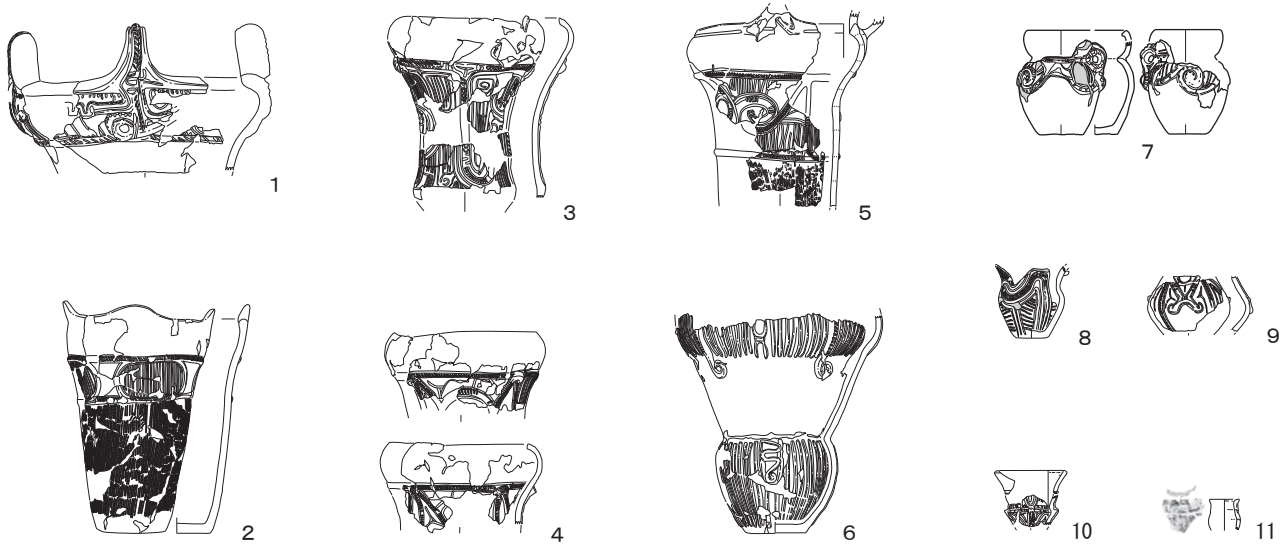
第 26 図 SI827J 遺物出土分布図⑧—土器時期別 3 —



第 27 図 SI827J 遺物出土分布図⑨—土器重量別—



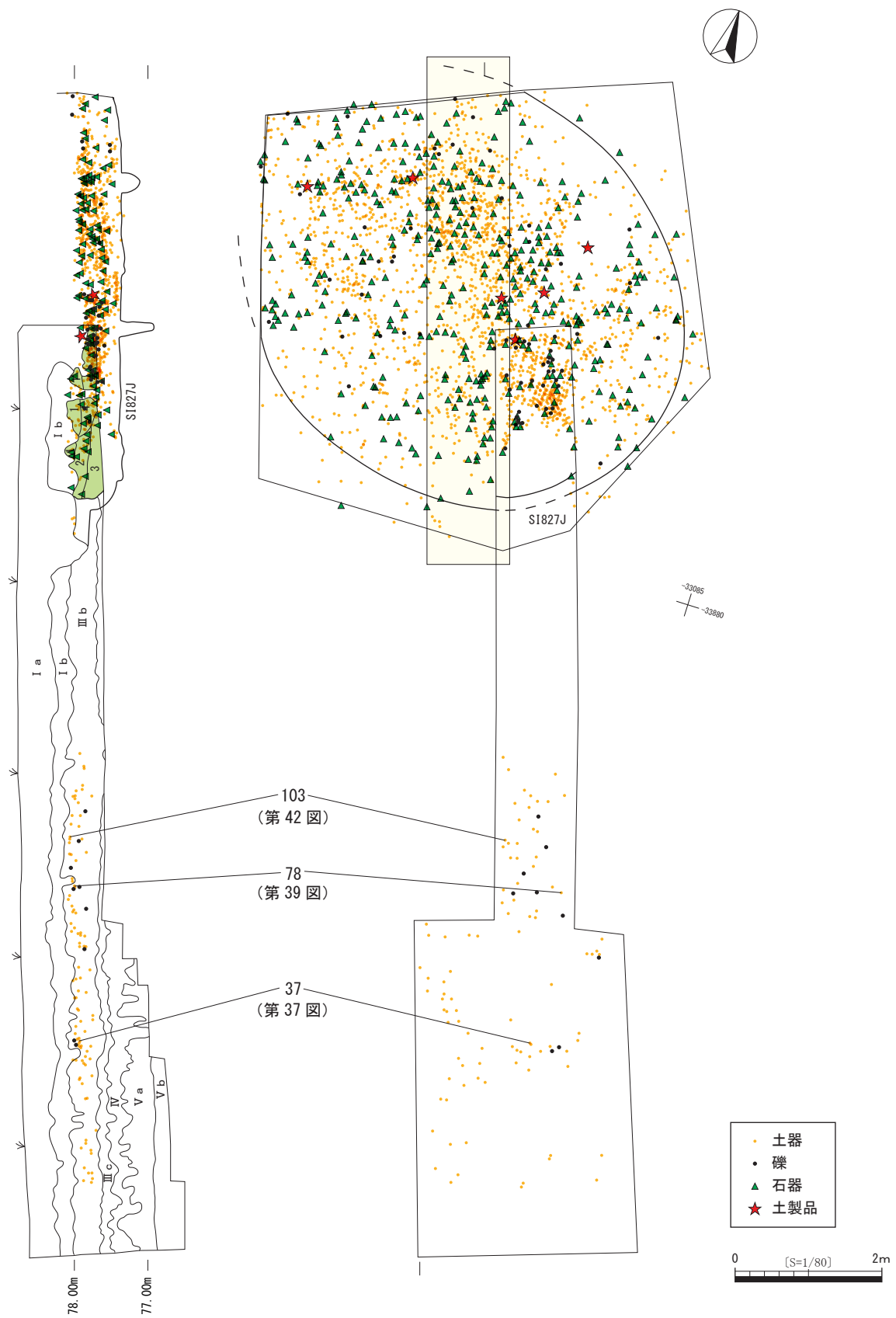
第 28 図 SI827J 遺物出土分布図⑩—土器個体別 1—



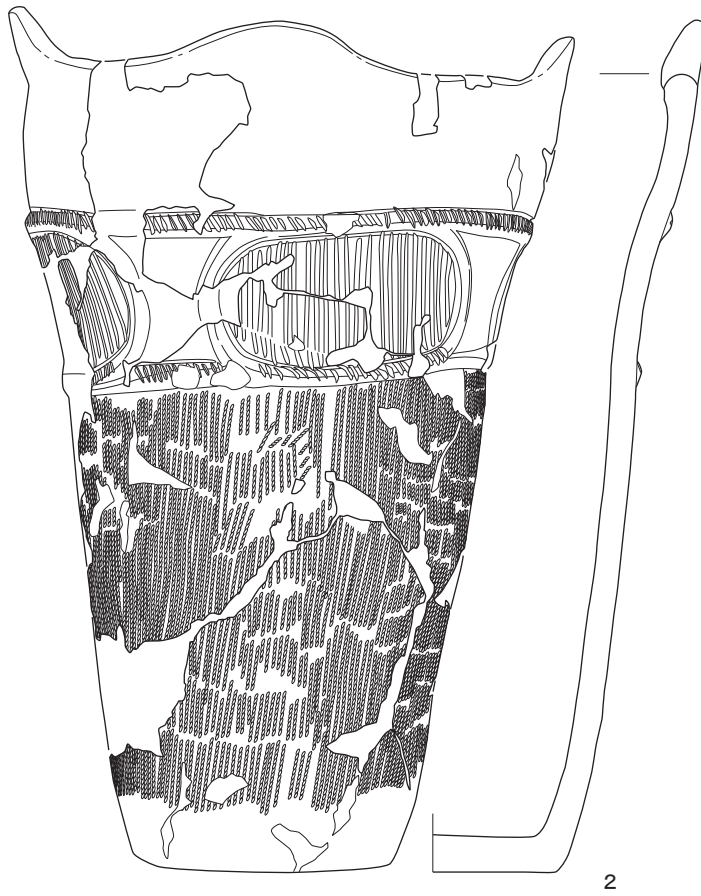
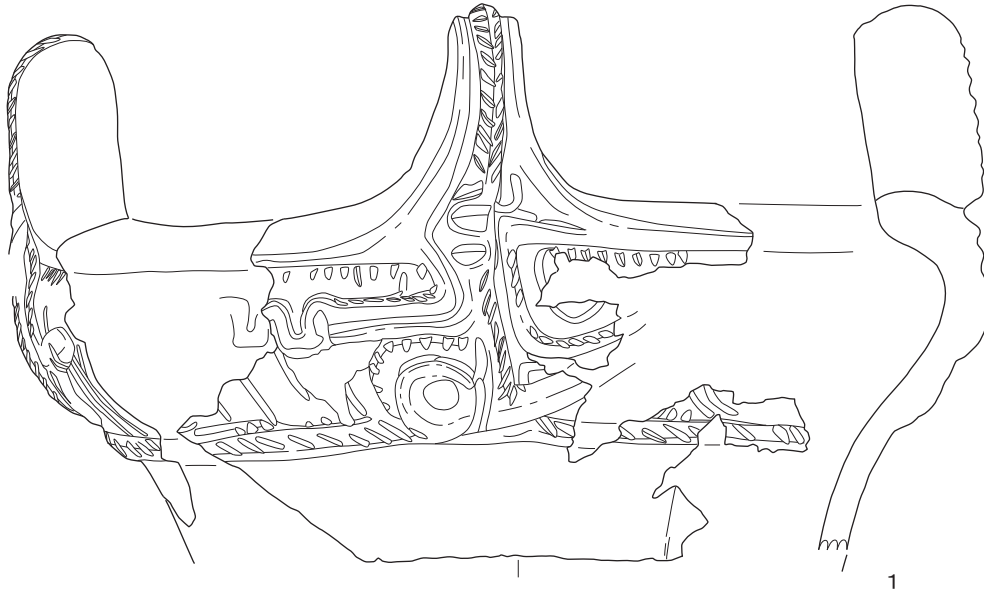
個体 No.	
●	1
●	2
●	3
●	4
●	5
●	6
△	7
▲	8
▲	9
▲	10
★	12
★	13
★	14
■	15
■	16
■	17
■	88

0 [S=1/80] 2m

第 29 図 SI827J 遺物出土分布図①—土器個体別 2—

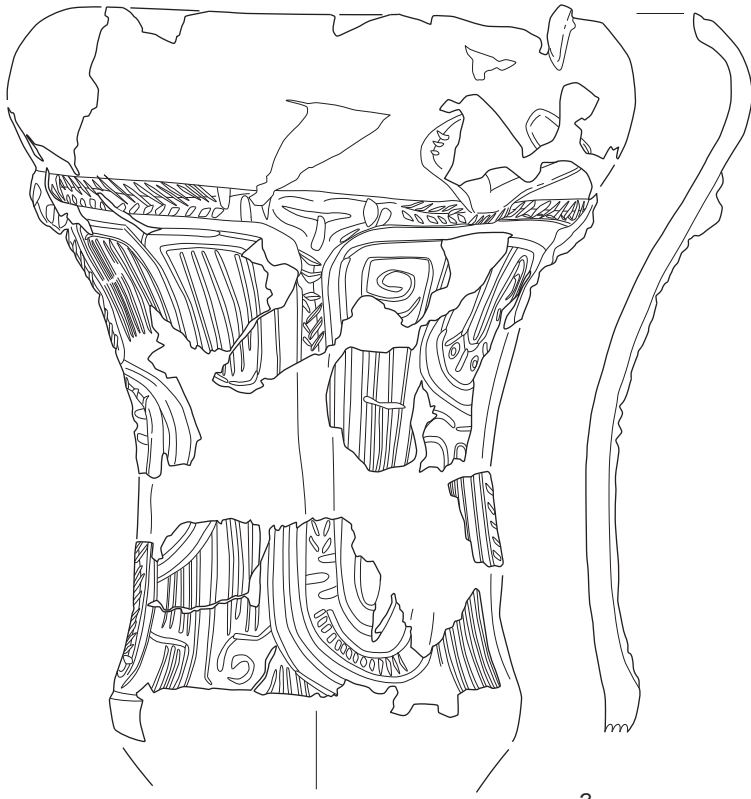


第 30 図 確認調査・本調査全体の遺物出土状況

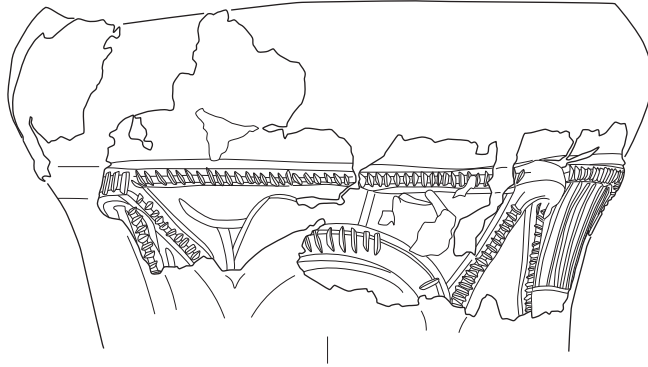


0 [S=1/4] 5cm

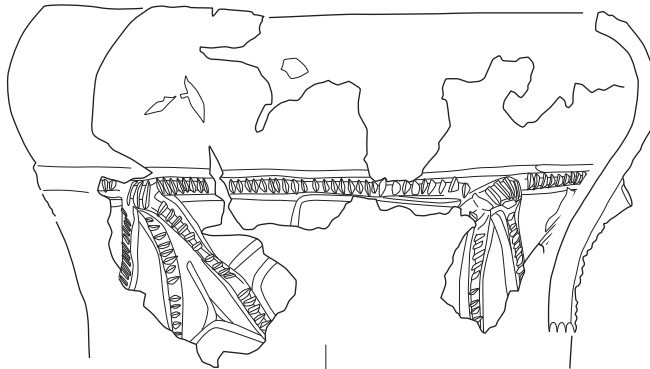
第31图 土器 (1)



3

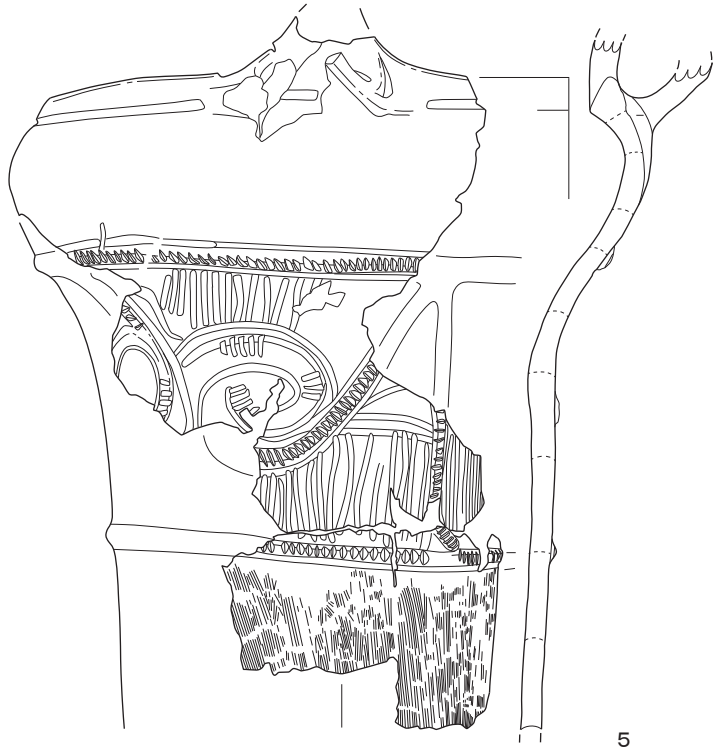


4



0 [S=1/4] 5cm

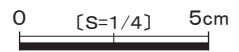
第32図 土器 (2)



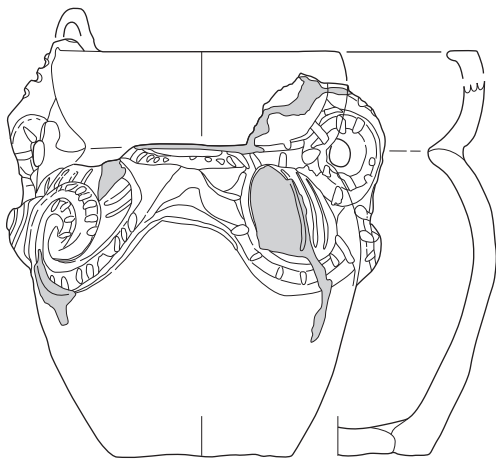
5



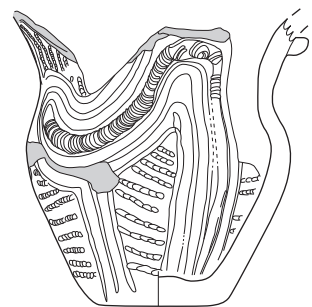
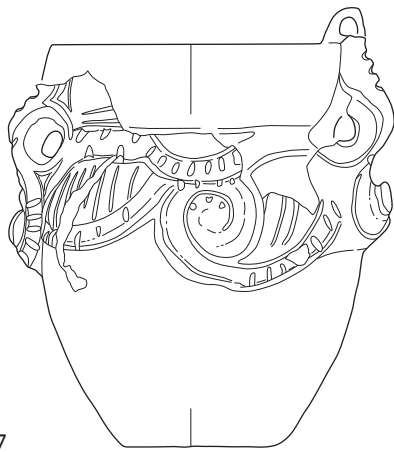
6



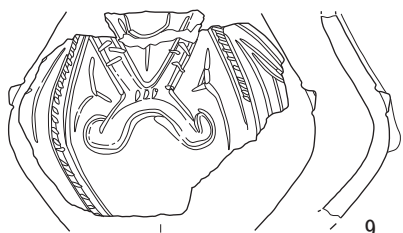
第33図 土器 (3)



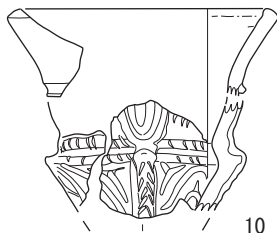
7



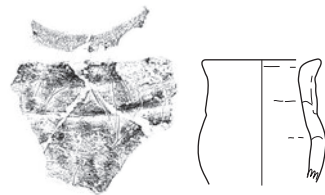
8



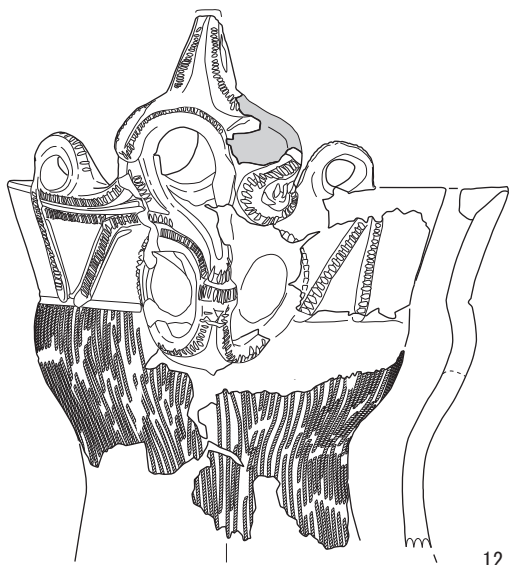
9



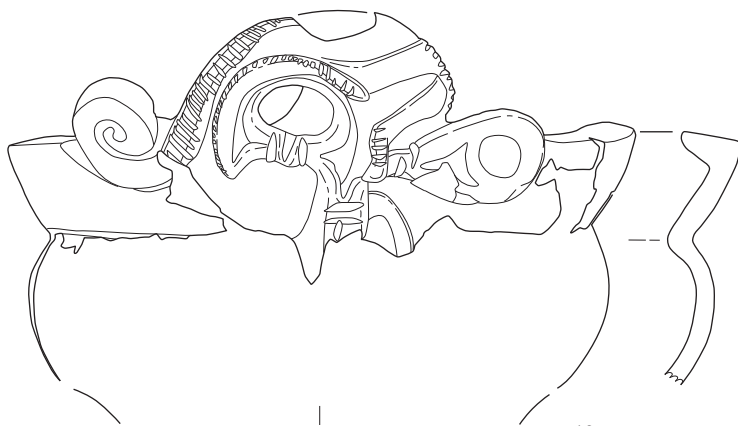
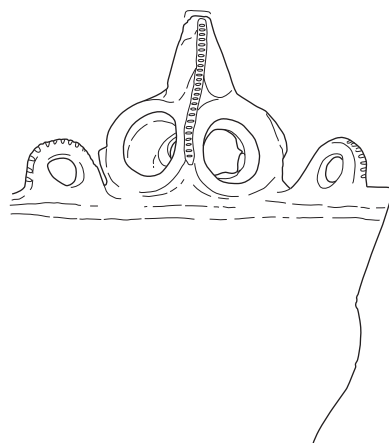
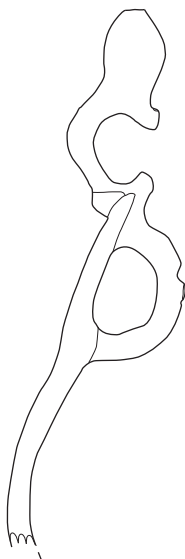
10



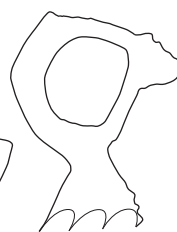
11



12

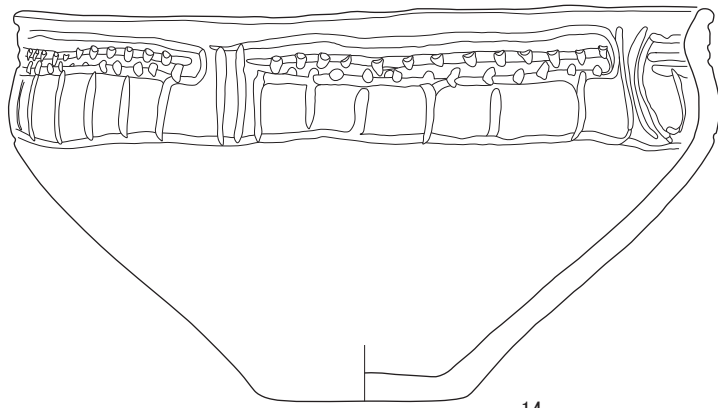


13



0 [S=1/4] 5cm

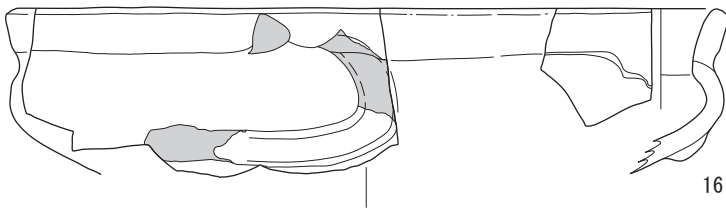
第34图 土器 (4)



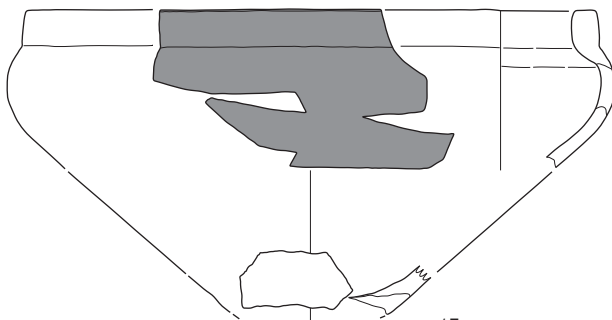
14



15



16



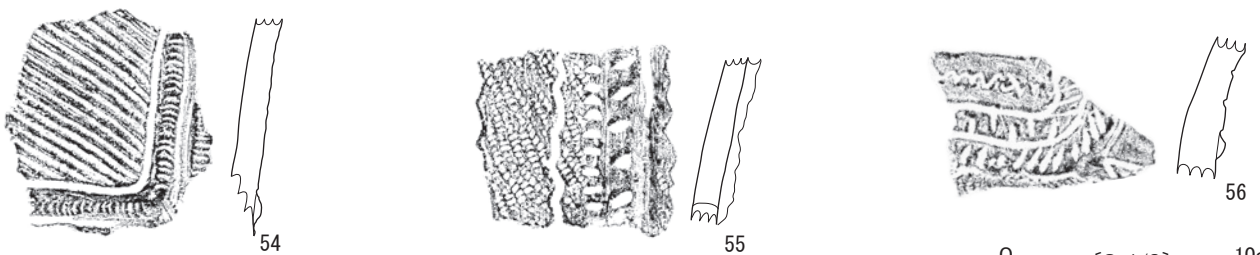
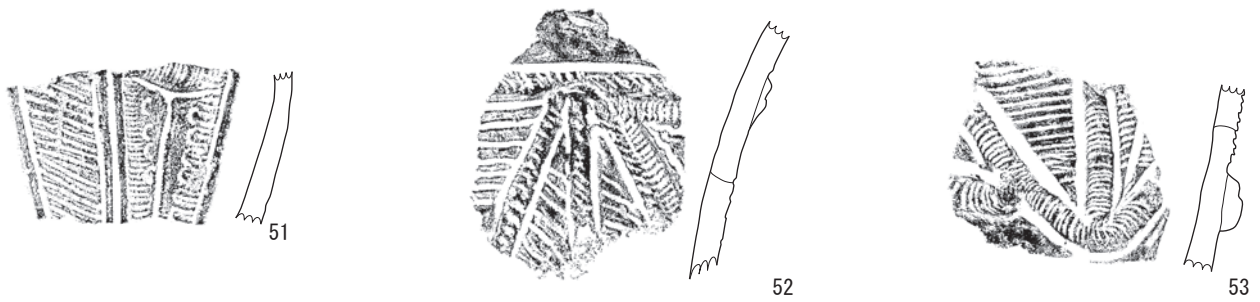
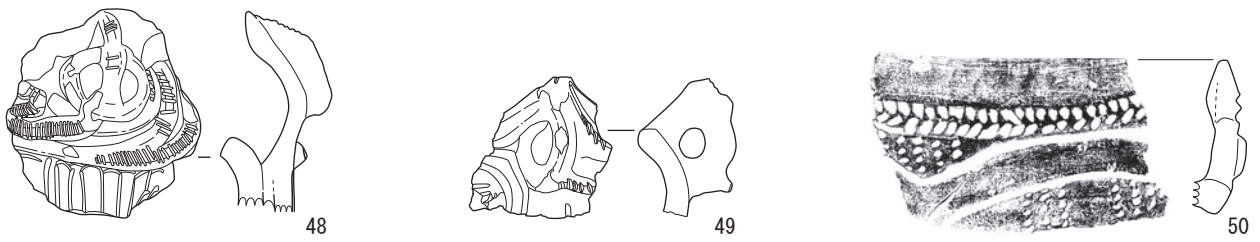
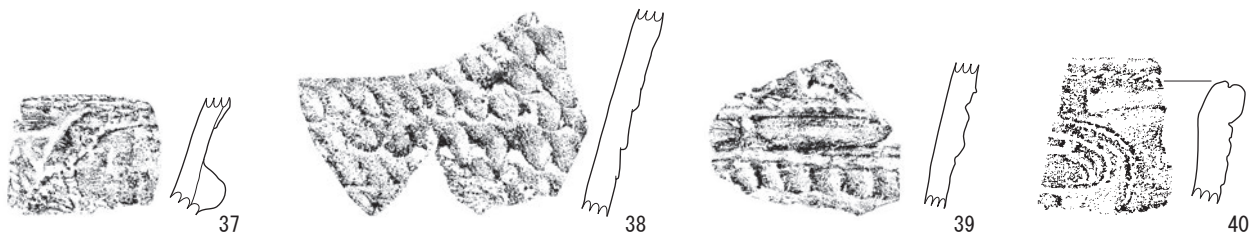
17

0 [S=1/4] 5cm

第35図 土器 (5)

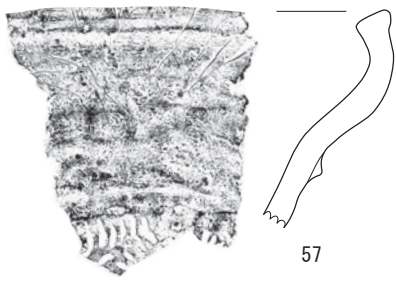


第36图 土器(6)

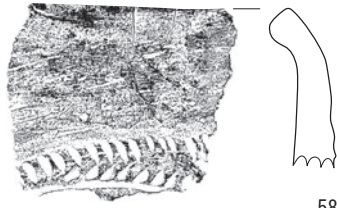


0 [S=1/3] 10cm

第37图 土器 (7)



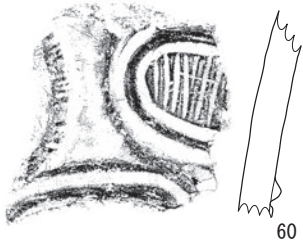
57



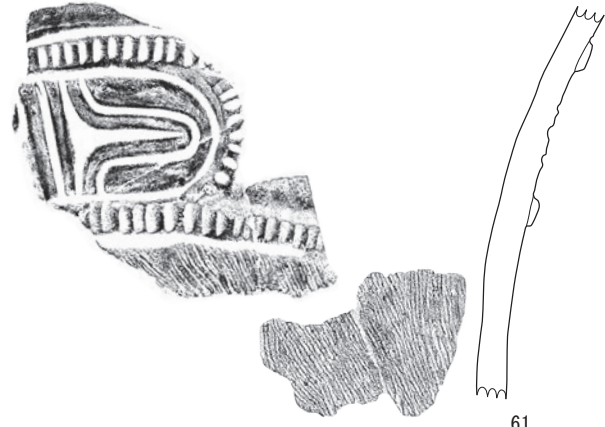
58



59



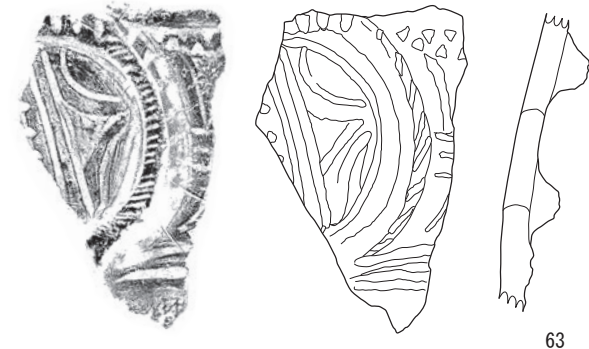
60



61



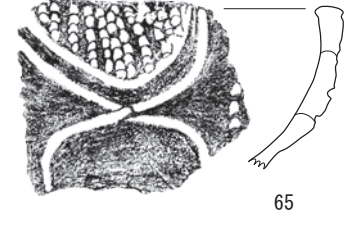
62



63



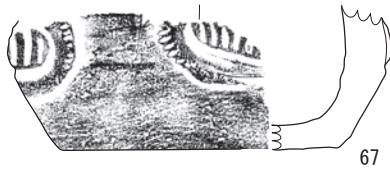
64



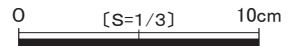
65



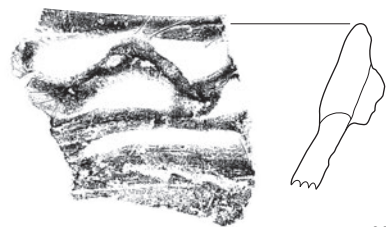
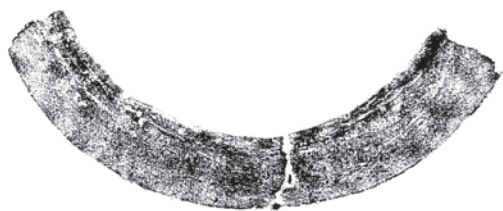
66



67



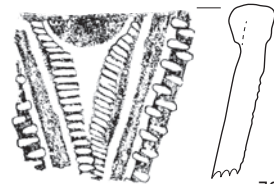
第38图 土器 (8)



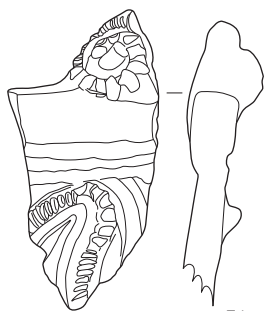
69



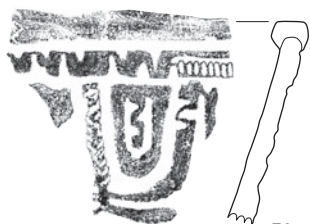
68



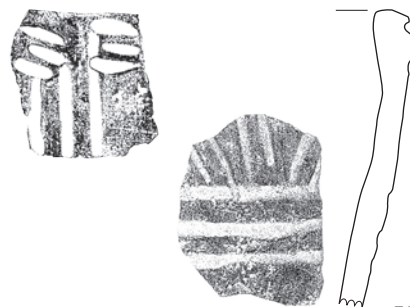
70



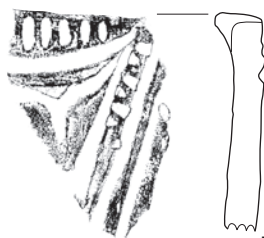
71



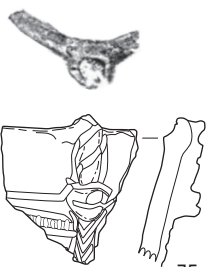
72



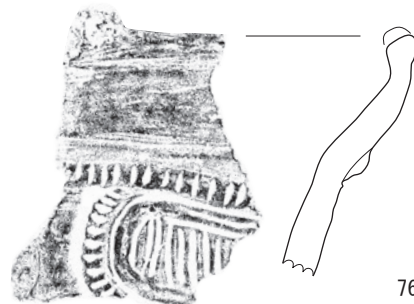
73



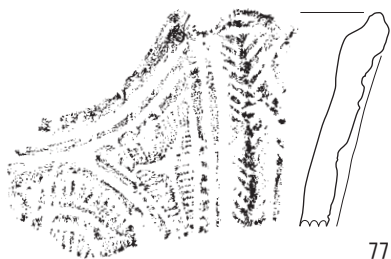
74



75



76



77



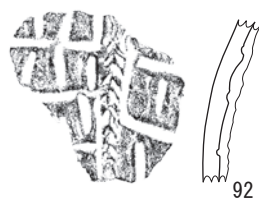
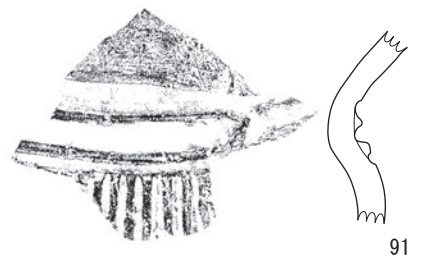
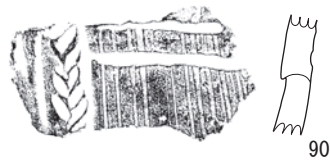
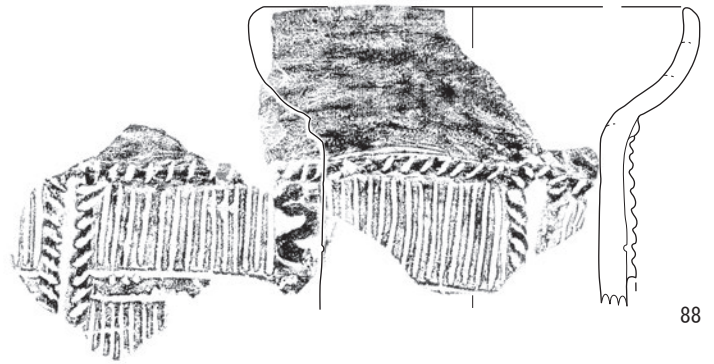
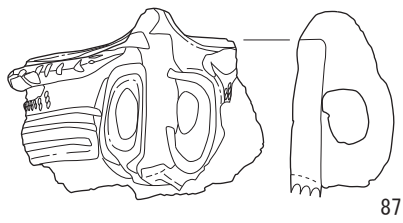
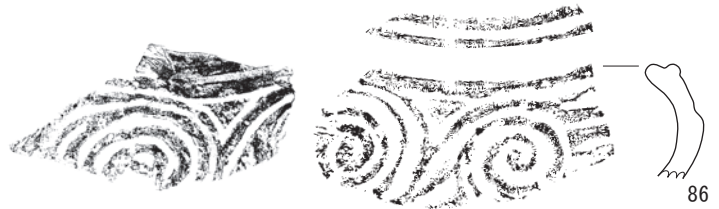
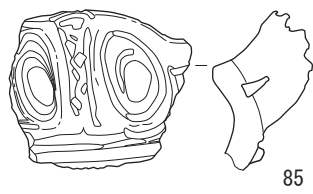
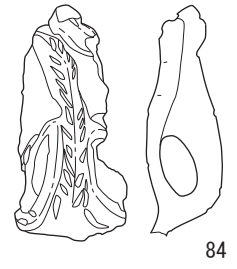
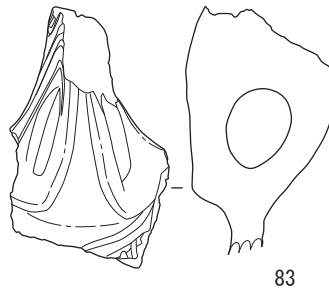
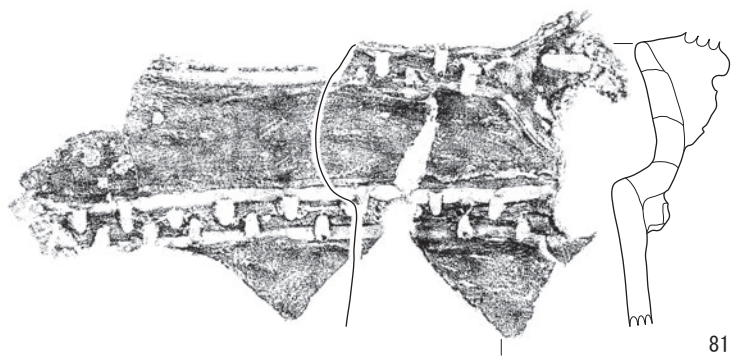
78



79

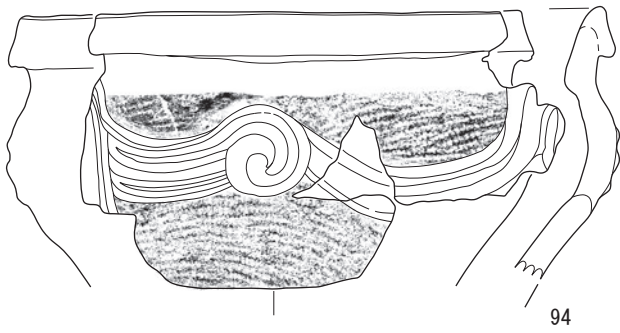
0 [S=1/3] 10cm

第39図 土器 (9)



0 [S=1/3] 10cm

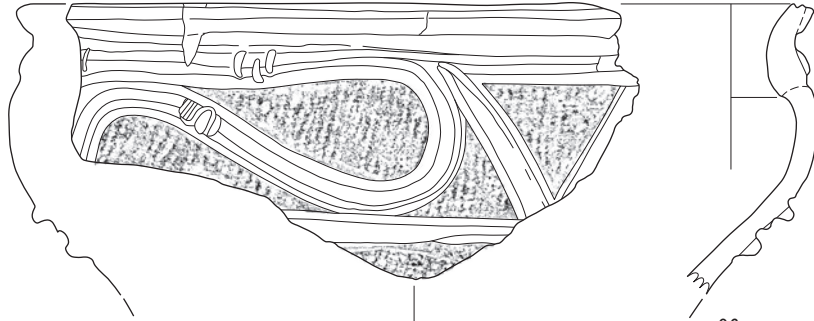
第40图 土器 (10)



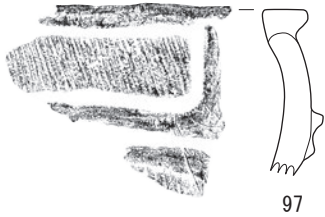
94



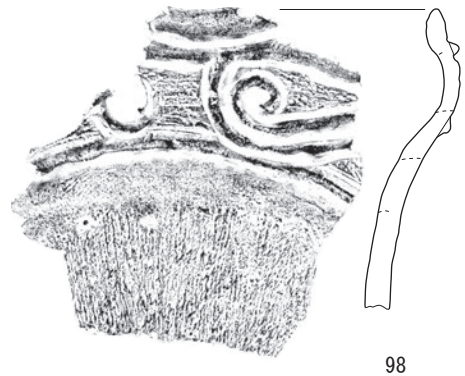
95



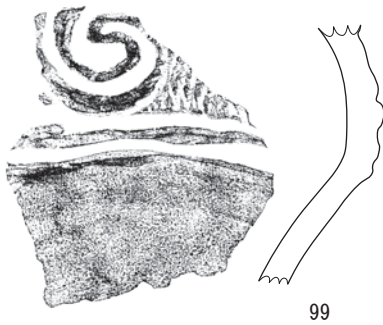
96



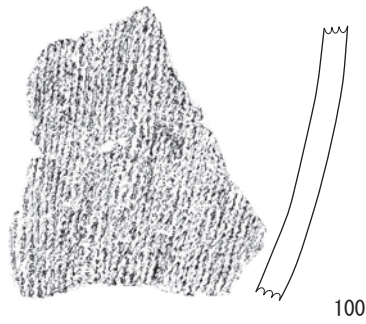
97



98



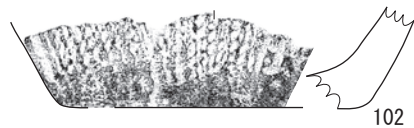
99



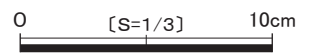
100



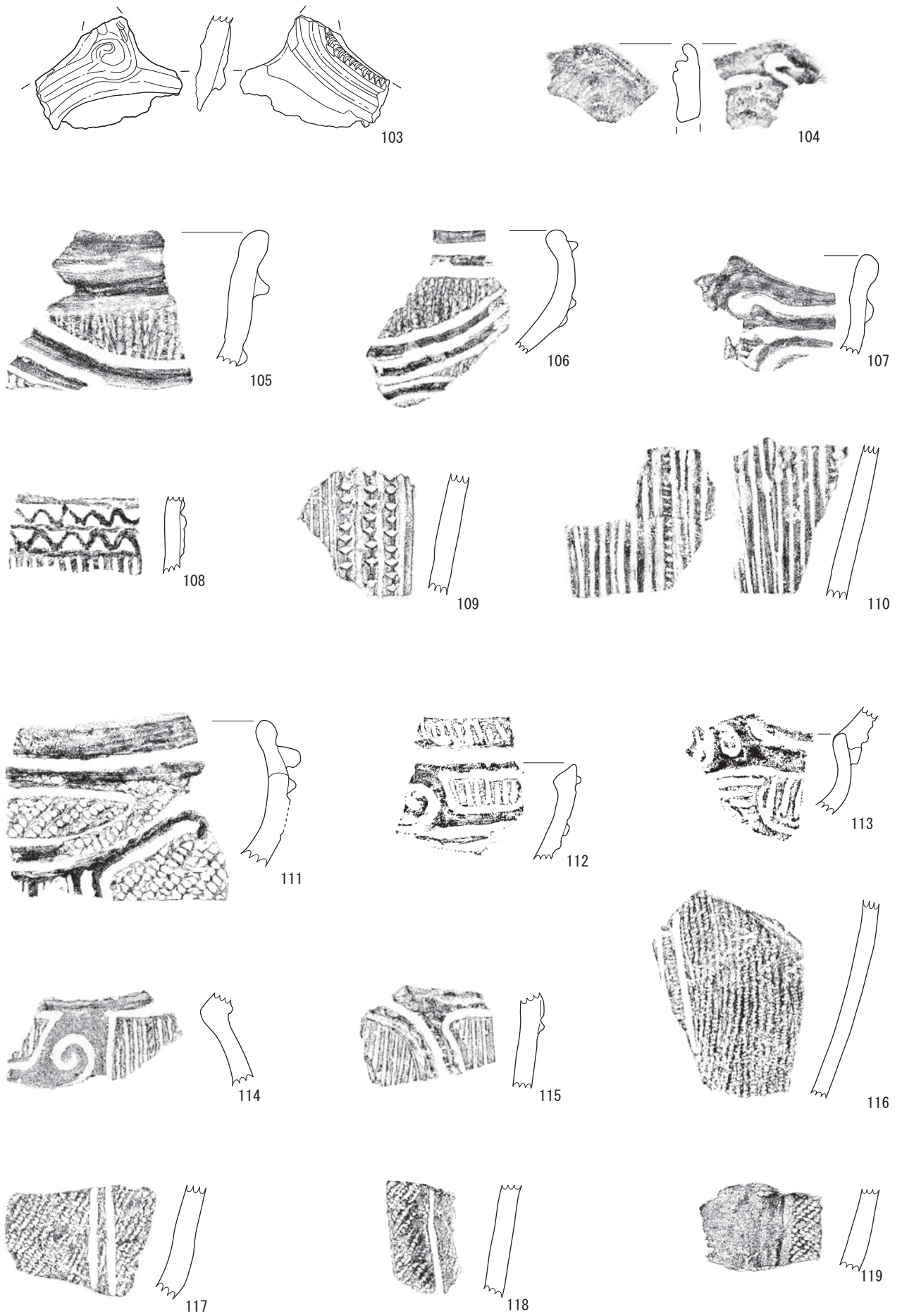
101



102

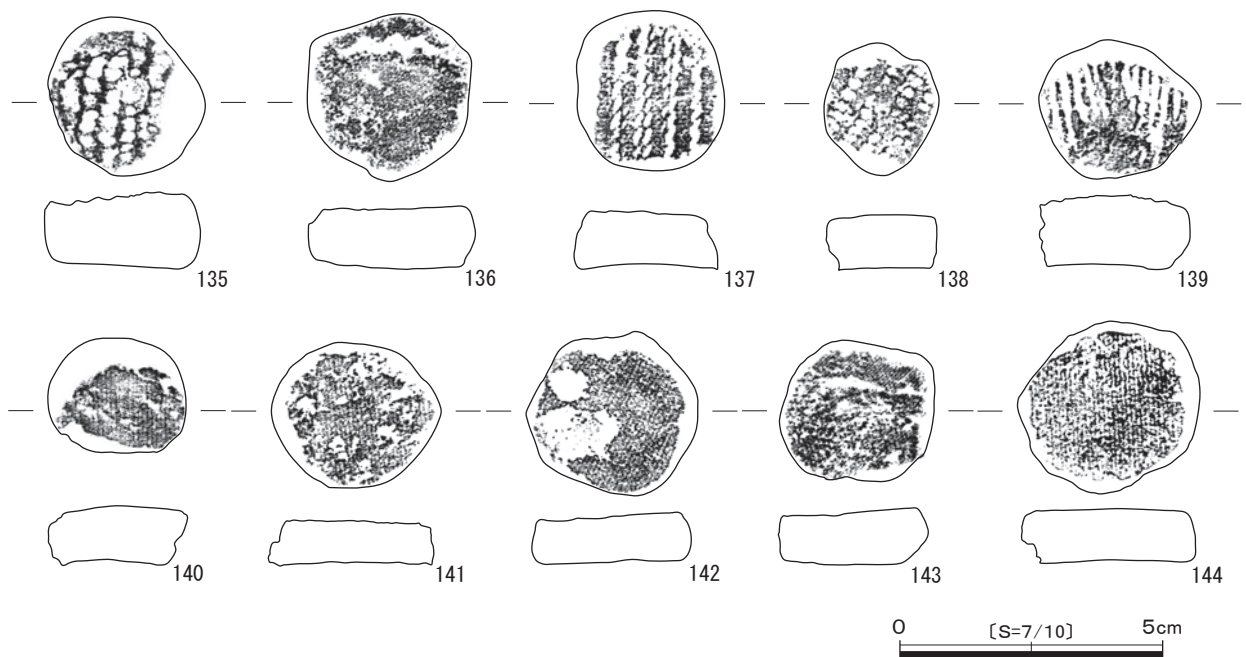
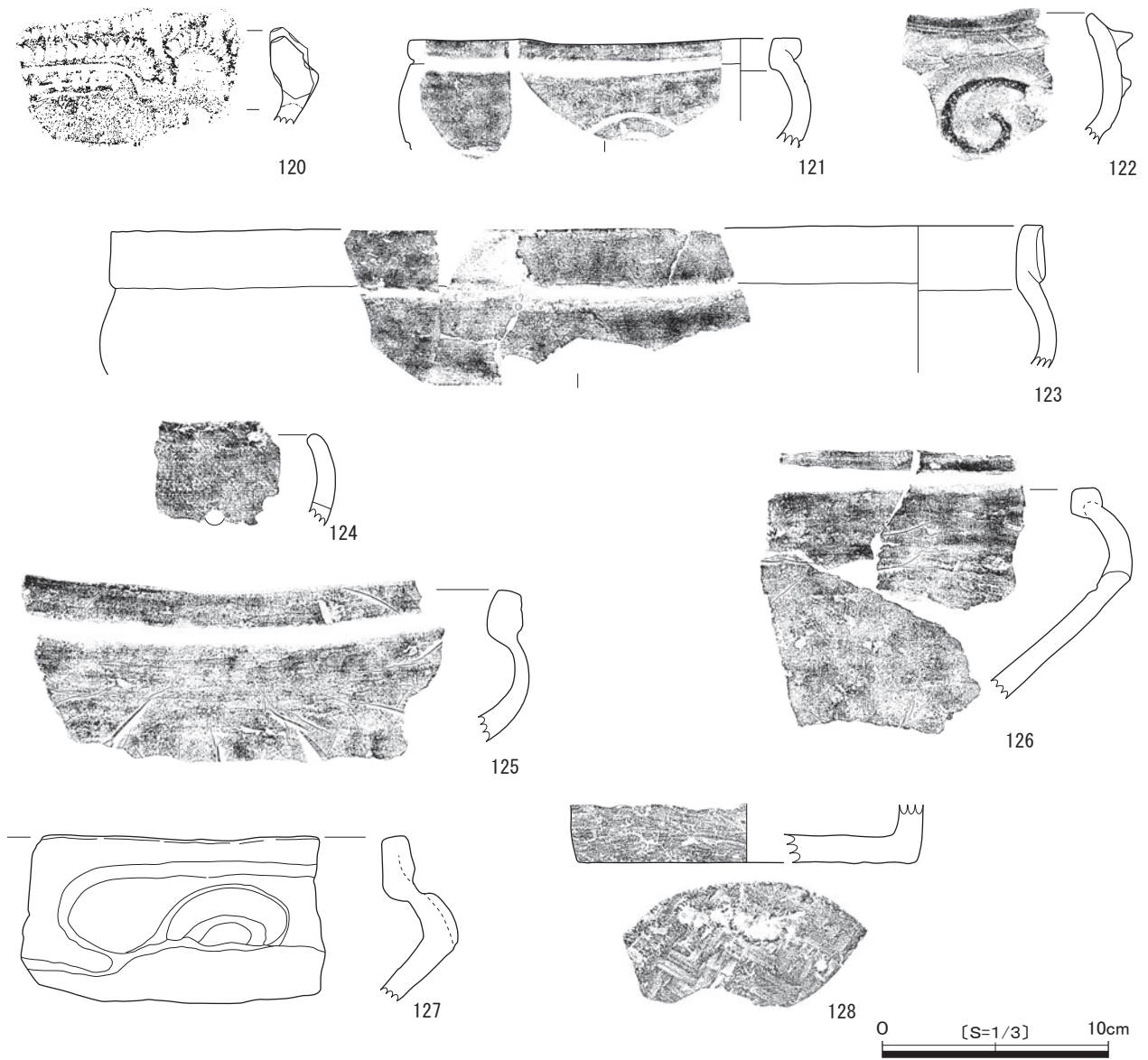


第41图 土器 (11)

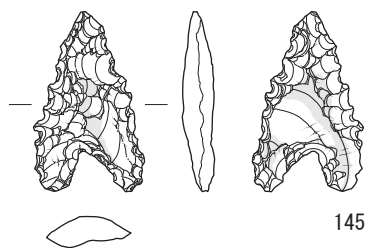


0 [S=1/3] 10cm

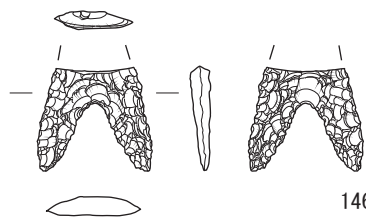
第42図 土器 (12)



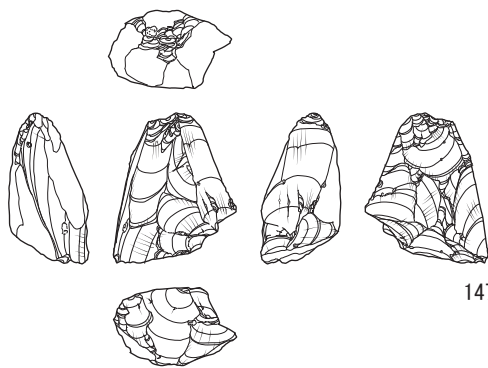
第43図 土器 (13) ・土製品



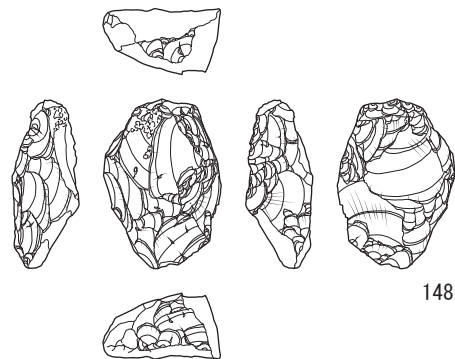
145



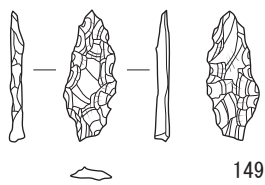
146



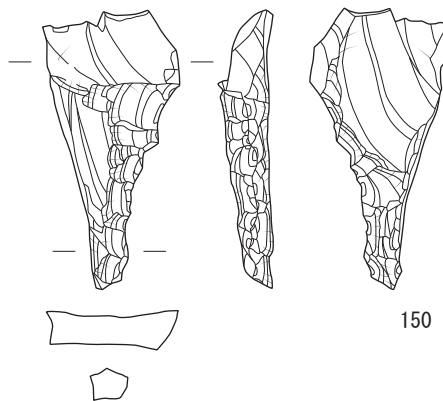
147



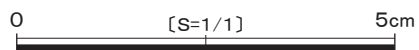
148



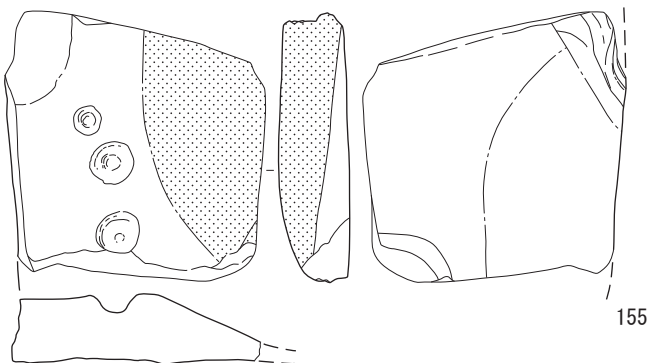
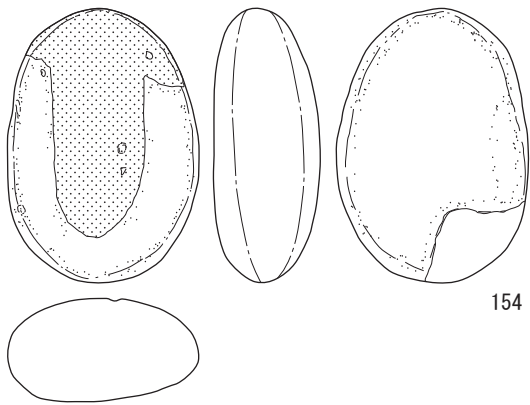
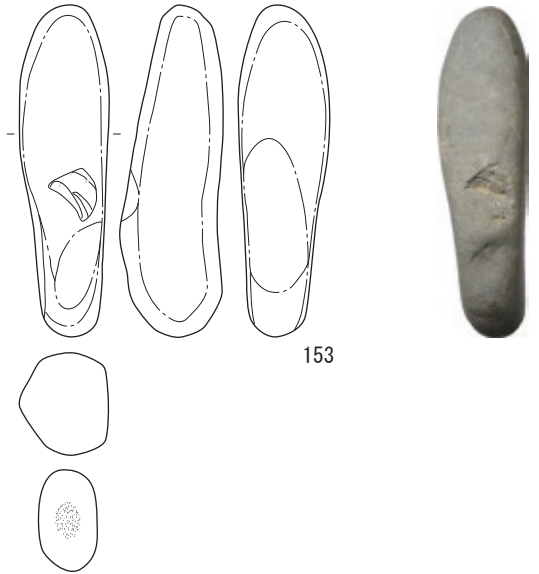
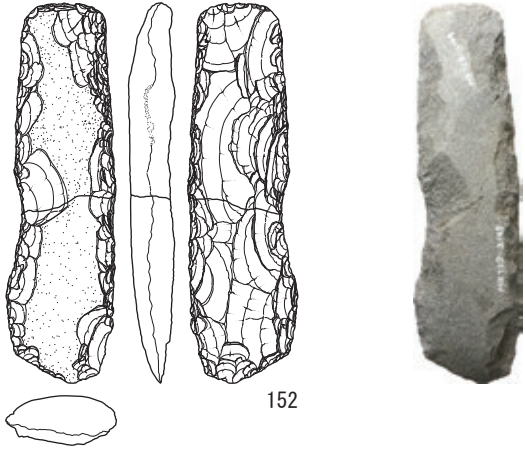
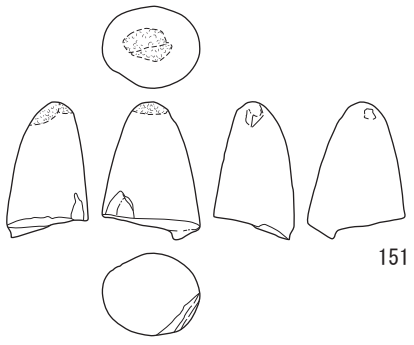
149



150



第44图 石器 (1)



0 [S=1/3] 10cm

第45図 石器(2)



写真8 調査地点近景（南東から、奥は府中街道）



写真9 確認調査区北端部遺物出土状況（南から）



写真10 表土機械掘削作業（南東から）



写真11 竪穴建物出土遺物取り上げ作業（北西から）



写真12 竪穴建物覆土掘削作業（北東から）



写真13 遺物出土状況・覆土堆積状況（西から）



写真14 遺物出土状況・覆土堆積状況（北西から）



写真15 遺物出土状況・覆土堆積状況（西から）



写真 16 遺物出土状況（東から）

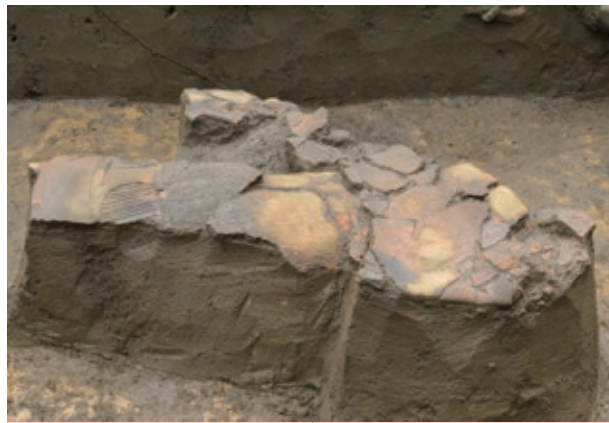


写真 17 遺物出土状況（東から）

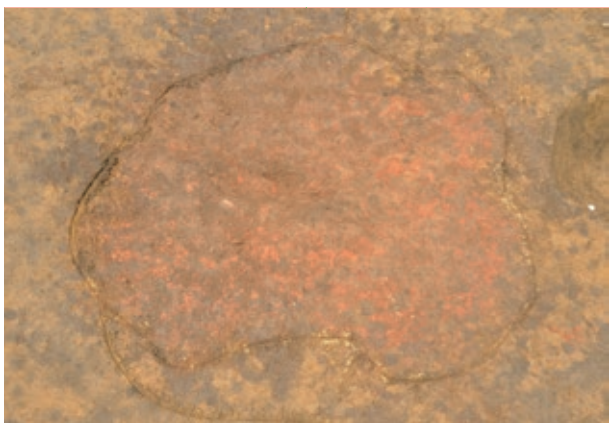


写真 18 炉焼土検出状況（東から）



写真 19 土坑 SK3524J 土層堆積状況（南から）



写真 20 SK3524J（南から）

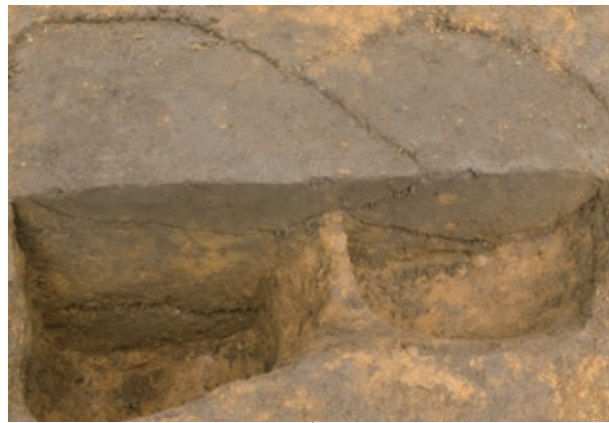


写真 21 SI827J ピット 10・23 土層堆積状況（西から）



写真 22 SI827J ピット 15 土層堆積状況（南から）



写真 23 SI827J ピット 19 土層堆積状況（南から）



1



2

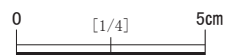


写真24 土器 (1)



3



4

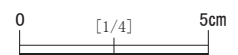


写真25 土器 (2)



5



6

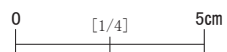


写真26 土器 (3)



7



8



12



9



10



11



13



14



16



17



15

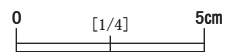


写真27 土器(4)



写真28 土器 (5)



写真29 土器 (6)



写真30 土器 (7)



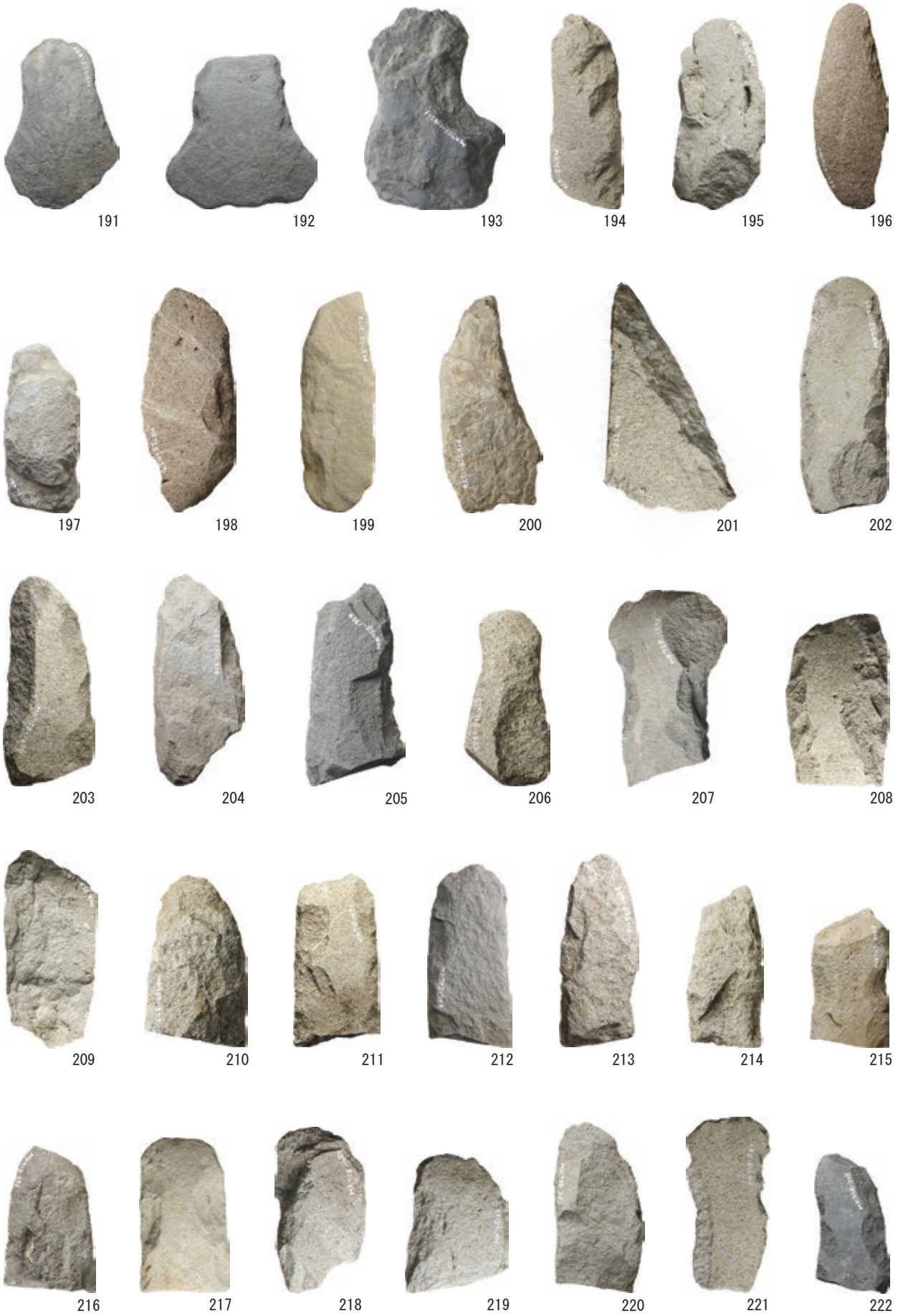
写真31 土器 (8)



写真32 土器 (9) ・土製品



写真33 石器 (1)



0 [1/3] 10cm

写真34 石器 (2)

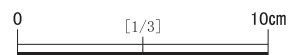


写真35 石器 (3)

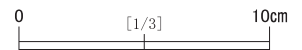


写真36 石器 (4)

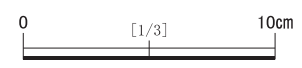


写真37 石器 (5)

表4 土器観察表

番号	出土位置	時期 (新地平)	器種 部位 残存率	器形・文様・形状・法量	胎土	色調	焼成	備考
1	758次 SI827J	勝坂3 (9c期)	深鉢 口縁部～頸部 口縁部1/2～頸部1/6残存	平口縁、4単位の突起。頸部に横位隆帯で区画、区画内に隆帯による文様、交互刺突、沈線による文様を充填。隆帯上キザミ、交互刺突文、綾杉状文施文。全体に沈線、キザミ等は粗い。頸部無文帯。 器高28.8cm、口径42.0cm	長石、角閃石、小礫、赤色粒子	外:明褐～暗褐 7.5YR5/6～7.5YR3/3 内:明褐～にぶい黄褐 7.5YR5/6～10YR5/4	良	
2	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 口縁部～底部 口縁部1/4～胴部1/2～底部1/1(周囲のみ残存,中央部欠損)	波状口縁(4単位)、平底。口縁部無文やや内弯。胴部上半に隆帯による楕円区画(4単位)、区画内縦位沈線充填。隆帯上キザミ施文(楕円区画の弧の部分には施文なし)。隆帯区画下部捺糸文施文。捺糸文L縦位 器高44.9cm、口径30cm、底径13cm	長石、石英、雲母、小礫、赤色粒子	外:明赤褐～黒 5YR5/8～10YR1.7/1 内:明赤褐～黒 5YR5/8～10YR1.7/1	良	口縁の波頂部と楕円区画の位置はややずれている。
3	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	深鉢 口縁部(口唇部欠損)～底部付近 口縁部付近1/2～胴部1/2残存	口縁部上部欠損。屈折底。口縁無文内弯。1カ所突起が欠損した痕跡あり。隆帯による区画と文様。隆帯上にキザミ、交互刺突文、綾杉状文が見られる。隆帯間には沈線による渦巻文、三叉文等の文様や縦位沈線を充填する。 器高38.2cm、口縁部付近残存部径29.0cm	石英、雲母、小礫、赤色粒子	外:明赤褐～暗褐 5YR5/6～7.5YR3/3 内:黒褐～黒 7.5YR3/5～7.5YR1.7/1	良	胎土に石英と雲母を多く含む。搬入品?
4	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	深鉢 口縁部付近(口縁部上部欠損)～胴部 口縁部付近1/12～胴部1/2残存	口縁部上部欠損、残存部口縁無文内弯。隆帯による区画と文様。頸部横位隆帯上に突起が見られ、3条の隆帯が垂下する部分が3単位、2条垂下する部分が1単位。隆帯による区画内には陰刻による三叉文、縦位沈線の充填等見られる。隆帯による環状の文様も見られる。 器高16.9cm、口縁部付近残存部径29.1cm	長石、角閃石、小礫	外:明赤褐～暗褐 5YR4/6～7.5YR3/3 内:明赤褐～暗褐 5YR4/6～7.5YR3/3	良	
5	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	深鉢 口縁部～胴部 口縁部1/4～胴部1/4残存 器高39.2cm	無文内弯する平口縁。口縁部に欠損した突起1単位あり。口縁に沿う1条の沈線。胴部に隆帯に区画された文様帯。区画内には隆帯による渦巻文、楕円形の文様施文、印刻による三叉文、縦位沈線充填。隆帯上キザミ施文。胴部下半は縦位条線文施文。	長石、石英、角閃石、小礫	外:赤褐～黒 5YR4/6～7.5Y2/ 内:赤褐～黄灰 5YR4/8～2.5Y4/1	良	
6	758次 SI827J	勝坂3 (9c期)	深鉢 口縁部付近～底部 口縁部付近1/2～胴部上部1/1・下部1/2～底部1/1残存	口縁に「し」字状の隆帯(4単位)と横位短隆帯に上部が環又は弧状になった文様(3単位残存、1単位欠損)を交互に施文、隆帯上キザミ施文。文様間には縦位隆帯充填。頸部は広い無文帯、下部は縦位隆帯貼付、蛇行した隆帯の文様が2カ所見られる。 器高46.0cm、口縁部付近残存部径42.0cm、底径13.0cm	長石、角閃石、小礫	外:明赤褐～極暗赤褐 5YR5/8～5YR2/3 内:明赤褐～極暗赤褐 5YR5/8～5YR2/3	良	長石の大粒子が目立つ
7	758次 SI827J	勝坂3 (9c期)	深鉢 口縁部～底部 口縁部付近1/5～胴部上部1/1～底部1/1残存	口縁無文内弯。頸部に環状把手1カ所残存。頸部に隆帯回す。胴部上半に太い隆帯による楕円文、渦巻文等の文様施文。隆帯間に沈線充填。隆帯上に粗大なキザミ施文。 器高19.8cm、底径9.0cm	長石、角閃石、小礫	外:明赤褐～にぶい橙 5YR5/6～5YR6/4 内:黒褐 5YR2/1～5YR4/6	良	
8	758次 SI827J	勝坂2 (7b期)	胴部上部～底部 胴部上部1/2～底部1/1残存	口縁部欠損。「J」字状の隆帯。隆帯上には連続爪形文施文。半裁竹管状工具による平行沈線文によるパネル状区画施文。区画内は横位結節状沈線、三角押文、三叉文等充填。一部で平行沈線の外側を印刻する。 器高15.5cm、底径6.6cm	長石、小礫	外:赤褐～ 5YR5/6～5YR4/6 内:褐灰 5YR4/1 5YR3/1	良	
9	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	深鉢 胴部 胴部上部～下部1/3残存	隆帯垂下、隆帯上キザミ施文。隆帯によるX字状の文様、隆帯上交互刺突文施文。隆帯間に沈線による三叉文等の文様施文。 器高10.8cm	長石、雲母、角閃石、小礫	外:橙～黒褐 7.5YR7/6～10YR4/6 内:黒褐 10YR3/2	良	
10	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	深鉢 口縁部～胴部 口縁部1/4～胴部1/2残存	無文口縁外反。隆帯垂下、隆帯上綾杉状文施文。胴部下部で括れ、隆帯を回す。隆帯上にキザミ、胴部下部に三叉文を交互に施す。 器高10.7cm	長石、小礫	外:にぶい赤褐～赤褐 2.5YR4/3～2.5YR4/3 内:赤灰 2.5YR4/1	良	
11	758次 SI827J	-	深鉢 口縁部～胴部 口縁部1/3～胴部1/6残存	口縁上部肥厚しやや外反する小型の無文土器。 器高6.5cm	角閃石、小礫、赤色粒子	外:橙 5YR5/6～5YR6/6 内:橙 5YR6/6	良	
12	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	深鉢 口縁部～胴部 口縁部1/3～胴部1/2残存	内折する平口縁。口縁に大型の蛇体状突起貼付。突起の左右には口唇部に環状の突起、外面に隆帯を三角形に貼付。隆帯上、突起縁にキザミ施文。外面の眼鏡状突起に押し状の連続爪形文が見られる。把手等のつくりは細身で丁寧。胴部に縄文施文。0段多条無節L斜位又は捺糸文L縦位 器高28.2cm、推定口径23.3cm	長石、石英、角閃石、小礫	外:橙～極暗赤褐 5YR6/6～5YR2/4 内:極暗赤褐～黒褐 5YR2/4～7.5YR3/2	良	
13	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	深鉢 口縁部 口縁部上部1/2～口縁部下部1/12残存	内折する平口縁。口縁に蛇体状の大型の突起1単位。突起の端部の渦巻を印刻で表現する。内面は眼鏡状となる。外面に孔1ヶ所、内面に2カ所、突起縁にキザミ施文。残存部口縁部無文。胴部には縄文が施されたと思われるが欠損のため不明 器高18.7cm、口径33.7cm	石英、雲母、小礫	外:赤褐 5YR4/8 内:赤褐～にぶい黄褐 5YR4/8～10YR5/4	良	胎土に石英と雲母を多く含む。搬入品?

番号	出土位置	時期 (新地平)	器種 部位 残存率	器形・文様・形状・法量	胎土	色調	焼成	備考
14	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	浅鉢 口縁部～底部 口縁部1/2～底 部2/3残存	口縁内湾し上端がやや外反する。口縁部に太い単沈線による矩形区画、区画上端に交互刺突文を施す。文様は縦位2本線で大きく区切り4単位となる。 器高20.8cm、口径37.0cm、底径10.5cm	長石、角閃石、小礫	外:にぶい橙～にぶい褐 7.5YR6/4～7.5YR6/3 内:灰褐 7.5YR5/2	良	
15	758次 SI827J	中期	浅鉢 口縁部～胴部 口縁部～胴部 1/8残存	肥厚する平口縁やや外傾。残存部無文。外面口縁部、内面全面にわずかに赤色塗彩の痕跡認める。 器高16.4cm、口径45.6cm	長石、石英、角閃石、小礫	外:赤褐～黒褐 5YR2/4 内:黒 5YR1.7/1	良	彩色土器
16	758次 SI827J	中期	浅鉢 口縁部～胴部 口縁部～胴部 2/3残存	肥厚する平口縁やや外傾。口縁部に弧状隆帯貼付 器高8.8cm、口径38.0cm	長石、石英、小礫	外:にぶい褐～にぶい橙 7.5YR3/6～ 7.5YR4/6 内:にぶい褐～にぶい橙 7.5YR3/6～ 7.5YR4/6		彩色土器
17	758次 SI827J	中期	浅鉢 口縁部～底部 口縁部～胴部 1/6残存	肥厚する平口縁やや外傾。残存部無文。外面口縁部～胴部、内面全面にわずかに赤色塗彩の痕跡認める。器高15.7cm、口径30.0cm	長石、石英、角閃石、小礫	外:にぶい赤褐～赤褐 5YR4/4～4/8 内:にぶい赤褐～赤褐 5YR4/4～4/8	良	彩色土器
18	758次 SI827J	五領ヶ台 IIc (4期)	深鉢 胴部破片	口縁直下～胴部上半。隆帯による横帯楕円区画文、胴部には地紋施文後に懸垂する沈線文。縄文RL縦位	雲母、小礫	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:橙 7.5YR6/6	良	
19	758次 SI827J	勝坂1 (5a期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口縁上部に竹管による交互刺突文、そこから垂下するY字状懸垂文。	長石、角閃石	外:にぶい赤褐 5YR4/3 内:にぶい赤褐 5YR4/3	良	大石タイプ
20	758次 SI827J	勝坂1 (5b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。竹管による角押文、三角印刻文、焼成前の穿孔。	雲母、長石	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:にぶい褐 7.5YR5/4	良	
21	758次 SI827J	阿玉台 Ib (5b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口唇と口縁に押引文。	雲母多量	外:灰褐 5YR4/2 内:にぶい赤褐 5YR4/3	良	
22	758次 SI827J	阿玉台 Ib (5b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口縁に隆帯による細長い横帯楕円区画文、隆帯に沿う押引文。	雲母、長石	外:にぶい黄褐 10YR5/3 内:にぶい褐 7.5YR5/3	良	
23	758次 SI827J	阿玉台 Ib (5b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口縁に隆帯による細長い横帯楕円区画文、隆帯に沿う押引文。	雲母、小礫	外:灰褐 5YR4/2 内:にぶい赤褐 5YR5/3	良	
24	758次 SI827J	阿玉台 Ib (5b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口縁に隆帯による細長い横帯楕円区画文、隆帯に沿う押引文。	雲母、小礫	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:灰褐 7.5YR6/2	良	
25	758次 SI827J	阿玉台 Ib (5b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口唇に刻み、口縁に2条の押引文。	雲母、小礫	外:灰褐 5YR5/2 内:褐灰 5YR4/1	良	
26	758次 SI827J	阿玉台 Ib (5b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口唇に刻み、隆帯により口縁縦に突起貼付、口縁に2条の押引文、胴部にヒダ状圧痕。	雲母、小礫	外:にぶい褐 7.5YR5/3 内:にぶい褐 7.5YR5/3	良	
27	758次 SI827J	阿玉台 Ib (5b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口唇に刻み、口縁に2条の押引文。	雲母、小礫	外:黒褐 7.5YR3/2 内:灰褐 7.5YR6/3	良	
28	758次 SI827J	阿玉台 I (5b期)	深鉢 底部破片	網代圧痕。2本越、2本潜、1本送り	長石、小礫	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:褐灰 5YR5/1	良	
29	758次 SI827J	阿玉台 II (6期)	深鉢 口縁部破片	波状口縁。口縁に隆帯による横帯楕円区画文、区画内には竹管内皮による二条の押引文。	雲母、長石、石英、小礫	外:明赤褐 5YR5/6 内:灰褐 5YR5/52	良	
30	758次 SI827J	阿玉台 I (5b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口唇部に押引文、口縁部に押引文による菱形、く字状文施文、その直下に低い隆帯を横位蛇行状に貼付。	角閃石、小礫	外:極暗赤褐 2.5YR2/2 内:灰赤 2.5YR5/2	良	
31	758次 SI827J	阿玉台 II (6期)	深鉢 口縁部破片	波状口縁。突起頂部から隆帯を垂下させ、口唇部、隆帯上に刻みを施文し、隆帯脇に竹管内皮による2条の押引文を施文。	雲母、長石	外:暗赤褐 5YR3/3 内:赤褐 5YR5/4	良	
32	758次 SI827J	阿玉台 II (7期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。低い隆帯による三角形区画、そこに竹管内皮による平行沈線が沿う。	雲母、小礫	外:暗赤褐 5YR3/2 内:灰褐 5YR5/2	良	33と同一個体
33	758次 SI827J	阿玉台 II (7期)	深鉢 胴部破片	竹管内皮による平行沈線文を弧状に施文。	雲母、小礫	外:にぶい黄褐 10YR5/3 内:褐灰 10YR4/1	良	32と同一個体
34	758次 SI827J	阿玉台 II (7期)	深鉢 胴部破片	隆帯による高さのある楕円区画。隆帯内側に沿う押引文。	雲母、長石	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:にぶい赤褐 5YR5/4	良	

番号	出土位置	時期 (新地平)	器種 部位 残存率	器形・文様・形状・法量	胎土	色調	焼成	備考
35	758次 SI827J	阿玉台Ⅱ (7期)	深鉢 胴部破片	隆帯による懸垂文。胴部には連続貝殻腹縁文施文。	雲母、長石、 小礫	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:にぶい赤褐 5YR5/4	良	
36	758次 SI827J	阿玉台Ⅱ (7期)	深鉢 胴部破片	隆帯による楕円区画。	角閃石、小礫	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:にぶい褐 7.5YR5/4	良	
37	756次 包含層	阿玉台 I b	深鉢 胴部破片	隆帯による楕円区画。	雲母、小礫	外:にぶい赤褐 5YR5/3 内:にぶい赤褐 5YR5/3	良	
38	758次 SI827J	阿玉台 I b	深鉢 胴部破片	ヒダ状指頭圧痕	雲母、小礫	外:にぶい赤褐 5YR5/3 内:灰褐 5YR5/2	良	PJ-1覆土
39	758次 SI827J	阿玉台 I b	深鉢 胴部破片	隆帯による狭い横帯楕円区画文、直下にヒダ状指頭圧痕。	雲母、長石、 小礫	外:にぶい褐 7.5YR5/3 内:褐灰 7.5YR5/1	良	
40	758次 SI827J	阿玉台Ⅱ	浅鉢 口縁部破片	平口縁。隆帯による横帯楕円区画文。	雲母、長石、 石英、小礫	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:明赤褐 5YR5/6	良	
41	758次 SI827J	阿玉台Ⅱ	浅鉢 口縁部破片	平口縁。隆帯による横帯楕円区画文、隆帯に沿う複列の押引文。(外面ミガキ)	雲母、長石、 石英、小礫	外:にぶい褐 7.5YR5/3 内:にぶい橙 7.5YR6/4	良	
42	758次 SI827J	阿玉台Ⅱ	浅鉢 口縁部破片	平口縁。口縁に半裁竹管による平行沈線文。(外面口縁部横位ミガキ、胴部ナデ、内面横位ミガキ)	角閃石、小礫	外:にぶい赤褐 5YR5/3 内:にぶい橙 5YR6/4	良	
43	758次 SI827J	勝坂1 (5b期)	深鉢 口縁部破片	内削の平口縁。口唇直下に隆帯貼付。隆帯上に刻み、隆帯に沿うように幅狭い角押文。	雲母	外:にぶい褐 7.5YR5/3 内:にぶい褐 7.5YR5/3	良	
44	758次 SI827J	勝坂1 (5c期)	深鉢 口縁部破片	縦位の平行沈線施文後に刺突列施文。	角閃石、小礫	外:にぶい黄橙 10YR 7/3 内:黒褐 10YR 3/2	良	搬入品か
45	758次 SI827J	勝坂1 (6a期)	深鉢 口縁部破片	印刻による玉抱三叉文状文、細縄文、円形刺突、上端に裁痕(刻み)列。	角閃石、長石	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:にぶい赤褐 5YR4/4	良	
46	758次 SI827J	勝坂2 (7b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。隆帯による楕円区画文、区画に沿う爪形文、地紋縄文施文後口唇直下に波状沈線文。	角閃石、長石	外:にぶい赤褐 2.5YR4/3 内:灰赤 2.5YR5/2	良	
47	758次 SI827J	勝坂2 (8a期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。2種類の幅の角押文。	角閃石、長石	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:灰褐 5YR5/2	良	
48	758次 SI827J	勝坂2 (8期)	深鉢 口縁部、突起部 破片	眼鏡状突起、周囲に隆帯による文様。隆帯上刻み施文。突起下部に縦位の平行沈線を充填。突起内面には円形の窪みあり。(内面ナデ)	長石、石英、 角閃石、赤色 粒子	外:暗褐 7.5YR3/4 内:暗褐 7.5YR3/4	良	
49	758次 SI827J	勝坂2	深鉢 口縁部、突起部 破片	口縁部に円形の窪みを持つ突起。突起右側には隆帯が繋がる、隆帯上に刻み施文。突起左側には平行沈線による文様が見られる。	長石、小礫、 赤色粒子	外:黒褐 10YR2/2 内:暗褐 10YR3/3	良	
50	758次 SI827J	勝坂2 (8a期)	浅鉢 口縁部破片	平口縁。沈線による弧状文、口唇直下に矢羽根上刻文、弧状文の上下に工具による疑似縄文。	角閃石、長石	外:にぶい赤褐 2.5YR5/4 内:にぶい赤褐 2.5YR5/4	良	口縁部内 外面赤塗
51	758次 SI827J	勝坂2 (7b期)	深鉢 胴部破片	半裁竹管状工具による平行沈線のパネル文、区画内に斜行沈線、沈線による三叉文、連続爪形文、半円形刺突文を充填。	角閃石、長石	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:にぶい褐 7.5YR6/3	良	
52	758次 SI827J	勝坂2 (8a期)	深鉢 胴部破片	隆帯貼付による重三角形区画文、隆帯上に刻み、隆帯に沿い沈線、斜行沈線文充填。	角閃石、長石	外:にぶい赤褐 2.5YR4/3 内:灰赤 2.5YR5/2	良	
53	758次 SI827J	勝坂2 (8a期)	深鉢 胴部破片	隆帯貼付による重三角形区画文、隆帯上にC字状の連続爪形文、隆帯に沿い沈線、斜行沈線文充填。	雲母、長石	外:にぶい赤褐 2.5YR4/3 内:明赤褐 2.5YR5/6	良	
54	758次 SI827J	勝坂2 (8a期)	深鉢 胴部破片	隆帯貼付による重三角形区画文、隆帯上にC字状の連続爪形文、隆帯に沿い沈線、斜行沈線文充填。	角閃石、長石、 小礫	外:にぶい橙 5YR6/4 内:褐灰 5YR5/1	良	
55	758次 SI827J	勝坂2 (8a期)	深鉢 胴部破片	隆帯貼付による懸垂文、隆帯上に刻み施文、地紋縄文斜位施文。縄文施文後に波状沈線施文。	角閃石、長石、 小礫	外:明赤褐 2.5YR5/6 内:赤灰 2.5YR4/1	良	
56	758次 SI827J	勝坂2 (8a期)	深鉢 胴部破片	隆帯貼付による楕円区画、隆帯上に刻み、隆帯内側に平行する沈線、その中に交互刺突文、区画の内側に波状沈線文施文。	角閃石、長石、 小礫	外:灰赤 2.5YR4/2 内:赤灰 2.5YR4/1	良	

番号	出土位置	時期 (新地平)	器種 部位 残存率	器形・文様・形状・法量	胎土	色調	焼成	備考
57	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 口縁部破片	内湾する無文の平口縁。隆帯による楕円区画文、隆帯上に刻み施文。	角閃石、長石、小礫	外:暗赤褐 2.5YR3/4 内:暗赤褐 2.5YR3/4	良	頸部楕円区画文系
58	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 口縁部破片	内湾する無文の平口縁。隆帯による楕円区画文、隆帯上に綾杉状の刻み施文。	小礫	外:にぶい赤褐 5YR5/3 内:灰褐 5YR6/2	良	頸部楕円区画文系
59	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁、隆帯による不整楕円区画、隆帯上に刻み施文、隆帯内側に沿って平行沈線、区画の内側に横位、斜位の沈線を充填。	長石、石英、角閃石、赤色粒子	外:にぶい赤褐 2.5YR5/4 内:にぶい赤褐 2.5YR5/4	良	
60	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 胴部破片	隆帯による横帯楕円区画文を2段重層。隆帯上に刻み施文、楕円区画の内側には従位沈線充填。	長石、角閃石、小礫	外:にぶい赤褐～明赤 5YR5/4～5/6 内:褐灰 5YR4/1	良	
61	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	深鉢 胴部破片	隆帯による横帯楕円区画、隆帯上刻み施文、区画の内側に三叉文、沈線文充填。区画以下に、地紋の斜位の細かい縄文縦位施文。	雲母、角閃石	外:にぶい赤褐 2.5YR4/4 内:暗赤灰 2.5YR3/1	良	
62	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	深鉢 胴部破片	隆帯による横帯区画、隆帯上には刻み文施文、区画内に沈線文、三叉文等とその間を埋めるように細かい刻みを充填、区画文以下には地紋の縄文縦位施文。	角閃石、小礫	外:にぶい黄橙 10YR6/4 内:灰黄褐 10YR6/2	良	
63	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	深鉢 胴部破片	隆帯による横帯楕円区画、隆帯上に太い刻みと細かい刻み施文、区画の内側に沈線文と三叉文充填、区画文以下には地紋の縄文施文。	角閃石	外:にぶい赤褐～明赤 5YR5/4～5/6 内:にぶい橙 7.5YR6/4	良	
64	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	深鉢 突起部	沈線による三角形の区画を交互に配し、区画内に沈線による三叉文、沈線横位充填する突起。	長石	外:にぶい赤褐2 .5YR5/4 内:暗赤褐 2.5YR3/4	良	
65	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	深鉢 口縁部破片	内湾する平口縁。沈線による対弧状文が引かれ、上部区画内に三角押文を縦位に充填。	長石、角閃石、小礫	外:明赤褐 2.5YR5/6 内:灰赤 2.5YR5/2	良	
66	758次 SI827J	勝坂2	深鉢 突起部 破片	眼鏡状の孔を有する突起、孔に沿って沈線が引かれ外側に刺突文を施文。	長石、小礫	外:にぶい赤褐 2.5YR4/4 内:にぶい赤褐 2.5YR4/4	良	
67	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 突起部 破片	隆帯による横帯楕円区画文、隆帯上に刻み、区画内縦に沈線充填。	長石、角閃石、小礫	外:明赤褐 2.5YR5/2 内:灰赤 2.5YR5/6	良	内面に種実圧痕
68	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	深鉢 口縁部～胴部 破片	端部がく字状に内折する平口縁。口縁部無文。隆帯による文様、隆帯上刻み、押圧施文。弧状の沈線内に三角押文を縦位に充填。(外面口縁部横位ナデ後横位ミガキ、口唇部ミガキ、内面横位ナデ)	長石、石英、角閃石、小礫、赤色粒子	外:褐 7.5YR4/6 内:褐 10YR4/4	良	
69	758次 SI827J	勝坂3	鉢ないし浅鉢 口縁部破片	外傾する平口縁。隆帯を蛇行に貼付。	長石、角閃石、小礫	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:にぶい橙 7.5YR6/4	良	
70	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	深鉢 口縁部破片	直立する平口縁。平行沈線による重三角形区画、区画上に交互刺突、区画内に三叉文、沈線状の刻み充填。	長石、角閃石、小礫	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:褐灰 5YR4/1	良	小型円筒形タイプ
71	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	深鉢 口縁部破片	直立する狭い無文平口縁、口唇上に突起付く。隆帯による横帯区画文、隆帯上に刻み施文。	小礫	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:赤褐 5YR4/6	良	
72	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口唇直下に交互刺突による鋸歯状文、刻み巡らす、以下に沈線によるu字状区画、交互刺突、細かい刻みを施文。全体に半隆起状の施文構成。	長石、小礫	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:灰褐 5YR4/6	良	小型円筒形タイプ
73	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	深鉢 口縁部破片	直立する平口縁。太い縦位沈線と刻み施文。	長石	外:にぶい赤褐 2.5YR4/4 内:にぶい赤褐 2.5YR4/4	良	
74	758次 SI827J	勝坂3 (9b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。太く浅い沈線による縦の平行する懸垂文、沈線間に交互刺突文、横位の弧状文と三叉文。	長石、角閃石、小礫	外:灰褐 5YR5/2 内:褐灰 5YR5/1	良	
75	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口縁部上部無文。口縁部に突起貼付。突起から1条の隆帯垂下、隆帯上綾杉状刺突文施文。突起横には横位沈線を複数施文、沈線間キザミ施文。(外面口縁部横位ナデ、口唇部ナデ、内面横位ナデ)	長石、石英、小礫、赤色粒子	外:暗褐 7.5YR3/4 内:黒褐 10YR2/3	良	
76	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 口縁部破片	内湾する無文の平口縁。隆帯による横帯楕円区画、隆帯上に刻み、隆帯の内側に沿い平行沈線、区画内に縦位沈線充填。	角閃石、小礫	外:明赤褐 5YR5/6 内:にぶい赤褐 5YR2/3	良	頸部楕円区画文系
77	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 口縁部破片	大波状口縁(4単位?)。隆帯貼付による三角形、楕円区画。隆帯上に刻み、綾杉状の刻み施文、平行沈線による区画枠線に交互刺突文、区画内に三叉文と沈線状の刻み充填。	長石、角閃石	外:橙 7.5YR6/6 内:橙 7.5YR6/6	やや不良	パネル文系
78	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 口縁部破片	肥厚する無文平口縁。低い隆帯を横位に巡らし隆帯直上に焼成前の穿孔、隆帯以下に縄文縦位施文。	混和材極少量	外:赤褐 5YR4/6 内:明赤褐 5YR5/6	良	有孔鏝付土器?
79	758次 SI827J	勝坂3 (9期)	深鉢 口縁部破片	肥厚する折り返し状の無文平口縁。以下地紋に斜線文を施文。	角閃石、小礫	外:明赤褐 5YR3/3 内:明赤褐 5YR5/6	良	

番号	出土位置	時期 (新地平)	器種 部位 残存率	器形・文様・形状・法量	胎土	色調	焼成	備考
80	758次 SI827J	勝坂3 (9b~9c 期)	深鉢 口縁部破片	く字状に内折する平口縁。外面に欠損した突起の痕跡あり。突起上部には沈線によるH字状の文様施文。(外面ナデ、口唇部ナデ、内面横位ナデ)	石英、雲母、小礫	外:赤褐~黒褐 5YR4/8~7.5YR3/2 内:赤褐 5YR4/8	良	胎土に雲母を多く含む。
81	758次 SI827J	勝坂3	深鉢	口縁部付近と頸部に横位1条の隆帯貼付、隆帯上交互刺突文施文。突起と思われる部分が見られるが大部分が欠損。	長石、角閃石、小礫、赤色粒子	外:明赤褐~極暗褐 5YR5/8~7.5YR2/3 内:明赤褐~極暗褐 5YR5/8~7.5YR2/3	良	胎土に角閃石を多く含む。
82	758次 SI827J	勝坂3 (9期)	深鉢 突起部 破片	外面には孔が左右に貫通した眼鏡状突起、中央に交互刺突文施文。左側には沈線による渦巻文。内面には十字状の文様を深く切り込んで施文。	長石、角閃石、小礫、赤色粒子	外:にぶい褐~黒褐 7.5YR5/4~7.5YR2/2 内:暗褐~黒 7.5YR3/4~10YR1.7/1	良	
83	758次 SI827J	勝坂2~3 (9期)	深鉢 突起部 破片	左右に貫通する孔のある突起。孔の上部に弧状の沈線を複数施文。(外面横位ナデ、内面横位ナデ)	長石、石英、小礫	外:暗褐 7.5YR3/4 内:暗褐 7.5YR3/4	良	
84	758次 SI827J	勝坂2~3 (8b~9a 期)	深鉢 口縁部、突起部 破片	口縁部に隆帯を渦巻状の突起に成形し垂下、左右に孔が貫通した眼鏡状突起と繋がる。垂下する隆帯部分には綾杉状刺突文を施文。(内面横位ナデ)	長石、小礫、赤色粒子	外:赤褐~暗褐 5YR4/8~7.5YR3/3 内:暗褐 7.5YR3/4	良	
85	758次 SI827J	勝坂3 (9期)	深鉢 口縁部、突起部 破片	左右の孔が貫通した眼鏡状突起。孔の周囲には沈線が沿う。中央には交互刺突文施文。(内面横位ナデ後一部横位ミガキ)	長石、角閃石、小礫、赤色粒子	外:暗赤褐 5YR3/6 内:黒褐 10YR2/2	良	
86	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1 (9c期)	深鉢 口縁部破片	内湾する口縁に沈線による渦巻状の連続文。(内面横位ナデ)	長石、角閃石、石英、小礫	外:明赤褐 5YR5/6 内:灰褐 5YR6/2	良	ブラジャータイプの祖型?
87	758次 SI827J	中峠系 (9期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口唇部に眼鏡状突起あり、突起下部に左右に孔が貫通した眼鏡状突起。眼鏡状突起の左右に横位沈線を複数施文。左端に僅かに捺糸文が見られる。(口唇部ナデ、内面横位ナデ一部縦位ナデ)捺糸文L縦位	長石、石英、角閃石、小礫、赤色粒子	外:明褐 7.5YR5/6 内:黒褐 10YR2/2	良	中峠系
88	758次 SI827J	曾利 I (10a期)	深鉢 口縁部~胴部 破片	口縁部部分 平口縁、口縁部無文内湾。頸部に横位1条の隆帯。逆U字状の隆帯、蛇行隆帯垂下。隆帯上に刻み施文。胴部に縦位沈線充填。(外面口縁部横位ナデ、口唇部ナデ、内面口縁部横位ナデ後横位ミガキ・胴部横位ナデ後横位ミガキ一部縦位ミガキ) 胴部破片部分 頸部に横位1条の隆帯。2条1組の隆帯、1条の波状隆帯垂下。頸部隆帯、2条1組の隆帯上に刻み施文。2条1組の沈線上下に縦位沈線充填。(内面上部横位ミガキ、下部縦位ミガキ)	長石、石英、角閃石、小礫	口縁部部分 外:赤褐 5YR4/6 内:暗赤褐 5YR3/3 胴部破片部分 外:褐 7.5YR4/4 内:暗褐 7.5YR3/3	良	
89	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1 (9c~10a 期)	深鉢 口縁部破片	半隆起線による褶曲文。器面の一部剥落。	角閃石、小礫	外:にぶい黄橙~褐灰 10YR7/4~4/1 内:にぶい黄橙 10YR6/3	良	
90	758次 SI827J	曾利 I (10a期)	深鉢 胴部破片	縦位に隆帯垂下。隆帯上に綾杉状の刻み、縦位の平行沈線施文後横位に単沈線施文。	長石	外:灰褐 7.5YR5/2 内:褐灰 7.5YR5/1	良	
91	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1 (9c~10a 期)	深鉢 口縁部下半 ~胴部 破片	無文口縁直下に横位に隆帯2条巡らせ、胴部に半裁竹管状工具による半隆起状の平行沈線。(外面口縁横位ミガキ、内面口縁部横位ミガキ、胴部横位ナデ)	雲母、小礫	外:にぶい赤褐 5YR4/4 内:灰褐 5YR6/2	良	胎土に雲母多く含む。狐蔵タイプ?
92	758次 SI827J	勝坂3 (9c期)	深鉢 胴部破片	胴部に細い隆帯垂下、隆帯上に綾杉状の刻み、横位単沈線を複数本施文後、その間に縦位に単沈線を充填。(内面横位ミガキ)	長石、角閃石	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:褐灰 5YR4/1	良	器壁薄い
93	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1 (9c~10a 期)	深鉢 口縁部下半 ~胴部 破片	無文口縁直下に横位に隆帯巡らせ、そこから胴部に隆帯を平行に貼付し隆帯間を単沈線でナゾル。(外面口縁ミガキ、内面横位粗いミガキ)	小礫	外:橙 7.5YR7/6 内:灰褐 7.5YR5/2	良	
94	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1 (9c~10a 期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口縁部無文。地紋縄文施文後に隆帯による渦巻文、渦巻文間に3条の弧状の隆帯を貼付。(外面口縁部横位ナデ、口唇部ミガキ、内面横位ナデ)縄文LR斜位	長石、石英、角閃石、小礫	外:暗褐 7.5YR3/4 内:暗褐 7.5YR3/4	良	台耕地タイプ
95	758次 SI827J	加曾利E1 (9c~10a 期)	深鉢 口縁部破片	内湾する平口縁、隆帯による横位S字状文とそれに沿う平行沈線文、地紋縄文。(口唇部ナデ後ミガキ、内面横位ナデ)縄文RL斜位	長石、石英、雲母、角閃石、小礫	外:黒褐 10YR2/2 内:黒褐 10YR2/2	良	台耕地タイプ?
96	758次 SI827J	加曾利E1 (10a期)	深鉢 口縁部~頸部 破片	平口縁。隆帯による口縁部区画。区画内に隆帯による文様、隆帯に沿う沈線、隆帯上交互刺突文。区画内、頸部縄文施文。(口唇部ナデ、内面横位ナデ)縄文RL斜位	長石、角閃石、小礫	外:黒褐 7.5YR2/2 内:褐~黒 7.5YR4/3~ 7.5YR1.7/1	良	やや脆い 武蔵野台地型
97	758次 SI827J	加曾利E1 (10a期)	深鉢 口縁部 破片	平口縁。地紋捺糸文施文後に隆帯貼付による口縁部区画。(口唇部ナデ、内面横位ナデ)捺糸紋L	長石、角閃石、	外:にぶい赤褐 5YR4/4 内:灰褐 5YR5/2	良	

番号	出土位置	時期 (新地平)	器種 部位 残存率	器形・文様・形状・分量	胎土	色調	焼成	備考
98	758次 SI827J	加曾利E1 (10a期)	深鉢 口縁部一胴部 破片	平口縁。隆帯による口縁部区画。区画内2条1組の隆帯による横位S字状文。区画内、胴部に細かい捺糸文施文。頸部付近は無文。(口唇部ナデ、内面口縁部横位ナデ・胴部縦位ナデ)捺糸文L横位(口縁部)、縦位(胴部)	長石、角閃石、小礫、赤色粒子	外:にぶい黄褐一黒褐 10YR5/4-10YR2/2 内:黒褐 10YR3/1	良	
99	758次 SI827J	加曾利E1 (10b期)	深鉢 頸部一胴部 破片	口縁端部欠失。地紋捺糸文施文後2条1組の隆帯による渦巻文。(外面横位ナデ後ミガキ、内面横位ナデ後ミガキ)捺糸紋R	長石、角閃石、小礫	外:暗赤褐 5YR3/2 内:灰褐 5YR5/2	良	
100	758次 SI827J	加曾利E1	深鉢 胴部破片	胴部全面に捺糸紋縦位施文。(内面横位ナデ)捺糸紋L	角閃石、小礫	外:橙 7.5YR6/6 内:橙 7.5YR5/2	良	内面に炭化物付着
101	758次 SI827J	加曾利E1	深鉢 底部破片	底部下端まで捺糸紋縦位施文。(内面横位ミガキ)捺糸紋L	長石、角閃石、小礫	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:灰褐 7.5YR6/2	良	
102	758次 SI827J	加曾利E1	深鉢 底部破片	捺糸紋縦位施文(内面横位ナデ)捺糸紋L	長石、小礫、赤色粒子	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:にぶい黄橙 10YR7/2	良	
103	756次 包含層	大木系	深鉢 口縁部破片	波状口縁。外面に隆帯による渦巻文。内面に弧状の隆帯。縁にキザミ施文。(外面横位ナデ、内面横位ナデ)	長石、雲母、角閃石、小礫	外:灰黄褐 10YR4/2 内:橙 7.5YR6/6	良	大木系
104	758次 SI827J	大木系	深鉢 突起部か 破片	外面には孔が左右に貫通した眼鏡状突起、中央に交互刺突文施文。左側には沈線による渦巻文。内面には十字状の文様を深く切り込んで施文。(外面ナデ後縦位・横位ミガキ、内面横位ナデ)	長石、角閃石、小礫、赤色粒子	外:にぶい黄褐 10YR5/4 内:にぶい黄褐 10YR5/3	良	大木系
105	758次 SI827J	加曾利E1 (10b期)	深鉢 口縁部破片	捺糸紋縦位に施文後、隆帯による口縁部区画。(内面横位粗いミガキ)捺糸紋L	雲母、長石、角閃石	外:橙 7.5YR6/6 内:にぶい褐 7.5YR5/4	良	
106	758次 SI827J	加曾利E1 (10b期)	深鉢 口縁部破片	捺糸紋縦位に施文後2本隆帯による口縁部区画。(内面横位ミガキ)捺糸紋L	角閃石、小礫	外:橙 7.5YR6/6 内:にぶい褐 7.5YR6/3	良	
107	758次 SI827J	加曾利E1 (10b期)	深鉢 口縁部破片	波状口縁。捺糸紋横位施文後、隆帯による渦巻文、口縁部区画。(内面横位ミガキ)捺糸紋R	長石、角閃石、小礫	外:にぶい赤褐 2.5YR4/3 内:赤褐 2.5YR3/6	良	
108	758次 SI827J	曾利 I (10b期)	深鉢 胴部破片	頸部に横位に3本の隆帯を巡らし、その間に蛇行隆帯を横位に2段巡らし、以下単沈線を縦位平行に施文。(内面横位ミガキ)	雲母、長石	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:褐灰 5YR4/1	良	胎土に雲母多く含む。曾利系
109	758次 SI827J	曾利 I (10b期)	深鉢 胴部破片	胴部に3本単位の隆帯を垂下させ、隆帯上に刻み、その後半裁竹管状工具による平行沈線を施文。(内面横位粗いミガキ)	小礫	外:にぶい橙 5YR6/4 内:にぶい橙 5YR6/4	良	曾利系
110	758次 SI827J	曾利 I (10b期)	深鉢 胴部破片	胴部に隆帯を垂下させ、隆帯上に刻み、その後半裁竹管状工具による平行沈線施文。(内面上半横位ミガキ、下半縦位ミガキ)	角閃石、小礫、赤色粒子	外:にぶい橙 7.5YR7/4 内:褐灰 7.5YR4/1	良	曾利系
111	758次 SI827J	加曾利E1 (10b期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。地紋縄文施文後2本単位の隆帯による口縁部区画、渦巻文。(内面横位ミガキ)縄文RL	角閃石、小礫	外:にぶい黄褐 10YR5/3 内:にぶい黄橙 10YR6/4	良	
112	758次 SI827J	加曾利E2 (11c期)	深鉢 口縁部破片	平口縁。口唇部内削ぎとなりそこに単沈線による斜行沈線を巡らす、口縁には細い隆帯と沈線による区画、渦巻文を施文、区画内に縦位沈線充填。(内面横位ミガキ)	角閃石	外:にぶい黄橙 10YR7/3 内:にぶい黄橙 10YR7/3	良	加曾利E、曾利折衷
113	758次 SI827J	加曾利E2 (11c期)	深鉢 口縁部破片	口縁突起。突起部に単沈線による渦巻文、口縁部には単沈線を縦、横に多条施文。(内面横位ミガキ)	長石、小礫	外:灰褐 5YR4/2 内:にぶい赤褐 5YR4/4	良	
114	758次 SI827J	加曾利E1 (10b期)	鉢 頸部一胴部 破片	胴部に捺糸紋施文後低い隆帯による区画、渦巻文施文。(内面横位ミガキ)捺糸紋L	長石、小礫、赤色粒子	外:明赤褐 5YR5/6 内:褐灰 5YR5/1	良	胴部がく字状に屈折する鉢
115	758次 SI827J	加曾利E1 (10b~ 10c期)	鉢 頸部一胴部 破片	胴部に半裁竹管状工具による縦位沈線施文後、隆帯と沈線による区画。(内面横位ミガキ)	角閃石	外:にぶい黄橙 10YR6/4 内:にぶい黄橙 10YR7/4	良	胴部がく字状に屈折する鉢
116	758次 SI827J	勝坂2 (8b期)	深鉢 胴部破片	縄文施文後、縦位に隆帯を垂下させ隆帯上に連続爪形文を施文。(内面縦位ミガキ)縄文RL縦位	長石、小礫	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:明褐 7.5YR5/6	良	外面に炭化物付着
117	758次 SI827J	加曾利E2 (11c期)	深鉢 胴部破片	縄文施文後、単沈線による懸垂文2本垂下させる。(内面横位ミガキ)縄文RL斜位	角閃石、小礫	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:褐灰 7.5YR5/1	良	
118	756次	加曾利E3 (12b期)	深鉢 胴部破片	縄文施文後、浅い単沈線による懸垂文を垂下させ、磨消縄文とする。(内面縦位ミガキ)縄文RL斜位	長石、小礫	外:赤褐 5YR4/6 内:灰褐 5YR5/2	良	
119	758次 SI827J	加曾利E3 (12c期)	深鉢 胴部破片	縄文施文後、太い単沈線による懸垂文を垂下させ、磨消縄文とする(内面縦位ミガキ)縄文RL斜位	長石、角閃石、小礫	外:灰褐 7.5YR5/2 内:灰褐 7.5YR5/2	良	
120	758次 SI827J	勝坂2 (8a期)	浅鉢 口縁部破片	平口縁。口唇部に刻み、口縁部に幅広の押し文施文、その直下に竹管状工具による連続交互刺突文施文。(外面胴部横位ケズリ、内部横位ミガキ)	長石、石英、角閃石	外:灰褐 7.5YR5/2 内:灰褐 7.5YR4/1	良	補修孔

番号	出土位置	時期 (新地平)	器種 部位 残存率	器形・文様・形状・法量	胎土	色調	焼成	備考
121	758次 SI827J	勝坂2 (8a期)	浅鉢 口縁部破片	肥厚する平口縁。口唇直下に1本の沈線が巡り口縁部に平行沈線による弧状文(円文?)を施文。(内外面とも丁寧な横位ミガキ)	雲母、長石、 角閃石	外:にぶい赤褐 5YR5/4 内:にぶい赤褐 5YR5/3	良	精製された胎土。 小型浅鉢
122	758次 SI827J	勝坂3 (9a期)	浅鉢 口縁部破片	平口縁。口縁に隆帯を鐫状に巡らし、その下に隆帯による渦巻文を施す。器面内外面ともに赤色塗彩される。(内外面とも丁寧な横位ミガキ)	雲母、長石	外:にぶい橙 5YR6/4 内:褐灰 5YR4/1	良	PJ-53覆土 精製された胎土
123	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	浅鉢 口縁部破片	平口縁。口縁部に板状に粘土板を貼付して肥厚させる。内外面ともに赤色塗彩された痕跡を認める。(内外面とも横位ミガキ)	長石、石英、 角閃石	外:灰褐 7.5YR6/2 内:にぶい橙 7.5YR7/4	良	
124	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	鉢 口縁部破片	平口縁。口縁に焼成前の穿孔がみられる。内外面ともに赤色塗彩された痕跡を認める。(内外面とも丁寧な横位ミガキ)	長石	外:灰褐 7.5YR5/2 内:褐灰 7.5YR4/1	良	小型鉢
125	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	浅鉢 口縁部破片	平口縁。口縁部を肥厚させ、太い沈線を巡らす。内外面ともに全面に赤色塗彩された痕跡を認める。(内外面とも丁寧な横位ミガキ)	長石、小礫	外:橙 7.5YR6/6 内:橙 7.5YR6/6	良	
126	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	浅鉢 口縁部破片	平口縁。口縁部を肥厚させ、太い凹線を巡らす。内外面ともに全面に赤色塗彩された痕跡を認める。(内外面とも丁寧な横位ミガキ)	長石、角閃石、 小礫	外:明褐色 7.5YR5/6 内:にぶい褐 7.5YR5/4	良	
127	758次 SI827J	勝坂3	浅鉢 口縁部破片	平口縁。口縁部に平板な粘土板を貼付し渦巻状の文様施文し、その後内外面ともに赤色塗彩される。(内外面とも横位ミガキ)	長石、角閃石、 小礫	外:橙 7.5YR6/6 内:褐灰 7.5YR4/1	良	胎土に長石を多量に含む
128	758次 SI827J	勝坂2~3	深鉢 底部破片	底部に網代圧痕。(外面横位ナデ)	角閃石、小礫	外:赤褐 5YR4/6 内:にぶい橙 5YR6/4	良	内面スス付着
129	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	浅鉢 胴部破片	内外面ともに全面に赤色塗彩された痕跡を認める。(内外面とも横位ミガキ)	長石、角閃石、 小礫	外:灰褐 7.5YR4/2 内:灰褐 7.5YR4/2	良	内外面赤塗
130	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	深鉢 胴部破片	平行沈線による弧状文施文。内面に赤色塗彩痕跡を認める。(外面ナデ、内面ミガキ)	長石、角閃石、 小礫	外:灰褐 7.5YR4.2 内:にぶい褐 7.5YR5/3	良	内面赤塗
131	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	浅鉢 胴部破片	内外面ともに全面に赤色塗彩された痕跡を認める。(内外面とも横位ミガキ)	雲母、長石	外:にぶい黄橙 10YR6/4 内:灰黄褐 10YR4/2	良	内外面赤塗
132	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	浅鉢 胴部破片	内面に赤色塗彩痕跡を認める。(外面ナデ、内面ミガキ)	長石、角閃石	外:明褐 7.5YR5/6 内:褐灰 7.5YR4/1	良	内面赤塗
133	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	浅鉢 胴部破片	内外面ともに全面に赤色塗彩された痕跡を認める。(内外面とも横位ミガキ)	長石、角閃石	外:黒褐色 7.5YR3/2 内:黒褐色 7.5YR3/2	良	内外面赤塗
134	758次 SI827J	勝坂3~ 加曾利E1	浅鉢 胴部破片	内外面ともに全面に赤色塗彩された痕跡を認める。(内外面とも横位ミガキ)	長石、角閃石	外:橙 7.5YR6/6 内:黒褐色 7.5YR3/2	良	内外面赤塗
第16図	758次 SK3524J	勝坂2 (7a期)	深鉢 胴部破片	隆帯に沿う押引文と波状沈線文。	角閃石、 小礫	外:にぶい赤褐5YR4/4 内:黒褐色5YR3/1	良	

表5 SI827J 出土土製品(土製円板)観察表

番号	時期	法量(cm)			重量	側縁加工	文様	胎土	色調	焼成	備考
		最大長	最大幅	最大厚							
135	勝坂3	3.1	2.9	1.5	16.7	一部擦れ	地文RLの単節縄文	長石、角閃石	明赤褐 5YR5/6	良	
136	勝坂2	3.3	3.2	1.2	14.9	一部擦れ	波状沈線文様	角閃石、小礫	赤褐 5YR4/6	良	
137	勝坂3	3.2	2.9	1	12.2	全周擦れ	地文Lの撚糸文	小礫	にぶい赤褐 2.5YR4/3	良	
138	勝坂2	2.6	2.2	1	6.2	1/2擦れ	地文RLの浅い縄文	小礫	明赤褐 2.5YR5/6	良	
139	勝坂3	2.6	3.1	1	12.4	一部擦れ	地文Lの撚糸文	小礫	橙 5YR6/6	良	
140	勝坂	2.3	2.7	0.9	8.1	一部擦れ	無文部	小礫	明赤褐 2.5YR5/6	良	
141	勝坂	2.8	3.2	0.8	9.8	一部擦れ	無文部	小礫	橙 7.5YR6/6	良	浅鉢?
142	勝坂	3.1	3.4	1	11.7	一部擦れ	無文部	角閃石、小礫	明褐 7.5YR5/6	良	
143	勝坂	2.6	3	1	10.1	一部擦れ	無文部	長石、角閃石、小礫	明褐 7.5YR5/6	良	
144	勝坂	3.5	3.6	1	16	一部擦れ	無文部	小礫	赤褐 5YR4/6	良	浅鉢

表6 石器観察表

遺物No.	出土位置	器種	石材	法量(mm)			重量(g)	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)		
145	758次SI827J	石鏃	チャート	24.1	15.1	4.1	1.2	凹基無茎(側縁は鋸歯状)、完形
146	758次SI827J	石鏃	黒曜石	13.7	15.2	2.5	0.4	凹基無茎、器体上半欠損
147	758次SI827J	楔形石器	黒曜石	20.9	14.9	11.3	2.7	片端に潰れ(平坦面)、もう一方の端は欠損
148	758次SI827J	楔形石器	黒曜石	22.7	16.0	9.1	2.9	上下端に潰れ(エッジ×エッジ)
149	758次SI827J	石錐	チャート	17.2	7.2	2.1	0.3	尖頭器状で上下端に錐部か(上端は欠損)、断面半円形
150	758次SI827J	石錐	チャート	36.9	17.4	6.9	3.6	錐部断片、断面不整三角形あるいは台形
151	758次SI827J	磨製石斧	砂岩	55.9	37.3	33.1	82.0	乳棒状磨製石斧、基部断片
152	758次SI827J	打製石斧	砂岩	150.7	43.9	18.3	80.8	2144と2155接合、短冊形、完形
153	758次SI827J	敲石	ホルンフェルス	130.5	35.8	41.3	262.3	棒状礫を素材として上下端に敲打痕、完形
154	758次SI827J	すり石	砂岩	108.3	76.7	41.5	499.0	扁平礫を素材としてほぼ全周縁に敲打痕、完形
155	758次SI827J	凹石	緑泥片岩	103.0	102.3	28.6	450.0	正面に3ヶ所の凹み及び湾曲した作業面(石皿の転用)、断片
156	758次SI827J	打製石斧	砂岩	132.6	51.7	18.2	127.0	短冊形、完形
157	758次SI827J	打製石斧	砂岩	124.8	46.9	19.1	122.2	短冊形、完形
158	758次SI827J	打製石斧	砂岩	117.2	51.1	18.9	129.7	短冊形、完形
159	758次SI827J	打製石斧	砂岩	113.1	44.4	17.3	87.3	短冊形、完形
160	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	126.9	46.8	17.3	139.5	短冊形、完形
161	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	147.0	43.5	17.5	120.5	短冊形、完形
162	756次SI827J	打製石斧	砂岩	126.2	44.5	19.6	116.3	短冊形、完形
163	758次SI827J	打製石斧	砂岩	134.9	53.2	16.5	154.6	短冊形、完形
164	758次SI827J	打製石斧	砂岩	109.0	41.2	14.5	74.7	短冊形、完形
165	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	102.8	47.8	22.2	137.2	短冊形、完形
166	756次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	117.6	40.5	18.7	99.2	短冊形、完形
167	758次SI827J	打製石斧	砂岩	121.5	40.5	22.3	138.1	短冊形、完形
168	758次SI827J	打製石斧	砂岩	107.7	45.1	16.8	91.3	短冊形、完形
169	758次SI827J	打製石斧	砂岩	107.4	35.6	13.4	56.0	短冊形、完形
170	758次SI827J	打製石斧	砂岩	107.6	37.1	13.8	71.4	短冊形、完形
171	758次SI827J	打製石斧	頁岩	150.1	34.9	17.8	91.8	短冊形、完形
172	758次SI827J	打製石斧	頁岩	109.9	31.1	17.4	65.5	短冊形、完形
173	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	83.7	35.4	12.6	40.6	短冊形、完形
174	758次SI827J	打製石斧	頁岩	91.0	39.1	16.7	74.3	短冊形、完形
175	758次SI827J	打製石斧	砂岩	86.9	39.9	15.3	59.6	短冊形、完形
176	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	71.2	50.5	13.5	67.0	短冊形、完形
177	758次SI827J	打製石斧	砂岩	71.9	42.0	16.5	64.6	短冊形、完形
178	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	71.0	42.2	8.6	33.7	短冊形、完形
179	758次SI827J	打製石斧	緑泥片岩	85.0	32.2	8.8	33.6	短冊形、完形
180	758次SI827J	打製石斧	頁岩	62.0	31.9	10.6	28.4	短冊形、完形
181	756次包含層	打製石斧	砂岩	118.2	53.6	13.4	104.4	撥形、完形
182	758次SI827J	打製石斧	砂岩	104.3	49.8	14.1	73.0	撥形、完形
183	758次SI827J	打製石斧	砂岩	111.2	46.0	14.1	104.8	撥形、完形
184	758次SI827J	打製石斧	砂岩	94.8	44.1	15.1	70.0	撥形、完形
185	758次SI827J	打製石斧	砂岩	90.1	43.1	12.6	67.6	撥形、完形
186	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	90.3	48.7	13.9	67.5	撥形、完形
187	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	87.8	43.9	14.4	68.3	撥形、完形、裏面に素材主要剥離面を大きく残す
188	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	91.7	59.2	13.6	67.3	撥形、完形
189	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	90.2	52.7	15.6	87.1	撥形、完形
190	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	94.5	70.6	17.5	140.2	撥形、完形、正面のほぼ全面が礫面に覆われる
191	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	94.9	64.1	14.8	75.5	撥形、完形、正面のほぼ全面が礫面に覆われる
192	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	85.2	84.6	19.4	128.5	撥形、完形、正面のほぼ全面が礫面に覆われる
193	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	114.1	78.5	22.4	190.4	分銅形、完形
194	758次SI827J	打製石斧	砂岩	108.0	38.3	23.9	132.1	未製品
195	758次SI827J	打製石斧	砂岩	106.4	49.6	21.2	112.3	未製品
196	758次SI827J	打製石斧	砂岩	113.9	41.9	16.7	83.4	未製品
197	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	94.0	42.4	24.8	121.5	未製品
198	758次SI827J	打製石斧	砂岩	124.3	53.4	17.2	122.8	未製品
199	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	122.2	41.5	14.9	76.0	未製品

遺物No.	出土位置	器種	石材	法量(mm)			重量(g)	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)		
200	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	117.5	55.3	20.5	138.0	未製品
201	758次SI827J	打製石斧	千枚岩	137.4	66.7	23.5	198.2	未製品
202	758次SI827J	打製石斧	砂岩	129.5	49.8	23.9	195.7	刃部欠損
203	758次SI827J	打製石斧	砂岩	115.3	51.9	29.3	181.6	刃部欠損
204	756次SI827J	打製石斧	砂岩	117.7	50.3	18.7	129.1	刃部欠損
205	758次SI827J	打製石斧	砂岩	109.8	55.2	30.9	213.6	刃部欠損
206	758次SI827J	打製石斧	千枚岩	97.6	47.3	22.7	114.6	刃部欠損
207	758次SI827J	打製石斧	砂岩	107.4	65.6	30.4	227.2	刃部欠損
208	758次SI827J	打製石斧	砂岩	97.0	58.5	20.9	148.2	刃部欠損
209	758次SI827J	打製石斧	砂岩	110.9	52.7	18.8	104.2	刃部欠損
210	758次SI827J	打製石斧	砂岩	93.2	56.8	36.4	197.6	刃部欠損
211	758次SI827J	打製石斧	砂岩	96.5	49.1	18.7	114.1	刃部欠損
212	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	101.6	48.1	18.3	98.0	刃部欠損
213	758次SI827J	打製石斧	砂岩	107.4	43.9	20.3	99.5	刃部欠損
214	758次SI827J	打製石斧	千枚岩	88.9	42.9	23.6	90.6	刃部欠損
215	758次SI827J	打製石斧	砂岩	77.3	45.5	20.7	89.0	刃部欠損
216	758次SI827J	打製石斧	砂岩	78.7	51.3	16.3	77.3	刃部欠損
217	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	85.5	49.6	24.1	139.4	刃部欠損
218	758次SI827J	打製石斧	砂岩	90.5	52.7	21.0	106.5	刃部欠損
219	756次包含層	打製石斧	砂岩	76.8	56.3	20.8	113.5	刃部欠損
220	756次SI827J	打製石斧	砂岩	94.7	51.7	13.6	62.7	刃部欠損
221	758次SI827J	打製石斧	砂岩	97.6	46.7	10.2	60.3	刃部欠損
222	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	77.9	41.3	13.7	51.7	刃部欠損
223	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	79.9	49.0	16.3	72.1	刃部欠損
224	758次SI827J	打製石斧	砂岩	86.7	47.8	21.4	91.5	刃部欠損
225	758次SI827J	打製石斧	砂岩	81.6	49.7	17.6	86.9	刃部欠損
226	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	77.4	46.6	18.9	77.9	刃部欠損
227	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	80.3	47.7	16.0	65.7	刃部欠損
228	758次SI827J	打製石斧	砂岩	69.4	40.7	15.3	57.3	刃部欠損
229	758次SI827J	打製石斧	砂岩	68.8	41.7	21.3	68.1	刃部欠損
230	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	79.0	43.4	19.3	72.5	刃部欠損
231	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	72.9	43.1	14.0	47.3	刃部欠損
232	758次SI827J	打製石斧	千枚岩	78.3	39.7	18.5	498.6	刃部欠損
233	758次SI827J	打製石斧	雲母片岩	73.5	42.0	16.7	51.0	刃部欠損
234	758次SI827J	打製石斧	砂岩	78.4	43.3	12.9	40.5	刃部欠損
235	758次SI827J	打製石斧	頁岩	80.9	44.4	12.5	42.4	刃部欠損
236	758次SI827J	打製石斧	砂岩	87.3	38.0	15.7	68.7	刃部欠損
237	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	92.4	43.6	15.2	81.1	刃部欠損
238	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	93.3	45.7	12.4	70.5	刃部欠損
239	756次包含層	打製石斧	ホルンフェルス	102.8	39.2	12.4	55.5	刃部欠損
240	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	72.8	35.3	14.3	46.0	刃部欠損
241	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	75.4	33.2	15.3	46.5	刃部欠損
242	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	68.6	50.6	17.3	64.2	刃部欠損
243	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	66.0	47.6	10.9	45.8	刃部欠損
244	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	80.8	60.1	19.8	129.3	刃部欠損
245	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	76.6	50.0	18.2	87.0	刃部欠損
246	756次包含層	打製石斧	砂岩	57.9	50.5	20.5	63.2	基部
247	758次SI827J	打製石斧	砂岩	57.3	51.1	18.2	64.5	基部
248	758次SI827J	打製石斧	砂岩	64.5	42.8	11.3	40.8	基部
249	758次SI827J	打製石斧	頁岩	63.9	46.6	16.2	54.2	基部
250	758次SI827J	打製石斧	砂岩	52.0	46.3	11.0	26.3	基部
251	756次SI827J	打製石斧	砂岩	55.3	47.5	19.1	53.9	基部
252	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	53.3	52.3	15.5	45.2	基部
253	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	55.0	52.1	17.0	52.5	基部
254	758次SI827J	打製石斧	砂岩	55.1	37.9	15.7	45.9	基部
255	758次SI827J	打製石斧	千枚岩	50.7	36.1	8.4	22.6	基部
256	756次SI827J	打製石斧	砂岩	58.6	41.1	11.3	30.4	基部
257	756次SI827J	打製石斧	砂岩	59.5	42.7	14.1	36.2	基部

遺物No.	出土位置	器種	石材	法量(mm)			重量(g)	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)		
258	758次SI827J	打製石斧	砂岩	52.6	49.0	23.1	62.1	基部
259	758次SI827J	打製石斧	砂岩	61.9	37.5	14.6	38.6	基部
260	758次SI827J	打製石斧	砂岩	54.0	40.5	12.8	22.9	基部
261	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	50.5	41.0	16.4	34.1	基部
262	758次SI827J	打製石斧	砂岩	46.1	46.8	14.7	29.9	基部
263	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	60.0	50.8	14.7	45.2	基部
264	758次SI827J	打製石斧	千枚岩	39.8	41.7	10.6	19.9	基部
265	758次SI827J	打製石斧	千枚岩	44.0	41.3	12.3	30.3	基部
266	758次SI827J	打製石斧	千枚岩	46.7	29.7	9.2	16.3	基部
267	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	44.0	42.5	9.1	20.8	基部
268	758次SI827J	打製石斧	砂岩	35.3	43.3	11.5	18.4	基部
269	758次SI827J	打製石斧	砂岩	45.1	40.1	10.9	18.0	基部
270	758次SI827J	打製石斧	頁岩	36.6	37.3	14.7	15.8	基部
271	756次SI827J	打製石斧	黒色頁岩	28.3	45.7	9.1	11.1	基部
272	758次SI827J	打製石斧	砂岩	53.8	50.9	21.5	56.0	中間部
273	758次SI827J	打製石斧	砂岩	49.2	47.4	25.5	60.6	中間部
274	756次包含層	打製石斧	砂岩	64.1	48.8	21.1	76.9	中間部
275	758次SI827J	打製石斧	雲母片岩	66.9	35.8	11.8	41.8	中間部
276	758次SI827J	打製石斧	砂岩	65.2	63.5	21.8	113.9	中間部
277	758次SI827J	打製石斧	砂岩	74.4	52.3	22.7	78.2	中間部
278	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	68.2	43.3	21.7	81.5	中間部
279	758次SI827J	打製石斧	頁岩	75.4	41.4	15.5	63.1	中間部
280	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	71.0	38.8	15.3	55.1	中間部
281	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	50.4	56.8	9.9	34.2	刃部
282	758次SI827J	打製石斧	砂岩	57.2	65.7	15.8	61.3	刃部
283	758次SI827J	打製石斧	砂岩	57.3	60.1	15.3	58.7	刃部
284	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	63.2	50.4	13.3	487.5	刃部
285	758次SI827J	打製石斧	砂岩	94.0	55.8	11.8	63.1	刃部
286	756次SI827J	打製石斧	砂岩	87.5	43.2	11.0	46.5	刃部
287	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	69.0	40.2	18.2	62.0	刃部
288	758次SI827J	打製石斧	ホルンフェルス	62.9	53.8	17.5	67.9	刃部
289	756次包含層	打製石斧	砂岩	143.3	55.6	18.2	149.2	刃部(基部欠損)
290	758次SI827J	二次加工剥片	砂岩	149.5	105.2	56.5	799.0	断片のため素材礫は不明だが正面に敲打痕
291	758次SI827J	二次加工剥片	ホルンフェルス	154.4	72.7	49.2	460.0	逆「く」状に成形、完形
292	758次SI827J	二次加工剥片	ホルンフェルス	146.5	69.7	28.5	244.9	逆「く」状に成形、完形
293	758次SI827J	二次加工剥片	ホルンフェルス	61.8	118.0	12.8	91.6	横長、完形、礫打面、フェザーエッジ
294	758次SI827J	石匙	ホルンフェルス	70.6	60.7	6.3	23.4	縦型、両極敲打によって深い抉り、刃部一部欠損
295	758次SI827J	石匙	ホルンフェルス	92.4	79.0	15.5	107.1	縦型、両極敲打によって深い抉り、柄部一部欠損
296	758次SI827J	石匙	ホルンフェルス	98.4	60.8	14.0	2150.0	縦型、両極敲打によって深い抉り、刃部一部欠損
297	758次SI827J	敲石	砂岩	104.9	40.7	22.9	169.1	棒状礫を素材として左、右面に敲打痕、完形
298	758次SI827J	敲石	砂岩	110.3	43.1	26.7	207.5	棒状礫を素材として左面に敲打痕、完形
299	758次SI827J	敲石	砂岩	118.8	73.1	49.7	595.0	棒状礫を素材として上端に敲打痕、器体上端一部欠損
300	756次包含層	敲石	砂岩	106.8	65.6	48.1	499.0	棒状礫を素材として左、右、下面に敲打痕、完形
301	758次SI827J	敲石	砂岩	67.8	68.1	34.5	209.2	扁平礫を素材として下端に敲打痕、器体上端一部欠損
302	758次SI827J	すり石	砂岩	141.6	90.8	48.3	885.8	扁平礫を素材として下端に敲打痕、完形
303	758次SI827J	すり石	砂岩	120.8	81.6	36.9	510.2	扁平礫を素材としてほぼ全周縁に敲打痕、完形
304	758次SI827J	すり石	砂岩	109.6	87.9	44.2	589.0	扁平礫を素材としてほぼ全周縁に敲打痕、完形
305	758次SI827J	すり石	石英閃緑岩	73.0	82.3	62.6	390.0	断片のため素材礫は不明だが下端に敲打痕
306	758次SI827J	凹石	緑泥片岩	85.1	83.3	20.6	199.9	正面に2ヶ所の凹み、断片
307	758次SI827J	凹石	石英閃緑岩	227.3	178.7	107.1	5210.0	正面に5ヶ所の凹み、器体上半欠損
308	758次SI827J	石皿	安山岩	156.1	294.2	66.1	3600.0	正面にほぼ平坦な作業面、断片
309	758次SI827J	石皿	石英閃緑岩	104.1	110.2	30.9	399.0	正面、裏面ともに平坦な作業面、断片

第5章 自然科学分析

第1節 植物珪酸体分析・炭化材同定・微細物分析・骨同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、多喜窪遺跡の縄文時代堅穴建物 SI827J における炉の覆土に関して、植物珪酸体分析や微細遺物分析を行うことで、当時の本遺跡周辺の植物利用に関する情報を得ることを目的とする。また、検出された木材や骨についても同定を試み、出土遺物に関する詳細な情報を得ることとする。

1. 植物珪酸体分析

(1) 試料

SI827J 炉の下部より採取された土壌試料 1 点で、炉内での燃料材に関する情報を得るために選択した試料である。

(2) 分析方法

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993）。そのため、珪化組織片の産状により当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。今回は、特に珪化組織片の産状に注目する。

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土 1 g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土 1 g あたりの個数に換算）を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個 / g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸めている（100 単位にする）。

(3) 結果・考察

結果を表 7 に示す。試料からは、珪化組織片が検出されない。単体の植物珪酸体は検出されるが、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。検出される分類群数は少なく、クマザサ属を含むタケ亜科などが認められるに過ぎない。SI827J 炉（下部）からは、珪化組織片が検

表 7 植物珪酸体分析結果

種 類	SI827J 炉(下部)
イネ科葉部短細胞珪酸体	
クマザサ属	1,200
タケ亜科	1,500
ススキ属	200
不明	1,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
クマザサ属	1,300
タケ亜科	1,700
不明	1,100
合 計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	4,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,100
植物珪酸体含量	8,300

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

出されなかった。そのため、燃料材の利用に関して検討するに至らず、燃料材の有無については明確にならない。なお単体の植物珪酸体として、保存状態の悪いクマザサ属を含むタケ亜科などが認められた。タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており（近藤, 1982; 杉山・藤原, 1986）、他の種類よりも残留しやすいことが知られている。今回も土層中に相対的に多く残留したために、その産出が目立つ結果になったと考えられる。ただし、少なくとも検出されたクマザサ属を含むタケ亜科がイネ科草本類に見られた可能性が考えられる（写真 38-2～4）。

2. 炭化材同定

(1) 試料

試料は遺跡内から検出された「MK-756 220」と「MK-758 1696」の2点である。

(2) 分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作成する。実体顕微鏡や電子顕微鏡を用いて組織を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(3) 結果

同定の結果「MK-756 220」はクリである。「MK-758 1696」は炭化していないことや、中空であること、組織の状況などから後代の根と思われる。以下に検出された炭化材の解剖学的所見を述べる。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～2列、1～15細胞高。道管の配列が放射状になっていることや、放射組織に2列のものがみられることから（通常は単列）、根材もしくは根に近い部分と思われる（写真 38-1）。

(4) 考察

炭化材はクリである。都内遺跡出土炭化材の傾向を出土木製品用材データベース（伊東・山田編, 2012）でみると、クリは、時代を問わず多数検出される。クリは、明るい林地を好む種類で、成長が早く、萌芽による更新が容易であるため森林の再生が速い。そのため、河川沿いや人里近くに森林を作ることが多い（いわゆる里山林）。このようにクリはナラ類などの落葉広葉樹とともに里山林の主要構成要素の一つであることから、遺跡周辺に普通に生育し、容易に入手可能であったと思われる。クリの木材は水湿に強く、加工しやすい特性を生かして建築材等さまざまな用途で利用されたと思われる。さらに、火力が強く、火持ちが良いため、薪炭材としても有用である。

3. 微細物分析

(1) 試料

試料は、MK-758 SI827Jより採取された4点（1/4、2/4、3/4、4/4）と、炉（下部）より採取された2点（1/2、2/2）の、計6点である。

(2) 分析方法

試料1kgを常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が

浮かなくなるまで繰り返す（約 20 回）。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実の他、主に径 2mm 以上の炭化材などの遺物を抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本や中山ほか（2010）、鈴木ほか（2018）等を参考に実施し、部位・状態別の個数と重量を求めて、結果を一覧表で示す。炭化種実以外は、炭化材は重量と最大径、炭化材主体、土粒・岩片主体は重量、非炭化種実は何個を一覧表に併記する。分析後は、抽出物と残渣を容器に入れて保管する。

（3）結果

結果を表 8 に示す。6 試料 6.0kg を通じて、木本 2 分類群（オニグルミ、ミズキ）7 個の炭化種実が同定された。6 個は同定ができなかった。炭化種実以外は、炭化材 0.07g（最大 6.4mm；4/4）、炭化材主体 0.36g、非炭化植物片 0.2g、非炭化種実（草本のタケニグサ）4 個、土粒・岩片主体 54.0g が確認された。非炭化植物片・種実は、本遺跡の立地を考慮すると混入と判断されるため、考察より除外する。

炭化種実の出土個数は、SI827J の 1/4 が 1 個（オニグルミ）、3/4 が 2 個（オニグルミ？、ミズキ）、4/4 が 4 個（オニグルミ 2 個、オニグルミ？ 2 個）である。なお、2/4 と炉（下部）の 1/2、2/2 からは検出されなかった。炭化種実の保存状態は、炭化や破損等により不良である。以下、形態的特徴等を記す。学名は佐竹ほか編（1989a, b）に依拠した。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属

核は径 2.5～4cm の広卵体。頂部が尖り、1 本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る 2 つの大きな窪みと隔壁がある。出土核は破片で、残存長 10.5mm（写真 38-5・6）。

・ミズキ (*Swida controversa* (Hemsl.) Sojak) ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）は長さ 3～3.5mm、径 4～4.5mm の偏球体で、基部に径 1mm 程度の大きく深い孔がある。内果皮は硬く、表面には一周する 1 本の幅広く深い縦溝と、やや深い縦溝が数本走る。内果皮は硬く緻密で、内部には 2 室を形成する隔壁がある。出土核は破片で、残存径 2.0mm（写真 38-7）。

表 8 種実同定結果

分類群	部位・状態・粒径	MK-758 SI827J						備考
		1/4	2/4	3/4	4/4	炉(下部)		
						1/2	2/2	
炭化種実								
オニグルミ	核 破片	1	-	-	2	-	-	(個),残存長5.2mm
オニグルミ?	核? 破片	-	-	1	2	-	-	(個)
ミズキ	核 破片	-	-	1	-	-	-	(個),残存径2.0mm
炭化種実合計		1	-	2	4	-	-	(個)
不明炭化物		-	-	3	3	-	-	(個),微細片
炭化材		6.30	-	-	6.41	-	-	最大径(mm)
	4-2mm	0.04	-	-	0.03	-	-	乾重(g)
炭化材主体	2-1mm	0.05	0.02	0.03	0.08	-	0.02	乾重(g)
	1-0.5mm	0.05	0.01	0.02	0.04	0.03	0.02	乾重(g)
土粒・岩片主体	>4mm	-	-	21.69	-	-	11.02	乾重(g)
	4-2mm	4.51	-	1.64	1.64	0.74	0.13	乾重(g)
	2-1mm	0.57	0.14	1.95	1.44	0.62	0.29	乾重(g)
	1-0.5mm	0.29	0.23	1.91	2.67	1.87	0.66	乾重(g)
非炭化種実								
タケニグサ	種子 完形	-	-	4	-	-	-	(個),混入の可能性
分析量		1000	1000	1000	1000	1000	1000	乾重(g)

(4) 考察

微細物分析の結果、SI827Jより落葉広葉樹2分類群(オニグルミ、ミズキ)の炭化種実が確認された。オニグルミ、ミズキは河畔林要素の高木である。当時の遺跡周辺に分布していた落葉広葉樹林に由来すると考えられる。また、堅果類のオニグルミは子葉が食用可能で、ミズキは果実が食用可能である(堀田編,1989)。特にオニグルミは古くから利用され、遺跡出土例も多い(渡辺,1975など)。当該期の本遺跡周辺の落葉樹林から持ち込まれ、利用された植物質食料と示唆される。さらに、オニグルミの部位は非可食部であり、破片の状態で出土していることから、可食部を取り出した後に廃棄された食料残滓と考えられる。ただし、SI827J内で火を受けたか、別の場所で火を受けたものがSK3524J内に移動したかは不明である。

4. 骨同定

(1) 試料

骨同定を行う試料は、PJ-51内一括の1点である。

(2) 分析方法

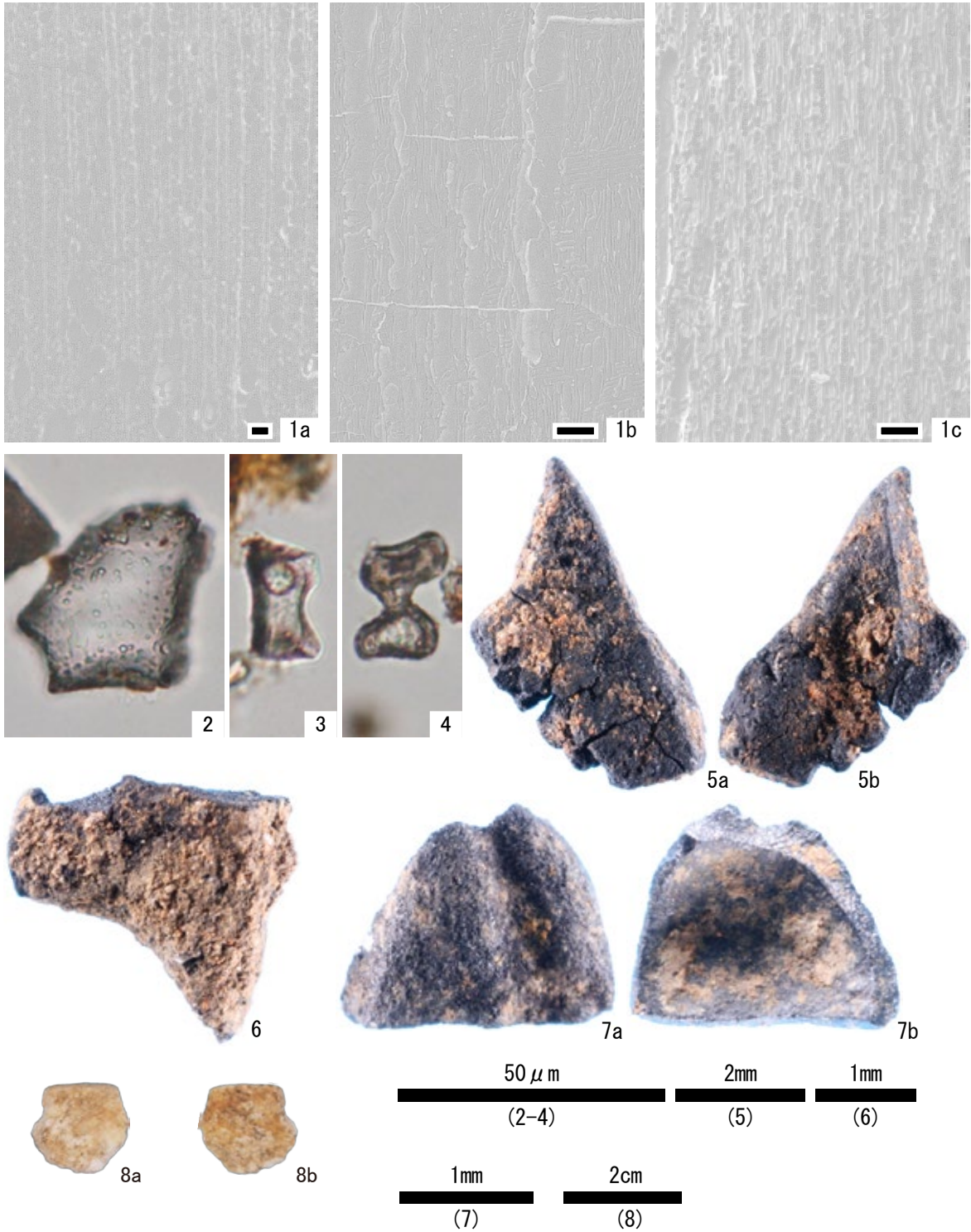
試料を肉眼および実体顕微鏡で観察し、対象物の検討を行う。

(3) 結果

PJ-51内一括から採取された骨とみられる破片は、骨ではなく、凝灰岩の破片である(写真38-8)。凝灰岩は、秋川上流域のあきる野市や日の出町付近で見られる。そのような場所から搬入された岩石の破片であるとみられる。

【引用文献】

- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 堀田 満(代表)編,1989,世界有用植物事典,平凡社,1499p.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社,449p.
- 近藤錬三,1982,Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書,32p.
- 近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会,387p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会,678p.
- パリーノ・サーヴェイ株式会社,1993,自然科学分析からみた人々の生活(1). 慶應義塾藤沢校地理蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」,慶應義塾,347-370.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編,1989a,日本の野生植物 木本Ⅰ. 平凡社,321p.
- 佐竹義輔・原 寛・亘野俊次・富成忠夫編,1989b,日本の野生植物 木本Ⅱ,平凡社,305p.
- 杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学,19,69-84.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2018,草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂—. ネイチャーウォッチングガイドブック,誠文堂新光社,303p.
- 渡辺 誠,1975,縄文時代の植物食. 雄山閣出版,187p.



1. クリ (No. 220) a: 木口 b: 柀目 c: 板目 スケールは100 μ m
2. クマザサ属機動細胞珪酸体 (SI827J炉; 下部)
3. クマザサ属短細胞珪酸体 (SI827J炉; 下部)
4. ススキ属短細胞珪酸体 (SI827J炉; 下部)
5. オニグルミ 核 (MK-758 SI827J)
6. オニグルミ 核 (MK-758 SI827J)
7. ミズキ 核 (MK-758 SI827J)
8. 凝灰岩 (PJ-51内一括)

写真38 木材・植物珪酸体・炭化種実・骨

第2節 黒曜石の産地推定分析

足立とも与・新免歳靖

はじめに

多喜窪遺跡の縄文時代竪穴建物 SI827J より出土した黒曜石資料について、蛍光 X 線分析を用いた産地推定を行うことで、当時の本遺跡周辺における石材流通の一端を把握したい。

1. 試料

産地推定分析に用いた試料は、多喜窪遺跡より出土した黒曜石資料 159 点である（写真 39・40）。各試料の法量・器種・分析結果などを表 9 に示す。

2. 産地推定分析の方法

産地推定に用いる各元素の測定には、エネルギー分散型蛍光 X 線分析（非破壊法）を用いた。測定条件は以下の通りである。

分析装置：日立ハイテクサイエンス製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 SEA-5120S、線源ターゲット：モリブデン (Mo) 管球、管電圧：45kV、管電流：40 μ A、X 線照射径： ϕ 1.8mm、測定雰囲気：大気、測定時間：180 秒、定量分析の計算方法：FP 法、標準試料：なし

黒曜石の主成分元素のうち、産地推定の指標となる鉄 (Fe)、カルシウム (Ca)、カリウム (K) の 3 元素と、主要成分元素と挙動に相関性がある微量成分元素のマンガン (Mn)、ストロンチウム (Sr)、ルビジウム (Rb) の 3 元素の計 6 元素について測定を行った。これらの 6 元素は、東日本の黒曜石の産地分析に有効であることが示されている（菅頭ほか 2020 等）。

測定に際しては、機器に内蔵された CCD カメラによる試料表面の観察を行い、X 線照射範囲がなるべく平滑かつ新鮮な面となるように心がけ、1 試料につき 1 回の測定を行った。

産地推定の基準資料として、関東周辺の主要な黒曜石産地である高原山（栃木県）、小深沢・男女倉・星ヶ塔・麦草峠（長野県）、畑宿（神奈川県）、上多賀・柏峠（静岡県）、神津島（東京都）の各産地黒曜石を用いた。各産地黒曜石の分析値と平均値を表 10 に示す。

産地推定は、上にあげた 6 元素の測定結果をもとに、資料全点と産地資料群について最遠隣法によるクラスター分析を実施し、その分類結果から産地を推定した。クラスター分析には、IBM 社製 SPSS Statistics24 を用いた。

3. 産地推定分析の結果

分析試料について 6 元素の測定結果を表 9 に示す。測定値は 6 元素の酸化物の総和を 100 としたときの百分率で表している。また、クラスター分析による樹形図を第 46 図として示す。

産地推定分析の結果、多喜窪遺跡より出土した黒曜石資料の産地の内訳は、星ヶ塔 8 点、信州系 4 点、神津島 147 点であった（表 11）。各産地グループについて、6 元素の平均値を表 10 に示した。

信州系とした試料群については、クラスター分析による分類ではいずれの原産地資料もクラスターに含んでいないが、男女倉や星ヶ塔といった信州系のクラスターと併合していたため、信州系と判断した。また、神津島とした試料群は、さらに 6 つのクラスターに分けられる。このような差異は、同一産地内における原石採取地の差異によるものと考えられる。

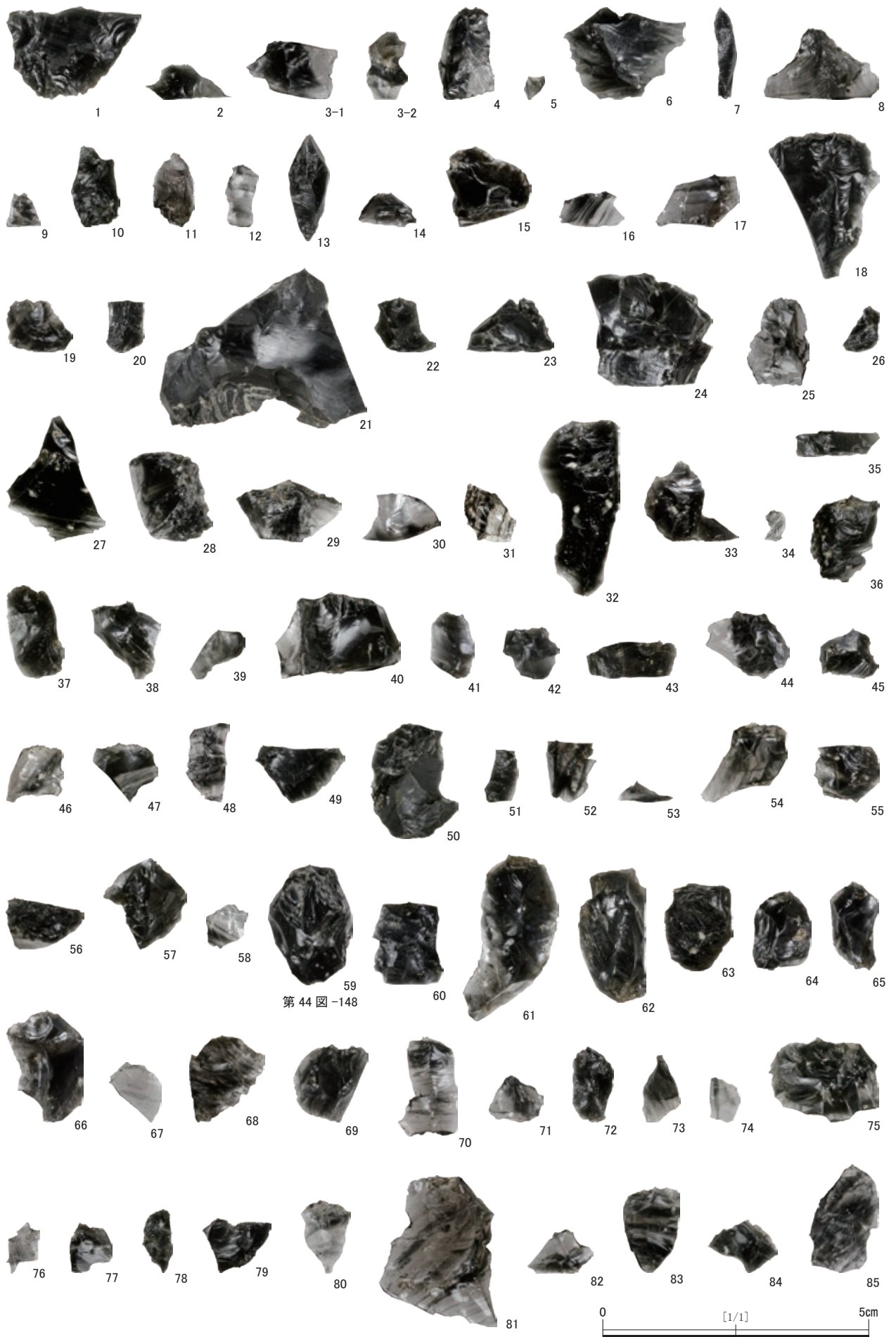


写真39 黒曜石分析資料（1）

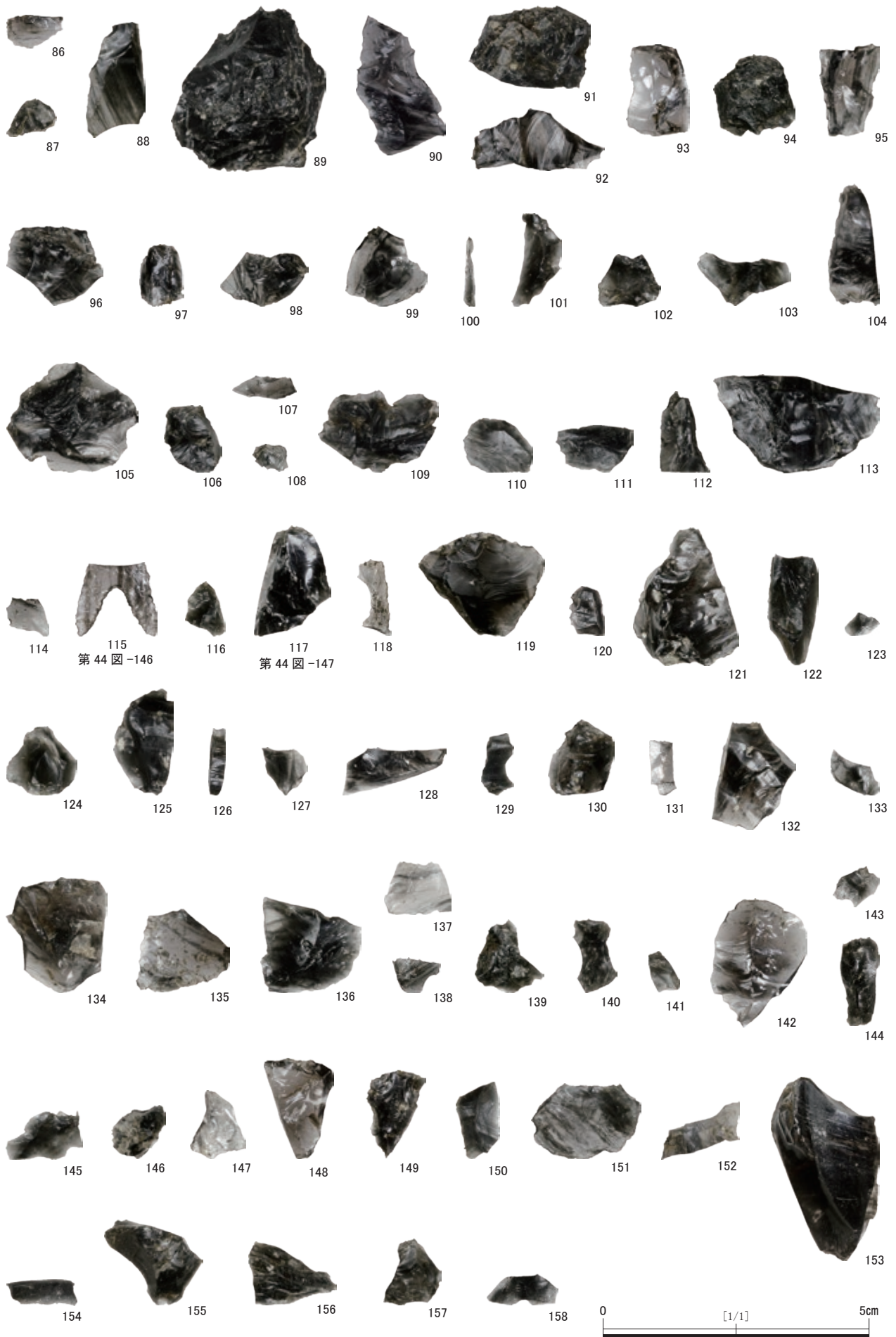


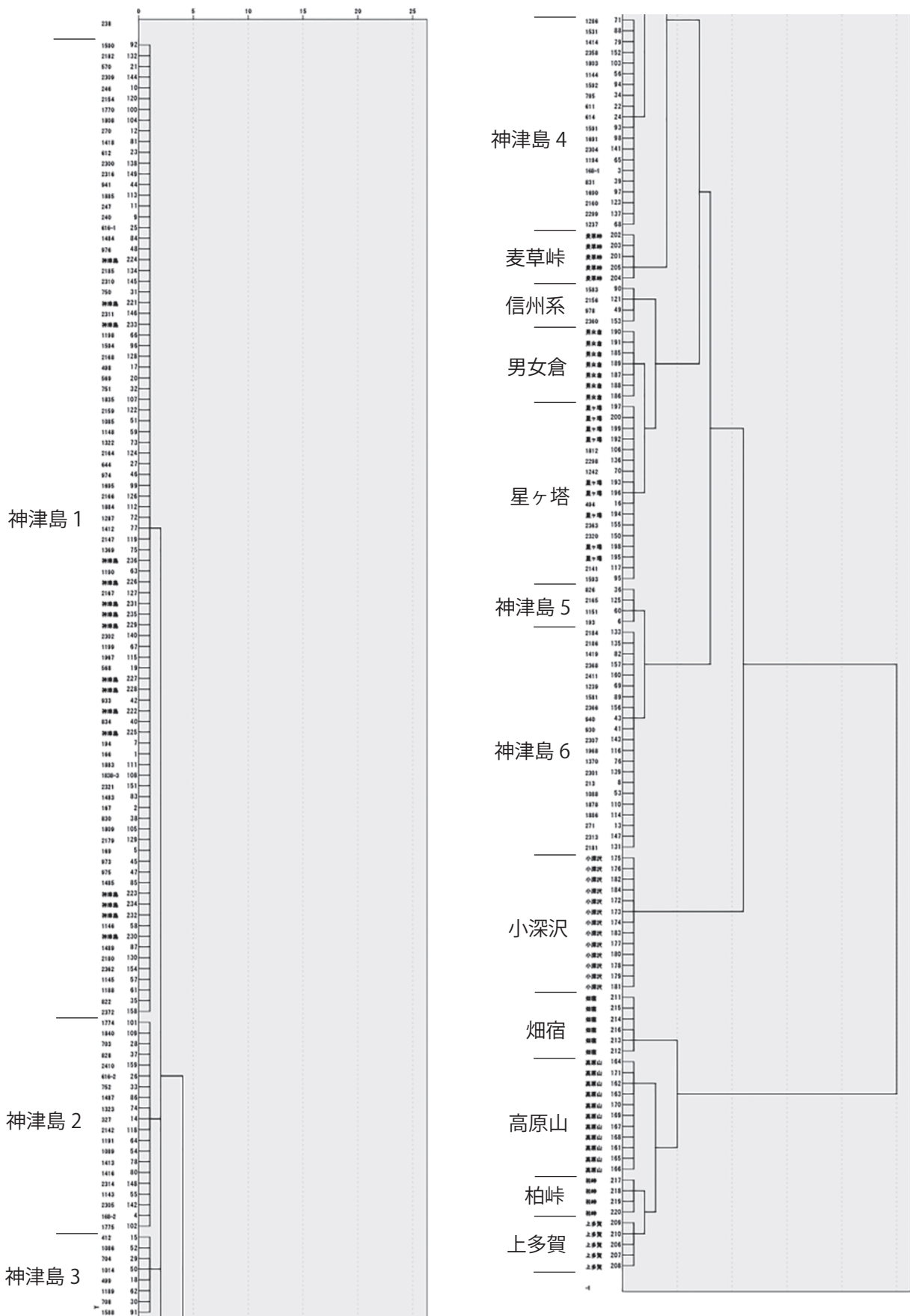
写真40 黒曜石分析資料（2）

表9 分析資料リスト

試料No.	注記No.	器種	重量(g)	MnO	FeO	SrO	CaO	Rb2O	K2O	推定産地
1	166	石鏃未製品	2.3	3.6	32.8	0.7	21.8	0.6	40.6	神津島
2	167	剥片	0.2	3.6	34.7	0.8	19.4	0.6	40.9	神津島
3-1	168-1	剥片	0.8	2.8	36.4	0.6	17.9	0.6	41.7	神津島
3-2	168-2	剥片		4.2	35.6	0.7	18.3	0.6	40.7	神津島
4	169	剥片	0.6	3.8	33.6	0.8	20.5	0.7	40.7	神津島
5	193	碎片	0.1未満	5.8	39.1	0.5	19.2	0.5	34.9	神津島
6	194	剥片	1.0	3.4	33.1	0.7	21.3	0.6	41.0	神津島
7	213	剥片	0.1未満	5.0	33.7	0.4	20.4	0.5	40.1	神津島
8	240	石鏃未製品	0.8	4.0	35.2	0.6	19.1	0.4	40.8	神津島
9	246	碎片	0.1未満	4.3	34.8	0.6	20.5	0.5	39.2	神津島
10	247	剥片	0.5	4.2	33.5	0.6	18.8	0.5	42.5	神津島
11	270	楔形石器	0.4	4.2	34.1	0.7	19.9	0.5	40.6	神津島
12	271	剥片	0.1未満	4.9	34.0	0.6	20.4	0.5	39.5	神津島
13	327	楔形石器	0.6	4.0	34.4	0.8	19.8	0.6	40.3	神津島
14	412	剥片	0.2	3.8	33.1	0.8	23.9	0.7	37.8	神津島
15	494	楔形石器	1.8	3.6	25.2	0.3	13.7	1.2	56.0	星ヶ塔
16	498	剥片	0.1	4.3	34.1	0.7	19.9	0.7	40.5	神津島
17	499	剥片	0.8	2.9	33.8	0.8	22.1	0.5	40.0	神津島
18	568	剥片	3.3	32.7	0.6	21.7	0.5	41.2	41.2	神津島
19	569	剥片	0.3	4.3	34.5	0.7	19.7	0.6	40.2	神津島
20	570	剥片	0.2	4.1	34.7	0.6	20.0	0.6	40.0	神津島
21	611	剥片	9.0	3.3	32.4	0.6	19.9	0.6	43.3	神津島
22	612	剥片	0.3	4.3	33.6	0.7	20.2	0.4	40.9	神津島
23	614	剥片	1.0	3.4	32.8	0.5	19.7	0.6	43.0	神津島
24	616	石核	6.7	3.8	34.8	0.7	20.0	0.7	40.1	神津島
25	644	剥片	0.5	4.2	34.1	0.5	22.3	0.5	38.4	神津島
26	703	碎片	0.1	3.7	32.8	0.8	19.5	0.7	42.6	神津島
27	704	剥片	1.7	3.4	33.1	0.7	22.9	0.6	39.2	神津島
28	708	楔形石器	1.4	3.2	34.8	1.0	20.0	0.7	40.4	神津島
29	750	剥片	0.8	3.9	34.1	0.7	20.6	0.5	40.3	神津島
30	751	剥片	0.3	4.2	34.9	0.7	20.0	0.6	39.6	神津島
31	752	剥片	0.2	4.0	33.9	0.8	19.7	0.7	41.0	神津島
32	785	剥片	1.7	3.7	33.3	0.6	19.3	0.4	42.7	神津島
33	822	楔形石器	0.9	3.3	36.1	0.7	20.3	0.5	39.1	神津島
34	826	碎片	0.1未満	5.6	34.8	0.5	19.9	0.7	38.4	神津島
35	828	剥片	0.2	3.8	34.1	0.8	18.8	0.7	41.8	神津島
36	830	剥片	0.8	3.4	33.9	0.7	19.6	0.6	41.9	神津島
37	831	剥片	0.5	3.1	35.1	0.7	18.2	0.7	42.3	神津島
38	834	剥片	0.8	3.4	33.5	0.7	21.1	0.6	40.7	神津島
39	930	剥片	0.1未満	5.0	33.1	0.7	21.1	0.4	39.8	神津島
40	933	剥片	2.2	3.5	33.3	0.7	19.9	0.6	42.1	神津島
41	940	剥片	0.1未満	4.8	32.6	0.7	19.6	0.6	41.7	神津島
42	941	剥片	0.1未満	4.3	34.0	0.5	19.5	0.5	41.2	神津島
43	973	剥片	0.6	3.8	33.7	0.7	20.0	0.7	41.1	神津島
44	974	剥片	0.4	4.2	33.2	0.7	22.3	0.6	39.1	神津島
45	975	剥片	0.4	3.9	34.5	0.7	20.7	0.7	39.5	神津島
46	976	楔形石器	0.3	3.9	33.6	0.7	20.5	0.6	40.8	神津島
47	978	剥片	0.2	3.2	24.7	0.4	17.0	0.5	54.4	信州系
48	1014	剥片	0.2	3.5	33.1	0.8	23.6	0.6	38.5	神津島
49	1085	剥片	0.5	4.2	33.5	0.6	20.7	0.5	40.5	神津島
50	1086	剥片	1.7	3.7	35.4	0.8	23.2	0.6	36.3	神津島
51	1088	剥片	0.1未満	4.9	34.1	0.5	20.5	0.4	39.6	神津島
52	1089	剥片	0.4	3.9	35.8	0.8	20.2	0.7	38.7	神津島

試料No.	注記No.	器種	重量(g)	MnO	FeO	SrO	CaO	Rb2O	K2O	推定産地
53	1143	剥片	0.1未満	4.4	34.5	0.8	18.6	0.4	41.4	神津島
54	1144	剥片	0.6	3.6	34.2	0.6	20.1	0.5	41.0	神津島
55	1145	楔形石器	0.6	3.5	34.6	0.8	21.2	0.6	39.3	神津島
56	1146	剥片	0.3	3.5	32.4	0.8	21.2	0.6	41.5	神津島
57	1148	剥片	1.1	4.1	33.5	0.6	20.8	0.6	40.5	神津島
58	1151	剥片	0.1未満	5.5	33.3	0.6	20.3	0.6	39.7	神津島
59	1188	楔形石器	2.9	3.3	34.5	0.8	20.9	0.6	39.9	神津島
60	1189	剥片	1.0	3.0	33.2	0.7	21.1	0.6	41.4	神津島
61	1190	剥片	2.1	3.8	33.5	0.7	21.4	0.5	40.2	神津島
62	1191	剥片	2.4	3.9	33.9	0.8	19.6	0.6	41.2	神津島
63	1194	剥片	0.8	3.6	35.9	0.7	19.0	0.7	40.2	神津島
64	1198	楔形石器	0.8	4.0	33.2	0.7	21.0	0.5	40.7	神津島
65	1199	楔形石器	1.0	3.4	33.6	0.6	20.5	0.6	41.4	神津島
66	1237	剥片	2.0	2.9	32.9	0.8	18.4	0.7	44.3	神津島
67	1239	剥片	0.1未満	4.6	33.9	0.8	20.7	0.6	39.5	神津島
68	1242	楔形石器	0.6	3.6	24.9	0.2	14.1	1.1	56.0	星ヶ塔
69	1286	楔形石器	0.4	4.0	30.5	0.6	18.2	0.6	46.2	神津島
70	1287	剥片	0.5	3.9	32.0	0.6	20.8	0.5	42.3	神津島
71	1322	剥片	0.1未満	4.3	33.8	0.6	21.1	0.5	39.7	神津島
72	1323	楔形石器	0.4	4.1	33.4	0.7	20.7	0.7	40.4	神津島
73	1369	剥片	0.2	3.9	33.4	0.7	21.5	0.6	40.0	神津島
74	1370	碎片	0.1未満	5.1	34.9	0.5	19.4	0.6	39.5	神津島
75	1412	剥片	1.7	3.8	33.3	0.6	21.3	0.6	40.5	神津島
76	1413	剥片	0.1未満	3.9	35.6	0.7	19.8	0.6	39.4	神津島
77	1414	楔形石器	0.2	3.7	34.0	0.5	19.1	0.6	42.1	神津島
78	1416	楔形石器	0.3	4.0	41.0	0.7	18.2	0.5	35.6	神津島
79	1418	楔形石器	0.4	4.1	33.2	0.7	20.4	0.5	41.1	神津島
80	1419	剥片	0.1	4.8	33.3	0.6	22.1	0.5	38.7	神津島
81	1483	剥片	2.3	3.7	34.1	0.7	19.7	0.6	41.2	神津島
82	1484	剥片	0.2	3.8	33.7	0.7	19.9	0.7	41.4	神津島
83	1485	楔形石器	0.7	3.8	34.3	0.7	20.5	0.6	40.0	神津島
84	1487	剥片	0.3	4.1	34.6	0.7	19.6	0.7	40.2	神津島
85	1489	剥片	0.6	3.7	33.9	0.8	20.5	0.6	40.5	神津島
86	1531	剥片	0.1	3.7	30.7	0.6	19.1	0.5	45.4	神津島
87	1581	剥片	0.1未満	4.9	34.4	0.8	19.7	0.7	39.6	神津島
88	1583	剥片	0.7	2.4	22.6	0.5	15.9	0.4	58.2	信州系
89	1588	石核	12.6	3.1	33.4	0.9	22.6	0.6	39.4	神津島
90	1590	剥片	1.1	4.1	33.7	0.6	19.9	0.5	41.2	神津島
91	1591	剥片	3.3	3.5	32.8	0.6	19.0	0.7	43.4	神津島
92	1592	剥片	1.5	3.6	34.0	0.6	20.0	0.5	41.3	神津島
93	1593	剥片	0.8	4.0	25.8	0.3	12.6	1.1	56.3	星ヶ塔
94	1594	楔形石器	1.6	4.0	34.1	0.6	21.1	0.6	39.6	神津島
95	1690	剥片	0.6	3.1	34.9	0.6	20.3	0.8	40.4	神津島
96	1691	剥片	1.0	3.4	34.0	0.6	18.7	0.6	42.7	神津島
97	1695	楔形石器	0.3	3.9	34.1	0.6	20.4	0.6	40.4	神津島
98	1770	楔形石器	0.5	4.2	33.3	0.7	21.1	0.5	40.3	神津島
99	1774	剥片	0.5	4.4	35.0	0.8	18.8	0.7	40.2	神津島
100	1775	碎片	0.1未満	4.2	38.6	0.7	17.4	0.5	38.6	神津島
101	1803	剥片	0.3	3.8	34.5	0.6	19.1	0.6	41.4	神津島
102	1808	楔形石器	0.3	4.2	33.1	0.6	20.9	0.6	40.7	神津島
103	1809	剥片	0.4	3.7	34.1	0.8	20.5	0.8	40.3	神津島
104	1812	剥片	0.8	3.5	23.5	0.3	14.5	0.9	57.3	星ヶ塔
105	1835	剥片	1.8	4.1	32.9	0.7	20.0	0.7	41.7	神津島

試料No.	注記No.	器種	重量(g)	MnO	FeO	SrO	CaO	Rb2O	K2O	推定産地
106	1838	楔形石器	0.9	3.7	34.4	0.7	19.1	0.5	41.6	神津島
107	1840	剥片	0.1未満	3.9	35.2	0.8	17.6	0.7	41.7	神津島
108	1878	剥片	0.1未満	5.0	34.1	0.6	19.7	0.5	40.2	神津島
109	1883	剥片	0.9	3.5	33.6	0.7	21.4	0.5	40.4	神津島
110	1884	碎片	0.2	3.8	33.6	0.6	20.5	0.6	41.0	神津島
111	1885	碎片	0.3	4.0	34.0	0.6	19.5	0.6	41.4	神津島
112	1886	剥片	0.5	4.8	33.1	0.6	19.6	0.6	41.5	神津島
113	1967	剥片	3.1	3.2	33.6	0.6	21.1	0.6	40.9	神津島
114	1968	碎片	0.1未満	5.2	35.7	0.6	20.5	0.5	37.6	神津島
115	2141	石鏃	0.4	3.5	25.3	0.3	13.2	1.0	56.8	星ヶ塔
116	2142	剥片	0.2	3.9	33.9	0.8	20.3	0.6	40.5	神津島
117	2147	楔形石器	2.7	3.7	33.1	0.6	22.0	0.6	40.1	神津島
118	2154	剥片	0.1	4.2	35.3	0.6	19.9	0.6	39.4	神津島
119	2156	楔形石器	3.0	2.8	23.5	0.4	15.8	0.3	57.1	信州系
120	2159	剥片	0.2	4.0	35.5	0.6	19.6	0.7	39.6	神津島
121	2160	楔形石器	4.2	3.0	30.9	0.7	19.8	0.6	45.0	神津島
122	2164	剥片	0.5	4.2	33.0	0.6	21.9	0.5	39.9	神津島
123	2165	碎片	0.1未満	5.6	33.6	0.5	19.8	0.6	40.0	神津島
124	2166	楔形石器	0.5	3.8	34.0	0.6	19.9	0.6	41.2	神津島
125	2167	剥片	1.4	3.7	33.8	0.7	20.7	0.6	40.6	神津島
126	2168	楔形石器	0.2	4.0	34.5	0.7	20.6	0.6	39.6	神津島
127	2179	剥片	0.1	3.7	33.9	0.8	21.1	0.7	39.9	神津島
128	2180	剥片	0.7	3.8	33.5	0.8	21.1	0.6	40.3	神津島
129	2181	剥片	0.2	4.9	33.2	0.6	18.8	0.7	41.9	神津島
130	2182	楔形石器	0.8	4.1	33.9	0.6	19.9	0.5	41.0	神津島
131	2184	剥片	0.1未満	4.9	33.2	0.6	22.8	0.6	37.9	神津島
132	2185	剥片	2.5	4.0	33.8	0.6	20.0	0.6	41.0	神津島
133	2186	剥片	0.1未満	4.9	33.3	0.7	21.7	0.7	38.8	神津島
134	2298	剥片	3.3	3.2	25.5	0.3	15.0	1.1	54.9	星ヶ塔
135	2299	剥片	0.7	3.3	32.1	0.7	18.4	0.4	45.2	神津島
136	2300	剥片	1.2	4.3	33.2	0.7	19.3	0.5	42.1	神津島
137	2301	剥片	0.2	5.3	33.9	0.5	20.4	0.6	39.3	神津島
138	2302	剥片	0.1未満	3.7	34.1	0.7	21.0	0.7	40.0	神津島
139	2304	剥片	0.4	3.4	34.4	0.7	18.0	0.7	42.9	神津島
140	2305	剥片	0.2	4.7	35.1	0.8	18.6	0.5	40.4	神津島
141	2307	剥片	0.1未満	5.2	33.1	0.6	19.9	0.4	40.8	神津島
142	2309	剥片	1.6	4.0	34.2	0.6	20.3	0.6	40.3	神津島
143	2310	剥片	0.1未満	4.1	33.7	0.7	20.0	0.6	41.0	神津島
144	2311	楔形石器	0.6	3.9	33.1	0.7	20.7	0.6	41.0	神津島
145	2313	剥片	0.1	4.5	34.2	0.6	20.5	0.6	39.7	神津島
146	2314	剥片	0.3	4.0	39.9	0.8	20.2	0.5	34.8	神津島
147	2316	剥片	0.2	4.4	33.1	0.6	19.4	0.5	42.1	神津島
148	2320	楔形石器	1.4	3.5	25.3	0.3	14.2	1.1	55.6	星ヶ塔
149	2321	楔形石器	0.8	3.7	34.8	0.7	19.4	0.5	41.0	神津島
150	2358	剥片	0.2	3.7	34.3	0.5	19.5	0.6	41.4	神津島
151	2360	楔形石器	0.7	3.1	25.8	0.5	19.1	0.4	51.2	信州系
152	2362	剥片	0.5	3.6	34.6	0.8	20.6	0.5	40.0	神津島
153	2363	楔形石器	7.7	3.8	26.2	0.3	13.3	1.2	55.2	星ヶ塔
154	2366	剥片	0.1未満	4.9	34.9	0.7	20.1	0.5	38.9	神津島
155	2368	剥片	1.8	4.4	34.5	0.7	20.9	0.6	39.0	神津島
156	2372	剥片	0.9	3.6	37.7	0.7	20.6	0.6	36.7	神津島
157	2410	楔形石器	0.5	3.7	34.5	0.9	19.9	0.7	40.3	神津島
158	2411	剥片	0.1未満	4.5	34.2	0.7	20.8	0.5	39.2	神津島



第 46 図 多喜窪遺跡出土黒曜石のクラスター分析結果

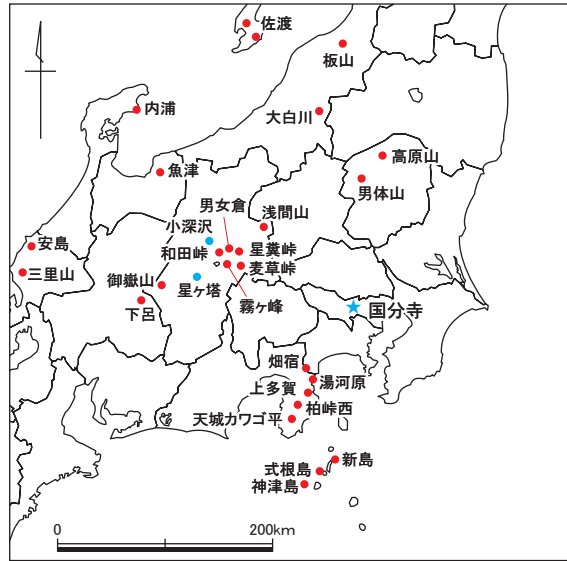
表 10 各生産地黒曜石の分析値と平均値

産地名	MnO	FeO	SrO	CaO	Rb ₂ O	K ₂ O
高原山	2.2	45.7	0.7	21.9	0.7	28.7
高原山	2.1	45.1	0.7	23.0	0.6	28.5
高原山	2.2	45.7	0.7	22.6	0.7	28.3
高原山	2.3	46.1	0.7	21.1	0.7	29.2
高原山	2.2	45.3	0.7	21.9	0.6	29.2
高原山	2.1	45.4	0.7	21.8	0.7	29.3
高原山	2.1	46.0	0.6	22.3	0.6	28.3
高原山	2.1	45.1	0.6	21.9	0.7	29.6
高原山	2.2	46.3	0.8	22.8	0.7	27.2
高原山	2.2	46.2	0.7	22.8	0.8	27.3
高原山	2.4	46.8	0.8	20.8	0.7	28.6
平均値 (n=11)	2.2	45.8	0.7	22.1	0.7	28.6
小深沢	4.4	26.2	0.0	14.4	2.0	52.9
小深沢	4.4	26.4	0.0	14.4	2.1	52.7
小深沢	4.3	26.2	0.0	13.9	2.0	53.5
小深沢	4.3	26.4	0.1	14.7	2.0	52.4
小深沢	4.5	26.5	0.1	14.6	2.0	52.3
小深沢	4.7	24.9	0.0	14.1	2.1	54.2
小深沢	4.7	26.0	0.0	14.1	2.2	53.1
小深沢	4.4	24.9	0.0	13.1	2.0	55.6
小深沢	4.7	25.5	0.0	14.2	2.1	53.5
小深沢	4.5	25.8	0.1	13.2	2.1	54.3
小深沢	4.4	25.4	0.0	14.0	2.1	54.0
小深沢	4.4	25.2	0.0	14.2	2.0	54.2
小深沢	4.4	26.1	0.0	13.7	2.1	53.8
平均値 (n=13)	4.5	25.8	0.0	14.0	2.1	53.6
男女倉	3.2	29.6	0.5	16.3	1.1	49.3
男女倉	3.3	29.5	0.4	16.3	1.1	49.3
男女倉	3.0	29.9	0.4	15.8	1.1	49.9
男女倉	3.1	30.0	0.4	15.9	1.1	49.5
男女倉	3.0	30.0	0.5	16.0	1.0	49.5
男女倉	2.9	29.9	0.5	16.5	1.0	49.2
男女倉	3.1	29.8	0.5	16.8	1.0	48.9
平均値 (n=7)	3.1	29.8	0.5	16.2	1.0	49.4
星ヶ塔	3.6	25.1	0.3	14.8	1.1	55.2
星ヶ塔	3.7	25.4	0.2	13.7	1.1	55.8
星ヶ塔	3.7	25.5	0.3	13.4	1.2	55.9
星ヶ塔	3.5	25.4	0.3	13.4	1.1	56.3
星ヶ塔	3.7	25.6	0.3	14.3	1.1	55.1
星ヶ塔	3.7	24.8	0.3	15.1	1.1	54.9
星ヶ塔	3.6	25.3	0.3	13.9	1.1	55.8
星ヶ塔	3.6	25.2	0.4	14.7	1.1	55.0
星ヶ塔	3.7	25.1	0.3	14.6	1.1	55.2
平均値 (n=9)	3.6	25.3	0.3	14.2	1.1	55.5

産地名	MnO	FeO	SrO	CaO	Rb ₂ O	K ₂ O
麦草峠	2.1	32.0	0.9	17.2	0.7	47.0
麦草峠	2.2	31.4	0.9	18.0	0.8	46.7
麦草峠	2.3	31.3	0.9	17.6	0.7	47.2
麦草峠	2.3	31.2	0.9	19.6	0.8	45.2
麦草峠	2.4	31.4	0.9	18.4	0.7	46.2
平均値 (n=5)	2.3	31.5	0.9	18.2	0.7	46.5
上多賀	2.8	51.2	1.1	24.8	0.3	19.8
上多賀	2.9	51.0	1.2	24.6	0.3	20.2
上多賀	2.7	49.9	1.1	25.0	0.2	21.1
上多賀	2.7	50.8	0.9	25.6	0.2	19.8
上多賀	2.7	50.5	1.0	25.1	0.2	20.5
平均値 (n=5)	2.7	50.7	1.1	25.0	0.2	20.3
畑宿	3.3	59.5	1.0	23.0	0.1	13.1
畑宿	3.4	61.0	1.2	21.3	0.1	13.0
畑宿	3.2	59.8	1.2	23.6	0.1	12.1
畑宿	3.3	60.5	1.1	22.5	0.2	12.5
畑宿	3.4	60.6	1.1	22.9	0.1	11.9
畑宿	3.0	59.2	1.0	23.9	0.1	12.8
平均値 (n=6)	3.3	60.1	1.1	22.9	0.1	12.6
柏峠	2.1	47.9	0.7	26.4	0.3	22.6
柏峠	2.0	49.0	0.8	26.0	0.3	21.9
柏峠	2.2	48.1	0.8	24.3	0.4	24.3
柏峠	2.4	48.2	0.8	24.6	0.4	23.6
平均値 (n=4)	2.2	48.3	0.8	25.3	0.3	23.1
神津島	3.8	33.5	0.7	20.5	0.5	41.0
神津島	3.6	33.7	0.7	20.4	0.6	41.1
神津島	3.9	33.2	0.7	20.7	0.6	40.9
神津島	3.9	33.0	0.7	20.2	0.6	41.6
神津島	3.4	33.5	0.7	20.9	0.6	41.0
神津島	3.7	33.0	0.7	20.9	0.6	41.1
神津島	3.5	33.1	0.6	20.7	0.5	41.5
神津島	3.6	33.0	0.6	20.6	0.6	41.6
神津島	3.7	33.0	0.7	20.9	0.6	41.2
神津島	3.6	33.2	0.8	21.8	0.6	40.1
神津島	3.7	34.0	0.7	21.0	0.5	40.1
神津島	3.9	32.7	0.8	21.0	0.5	41.1
神津島	4.0	33.6	0.7	20.6	0.6	40.5
神津島	3.9	33.3	0.7	20.7	0.6	40.8
神津島	3.7	33.6	0.7	21.1	0.6	40.4
神津島	3.9	33.0	0.7	21.3	0.6	40.6
平均値 (n=16)	3.7	33.3	0.7	20.8	0.6	40.9

表 11 産地内訳

産地グループ	点数
高原山	—
小深沢	—
男女倉	—
星ヶ塔	8点
麦草峠	—
信州系	4点
畑宿	—
上多賀	—
柏峠	—
神津島	147点
計	159点



第 47 図 黒曜石の原産地

表 12 6 元素の平均値

産地グループ	MnO	FeO	SrO	CaO	Rb2O	K2O
星ヶ塔	3.6	25.2	0.3	14.0	1.1	55.7
信州系	2.9	24.1	0.4	16.9	0.4	55.2
神津島1	3.9	33.9	0.7	20.5	0.6	40.5
神津島2	4.1	35.3	0.8	19.3	0.6	40.0
神津島3	3.3	33.7	0.8	22.4	0.6	39.1
神津島4	3.4	33.5	0.6	19.1	0.6	42.8
神津島5	5.6	35.2	0.5	19.8	0.6	38.3
神津島6	4.9	33.9	0.6	20.4	0.5	39.6

【参考文献】

菅頭明日香ほか 2020 「上ホシ遺跡 (1) 調査地点出土黒曜石資料の産地分析」『上ホシ遺跡 (1)』

船橋市遺跡調査会 pp. 170-174

大工原豊 長田友也 建石徹 [編] 2020 『考古調査ハンドブック 20 縄文石器提要』ニューサイエンス社

二宮修治ほか 2019 「石器石材原産地分析」『小金井市史 資料編 考古・中世』小金井市 pp. 381-404

第6章 総括

第1節 多喜窪遺跡出土の縄文土器・石器の様相

(1) 土器の編年(年代観)について(新地平編年、類型)

竪穴建物 SI827J の時期について出土土器から検討する。

本竪穴からは五領ヶ台式から加曾利 E 4 式までの時間幅のある土器片が出土しているが、主体となる時期はある程度器形が復元できた勝坂式終末期の土器群である。復元個体には大型深鉢 8 個体、小型深鉢 4 個体、小型土器 1 個体、浅鉢 4 個体が最もまとまったものである。

個体 1 は口縁部のみ遺存する 4 単位の山形突起を有する深鉢である。太い隆帯による横帯区画、突起からの懸垂隆帯、隆帯上の粗い刻文が特徴的である。隆帯は一部で 2 本単位の構成となっており、勝坂式末から加曾利 E 式の過渡期の様相がみられる。多摩東部、武蔵野台地を中心に分布する「清水が丘タイプ」(中山 2017) あるいはその近似種である。頸部は無文となっており以下胴部の文様構成は不明であるが、やや膨らむ胴部に縄文あるいは撚糸紋が施文されていた可能性がある。個体 2 は、緩い波状でやや内弯する無文口縁を有する「頸部横帯楕円区画文系土器」である。胴部には地紋の撚糸紋が施される。野川流域など武蔵野台地の勝坂式後半で主体となるタイプである。個体 3 は内弯する無文口縁のキャリパー形深鉢である。頸部が隆帯で区画され、そこから J 字状の懸垂隆帯を配し、胴部には沈線による平行線、渦巻文等パネル状の区画文を描く。隆帯上には綾杉状の刻文や交互刺突文を配する。刻文がやや粗大化する傾向がみられるが、勝坂式後半の「パネル文崩れ」の系統である。隆帯上の丁寧な綾杉状の刻文は在地の土器には希少な要素で、中部地方の土器に主体的にみられる特徴であることと、胎土に白色粒子が目立つ点などからみて他地域からの搬入品の可能性があろう。個体 4 は 3 同様に内弯する口縁を有する深鉢で、頸部以下、胴部を隆帯による三角形、渦巻状の区画で区切り、区画内を縦位沈線、三叉文を配する。隆帯上には刻文を配する。3 に比べて素文部が多いが、武蔵野台地を中心に分布する「パネル文崩れ」の系統である。個体 5 は個体 4 と同様な文様構成であるが、胴部の地紋に縄文、撚糸紋の代置として条線を施しているものであまり類例をみない。個体 6 は口縁上半を欠失するキャリパー形深鉢。口縁部に隆帯による懸垂文を配し、その間を埋めるように縦位隆帯を多条に貼付している。幅広の頸部無文帯を挟み胴部には口縁と同様な隆帯による懸垂文と多条の縦位隆帯を密に配する。胎土には特徴ある不透明な白色粒を多量に含む。勝坂式末(9c 期)に特徴的な「狐塚タイプ」の系統であろう。個体 7 は内弯する無文口縁を有し胴部上半に文様を集約するやや小型の「中帯文系土器」。器体の大きさに対し隆帯と刻文の施文が粗大な印象をもつ。本遺跡第一号住居趾の重文指定土器の 1 個体と同類である。個体 8 は口縁部を欠失する「パネル文系土器」。曲線隆帯の懸垂文と平行沈線によりパネル状区画構成となるが、本竪穴出土の他の個体よりやや古い印象がある。個体 9 は口縁、胴部下半以下を欠失するもので、7 同様の「中帯文系土器」。個体 10 は外反する無文口縁となる小型の深鉢。個体 11 は胴部がわずかに張る小型の無文深鉢。浅鉢は沈線で文様を表出するものと、平滑にされた器面上に彩色されたのがみられる。個体 12 は口縁部に蛇体状の大型把手が付されるキャリパー形深鉢であるが、縄文を施文する胴下半を欠失する。把手は丁寧なシャープな作りで、外反気味に直立する口縁部文様には隆帯により三角形の区画を配するが、このような構成の文様は野川流域の遺跡では類例が少なく、多摩地域南部から神奈川方面の土器に顕著な特徴である。個体 13 も内弯する口縁上が括れ、大振りな丁寧な作りの蛇体状の把手を配する深鉢で胴部以下を欠く。胎土に雲母を含むもので、多摩西部～中部地方方面からの搬入品的な性格が強い。胴部は欠失するが地紋の縄文が施されていたのだろう。個体 14 は内弯する口縁部文様帯に隆帯を用いず、太い沈線による交互刺突、窓枠状の連続文様を配する浅鉢。

個体 15 は口縁が括れ直線的に外反する無文の浅鉢であるが、器面が内外面とも丁寧に磨かれていることから本来は赤色彩色されていたのであろう。個体 16 は 15 に近似する器形で、扁平な隆帯文の上に赤色に彩色される。個体 17 も同様な器形となるやや小型の浅鉢であるが外面全面に彩色される。

次に破片資料をみていく。個体 88 は口縁が無文内弯する小型の深鉢で、頸部隆帯、懸垂する隆帯、縦位平行沈線で構成されるもので、勝坂（井戸尻）式末の様相をもつもので、曾利 I 式に繋がる文様構成をとる。個体 94 はキャリパー形の器形を呈し口縁部には 3 本単位の隆帯による渦巻繋ぎ弧文を周回させ縄文を充填するものである。個体 95 も文様が簡略化されているが、これらは武蔵野台地北部から北関東を中心に分布する「台耕地タイプ」の系統であろう。

堅穴建物 SI827J の器形復元土器は、勝坂式後半の特徴を有するがやや時間幅のある個体を含む。個体 1、個体 6、個体 88 は勝坂式終末期（9c 期）の指標となるタイプであるが、その他の個体は 9a～9b 期とやや古い様相をもつものも少なくない。特に個体 8 は 8a 期（藤内 II 式）の指標となるもので本堅穴出土の復元個体の中では最も古く位置付けられる。本堅穴は「多喜窪タイプ」こそ出土しなかったが、第一号堅穴住居跡とほぼ同時期、あるいはやや後出の様相を示している。本堅穴では土器群の廃棄はほぼ同時期に行われているものの製作時の異なる時間幅をもつ土器群が混在していると解釈されよう。あるいは別の場所に一時廃棄されたものが再廃棄されたために混在したとも考えられ、覆土中に中期後半の加曾利 E 式の破片を少数ながらも含むことから、廃棄は 9c 期あるいはそれ以降の 2 次廃棄が行われたと解することも可能ではないか。調査地区出土の破片の接合を試みたものの完形に復元できた個体が 1 点もみられないことからそれを裏付けているように見える。

（2）石器組成について

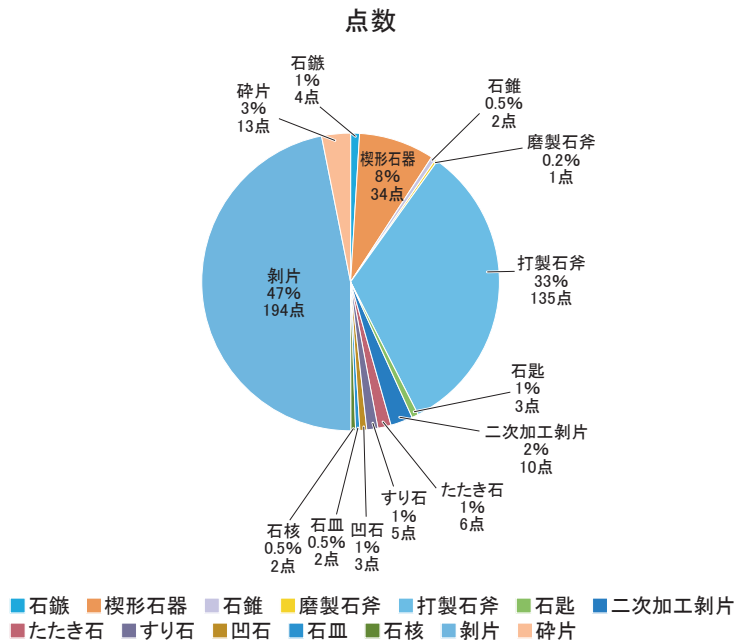
本調査で出土した石器は円グラフに示している（第 48 図）。点数内訳は石鏃 4 点、楔形石器 34 点、石錐 2 点、磨製石斧 1 点、打製石斧 135 点、石匙 3 点、二次加工剥片 10 点、敲石 6 点、磨石 5 点、凹石 3 点、石皿 2 点、石核 2 点、剥片 194 点、碎片 13 点、計 414 点であった。うち 11 点の実測図を示した（第 44・45 図）。数量的には黒曜石、チャート等の剥片が多いが、定型的な石器では打製石斧が多く全体の 30 パーセントを越える。南関東・中部の縄文中期の遺跡では打製石斧が爆発的に増加するが、とくに野川流域の遺跡では打製石斧の出土比率が特に高いことが知られている。

（3）打製石斧について（第 45 図・写真 33～36 参照）

打製石斧は堅穴建物を中心に計 135 点出土している。形態別内訳は、完形品だけでみた場合、従来の呼称によると短冊形 26 点、分銅・撥形 13 点、合計 39 点となる（第 50 図）。残存状況からみると完形品約 9%、折損品約 71%の割合となる。また、部位別点数でみると刃部を欠損するもの 44 点、基部 26 点、中間部 9 点、基部を欠損するもの 1 点、刃部 8 点、製作途上の未成品と思われるもの 8 点となる（表 13）。ここで刃部を欠損する事例が多いことが注意されるが、同じ野川流域の小金井市貫井南遺跡の小田静夫氏による打製石斧の分析でも刃部欠損の事例が最も多い点が既に指摘されている（小田 1976）。

石材別では短冊形では砂岩が半数を占め、ホルンフェルス、頁岩、緑泥片岩製、分銅・撥形ではホルンフェルスが半数以上を占め、砂岩がこれに次ぐ（第 51 図）。打製石斧の石材については砂岩とホルンフェルスが主に選択されていたことが明らかである。長さについては短冊形が 10～11 cm をピークとするが、分銅・撥形では 8～10 cm がピークとなる（第 50 図）。

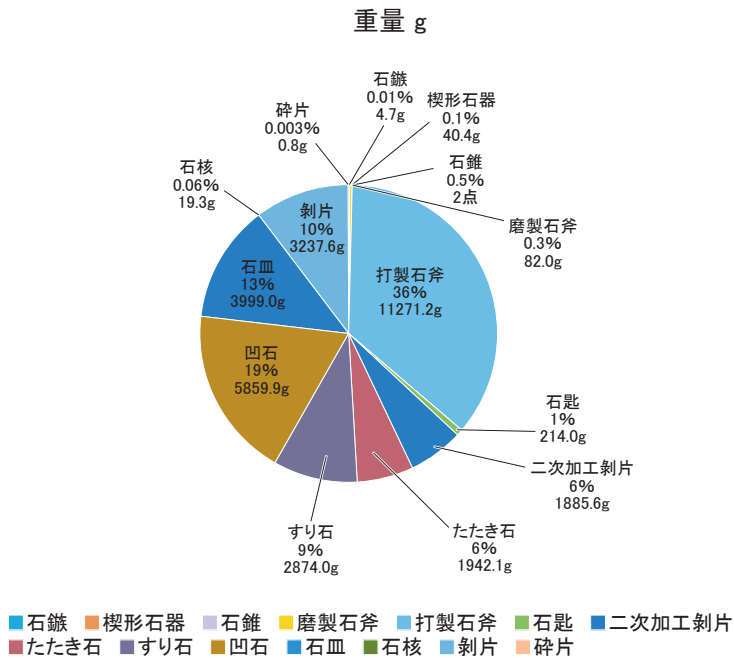
1 個体のみであったが堅穴建物 SI827J 覆土出土の 2 片が接合して完形になった（第 45 図 152）。今後の調査では最大長（15 cm）を測る短冊形で、器体の中間よりやや刃部寄りで折損する。観察によると折損の衝撃は背面（礫面残る側）方向からの力によるものである。調布市原山遺跡では 4,513 点の打



石器器種別点数

器種	点数	割合
石鏃	4	1%
楔形石器	34	8%
石鏃	2	0.5%
磨製石斧	1	0.2%
打製石斧	135	33%
石匙	3	1%
二次加工剥片	10	2%
たたき石	6	1%
すり石	5	1%
凹石	3	1%
石皿	2	0.5%
石核	2	0.5%
剥片	194	47%
碎片	13	3%

全点数414点に対する割合



石器器種別重量

器種	重量g	割合
石鏃	4.7	0.01%
楔形石器	40.4	0.1%
石鏃	3.9	0.01%
磨製石斧	82.0	0.3%
打製石斧	11271.2	36%
石匙	214.0	1%
二次加工剥片	1885.6	6%
たたき石	1942.1	6%
すり石	2874.0	9%
凹石	5859.9	19%
石皿	3999.0	13%
石核	19.3	0.06%
剥片	3237.6	10%
碎片	0.8	0.003%

総重量31434.5gの内訳

第48図 多喜窪遺跡(本地点)出土の縄文時代石器組成

製石斧が出土しているが、このうち欠損品が3,452点であった。打製石斧の機能、使用方法を探る目的で接合作業に取り組んだ結果、実に接合例が100例に及び、完形ないし完形に近い状態にまで復元できたものが56点となっている(宮里1993)。そこで器厚と折損方向に着目して観察分類を行っているが、背面あるいは腹面からの折損が多数であったものの、意外にも側縁からの折損が一定量認められるという。廃絶堅穴は土器のみならず使用により折損した打製石斧の廃棄場所でもあったのであろう。

(4) 黒曜石の産地について

黒曜石の蛍光X線分析を用いた産地推定は、黒曜石の剥片を中心に159点を対象としている。本調査で出土した黒曜石製石器の産地の内訳は、星ヶ塔8点、信州系4点、神津島147点という結果が提示された。至近の小金井市中山谷遺跡の中期前半～後半の堅穴建物(13棟)出土の黒曜石産地分析で

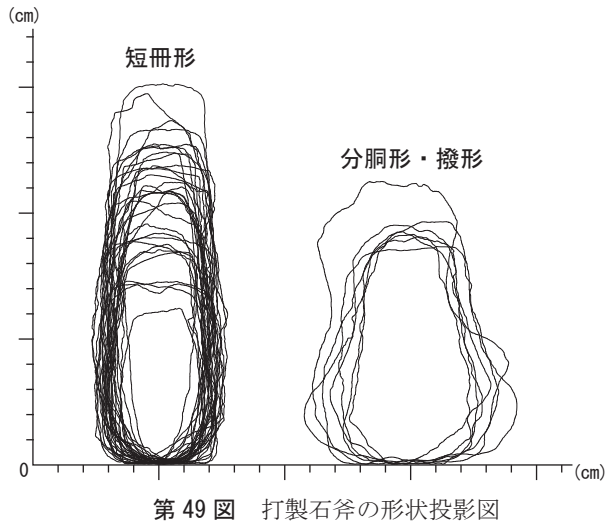
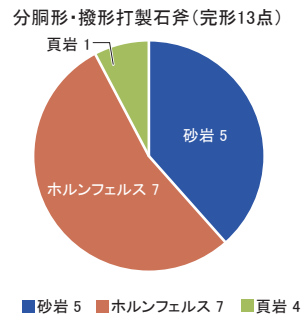
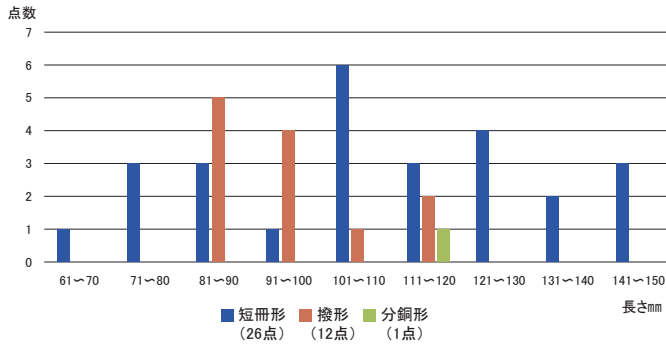
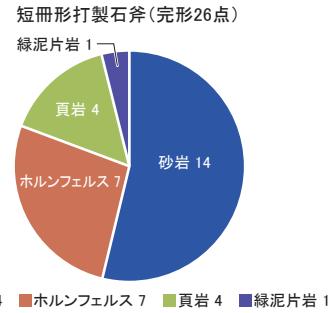
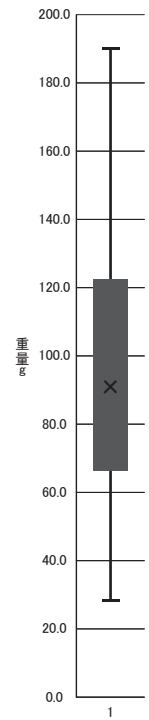
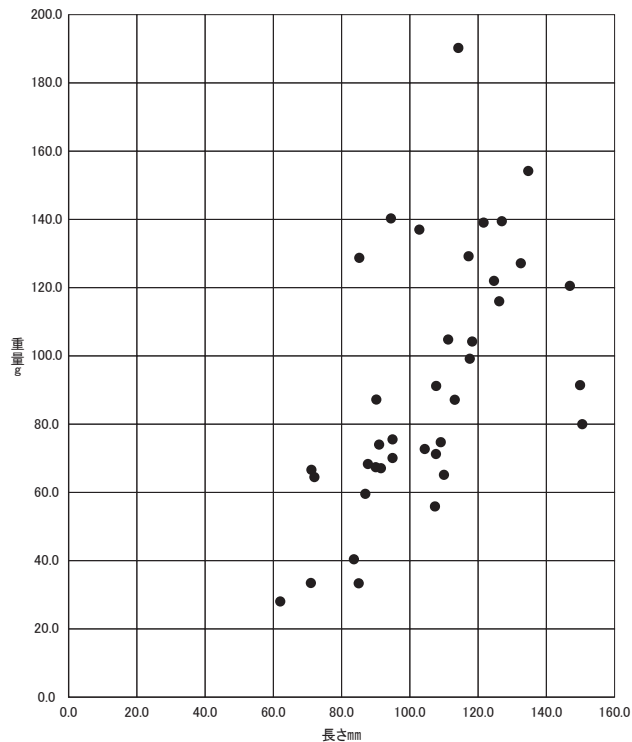
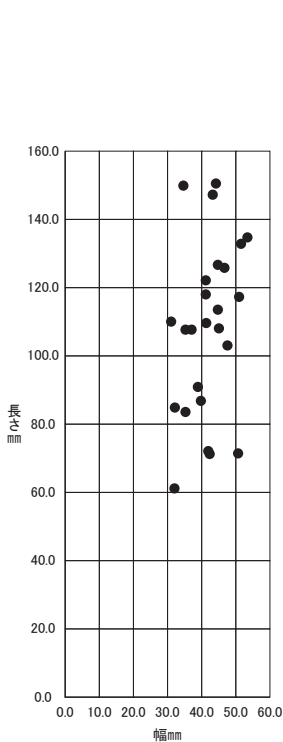


表 13 打製石斧の部位別点数

上部破片		中間部	下部破片		未製品	完形・ほぼ完形	計
刃部欠損	基部		基部欠損	刃部			
44点	26点	9点	1点	8点	8点	39点	135点



第 51 図 短冊形・撥形打製石斧の石材別点数



は、麦草峠1点、星ヶ塔4点、神津島37点（全堅穴出土の合計）という結果が得られ、星ヶ塔と神津島産の比率が本遺跡とほぼ同率になっている（小金井市2019）。また中山谷遺跡では全ての堅穴から1点以上神津島産の黒曜石が出土していることから、中期前半～後半を通じて神津島産が安定して供給されていたことがわかる。本遺跡では少量の信州系（星ヶ塔含む）、大半が神津島系という結果はこれまで分析されてきた武蔵野台地の中期前半の様相に整合している。中期前半では星ヶ塔など信州産黒曜石が主体となる遺跡は関東山地以西に限られ、府中市本宿町遺跡より東にある武蔵野台地の遺跡では、信州産黒曜石は10%程度以下となり神津島産が大半を占めることが明らかになっている（御堂島・藁科2012）。また本遺跡の神津島産黒曜石は製品に乏しく剥片が多いことから、当地で石器製作が行われていたことを示唆するが、1点出土した星ヶ塔産の黒曜石製の石鏃（第44図-146・写真40-115）は、他所で製作された製品が搬入された可能性がある。

第2節 多喜窪遺跡の堅穴建物と土坑の分布

（1）縄文時代の堅穴建物の時期と集落の変遷について（第55図・表14参照）

堅穴建物の分布と構築時期

多喜窪遺跡は、昭和23～26年にかけて吉田格氏によって最初に調査が行われ、第一号、第二号、第三号堅穴住居跡（堅穴建物）の3棟が調査された。このうち第一号住居跡出土の土器（9b～9c期）が一括して国指定重要文化財として東京国立博物館で常設展示されているものである。これらの住居跡は現在では正確な地点を特定できないが、集落の南東253次調査区付近と考えられる。

その後、多喜窪遺跡ではこれまでに79箇所が発掘調査が行われ、縄文時代の住居（堅穴建物）跡計31棟が確認されている。縄文時代の堅穴建物の時期は早期後半2棟（詳細不明）、それ以外は中期前半勝坂期～後半加曾利E期の所産である。早期の2棟は中期の堅穴建物集中地区より東に約50m外れた地点で確認されている。堅穴建物のうちで細別時期の明らかなものは中期15棟、それ以外は詳細時期不明のものである。中期の堅穴建物の時期は、出土土器からおよそ勝坂2式（7b期）～加曾利E2式（11c期）までが確認できたが、現在までのところ勝坂1式以前と加曾利E3式以降の堅穴建物は確認されていない（表14）。

中期の堅穴建物を細別時期別でみると、7b～8a期1棟、9a期3棟、9b期2棟、9c期4棟、10a期3棟、11a期2棟、11c期3棟という内訳になるが、現時点では加曾利E3（12a）期以降の居住痕跡がみられないことは確かである。未調査区域が多いとしても、7b期～11c期まで断続的であり、各時期2～4棟で推移している。今後調査事例が増加したとしても集落の時期的な傾向に変更を迫られることはないであろう。集落の南側では9c～10a期の堅穴が中央の土坑群に向かって内進する傾向は指摘できるが、未だ時期的な分布の傾向を云々できる状況ではない。

上記のように当遺跡で調査された中期の堅穴建物は、前半～後半のなかでも限定された短い時期であり利用頻度を反映しているのか、府中街道西方の264次調査区の北側を除き堅穴建物が重複している状態で検出されたものは少ない。本遺跡の中期の集落の最大範囲は、堅穴建物の分布より東西約100m、南北約140mに及ぶもので、約100m前後という縄文中期の「環状集落」としての平均的な広がり呈している。

264次調査区のSI366Jは、中期後半加曾利E2式期（11c期）の堅穴建物とみられ、柱穴により複数回建て替えが行われた可能性あるもので、覆土下層から上層にかけて半完形、復元可能な土器約50点と本遺跡では最も多量な遺物が出土している。

表 14 多喜窪遺跡検出縄文時代竪穴建物一覧表

No.	次数	調査年	遺構No.	住居規模 (南北×東西) (m)	形態	炉の形態	柱穴の本数	時期(新地平)	備考	文献
1			第一号 竪穴 住居址	5.25×5.25	円形	石囲埋甕 炉	主柱穴5	勝坂3(9c)	ほぼ完形の土器8個体を含む 住居址一括遺物が国の重要 文化財に指定されている	吉田1952
2	なし	S25	第二号 竪穴 住居址	推定直径約4.3	推定円形	埋甕炉	主柱穴4	加曾利E2(11a)	竪穴の壁は不明。一部は奈 良時代の竪穴と重複。床面 を追って柱穴を探した。第 一号住居址の北東約20m離 れて発見	
3		S26	第三号 竪穴 住居址	不明(※1)		地床炉	不明	勝坂	奈良時代の竪穴と重複のた め炉址と柱穴のみ発掘	
4		S53	SI210J	不明(※2)				加曾利E2(11a)	床面と埋甕が設置された小 穴のみ確認	上村他 1990
5		S54	SI245J	不明(※2)				不明	小穴の位置で住居と確定	
6	79	S55	SI246J	不明(※2)				不明	小穴の位置で住居と確定	
7		S55	SI269J	(2.4)×(2.4)				勝坂3(9a)	住居南側の1/4のみ確認	
8		S56	SI272J	不明(※2)				勝坂3(9b?)	柱穴と考えられる小穴と埋 甕のみ確認	
9	116	S55	SI237J	不明(※2)				中期		未報告
10	181	S58	SI312J	不明(※2)				加曾利E2(11c)		上敷領他 2013
11		S58	SI317J	不明(※2)				中期		
12	188	S58	SI318J	不明(※2)				中期?		
13	251	S60	SI362J	3.84×(2.6)	推定円形	埋甕炉		勝坂3(9c)		福田他 2003
14	252	S61	SI854J		推定楕円形	埋甕炉		加曾利E1(10a)		〃(※3)
15	253	S61	SI358J	不明(※2)				中期前半?	覆土中より勝坂式土器片出 土	未報告
16			SI365J	(2.50)×4.16	推定不整円形		主柱穴3	勝坂3(9a)	1回以上の建て替え	福田他 2003
17			SI366J	5.60×4.84	円形	石囲炉	主柱穴 4~5	勝坂3(9a~9c) 加曾利E2(11c)	3回以上の建て替え 土偶3点出土	
18			SI367J	(4.38)×(1.06)	推定不整円形			中期		
19	264	S61	SI370J	(1.00)×(3.84)	推定不整円形			中期?		
20			SI371J	(4.88)×(2.60)	推定楕円形		主柱穴2	中期	1回の建て替え	
21			SI372J	(3.50)×(2.70)	平面形把握で きず			勝坂2		
22			SI373J	(1.98)×(1.22)	平面形把握で きず			中期?		
23	312	S63	SI398J	(3.2)×4.1		石囲埋甕 炉		加曾利E1(10a)	打製石斧が多量に出土	未報告
24	321	H1	SI402J	3.2×3.2				早期後半?	床面やや凹凸、ピット検出 されず	小野本 2009
25	330	H1	SI408J	(4.4)×(3.8)	推定楕円形	石囲炉		加曾利E2(11c)	埋甕	未報告
26	623	H19	SI795J	東西方向の長辺 で4強				早期		立川 2009
27	623	H19	SI795J	東西方向の長辺 で4強				早期		立川 2009
28	758	R2	SI827J	(6.8)×5.4	楕円形	地床炉	主柱穴7	勝坂3(9c)		本報告
29	769	R3	SI846J	(2.5)×(2.5)	推定円形	地床炉		勝坂3(9a)		未報告
30	769	R3	SI857J	(2.5)×(2.6)	推定円形	地床炉		勝坂3(10a)		未報告
31	782	R4	SI853J	(3.0)×(1.8)	推定円形			勝坂2(7b~8a)		未報告

住居規模を示す()は、調査範囲内の測定値。

※1 他の竪穴住居址と重複のため

※2 検出部分が少ないため

※3 報告書中では屋外埋甕(SU5)とされていたが、写真を詳細に見た結果、周辺に焼土や硬化面・柱穴らしきピット群が観察された。そのためSU5は埋甕炉と想定され、新たに住居(SI854J)と認定した。また、252次調査ではSU5の東側にSU6が検出されている。住居の可能性もあるが認定出来なかった。

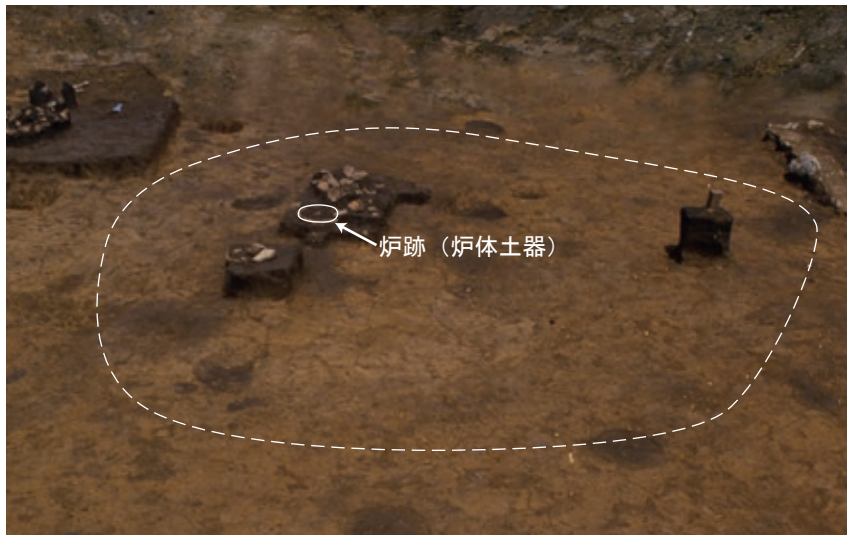


写真41 SI854J推定プラン（白い点線は建物推定範囲）

次に以前の調査では明確でなかったが、その後堅穴建物に認定してもよいと判断した遺構を以下に紹介する。251次調査区では、加曾利E 1式の埋甕（SU5）としていた遺構を、周辺に広がる柱穴状のピットを含めて今回、堅穴建物（SI854J）に認定した（写真41）。埋甕としていた底部を除去した深鉢形土器（10a期）は炉体の可能性があるものであるが、壁、床面等は明確にされていなかった。

769次調査区のSI846J－勝坂3式（9a期）の南東のピット群は調査時には単独のピット群として認識されていたが、一定の深さがあり、その多くに柱痕が認められたことから、今後の報告ではこれらのピットを一連のものとして堅穴建物の柱穴と認定した（SI857J）。

本遺跡の南西約100mには中期後半～末葉を中心とする府中市武蔵台東遺跡の集落が存在する（第11図）。多喜窪遺跡で確認されていない加曾利E 3～4式（12～13期）の堅穴建物が多数確認されているため、多喜窪集落の撤退後に次の拠点となった集落ということが言えそうである（府中市2019）。ただし野川最上流域には他にも恋ヶ窪、恋ヶ窪東、本町遺跡など加曾利E期後半～末葉の多くの同時期の集落遺跡が併存するので単純に多喜窪集落からの移転先とは断言できない。なお『国分寺市史』の刊行時には武蔵台東遺跡では調査が行われておらず、その付近も含めて「多喜窪A遺跡」として一連で括られていた経緯がある（国分寺市史編さん委員会1986）。

（2）土坑（墓墳）の分布と出土遺物について

（小型土器、大型粗製石匙、石鏃などの副葬品、伏甕（甕被葬）、石製垂飾など）（第56・57図参照）

①〔土坑の分布と形状〕

多喜窪遺跡ではこれまでに縄文時代の土坑総数141基が確認されている。遺物の出土がなく時期の不明確なものもあるが、概ね縄文中期の所産であろう。土坑は、堅穴建物の分布が希薄なエリア＝140次、251次、252次、312次調査区（南北約60m×東西約43m、面積約1641㎡）の近接した4地区付近に集中している。この3地区に近接した未調査地区を残すものの、従来からムラの「中央広場」などと呼ばれてきたエリアはおおよそ50m四方の範囲に堅穴住居（堅穴建物）に取り囲まれるように形成されていることが長年にわたる調査により明らかになってきた。

土坑を形態（平面形）から眺めると、円形81基、楕円形30基、方形～長方形11基、不明19基となり円形が最も多い。円形土坑の規模（平均長）は0.6～2.3mまでがあるが、平均で約1.03mを測るのでその規模は1m前後である。このうち構築時期のわかる土坑は、出土土器から勝坂2式期から3式の古期（7a～9a期）が中心となる。

② [土坑の構築時期]

ここで注意されるのは、現時点で土坑の構築開始時期に相当する竪穴建物が検出されていない点である。もちろん未調査箇所にも土坑と同時期の竪穴建物が存在している可能性も否定できない。近年調査が行われた集落北東に位置する782次調査で検出されたSI853J覆土で勝坂2式(7b～8a期)の土器片が出土しているので(未報告)現時点では最も古い竪穴となるが、土坑からは7a期に遡る遺物が出土しているにも関わらず当該期の竪穴建物は検出されていない。

土坑の多くは、現時点で竪穴建物など確実に居住痕跡の確認できる全時期(7b～11c期)にわたって構築されたのではなく、居住開始初期の一時期にのみ集中的に構築されたことに留意すべきである。土坑は、特に勝坂2式(7～8期)を中心とした時期に集中する傾向がうかがえる。むしろ集落の中で土坑が構築されていなかった時期の方が時間的には長いかもしれない。もちろん時期の判定可能な遺物が出土していないだけで、竪穴建物の確認できる時期(9a～11c期)に構築された遺物が出土していない土坑が含まれる可能性も完全には否定できない。

遺物の出土した土坑は総数141基のうち33基で、土坑全体の約23%という数値をみても遺物の出土した土坑は決して多くはない(表15)。また、遺物の出土した土坑の平面形態は、大別すると円形24基、楕円形8基、方形～長方形1基となり、土坑全体と同様、概ね円形を基調としている傾向がうかがえる。断面形状では皿状のものと鍋底状のものとその中間的な形状のものがみられる。

遺物の出土した土坑の内訳は、土器の出土した土坑17基、石器の出土した土坑16基、土製品の出土した土坑1基であった。このうち土器と石器が伴出した土坑1基(SK931J)、土製品と石器が伴出した土坑1基(SK939J)である。本遺跡の土坑は遺物の出土状況等からみてその多くは土坑墓とみてよいと判断される。遺物の出土した土坑どうしはほとんど重複しない点も注意され、構築場所の選定の際に先行する遺構を意識していたというより、短期間のうちに連続的に構築された可能性もある。

③ [土坑と出土遺物]

中期前半勝坂期の土坑墓と埋納(副葬)された出土遺物の関係については、既に神奈川、東京を中心とした領家玲美氏による基礎資料の提示とその検討(領家2014・2015)、坪田弘子氏による検討(坪田2019b)などがある。

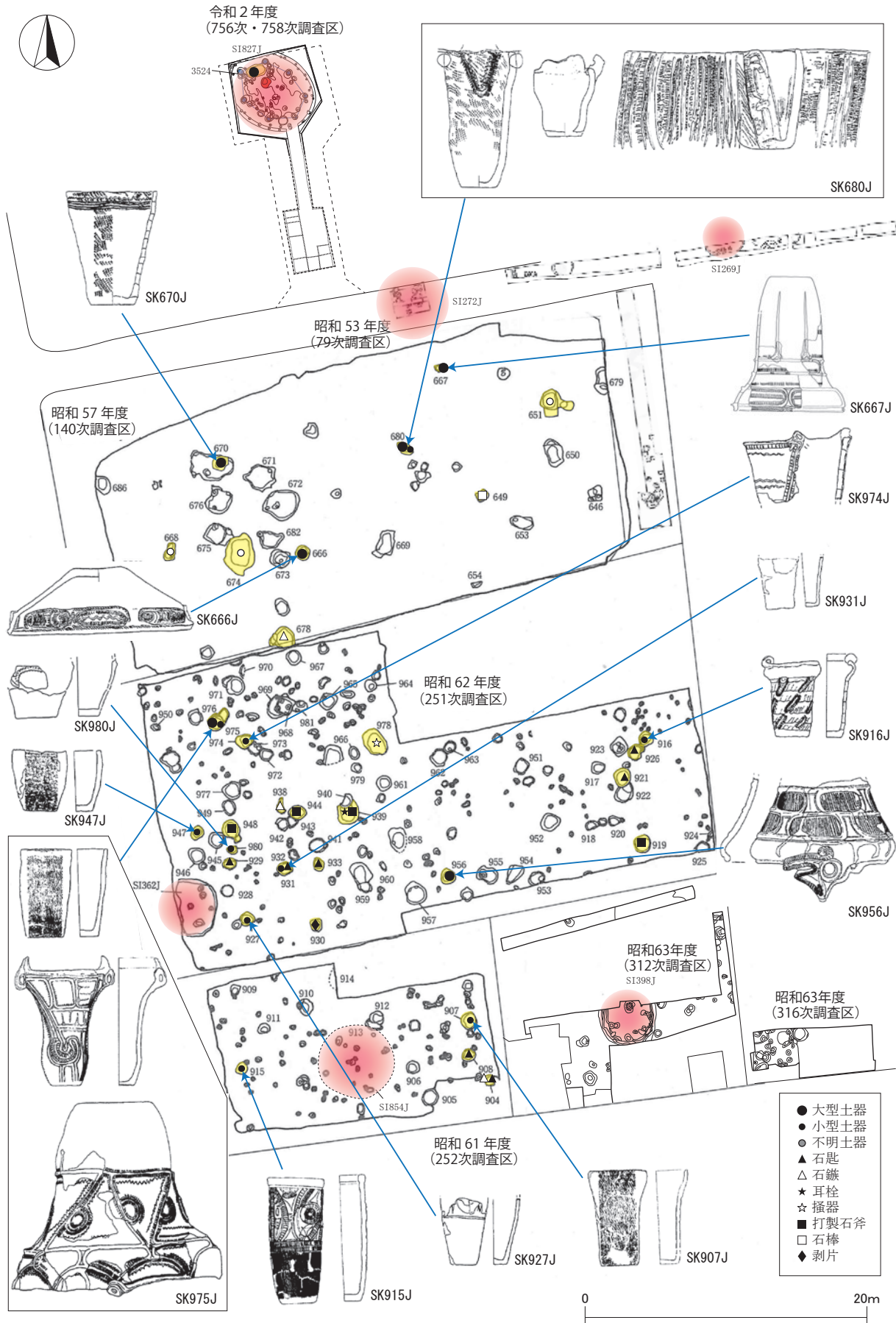
表15 次数別土坑検出数と遺物出土の土坑数

本遺跡での出土遺物では、小型の深鉢形土器が出土した土坑12基、逆位のいわゆる倒置土器が出土した土坑が4基ある。小型深鉢形土器はおそらく副葬品として埋納された可能性が高いものである。小型深鉢形土器が単独で出土した土坑8基(SK670J・SK907J・SK915J・SK916J・SK927J・SK931J・SK947J・SK980J)、土器が複数出土した土坑は2基(SK680J・SK975J)みられた。また埋納された土器は土坑内でも中央ではなく偏った位置に出土する傾向がみられる(SK670J・SK970J・SK980Jなど)。

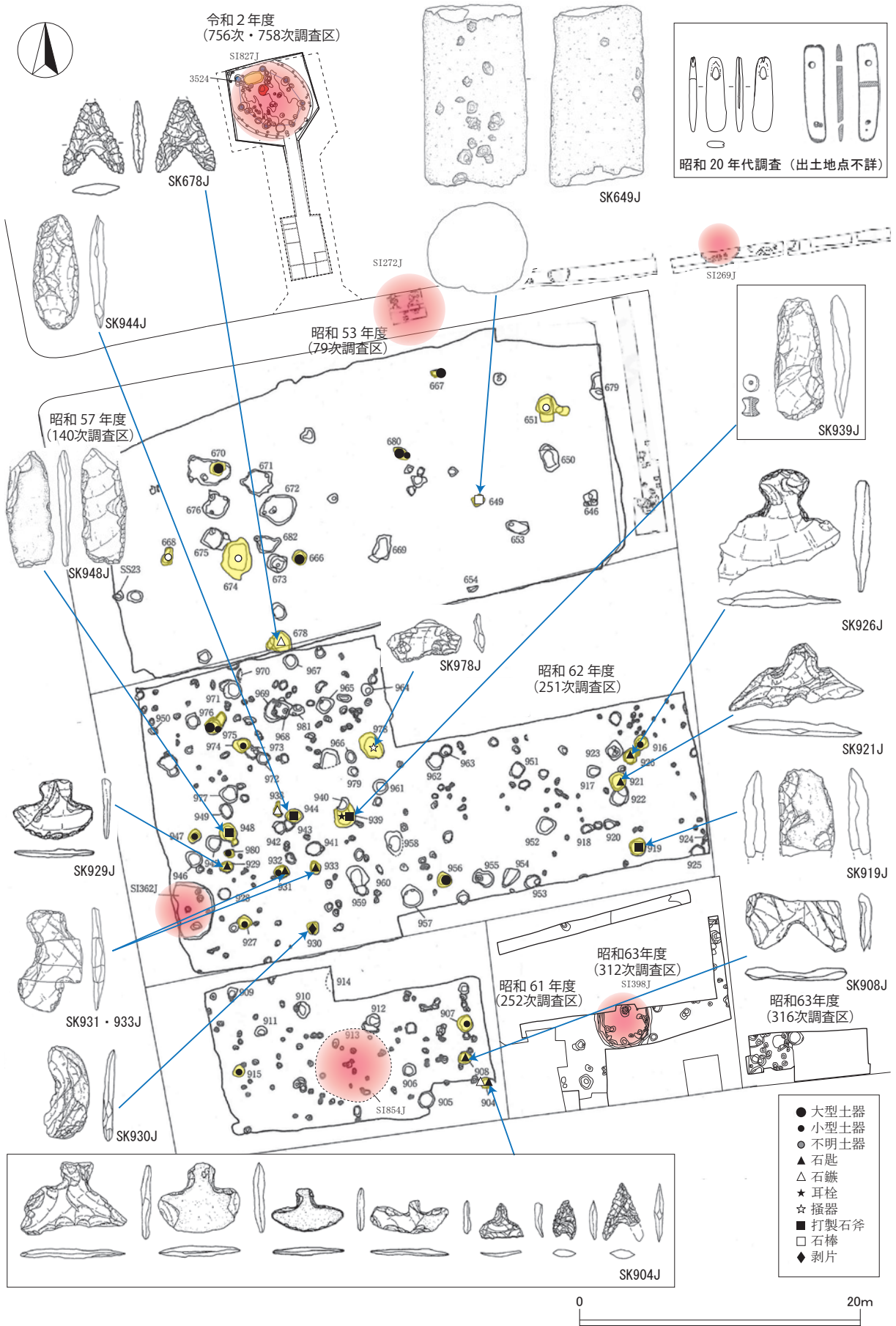
これらは細別時期でみると7a～9a期にわたっていることがわかる(表16)。少なくとも構築時期のわかる土坑だけでみて

(年度) 次数	総土坑数 (集石土坑)	遺物出土 土坑数	遺物出土土坑の遺物の内訳			
			土器	石器	土製品	玉
(S24～S26)	1	1	0	0	0	1
79次	6(1)	0	0	0	0	0
101次	6	0	0	0	0	0
140次	25(1)	9	7	2	0	0
181次	1	0	0	0	0	0
251次	62(1)	19	*8	*12	*1	0
252次	12(2)	4	2	2	0	0
264次	10	0	0	0	0	0
275次	3	0	0	0	0	0
282次	2	0	0	0	0	0
312次	5	0	0	0	0	0
315次	1	0	0	0	0	0
316次	1	0	0	0	0	0
575次	1	0	0	0	0	0
576次	1	0	0	0	0	0
582次	2	0	0	0	0	0
758次	1	0	0	0	0	0
769次	1	0	0	0	0	0
合計	141(5)	33	17	16	1	1

*251次SK931J土坑は深鉢と石匙片が出土、SK939J土坑は打製石斧と耳栓が出土しているため遺物の内訳に含まれる。



第56図 本地点周辺における土坑の土器出土状況



第57図 本地点周辺における土坑の石器・石製品・土製品の出土状況

表 16 多喜窪遺跡検出縄文時代土坑一覧表

次数	西暦 (年度)	遺構No.	規模 (m)	深さ (m)	形状	断面	主な 出土遺物	主な出土遺物 の帰属時期	備考		
なし	1951 (S26)		直径1弱	備考参照	円形		有孔垂玉(蛇紋 岩製) 扁平有孔硬玉		正確な場所は不明だが、市史によると第一号竪穴住居址の近く 深さは、吉田(1952)によれば表土から1.2'1.3'ロームから約0.3 国分寺市史(1986)によれば0.8		
79	1978~ 1982 (S53~ S57)	SK492J	直径1	0.4	円形						
		SK559J									
		SK592J									
		SK597J									
		SK599J									
		SS14	0.55×0.50	0.6	ほぼ円形				集石土坑 焼割礫が土坑上面に集中している		
101	1979 (S54)	SK496J	約2×約1.1	0.2	不整楕円形						
		SK495J	約1.2×約1.2	0.08~ 0.35(0 .2が多い)	不整円形						
		SK497J	約0.8×約0.8		不整円形						
		SK498J	約0.7×約1		不整円形						
		SK499J	約1×約1.1		不整円形						
		SK501J	約0.8×約0.7		不整円形						
140	1982 (S57)	SK646J	0.8×1.1		0.3	不整方形	逆台形(底面に段 差がある)				
		SK649J	0.9×0.6	0.15	隅丸方形	皿状	石棒		くぼみ石に転用されている		
		SK650J	1.9×1.1	0.3	不整楕円形	いびつな箱型					
		SK651J	1.1×1.3	0.15	不整円形	皿状	不明土器				
		SK652J	2.2×1.2	0.6	不整楕円形	いびつな椀型					
		SK653J	1.7×0.8	0.2	不整楕円形	逆台形					
		SK654J	(0.8)×(0.4)	0.4	推定楕円形	箱型					
		SK666J	0.95×0.95	0.49	円形	箱型	浅鉢	勝坂2(8a)	土器は逆位で出土。覆土がブロック 状に堆積、人為的に埋め戻したと 考えられる		
		SK667J	0.6×0.5	0.4	円形	逆台形	深鉢	勝坂2(7b)			
		SK668J	1.3×0.7	0.15	不整楕円形	いびつな皿状	不明土器				
		SK669J	1.8×0.6	0.2	不整長方形	浅い箱型					
		SK670J	1.2×1	0.26	不整円形	浅い皿状	深鉢	勝坂2(7b)	土器は覆土上面で押しつぶされた状 態で出土		
		SK671J	1.8×1.7	0.15	不整円形	浅い皿状			底面に深さ0.35のビット状のものあり		
		SK672J	2.5×2.1	0.15	不整円形	浅い皿状			底面に深さ0.85のビット状のものあり		
		SK673J	1.4×1.2	0.4	不整円形	椀状			底面に段差あり		
		SK674J	2.6×1.9	0.15	不整楕円形	浅い逆台形	不明土器				
		SK675J	1.4×1.4	0.25	不整方形	逆台形					
		SK676J	1.6×(1.5)	0.15	推定不整方形	浅い皿状			底面に深さ0.35のビット状のものあり		
		SK677J	1.3×1.4	0.25	不整円形	椀状					
		SK678J	1.5×1.5	0.35	不整円形	箱型	石鏃				
		SK679J	1.9×(0.9)	0.1	推定不整長方形	浅い皿状			底面に深さ0.25の緩い落ち込みあり		
		SK680J	1×0.8	0.26	不整円形	浅いすり鉢状	深鉢3点	勝坂2(8a)	土器は覆土中ほどから2点、上部から 1点		
		SK682J	1.4×1.2	0.25	不整円形	浅い椀状					
		SK686J	1.0×1.3	0.25	不整円形	いびつな逆台形					
				SS23	直径0.7~0.8	0.6	ほぼ円形	不整すり鉢状			集石土坑(集石は土坑上面に集中、遺 物は集石内から出土) 出土遺物は土 器片少量、石鏃、石皿
		181	1983 (S58)	SK765J	不明						検出部分が少ないため不明
251	1985 (S60)	SK916J	0.88×0.80	0.56	円形	V字型 西側に浅 く広がる	深鉢	勝坂2(7b)	西側部に完形の深鉢型土器が横倒し の状態出土		
		SK917J	0.94×0.80	0.2	円形	すり鉢型	なし				
		SK918J	0.9×(0.53)	0.2	推定楕円形	皿状			勝坂式土器片出土		
		SK919J	1.26×1.08	0.28	円形	底面がいびつな 逆台形	打製石斧等				
		SK920J	0.83×(0.70)	0.32	推定楕円形	逆台形			礫1個出土		
		SK921J	1.32×1.23	0.18	不整円形	皿状	大型粗製石匙				
		SK922J	(1.50)×1.20	0.22	推定円形	皿状			勝坂、加曾利E式土器片少量出土		
		SK923J	1.34×1.20	0.44	不整円形	すり鉢状			加曾利E式土器片1個出土		
		SK924J	(0.54)×(0.3)	0.31	推定円形	逆台形			勝坂式土器片1個出土		

次数	西暦 (年度)	遺構No.	規模 (m)	深さ (m)	形状	断面	主な 出土遺物	主な出土遺物 の帰属時期	備考
251	1985 (S60)	SK925J	0.79×(1.07)	0.68	推定楕円形	U字型			勝坂式土器片少量出土
		SK926J	1.17×0.92	0.08	不整楕円形	皿状	大型粗製石匙		
		SK927J	0.96×0.82	0.33	不整円形	いびつな逆台形	深鉢	勝坂2~3 (8b~9a)	
		SK928J	0.94×0.94	0.35	円形	箱型			勝坂式土器片, 剥片, 礫少量出土
		SK929J	0.93×0.80	0.33	円形	逆台形	粗製石匙等		
		SK930J	0.91×0.69	0.17	不整円形	皿状	剥片		
		SK931J	1.04×0.95	0.28	円形	皿状	深鉢, SK933J出土の 大型粗製石匙 片と接合する 破片1個等	不明	
		SK932J	0.80×0.61	0.36	楕円形	いびつな逆台形			加曾利E式土器片少量出土
		SK933J	0.88×0.70	0.33	楕円形	U字型	打製石斧, SK931J出土の 大型粗製石匙 片と接合する 破片3個		
		SK938J	1.12×(0.53)	0.19	推定不整楕円形	皿状	石匙1個		
		SK939J	(1.64)×1.35	0.25	推定楕円形	皿状	耳栓, 打製石斧 等		
		SK940J	1.08×(0.56)	0.33	推定楕円形	箱型			出土遺物なし
		SK941J	1.01×0.94	0.35	不整円形	逆台形			勝坂, 加曾利E式土器片, 礫少量出土
		SK942J	0.85×0.82	0.17	不整円形	皿状			出土遺物なし
		SK943J	0.80×(0.65)	0.25	推定円形	逆台形			出土遺物なし
		SK944J	1.10×0.96	0.5	不整円形	逆台形	打製石斧等		堆積土層から人為的な埋め戻しが想定される
		SK945J	1.19×1.13	0.3	円形	皿状			礫1個出土
		SK946J	1.20×1.11	0.43	円形	逆台形(底面に段差がある)			勝坂式土器片, 礫少量
		SK947J	1.05×0.75	0.33	不整円形	すり鉢状	深鉢	勝坂2(7b)	西側部にほぼ完形の小型粗製深鉢型土器が横倒しの状態で出土
		SK948J	1.30×1.17	0.31	不整円形	皿状	打製石斧等		
		SK949J	1.02×0.90	0.37	不整円形	箱型			加曾利E式土器片, 礫少量出土
		SK950J	0.67×0.39	0.32	不整円形	皿状			礫の91%は焼成を受け集石土坑として利用された可能性高い。勝坂, 加曾利E式土器片少量, 礫34個出土。
		SK951J	1.12×1.01	0.44	不整円形	箱型			堆積土層から人為的な埋め戻しが想定される。底面近くで礫少量, 勝坂, 加曾利E式土器片多く出土。
		SK952J	1.28×1.22	0.21	円形	皿状			五領ヶ台式土器片1個出土
		SK953J	1.11×1.02	0.18	円形	皿状			加曾利E式土器片1個出土
		SK954J	(1.45)×0.98	0.23	推定不整楕円形	皿状	なし		
		SK955J	1.45×1.16	0.29	不整楕円形	皿状			勝坂式土器片1個出土
		SK956J	1.04×0.96	0.35	円形	台形	深鉢	勝坂2(8b)	大形深鉢型土器1個体伏せた状態で出土(逆位で出土)。
		SK957J	1.60×1.40	0.56	不整楕円形	箱型			勝坂式土器片, 剥片少量出土
		SK958J	1.63×(0.52)	0.4	推定不整楕円形	すり鉢状			剥片1個出土
		SK959J	0.88×(0.77)	0.32	推定不整円形	逆台形			貉沢, 勝坂, 加曾利E式土器片, 剥片, 礫少量出土。
		SK960J	(1.51)×1.26	0.32	推定不整楕円形	逆台形			勝坂, 加曾利E式土器片少量出土
		SK961J	1.08×0.98	0.42	円形	逆台形			出土遺物なし
		SK962J	1.20×1.12	0.38	不整円形	箱型			出土遺物なし
		SK963J	0.85×0.80	0.19	円形	逆台形			出土遺物なし
		SK964J	1.38×0.94	0.35	不整楕円形	底面に段差のある皿状			
		SK965J	1.20×1.15	0.4	不整円形	逆台形			出土遺物なし
		SK966J	1.52×(1.31)	0.41	推定不整楕円形	逆台形			出土遺物なし
		SK967J	1.08×1.00	0.32	不整円形	逆台形			勝坂, 加曾利E式土器片少量出土
		SK968J	1.22×1.12	0.41	不整方形	東側が緩やかに広がるV字型			打製石斧等出土
		SK969J	1.57×(0.63)	0.2	推定不整円形	皿状			出土遺物なし
SK970J	(0.91×0.40)	0.32	把握できない	箱型			出土遺物なし		
SK971J	1.22×1.18	0.46	不整円形	箱型			出土遺物なし		
SK972J	0.93×0.84	0.16	円形	箱型			出土遺物なし		
SK973J	(0.88)×0.81	0.28	推定不整楕円形	W字型			出土遺物なし		
SK974J	1.17×0.96	0.41	不整円形	逆台形	深鉢	勝坂2(7b)			

次数	西暦 (年度)	遺構No.	規模 (m)	深さ (m)	形状	断面	主な 出土遺物	主な出土遺物 の所属時期	備考	
251	1985 (S60)	SK975J	1.80×1.16	0.42	円形	逆台形	深鉢3個	勝坂2 (7a~7b)	大形の深鉢型土器1個体伏せた状態、 小形の深鉢型土器2個体が横倒しの状 態で出土、どちらも完形からほぼ完 形の深鉢	
		SK976J	1.00×0.90	0.32	円形	J字型(確認面が 西側で下がる)			出土遺物なし	
		SK977J	1.25×1.17	0.56	不整円形	箱型			出土遺物なし	
		SK978J	2.00×1.40	0.45	不整楕円形	逆台形	搔器等			
		SK979J	0.83×0.74	0.38	円形	逆台形			磨石、剥片、礫少量出土	
		SK980J	0.75×0.52	0.26	不整楕円形	J字型(確認面が 西側で下がる)	深鉢	不明		
		SK981J	0.88×0.69	0.36	不整楕円形	U字形			加曾利E式土器片少量出土	
252	1986 (S61)	SK904J	0.86×0.72	0.62	円形	U字形	石鏃, 大形粗製 石匙		中期土器片出土	
		SK905J	1.18×1.05	0.34	円形	箱型			出土遺物なし	
		SK906J	0.90×0.80	0.5	円形	U字形			剥片1個出土	
		SK907J	1.26×1.07	0.36	不整円形	箱型	深鉢	勝坂2(7b)	西端の底面に小形深鉢型土器が1個体 横倒しの状態で出土	
		SK908J	0.94×0.90	0.24	円形	逆台形	大形粗製石匙			
		SK909J	0.78×0.68	0.4	円形	皿状			礫少量出土	
		SK910J	1.08×1.00	0.16	円形	皿状			礫少量出土	
		SK911J	0.86×0.78	0.22	円形	いびつな皿状			出土遺物なし	
		SK912J	1.00×0.92	0.3	不整円形	逆台形			勝坂, 加曾利E式土器片, 礫少量出土	
		SK913J	1.15×(0.64)	0.14	推定楕円形	皿状			礫の97%は焼成を受けている。集石 土坑。勝坂, 加曾利E式土器片, 磨石, 剥片, 礫143個出土。	
		SK914J	(1.34)×(0.66)	0.4	推定円形	いびつな皿状			礫の97%は焼成を受けている。集石 土坑。時期不明の土器片, 磨石, 礫器, 礫108個出土。	
SK915J	0.90×0.79	0.24	円形	いびつな皿状	深鉢	勝坂2~3 (8b~9a)	中央部にほぼ完形の円筒形の深鉢形 土器が横倒しの状態で出土			
264	1986 (S61)	SK982J	不明						全容が把握できないため不明	
		SK983J	不明						"	
		SK984J	不明							"
		SK985J	不明							"
		SK986J	不明							"
		SK987J	不明							"
		SK988J	1.20×0.80	0.4	隅丸方形	すり鉢状			出土遺物なし	
		SK989J	1.04×(0.96)	0.4~0.52	推定隅丸方形	すり鉢状			出土遺物なし	
		SK990J	0.85×0.82	0.4~0.55	隅丸方形	逆台形			五領ヶ台, 貉沢, 加曾利E式土器片, 打 製石斧, 磨石, 礫等が少量出土	
		SK991J	1.66×0.75	0.55	隅丸長方形	箱型(底面は ほぼ平坦)			早期の落し穴土坑とは形態等異な る。勝坂, 加曾利E式土器片, 礫等少量 出土。	
275	1986 (S61)	SK1009J	不明						記録なし	
		SK1010J	不明						"	
		SK1011J	不明						"	
282	1987 (S62)	SK1021J			円形				出土遺物なし	
		SK1025J			長円形				底面に小穴1個確認 出土遺物なし	
312	1988 (S63)	SK1138J	不明						検出部分が少ないため不明	
		SK1139J	約0.9							
		SK1140J	約0.7							
		SK1141J	0.7×0.7			不整円形				
		SK1142J	1×1			ほぼ円形				
315	1988 (S63)	SK1147J							土器片出土	
316	1988 (S63)	SK1151J	1.1×1.1		円形				石器少量出土	
575	2004 (H16)	SK3173J							中期土器片出土	
576	2004 (H16)	SK3197J	不明						表土から中期土器片出土	
582	2004 (H16)	SK3231J	1.2×不明							
		SK3232J	0.8×1.2							
758	2020 (R2)	SK3524J	(1.3)×0.9	0.36	推定楕円形	推定台形			土器片出土	
769	2021 (R3)	SK3505J	直径約0.8	0.28	円形	浅い皿状				

※参考文献は表2を参照。ただし101次・275次・282次・312次・315次・316次・576次・769次は未報告。

も、これを近年の小林謙一氏による暦年推定値（小林 2017）に照らし合わせると、7a～9a 期の約 200 年間に 33 基が確認できるので、1 細別時期あたり約 6～7 基が構築されていたことになろうか。

縄文中期前半の倒立土器は神奈川県秦野市東開戸遺跡 SK-12（8b 期）で頭蓋骨を伴った事例が確認されたことから（安藤他 1995）、人骨こそ遺存しないが土器で頭部を覆うように被せた、いわゆる甕被葬が行われた可能性を示唆するものである（坪田 2021）。本遺跡では SK667J、SK956J、SK975J は深鉢形土器、SK666J では浅鉢形土器が用いられ、SK975J では倒立深鉢形土器と別に小型深鉢形土器 2 点が伴っている。この 3 基は土坑群の中でも特に北西～北寄りに分布する。

石器の出土した土坑は 10 基みられるが、いわゆる大型粗製石匙の出土が目を引く。大型粗製石匙に焦点を当てると、単独で出土した土坑 6 基（SK908J・SK921J・SK926J・SK929J・SK931J・SK933J）、石鏃を伴うもの 1 基（SK904J）、小型土器を伴うもの 1 基（SK931J）などである。石器では他に打製石斧、搔器、石鏃、石棒、剥片が出土した土坑がある。SK904J では石匙 5 点、石鏃 2 点で合計 7 点の石器が出土している。大型粗製石匙を伴う土坑は土坑群の中でも東、南、西群に分布するが北群にはない。細別時期は不明である。また SK939J では打製石斧と土製耳飾り（耳栓）各 1 点が出土している。また中期は石鏃自体多くはないが、本遺跡では 2 例ある土坑内からの出土は副葬品として特別な扱いであったのであろうか。

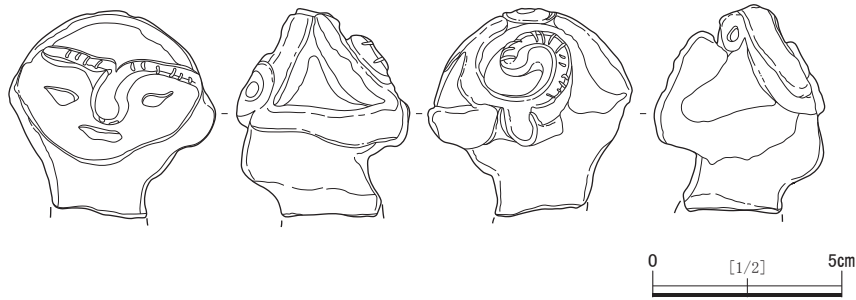
縄文中期の大型粗製石匙を伴う土坑は、これまで南関東～中部高地の遺跡で確認されているが、いずれも中期初頭～中葉の時期に限られ、土器を伴う事例と伴わない事例、石匙が単独出土、2 点以上の複数出土の各事例がみられる。本遺跡の周辺、南関東では八王子市神谷原遺跡（新藤他 1982）、八王子市南部地区 No. 11 遺跡（坪田 2001）、八王子市柵谷遺跡（竹田他 2009）、多摩ニュータウン No. 471 遺跡（小栗他 1993）、小田原市天神山遺跡（戸田他 2017）、厚木市恩名沖原遺跡（迫他 2000）、寄居町北塚屋遺跡等（黒坂他 1985）、中部高地では岡谷市梨久保遺跡（会田他 1986）、茅野市棚畑遺跡（鶴飼他 1990）等が知られている。現在確認できる遺跡数は多くはないが、南関東では八王子周辺など西部の丘陵、山地寄りが中心となるが、本遺跡の位置する武蔵野台地周辺では知られていない。

時期判定の可能な土器を伴う事例では、南部地区 No. 11 遺跡の 24 号土坑が中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式期（4 期）が最も古く、概ね勝坂 1 式期（5 期、貉沢期）～勝坂 2 式期（7～8 期、藤内Ⅰ～Ⅱ期）に盛行するようで、中期後半には行われなくなる。現状では中期前半の 5～8 期が中心の葬法といえそうである。柵谷遺跡では中期前半（貉沢・新道、藤内、井戸尻期）の土坑墓が 17 基検出されているが、貉沢・新道期には石匙を埋納する事例が多く、藤内期以降に打製石斧を埋納する傾向がみられ、時期が下ること意識の変化が認められるという（竹田他 2009）。本遺跡の場合では石匙、打製石斧を出土した土坑の細別時期が明確ではない。

なお南関東、中部の中期の大型粗製石匙はその特異性から、これまで上敷領久氏によって型式学的分類、製作技術、機能等について検討が行われている（上敷領 1987）。本遺跡の 1951 年の調査では、出土地点の詳細が不明であるものの、一号堅穴住居趾付近の土坑から装身具とみられる蛇紋岩製のへら状有孔垂飾りと、硬玉製のへら状有孔垂飾りが各 1 点出土しているという記述がある（吉田 1952）。土器を伴わないため細別時期は不明であるが、吉田格氏も想定しているとおり縄文中期の墓壇に伴う副葬品の一つであろう。なお地点は不明であるが他にも 1 点硬玉製の玉が採集されている。

縄文早期末～中期にかけてみられる特異なへら状有孔垂飾りは坪田弘子氏によって集成されている（坪田 2018）。土坑出土ではないが、他に特記される遺物として 264 次調査区の SI366J より土偶 3 点（右足部、胴下部、胴部）が出土しているが詳細時期不明である。また集落の中心から南東方向に当たる 274 次調査区の遺構外より中期前半の土偶頭部が出土している（巻頭写真 4・第 58 図）。

他に中期の土坑墓ということで注意されるのは、本遺跡の北約 1km に位置する恋ヶ窪遺跡 SK83J では



第 58 図 多喜窪遺跡（武蔵国分寺跡第 274 次調査）出土縄文土偶実測図

中期前半の円形土坑から、他所で焼かれ土坑内に再葬されたと考えられる焼人骨が発見されたが、本遺跡ではそれに類する遺構は発見されていない（『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅶ』国分寺市遺跡調査会 1996）。縄文中期の遺構としては、他に集石土坑 4 基（SS23・SS913・SS914・SS950）が確認されている。いずれも土坑群西辺の竪穴建物との間に構築されているが細別時期は明らかではない。

まとめ

多喜窪遺跡は野川最上流域付近に位置する縄文中期の集落である。今次の調査は調査面積も狭く、わずかに竪穴建物 1 棟、土坑 1 基を調査したに過ぎないが、国分寺市域では本町遺跡、恋ヶ窪遺跡に次いで調査が早くから行われてきた学史上でも重要な縄文時代遺跡の一つであることを鑑み、現時点までの周辺地区の調査成果を踏まえ「多喜窪縄文中期集落」の検討を行った。

今回の報告で、当該集落の中央付近に相当する既往調査地区の状況を再検討したところ、縄文中期の土坑はその分布と遺物の出土状況等のありようから、その多くは墓域を形成する土坑墓であると想定された。そのうち小型深鉢形土器、大型粗製石匙等の副葬品と思しき遺物の出土が顕著な土坑は 7a～9a 期に限定されるということも明らかになった。さらに同時期に倒置土器を伴う甕被葬の可能性あるものが 4 基（7a～8b 期）確認されている。近年、中期前半の甕被葬の可能性のある土坑墓の事例が知られるようになってきたが、東関東の中期後半～後期を中心とした廃絶竪穴で行われた「廃屋墓」の甕被葬との関係も興味深い。

このように縄文中期の当該地域の葬法の時期的、地域的な特徴を具体的に示したのものとして貴重な調査事例である。周辺で縄文中期前半のほぼ同時期の墓域が明確になった遺跡の一つとして小金井市貫井南遺跡が挙げられる（小金井市 2019）。貫井南遺跡は国分寺崖線から南に少し離れた野川右岸の立川段丘上に立地する集落跡で、中期前半（5a 期）～後半（11c 期）の竪穴建物が約 30 棟検出されている。ここでは竪穴建物を囲むように中央土坑群に約 150 基の土坑が検出され、小型深鉢型土器、赤塗された耳栓 1 対、ヘラ状垂飾などが出土しているが、大型粗製石匙等の石器類を伴う土坑が全く見られない点、土坑の副葬品の出土比率が低いなど本遺跡との差異も認められる。大型粗製石匙の副葬は中期前半を中心に中部～南関東に広域で認められるものの、どの遺跡でも普遍的に見られるということではなさそうである。土器が出土している時期のわかる土坑は 6b 期～9c 期とやや時間幅がある。

多喜窪遺跡付近ではこれまでに 79 箇所が発掘調査が実施されているが、果たして遺跡全面に調査が実施されたわけではない。国分寺市などの宅地、市街地化が著しく進んだ地域では縄文時代の集落の全体像がわかる遺跡は貴重である。長らく詳細不明であった多喜窪遺跡も少しずつではあるが実態が解明されつつあるが、これも小規模ではあるが長期に亘る継続的な調査の蓄積による賜物である。

第3節 多喜窪遺跡出土縄文土器の3D計測

はじめに

武蔵国分寺跡第756・758次調査の報告に伴い、多喜窪遺跡で昭和20年代に調査された際の出土資料のうち縄文土器4点について、あらたに3Dフォトグラメトリにより計測した(表17・第9図)。計測の手法と成果について以下に報告する。なお本報告に関わる内容のうち、写真撮影は津田・上山が、解析処理は津田・上山・野口が、図化・数値データ分析と本文執筆は野口が担当した。

表17 対象資料一覧

資料番号	新地平編年	器高(z)	外径1(x)	外径2(x)
0001 X住-1	9a期	428.762	327.636	346.507
0002 2号住-3	11b期	178.634	182.530	183.742
0003 2号住-2	10a期	372.131	305.805	313.819
0004 2号住-1	11a期	336.380	288.942	295.347

1. 3Dフォトグラメトリによる計測

3Dフォトグラメトリ(三次元写真計測)は、任意の位置、方向から撮影した多数の写真からステレオ法により再構築した深度情報を利用して対象の立体形状を復元するSfM-MVS法による写真計測技術である(野口2023b)。専用のソフトウェアを使用することで容易に実施できるようになったため、発掘調査現場から出土遺物まで幅広い対象に適用されている。今回は撮影から解析処理、図化までを一貫して実施した。

1-1. 撮影

使用機材と設定は写真42、表18・19のとおりである。基本的には三脚に固定したカメラにリングライトを付設し、対象資料をボックス内の回転台上に設置する。照明はリングライトに加え、ボックスに付属するLEDライトと、必要に応じてLEDビデオライトも使用する。回転台はスマートフォンアプリにより回転角度を設定できるもので、基本的に15度単位で回転させつつ、細部の撮影時には10度、5度単位、および任意の角度で回転させることもある。三脚はエレベーターが昇降するだけでなく、雲台とブームの併用により斜め上面からの撮影が可能なものを使用している。

撮影枚数と時間は表20の通り。撮影時間は最初と最後の画像のタイムスタンプから算出したもので

表18 撮影機材

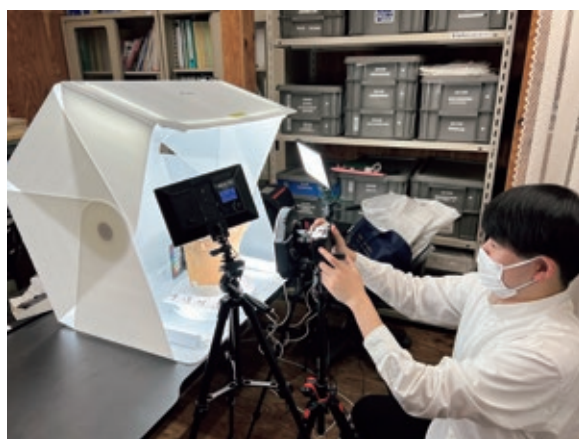


写真42 撮影機材のセッティング

カメラ	SONY ILCE7C	
撮像素子	35mmフルサイズ	(アスペクト比3:2)
画素数	約2420万画素	(6000×4000pix)
解像度	350dpi	
レンズ	SEL50M28	
リングライト	F&V R300SE	*5600K, 1187Lm×1
撮影ボックス	FOLDI03	
回転台	FOLDI0360	
照明	Orangemonkie Halo Bars	*5600K, <1200Lm×2
	VILTROX L132T	*5600K, 1065Lm×2

表 19 撮影時の設定（共通）

モード	絞り優先
絞り	F16
ISO	100
測光モード	中央重点測光
画像形式	RAW/ JPG
画質モード	エクストラファイン

表 20 撮影枚数と時間

資料		撮影枚数	撮影時間
0001	X住-1	590	2:46:00
0002	2号住-3	327	1:10:00
0003	2号住-2	458	1:29:00
0004	2号住-1	702	2:43:00



写真 43 正位置の撮影例（0001）



写真 44 逆位置の撮影例（0003）



写真 45 横位置の撮影例 (0001)

あくまで目安であるが、オートフォーカスと自動回転台、高速書き込み可能な SD カード (UHS スピードクラス 3) の使用により 1 枚あたり平均 17 秒となっている。撮影枚数は器形とサイズによるが、おおむね 300 枚以上を目安とする。底部を設置させた正位置、口縁部を設置させた逆位置から、全形、内部・内側面、および必要に応じて文様や突起、穿孔部の細部形状をカバーするようにラップ率に注意して撮影した。また資料 0001 のように口縁部の突起形状などにより逆位置に設置することが困難なものは横倒しに安置した (写真 43 ~ 45)。撮影した写真は適宜コンピューターに移動し、解析処理を実施する。

1-2. 解析処理

フォトグラメトリ・ソフトウェアとして Agisoft 社の Metashape Professional⁽¹⁾ を使用した。ソフトおよびコンピューターの諸元は表 21 の通り。また Metashape での解析処理の基本設定は表 22 の通りである。

表 21 フォトグラメトリのソフトと機材

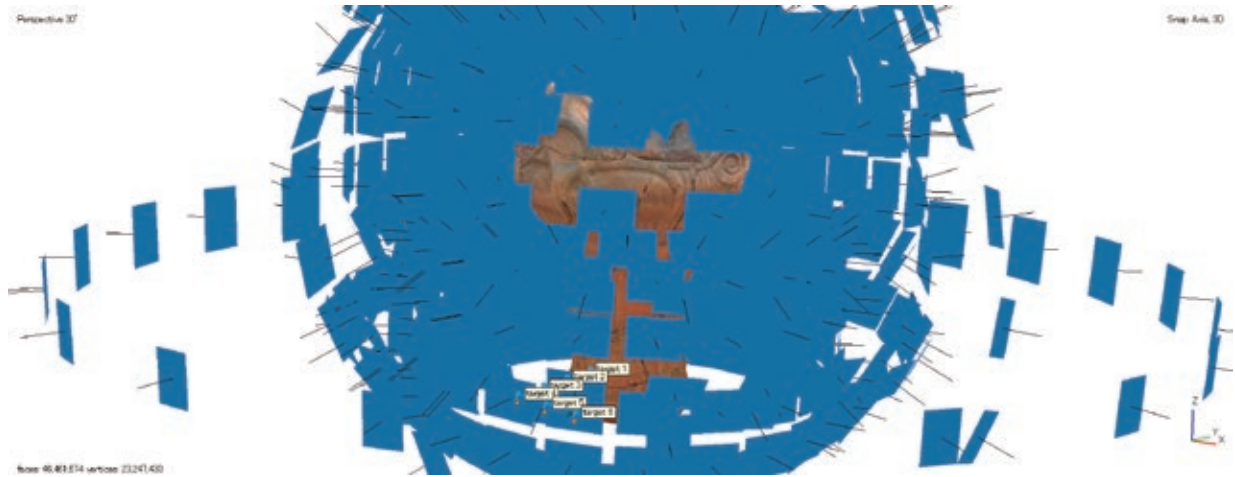
なお今回は JPEG 画像の解析処理に必要な成果が得られたため、RAW 画像はバックアップとし、現像しての解析処理は行っていない。基本手順は以下の通り。

- ① アラインメント 1 : 撮影した写真をすべて読み込み、基本設定のとおり精度 = 最高で実施する。
- ② カメラ最適化 : 段階的選択の、画像数 = 2、プロジェクションエラー = 0.5、再構築の不確実性 = 10 でタイポイントをフィルタリング、削除し、毎回、カメラ最適化をすべてのパラメーターについて実施する。

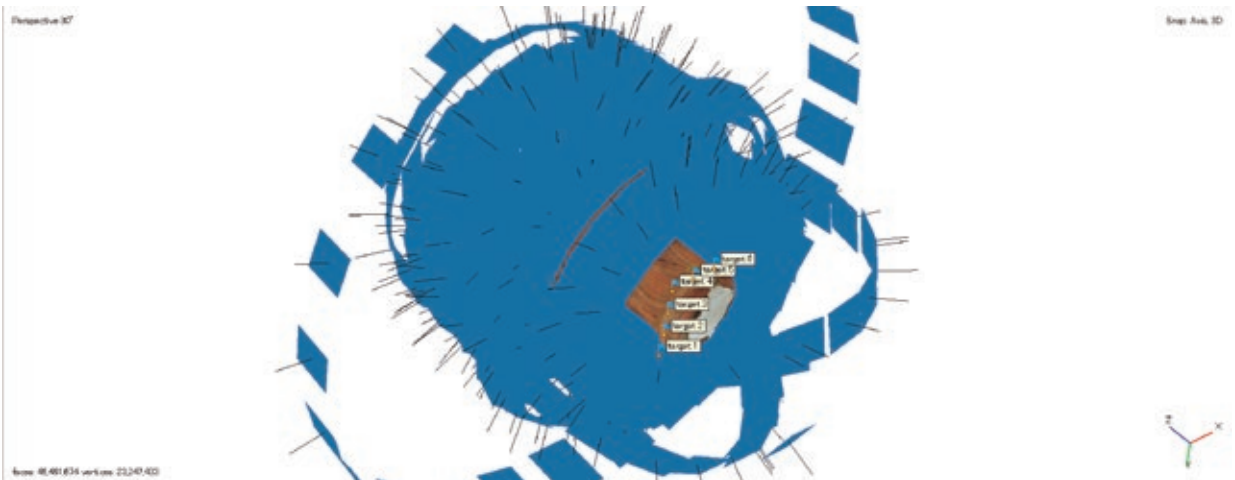
ソフトウェア	Agisoft Metashape Professional	1.8.4
PC1	Mouse G-Tune E5-165	
CPU	i7-10870H	8コア 16スレッド 2.2GHz
GPU	GeForce RTX3060Laptop	
メモリ	64GB	
OS	Windows10pro	
PC2	Frontier ZN	
CPU	i7-10750H	6コア 12スレッド 2.6GHz
GPU	GeForce RTX2070Super	
メモリ	64GB	
OS	Windows10pro	

表 22 解析処理の設定 (共通)

アラインメント		カメラ最適化		メッシュ		テクスチャ	
精度	最高	パラメーター	f, b1, b2, cx, cy, k1-k4, p1, p2	ポリゴン数	高	マッピングモード	汎用
汎用事前選択	はい			ソースデータ	深度マップ	ブレンドモード	モザイク
座標事前選択	いいえ			サーフェイスタイプ	自由形状	テクスチャサイズ	4096×1
キーポイント制限	40000			内挿補間	有効	穴埋めを有効	はい
タイポイント制限	4000	深度マップ		正確なポリューメトリックマスク	いいえ	ゴーストフィルター	はい
マスク	キーポイント	品質	最高				
静止したタイポイントを除外	はい	フィルタリング	強				



第 59 図 アラインメント状況 (0001) その 1



第 60 図 アラインメント状況 (0001) その 2

- ③ マスク作成：②により精度の低いポイントを除去した後にタイポイントからメッシュを作成（ポリゴン数=高）、モデルからすべての写真にマスクをインポートする。
- ④ アラインメント2：マスクをキーポイントに適用し、すべての写真についてアラインメントをリセットして再処理を実施する（第 59・60 図）。
- ⑤ カメラ最適化：②と同じ基準と手順で実施する。
- ⑥ メッシュ構築：深度マップをソースデータとして基本設定の通り実施する。
- ⑦ テクスチャ構築：基本設定の通り実施する。
- ⑧ スケール付与：撮影時に写し込んでおいた、50 mm感覚でL字型に配置した6点のマーカを自動識別し座標を付与する。

資料ごとの解析処理の結果は表 23 の通りである。SfMの精度として、アラインメントの誤差(1.19663

表 23 フォトグラメトリの結果（計測精度・解像度、処理時間）

	アラインメント			タイポイント	深度マップ	メッシュ	メッシュ	テクスチャ	投影変換誤差		累計処理時間
	時間	再投影誤差 (RMS)	中間キーポイントサイズ		時間	時間		時間	pix	mm	
0001	0:33:14	1.38970	4.00215	235332	3:50:00	4:28:00	46461674	0:50:45	7.658	0.325	9:41:59
0002	0:20:04	1.09365	3.68493	66297	2:23:00	4:21:00	31051122	0:22:01	5.822	0.887	7:26:05
0003	0:23:31	1.06170	4.08169	107087	3:11:00	3:36:00	31289547	0:36:38	19.769	0.663	7:47:09
0004	0:38:27	1.24146	4.43263	191385	5:12:00	8:20:00	41980369	1:05:57	15.167	1.166	15:16:24
平均値		1.19663	4.05035						12.104	0.760	
分散		0.02270	0.09433						42.455	0.127	
標準偏差		0.13048	0.26598						5.643	0.308	
		*pixel	*pixel						*pixel	*mm	

± 0.26096pix: 2σ 以下同)、キーポイントサイズ (4.05035 ± 0.53196pix)、投影変換誤差 (12.104 ± 11.286pix/ 0.760 ± 0.616mm) の結果が得られた。また 3D フォトグラメトリの成果として 310 万～465 万メッシュのモデルが得られた。

1-3. 3D データの出力

3D フォトグラメトリデータは、Agisoft Metashape のネイティブ形式である .psx および付随するデータフォルダと、入力した写真一式を一次アーカイブとして保管している。ただしこのデータは Metashape でしか利用できないため、標準的な交換形式で出力する必要がある。目的ごとに以下のファイルを作成し、出力した。資料ごとの詳細は表 24 の通り。なお出力に際し、座標系を統一している (1-4 で詳述)。

- a. 外部利用を前提とした長期保存アーカイブ：オリジナルデータを OBJ 形式に変換したもの。ASCII 形式 (バイナリ圧縮なし) での保存とする。 .obj、.mtl (マテリアル参照ファイル)、.jpg (テクスチャ画像) で構成される。
- b. 図化等に使用する交換形式データ：オリジナルデータを PLY 形式に変換、読み込み・書き込みと編集作業の便宜上、バイナリ圧縮で保存しファイルサイズを圧縮する。またテクスチャデータは RGB 変換してメッシュ・頂点に書き込む。

表 24 フォトグラメトリの結果
(データサイズ)

	Metashape*	OBJ1	PLY	OBJ2
0001	50.8GB	5.68GB	2.22GB	57.2MB*
0002	32.6GB	3.71GB	1.48GB	21.4MB
0003	36.9GB	3.75GB	1.5GB	21.4MB
0004	88.1GB	5.08GB	2.1GB	19.2MB

*RAW画像含む

*50万メッシュ

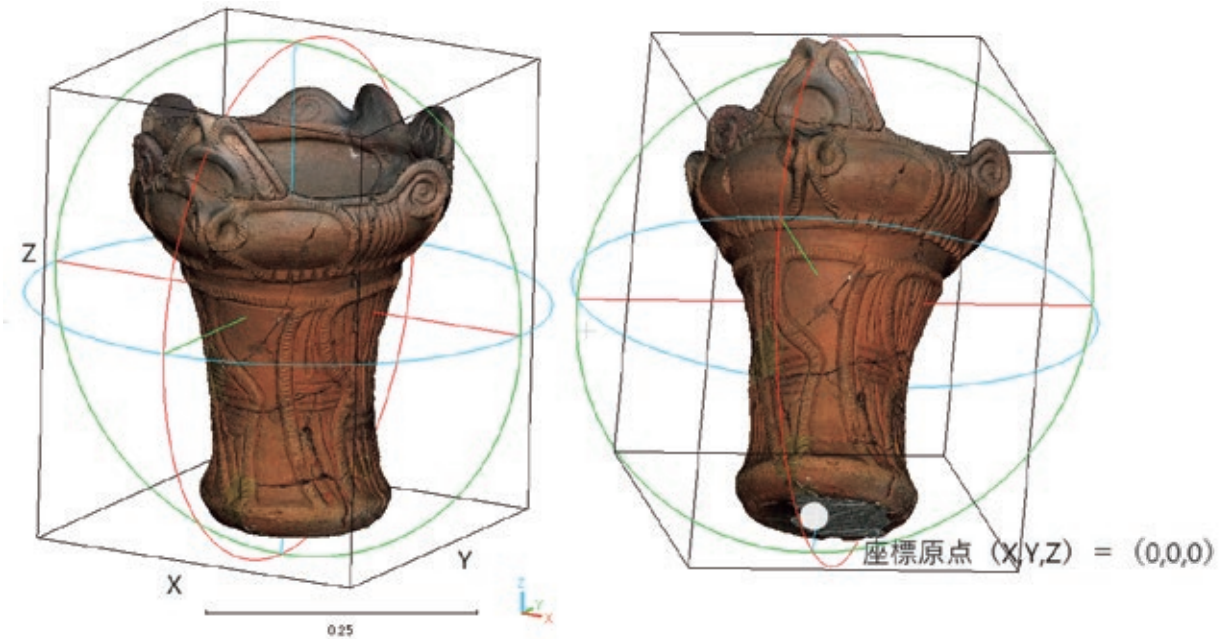
- c. ウェブ公開用の軽量化データ：オリジナルデータを Metashape 上で 20 万メッシュまで減算 (0001 のみ 50 万メッシュ) した上で、ノーマルマップとディフューズマップをオリジナルデータより作成し UV 展開したもの。国分寺市ふるさと文化財課の Sketchfab⁽²⁾ アカウントからの一般公開などに用いる (中野 2023)。

その他、必要に応じた派生データの作成も行うことができるが、報告書作成段階においては上記 3 つの出力を基本とした。

1-4. 3D データの規格化・標準化

1-2-⑧でスケールを付与されたデータは S=1/1 の実寸データであるが、座標原点や座標軸は任意のままである。図化や数値化、分析の便宜のため、以下の通り規格化・標準化した (第 61 図)。この作業は OBJ 形式で書き出した交換ファイル上で、オープンソースの点群・メッシュ編集ソフトウェア CloudCompare3) を使用した。

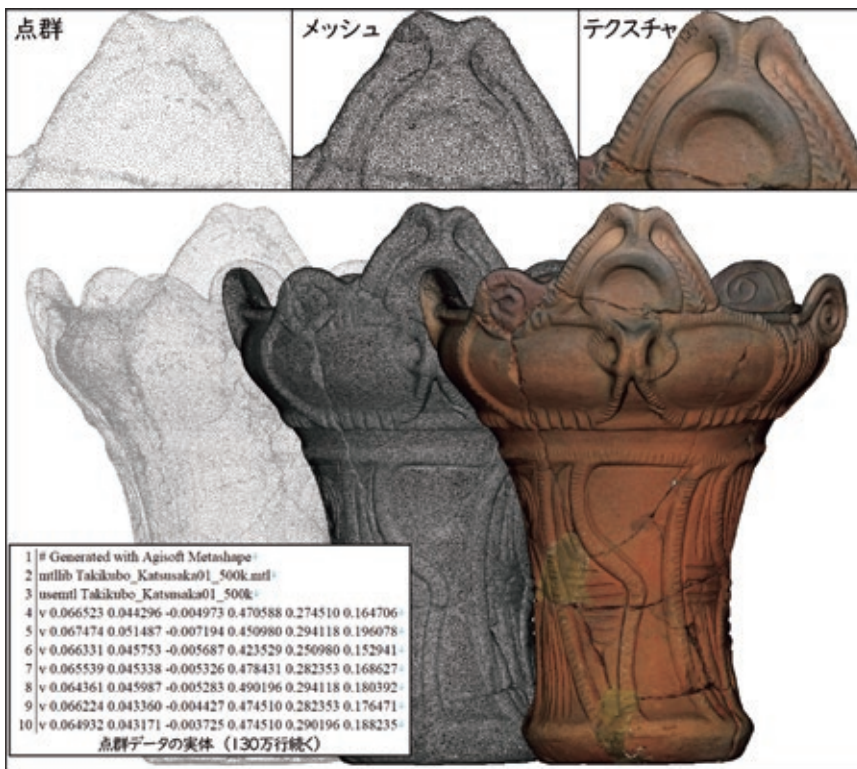
- ア. 座標軸の設定：器高を Z 軸、図化上の正面に対して左右方向を X 軸、奥行き方向を Y 軸とした。



第 61 図 座標系と原点 (0001)

土器を回転体と見なすとき、XY が外接楕円形の長軸 / 短軸に対応する。なお表 17 の器高と外径は、この XYZ の外接多角形（バウンディングボックス）の各辺の長さの値である。

- イ．向き・傾きの設定：3次元ベクトル上の向き、傾きは、基本的に従来の図化方法を基準とした。図化正面にもとづきヨー（Z軸回転）、底面を設置した際の器体軸によりピッチ（Y軸）、ロール（X軸）を決定する。具体的には CloudCompare⁽³⁾ の移動・回転機能を用いて、目視・手動で作業を行った。
- ウ．座標原点の設定：器体中央 = X, Y の重心の、底部の接地面 (= Z 最小値) を原点として座標変換を行った。変換後、1-3-a~c のデータを書き出した。



第 62 図 3D 計測データの概要 (原図：野口 2023b 図 1)



第 63 図 計測部位

2. 3D データの図化と計測

計測、取得された3Dデータの実体は、対象の表面をち密に覆った計測点の集合である。計測データにもとづく資料0001の表面積でメッシュ数を割り返すと、78.7点/mm²という密度が得られる(第62図)。このち密な点群・メッシュで構成されるデータは、さまざまな図化や数値データの取得に利用できる。

以下、いくつかの事例を提示する。

2-1. 正射投影展開図

考古学資料の図化に用いられる正射投影展開図(写真)は、従来は各面ごとに作図または撮影していた。3Dデータは全周囲の表面の情報を持っているため、向き・傾きを指定することで単一のデータから90度単位または任意の角度の正射投影展開図を作成できる。

土器の場合、従来は正面と断面のみの図示が一般的であった。これは回転体として一つの面(正面)で器形を代表させるという方法論にもとづくものであり、器面上に連続的に展開する文様などは、別途、円筒または扇形展開図(写真)として図示されることもある。一方、正射投影図の利点は、平面上の位置関係、距離、角度が正しく反映されることにある。そこで、ここでは3Dデータにもとづく各資料の5面展開図(正面、左右側面、背面、上面)を図示した(第64・66・68・70図)。底面も図示可能であるが、今回は残存率や底部圧痕等がみられないことから割愛している。

また3Dデータは、形状情報と色・テクスチャ情報を別個に保持している。または表示の切り替えが容易である。色情報は、胎土や焼成、スス・コゲなどの使用痕跡の理解に有効だが、一方で器形や文様



第64図 5面展開図・縦断面図・半截面図(カラーテクスチャー)(0001)



第65図 5面展開図(陰影図: EDL フィルター)(0001)



第 66 図 5面展開図・縦断面図・半截面図（カラーテクスチャー）（0002）



第 67 図 5面展開図（陰影図：EDL フィルター）（0002）



第 68 図 5面展開図・縦断面図・半截面図（カラーテクスチャー）（0003）



第 69 図 5面展開図（陰影図：EDL フィルター）（0003）



第70図 5面展開図・縦断面図・半截面図（カラーテクスチャー）（0004）



第71図 5面展開図（陰影図：EDL フィルター）（0004）

の形状把握の妨げになる場合もある。そこで5面展開図について、色・テクスチャ情報を非表示にした陰影図によるものも作成した（第65・67・69・71図）。これらの正射投影図の作成にはCloudCompareを使用している。

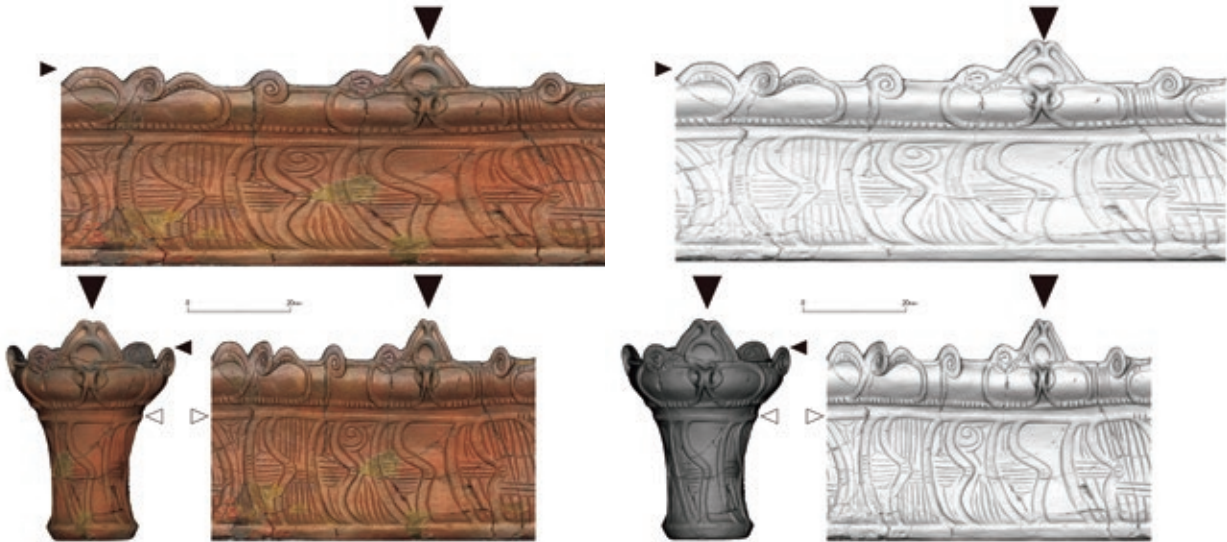
2-2. 円筒展開図

器面上に連続的に展開する文様を図示するために、拓本を円筒展開図状に配置したり、スリットカメラによる展開写真（小川1989）が用いられてきた。3Dデータは全周の表面情報を持っているため座標変換計算により、正射投影以外の展開も容易にできる。CloudCompareでは円筒、円錐の2つの展開図を作成する機能がデフォルトで備わっている。ここでは円周方向の文様の配置、構成を可視化するために円筒展開図を作成した。

なお展開写真の技法を確立した小川（前掲）も指摘している通り、シンプルな円筒形ではない土器の場合、どこに焦点を当てるかによってゆがみが生じる。デジタルデータの利点は、展開位置や角度、範囲を数値で指定できることで、これにより同一データにもとづく限り再現性が担保される。今回、資料0002以外については口縁部と胴部で径が異なることから、口縁部径と胴部径での円筒展開図を出力、また正射投影展開図と同様に色・テクスチャ情報表示と非表示（陰影図）の別、計4種類の円筒展開図を作成した（第72～78図：0002のみ口縁部径による円筒展開図のみ）。

2-3. 断面図

従来の作図法では、断面図はある任意の断面上の輪郭線図を指す。マコ、キャリパーなどの道具を



第 72 図 円筒展開図（カラーテクスチャー）（0001） 第 73 図 円筒展開図（陰影図）（0001）



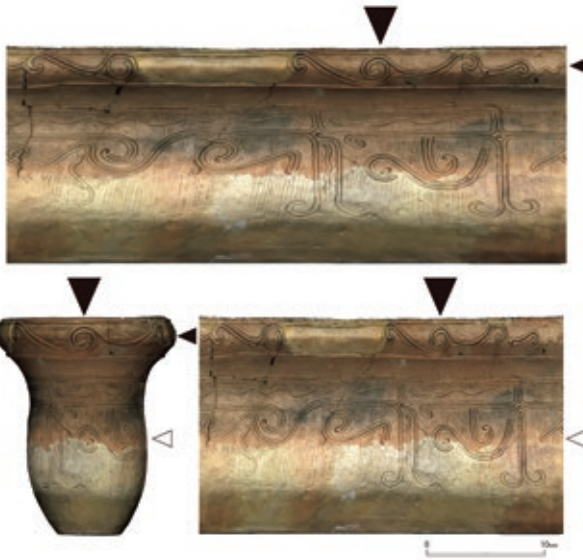
第 74 図 円筒展開図（カラーテクスチャー・陰影図）（0002）

使って実際の土器の表面形状をかたどりし、定規などで測り込んだ基準位置に合わせて作図される。3D データの場合は、データ上で指定した位置をスライスした形状情報を取得し、必要に応じて線画として出力する。今回は正面図に対応する一つの縦（高さ方向）の断面図を作図し正射投影展開図に付した（第 64・66・68・70 図）。これ以外にも、任意の角度で縦断面図を作成したり、複数の横断面図を連続で作成することも可能である（野口・斎藤 2018、野口・藤森 2021）。

また断面線図だけでなく、完形または復元個体を半截した図化も可能である。断面線図と同様に正射投影展開図に付している。今回の対象は復元範囲も広く半截断面図から得られる情報はあまり多くないが、文様、整形・調整痕跡、およびスス・コゲなどの使用痕跡の内外の位置や関係を示すうえで有効である。縦断面図と同じく、5 面展開図（第 64・66・68・70 図）に付している。

3. 3D データの解析：面的連続的な 3D データから得られる情報

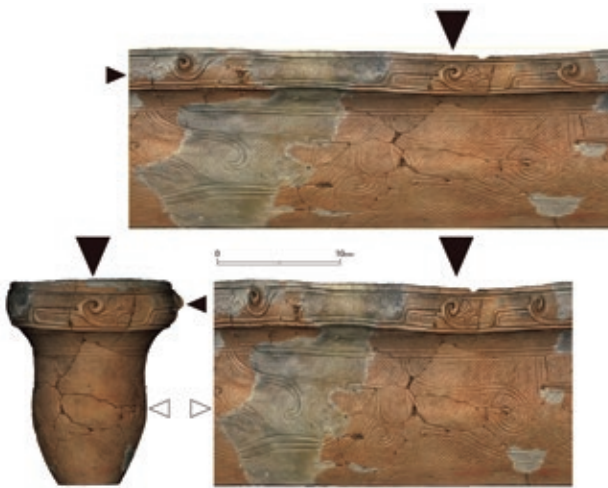
従来の縄文土器の実測図では、隆帯や沈線など文様構成要素は基本的に線画の形式で描画、表現され



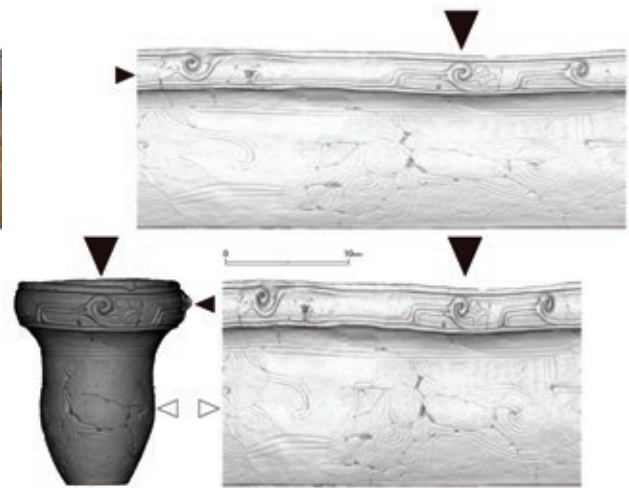
第 75 図 円筒展開図（カラーテクスチャー）（0003）



第 76 図 円筒展開図（陰影図）（0003）



第 77 図 円筒展開図（カラーテクスチャー）（0004）



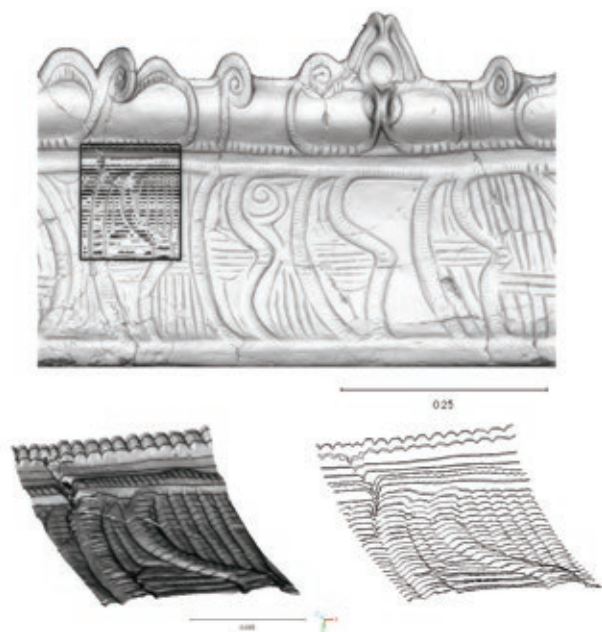
第 78 図 円筒展開図（陰影図）（0004）

てきた。たとえば沈線の肩部、あるいは断面V字状の沈線の底部は傾斜の変換点が明確に線をなしているの、客観的かつ明示的に位置や範囲を特定して示すことが可能である。一方、断面が半円形状（かまぼこ状）の隆帯や凹線の場合、断面形状の変化は連続的であり、頂部または底部がどこで区画されるのかを正確な位置によって示すことは困難である。学史的には、初期に点描やハッチング、薄墨の濃淡などで表現される場合もあったが、その後、実線と補助的な破線（またはかすれ線）で表現する方法にほぼ置き換わっている。その上で、面的な情報は拓本や写真が併用されるとともに、必要に応じて断面線図が示されてきた。

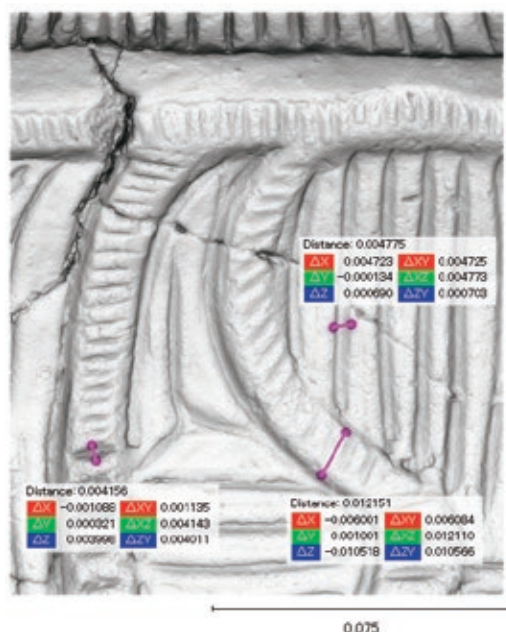
これに対して3Dデータは土器表面（内面を含む）の連続的な計測データであり、稜線や谷底線のみを計測して図化したものとは根本的に異なる。その特性にもとづく図化と、数値属性情報の取得について以下に検討する。

3-1. 文様等細部形状の図化表現

資料 0001 は、器面全体を刻み目を施された隆帯により区画されている。胴部では一か所を除いて区画内には沈線による文様が充填され、一方、頸部～口縁部では一か所を除き空白のままとなっている。このうち胴部の一か所（背面の胴部上半）について斜め視点で拡大表示し、かつ5mm単位で横方向の横



第 79 図 文様細部の陰影図と連続横断面 (0001)



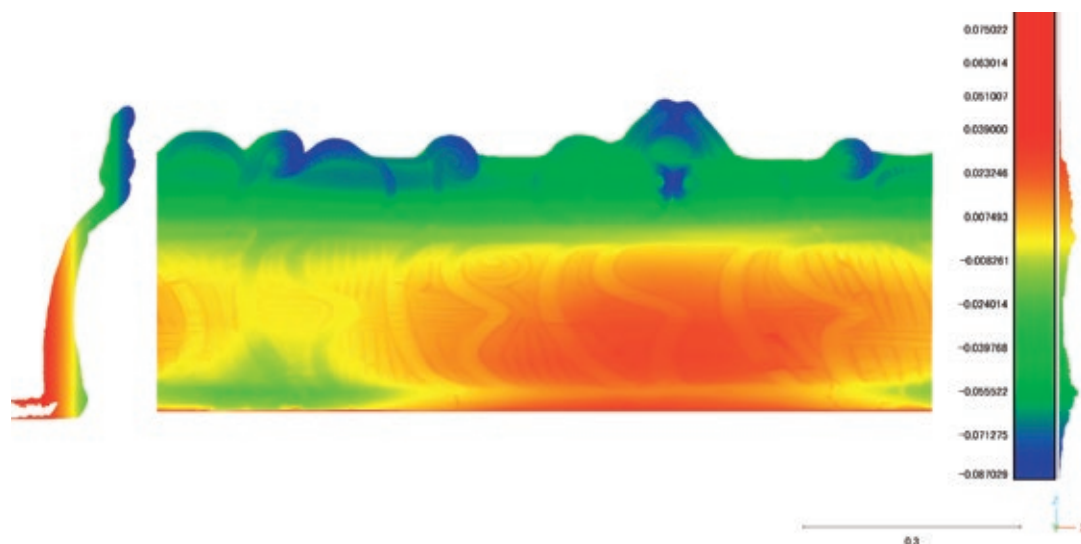
第 80 図 円筒展開データ (斜め俯瞰: 0001)

断面を抽出、図示した。実物資料を観察する機会がある者には当然のことであるが、隆帯の肩部や連続する沈線の間は横断面形が半円～角の丸まった台形状を呈し、直線でその位置や範囲を示すことは難しい (第 79 図)。5 面展開図、円筒展開図に付した陰影図は、従来の実測図表現と異なるため違和感を生じさせるかもしれないが、連続的な器面の細部形状を線分で代表 (抽象化) させず、より実態に即した状態で示すことができる図化表現だと言える。

なお 3D データは表面上のち密な計測点のすべての位置座標を保持しているため、任意の 2 点間の距離 (水平距離、垂直距離、斜距離) を取得することも可能である (第 80 図)。参考数値として、文様区画の隆帯の幅 = 12.2mm、隆帯上の刻み目の幅 = 4.2mm、区画内の沈線の幅 = 4.8mm が示されている。複数個所で計測値を取得し統計処理を行うことで、沈線・刻み目の工具のサイズや形状、および隆帯の粘土紐の幅や厚さを数値化することが可能になる。

3-2. さまざまな可視化表現手法

第 72 ~ 78 図に示した円筒展開図は平面に投影変換されたものではなく、オリジナルの 3D データを中心軸基準の円筒座標系に変換した上で指定した円周に沿って展開したものである。このため厚さ (器



第 81 図 円筒展開データの厚みの段彩図 (0001)

厚)方向の情報を保持している(第81図)。第79図の連続横断面も、この展開3Dデータ上で抽出したものになる。

陰影図は、立体的な表面形状に対して光源の位置や角度を指定することで反射や影をバーチャルに再現したものである。ソフトウェアによって光源の位置・角度や種類を変更することもできる。

それとは別に、表面形状に関する様々な数値情報を色(カラースケール)に変換して図化することもできる。例えば第81図は円筒展開後の厚さ(正確にはY軸基準面からの距離)の数値を色(RGB)に変換して図化したものであり、地形図表現における段彩図と同じものである。カラースケールと厚さの数値の対応は右端に示している(単位=メートル)。胴部の、5面展開図における正面に相当する範囲が赤色側に寄っているのは、基準面からの距離が小さい=中心軸により近い方向に偏りを示しているということになる。これは第64・65図の6面展開図の側面図に見られる前傾(正面側に傾いている)状態を反映している。対して口縁部では正面と背面の間で色の違いが顕著ではなく、胴部ほどの偏りがないことを示している。

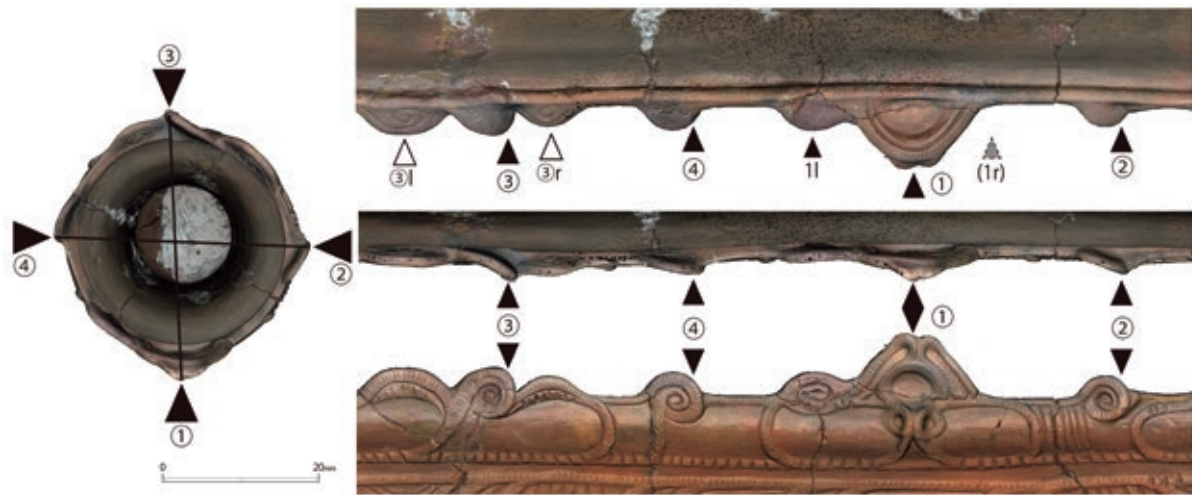
第82図は、表面の各計測点の傾きの方向(方位:0~360度)をグレースケールに変換したものである。図の左上方向30度を起点として、時計回りに90度ずつ、白~黒を繰り返すグレースケールを適用したことで縦方向の凹凸の、特に谷線(折れ線)が強調されるとともに、横方向の沈線や刻みも可視化されている。また破片の接合部も同様に強調されている。一方で陰影図と異なり口縁~頸部の円周方向のふくらみや隆帯は表現されず平坦に見える。このように表面の巨視的~微視的な凹凸だけでなく各種数値を可視化表現できることが3Dデータの特徴であり、肉眼観察では困難な特徴量を把握することも可能になる。



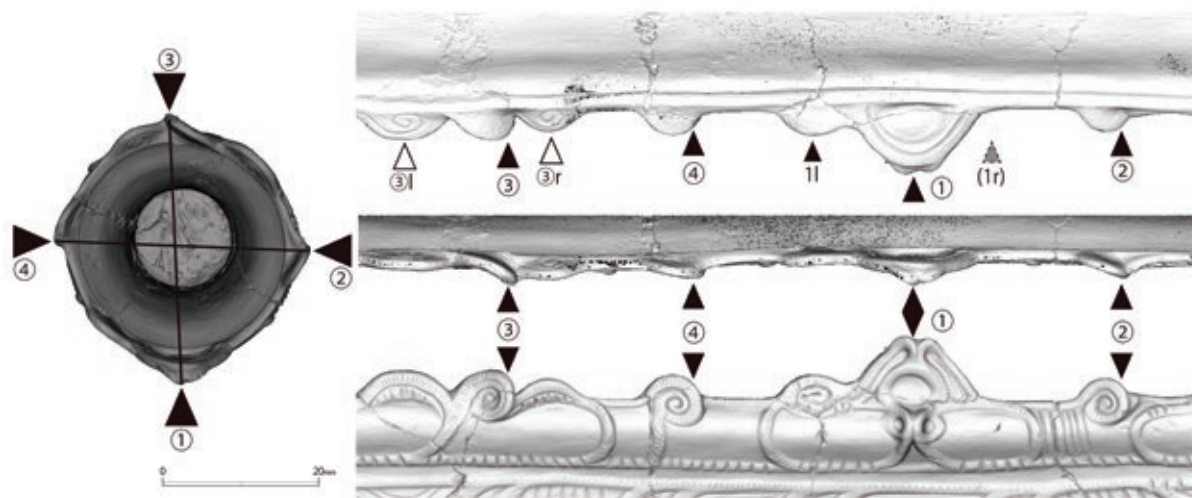
第82図 円筒展開データの傾斜方位角図(0001)

3-3. 立体物としての土器の構成・構造をどのように図化できるか

資料0001については、すでに石井(2019)が文様構成の特徴的な非対称性について詳細を解説している。論考内では器表面の文様と口縁の突起、さらに内面側の文様の関係性について議論が展開されるが、従来の実測図や展開写真のみからその関係性と構造を把握することは難しい。そこで第83・84図に、円筒展開図の内面、上面、器表面を図示するとともに、上面の正射投影図状に各突起の位置を表示することで対応関係を示した。文様構成の詳細や型式論的な考察については別稿に譲るが、たとえば③の左



第 83 図 口縁部内外面の文様・突起の対応関係 (0001 : カラーテクスチャー)



第 84 図 口縁部内外面の文様・突起の対応関係 (0001 : 陰影図)

右に付置された突起 (③ l/ r) にのみ渦巻が描かれていることが内面の展開図から読み取れる。また②～④の3つの突起は口縁の円周上から反時計回りの方向に飛び出していることが、上面の正射投影図と展開図でそれぞれ確認できる。

なおここで注意しなければならないのは、① 1 および③ 1 の突起については3/4以上が欠失しており復元されている点である。このため③ 1 内面の渦巻については復元の妥当性について確証が得られない。また① 1 について現状では①の左側縁にすりつける形で復元されているが、中心軸を挟んで対になる③と③ l/ r の状態と比較すると、①と① 1 の間にも③と同様の間隙があった可能性も考えられる。ただし① r に相当する箇所突起が欠失した痕跡はないため、③と同様の構成ではなかったという解釈も成り立つ。

いずれにしても3Dデータにもとづく正確な投影と展開図の作成は、実物資料上で立体的に観察される器形や文様等に関して、従来の実測図よりもより多くの情報量を、より正確に示すことが可能である。これによって土器の型式論研究などの基礎情報が、より客観化され共有されることになるだろう。今回はその一例を示すにとどまるが、新たな報告の可能性は提示できたと考える。

註

(1) <https://www.agisoft.com/>

(2) https://sketchfab.com/kokubunji_city_bunkazai

(3) <https://www.danielgm.net/cc/>

あとがき

国分寺市遺跡調査会会長 坂 浩 秀 一

「武蔵国分寺趾の西方三町の丘の上」、「薬師堂の西方、八幡神社の隣接地麦畑」の調査が、都立国立高校考古学部（松井新一）と武蔵野博物館（甲野勇）により1948年8月1・2日に実施され、「東西三メートル六〇センチ、南北三メートル八〇センチ」の方形の竪穴住居跡が発掘された⁽¹⁾。

竪穴の「竈は北側の壁面の中央に凸字形に掘り込んで造られ、国分寺に使用した布目瓦と全く同様の瓦を以て築かれ・・・「荏」刻印・・・「男」をへら書き」したものが検出され注目された（甲野1950）。尚、発掘された竈の写真は後に公表された（甲野1962）。そして、1949年に開催された「武蔵野奈良朝文化展」（8・24～9・6、日本橋三越）には出土の遺物が展観されて注目された⁽²⁾。

この発掘と出土遺物に関心をもった星野亮勝（武蔵国分寺住職）は、周辺の土器散布地（土師器・須恵器と布目瓦）を踏査し、1950年12月に小発掘を試みて縄文時代中期の完形土器を掘りあてた⁽³⁾。「4つの大形把手をもつ土器が発見されたという知らせを同市在住の星野亮勝師から戴き、早速に追調査を進めたところ、その土器を含む一括の住居址内出土の資料を検出」した、と吉田格は回想しているが⁽⁴⁾、完形土器の発掘は、星野から甲野に伝えられ、武蔵野博物館に勤務していた吉田と共に改めて現地の調査が行われ、発掘を実施することになった⁽⁵⁾。

完形土器を発掘した星野の意を承けた甲野は、遺跡発掘届を提出し、1951年2月吉田など（岡本勇ほか）の協力を得て、土器出土地を中心に発掘調査を実施した。

その結果、「国分寺町多喜窪縄文土器」の調査として同年4月に「勝坂式の竪穴住居跡を発掘、土器十二個、石斧六十箇、土製耳栓等を発見」として速報され、多喜窪縄文遺跡の存在が考古学界に広く知られたのである⁽⁶⁾。

「多喜窪遺跡」の発掘は、ついで1951年9月に武蔵野博物館により実施され⁽⁷⁾、さらに1952年4月から5月にかけて継続された⁽⁸⁾。

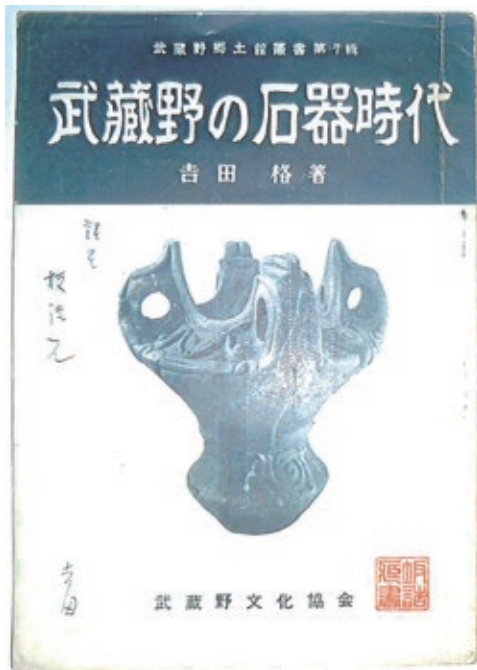
その間、国分寺町では、国分寺町文化財保存会、国分寺の協力により国分寺の境内に国分寺町文化財保存館が設立された。武蔵国分寺跡出土の瓦、薬師堂の西方で発掘された縄文土器、土師器・須恵器などが陳列されることになった。1950年12月に星野亮勝が発掘した縄文時代中期の土器、1951年2月に発掘された縄文時代中期の縄文土器と石器などの一括遺物などであり、甲野勇⁽⁹⁾の指導のもと星野亮勝の尽力により収蔵された「多喜窪遺跡出土の縄文土器群」が脚光を浴びるようになっていった。

1952年12月、国分寺町文化財保存館が開館し、「武蔵国分寺関連、及びその周辺の遺物」を陳列する施設として全国的に知られるようになった⁽¹⁰⁾。

この年（1952）、武蔵野文化協会は機関誌『武蔵野』（32-3・4）を「武蔵国分寺号」として刊行し、多喜窪遺跡出土の縄文時代中期土器群の報告を収録した。吉田格「東京都国分寺町中期縄文式住居趾調査概報」である。

この吉田報告は、1951年2月に発掘調査が実施された多喜窪遺跡出土の縄文時代中期の勝坂式土器の一括資料がはじめて公けにされたものであったが、あわせて多喜窪遺跡の調査史を総括する一文を加えたものであった。

多喜窪遺跡出土の勝坂式土器群は、国分寺町文化財保存館にその一部が展示され注目されていたが、甲野勇『縄文土器のはなし』（1953・6）に「大きな把手のある土器」（中期縄文・勝坂式土器、東京都国分寺多喜



第 85 図 吉田格著『武蔵野の石器時代』

窪)が、吉田格『武蔵野の石器時代』(1955・6)の「表紙」(勝坂式・都下国分寺町瀧久保)に紹介使用され(第85図)、勝坂式の代表的土器として江湖の注目を集めた。

遺跡については吉田『武蔵野の石器時代』に収められた「武蔵野に於ける主要遺跡案内」に「北多摩郡国分寺町瀧久保 中期 堅穴」と紹介され出土遺物は保存館にあり、発掘された堅穴住居跡の写真(発掘後に元の位置に土器を置いたもの)が紹介された。

また、多喜窪出土の勝坂式土器(4把手付)は、日本の縄文土器の代表として1952年にフランス・パリで開催された「東洋美術展」に出陳されるなど、各方面で注目されるようになっていった⁽¹¹⁾。

1975年6月12日付、多喜窪遺跡の遺物群(勝坂式完形土器12点、石器、土製品などの一括)が、国の重要文化財として指定され、東京国立博物館に一部が陳列されるようになった。

1950年12月に星野亮勝によって発掘され、あくる51年2月に甲野勇・吉田格などによって発掘された縄文時代中期の勝坂式土器を出土した第一号堅穴住居跡と同時に北東約20mの地から発掘された堅穴住居跡は、縄文時代中期の加曾利E式土器を出土することが把握され、北側には土師器を出土する住居跡が発掘された。さらに51年9月、52年4月から5月にかけて周辺の継続発掘が実施されたが、縄文時代中期の土器(勝坂式と加曾利E式)と土師器・須恵器、瓦類の出土が伝えられるほか、遺構の発掘については明らかではない。

多喜窪遺跡の発掘によって出土した遺物は、建前上、国分寺町文化財保存館に収められることになっていたため、発掘を主宰した武蔵野博物館、発掘担当の甲野勇・後藤守一・吉田格はそれに従い、遺物の整理、収蔵はすべて保存館で行われた。作業は、主として吉田の指導により同館の星野瑤子などによって行われていたが、諸般の事情により正式報告の刊行には不如意のまま時が経過したのである。

その後、多喜窪遺跡についての調査は、国分寺市教育委員会の所管によって分散的に実施されるようになるが、1986年3月に出版された『国分寺市史 上巻』には、1951年以降の調査結果が記載されている。ただ、多喜窪遺跡の調査史については錯誤が認められるので、この度の報告書の刊行にあたり、本稿で補正した⁽¹²⁾。

この度、多喜窪遺跡の報告書(武蔵国分寺跡第756・758次調査)が刊行される。従来の調査を踏まえて遺跡の様相が捉えられ、縄文時代の早期後半と中期の集落遺跡の一端が明らかにされた。早期は後半の2棟に止まり明瞭ではないが、中期前半の勝坂式～後半の加曾利E式にかけての堅穴建物15棟が発掘され、出土土器の観察により勝坂2式～加曾利E期にかけて形成された集落遺跡であることが明らかにされた。その形状は「環状集落」の様相を呈し、周辺に存在する「土坑」群の在り方ともども縄文時代中期の集落のあり方を示すことが明らかになった。住居と土坑の分布状態は、集落の様相を示す要素であり、今後の本遺跡調査の指針となっている。同時に土器を中心とし、石器と共に遺構との相関関係を考える際に大きな示唆をあたえることとなった。土器の観察と記録の方法の新手法の導入をあえて試み、多喜窪遺跡の調査と研究に有意義な報告文献となったのである。

註

- (1) 市塚正史・波多野松男「武蔵国分寺奈良時代住居跡発掘報告」(『先史文化』1、1950・4)、甲野勇「武蔵国分寺附近の竪穴住居(豫報)」(『武蔵野』31-3・4、1950・2)、甲野勇「武蔵国分寺附近奈良朝住居址発掘」(『日本人類学会』例会発表、1950・11)、松井新一「甲野勇先生の御指導に感謝して」(『甲野勇先生の歩み』1968・7)のほか、甲野勇「武蔵国分寺と庶民の生活」(『全通文化』24、1956・10)、甲野勇『武蔵野を掘る』(1962・10、初版、雄山閣出版)など。
- (2) 稲村坦元「武蔵野奈良朝文化展出品解説」(『武蔵野』31-3・4、1950・2)
- (3) その出土状態については、後日、甲野勇の指導により当初の状態に置かれて写真が撮影された。甲野『武蔵野を掘る』40頁の写真。
- (4) 吉田格「来たし考古学の路」(『武蔵野の考古学—吉田格先生古希記念論文集—』1992・11)
- (5) 「遺跡発掘届」は、(遺跡名) 竪穴住居跡(縄文・土師器)(所在地) 北多摩郡国分寺町(発掘主体) 甲野勇(発掘担当者) 甲野勇(発掘期日) 2.15~20である。文化財保護法の発布(1950・5・30成立、8・29施行)により、遺跡(埋蔵文化財包蔵地)の発掘には届出が義務付けられたため届出がなされた。
- (6) 『貝塚』33(学界點描、1951・4・25)
- (7) (遺跡名) 遺物包含地(所在地) 北多摩郡国分寺町(発掘主体) 武蔵野博物館(発掘担当者) 後藤守一・吉田格(発掘期日) 9・7~12。
- (8) (遺跡名) 遺物包含地(所在地) 北多摩郡国分寺町(発掘主体) 武蔵野博物館(発掘担当者) 吉田格(発掘期日) 4・10~5・20。
- (9) 甲野は「科学的なる古代史はまづ考古学的事実に立脚しなければならない……わが国において最も豊富なる考古学的資料の蒐蔵と完備せる陳列室とを誇る帝室博物館の如きは、卒先その長所を駆使して正確なる古代史を国民の前に展開する努力をおしまないことを我々は信じて」いたが、その「期待は遺憾ながら裏切られた」と1946年に指摘した(『古代史と博物館』『あんとろぼす』1、1946・7)。そして、1952年「往年の生活をしのぶ遺跡の上に造られる所に大なる意味があろう。遺跡と遺物とが結びあって始めて生活がはっきり浮び上る」と国分寺町文化財保存館の設立を期待し協力した(『国分寺歴史博物館の設立』『武蔵野』32-3・4、1952・4)。
- (10) 「博物館・陳列館・研究室・研究団体」(『日本考古学講座』2、1955・10)。同館は、2009年、武蔵国分寺跡資料館の開設により収蔵資料を移管して閉館した。国分寺町文化財保存館の時代、稲村坦元『武蔵国分寺と上代文化』(1959・10)で保存館の概要(「滝窪」出土の縄文土器、国分寺町遺跡案内「多喜窪」など)を紹介し、また星野瑤子『武蔵国分寺』(1967・6)を公けにし、勝坂式土器(多喜窪出土の「重文土器」)の写真を挿入した。
- (11) 関口雄基臣『多摩の歴史』3(1975・6)所収と「国分寺市史」にも「多喜窪出土の土器写真」が収められたが、その後、1993年には東京都教育庁『東京都史跡散歩』の「表紙」にも使用された。
- (12) 多喜窪遺跡は、出土遺物の一部が国の重要文化財に指定されている。発掘の背景など正確に記録しておくことが求められるであろう。鑑誤を看過することなく、補正しておくことは必要であり、あえて付記した次第である。

【引用・参考文献】

- 会田 進他 1986『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
- 安藤文一他 1995『東開戸遺跡（県立湘南老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）』東開戸遺跡発掘調査団
- 石井 匠 2019「武蔵野の縄文土器と岡本太郎」『武蔵野樹林』公益財団法人角川文化振興財団
- 石村喜英 1960『武蔵国分寺の研究』明善堂書店
- 板倉欽之他 2006『武蔵国分寺跡発掘調査概報 33 ー北方地区・西国分寺駅東地区第一種市街地再開発事業に伴う調査ー』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 伊藤 健他 2010『武蔵国分寺関連遺跡・武蔵台遺跡ー多摩総合医療センター（仮称）等建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査ー』東京都埋蔵文化財センター調査報告 239 集
- 稲村坦元他 1923『東京府史跡勝地調査報告書 第一冊 武蔵国分寺址の調査』東京府
- 鶴飼幸雄他 1990『棚畑 八ヶ岳西山麓における縄文時代中期の集落遺跡』茅野市教育委員会
- 岡崎完樹他 1985『武蔵国分寺跡発掘調査報告ー南方地区・府中都市計画道路（1・2・1号線の2）建設に伴う調査』東京都建設局・武蔵国分寺関連（府中都市計画道路1・2・1号線の2）遺跡調査会
- 岡本敏子 2005『岡本太郎の遊ぶ心』講談社
- 岡本太郎 1967『日本の伝統』光文社
- ※『日本の伝統』は他にも、角川文庫（1964）、講談社現代新書（1973）、講談社岡本太郎著作集 4（1979）、みすず書房（1999）、光文社文庫（2005）のものがあり、それぞれで縄文土器の掲載図版が少しづつ異なる。
- 岡本太郎 1980「縄文文化の謎を解く」『岡本太郎著作集 9 太郎対論』講談社
- 小川忠博 1989「展開写真について一序にかえて」『縄文土器大観 1 草創期・早期・前期』小林達雄編、小学館
- 小川将之他 1999『武蔵国分寺南西地区発掘調査報告書ー府中都市計画道路 3・2・2 の 2 号線建設に伴う調査』武蔵国分寺関連（府中都市計画道路 3・2・2 の 2 号線）遺跡調査会・東京都北多摩南部建設事務所
- 小田静夫 1976「縄文中期の打製石斧 東京・貫井南遺跡」『どるめん』10号 JICC出版局
- 小野本敦 2009『武蔵国分寺跡発掘調査概報 34 東僧坊・僧尼寺区画溝・東山道武蔵路の調査』国分寺市遺跡調査会
- 小野本敦 2012『平成 22 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 貝塚爽平 1979『東京の自然史』（増補第二版）紀伊國屋書店
- 貝塚爽平他編 2000『日本の地形 4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会
- 桂 弘美他 2021『令和元年度国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市教育委員会
- 上敷領久 1987「南関東における縄文時代中期の石器ー特に大形石匙についてー」『東京考古』第 7 号 東京考古談話会
- 上敷領久 1994『武蔵国分寺跡発掘調査概報 20 ー国分寺公共下水道面整備南部地区 19 号工事に伴う調査ー』国分寺市遺跡調査会
- 上敷領久 1999『多摩欄坂遺跡Ⅲ 都営内藤 1 丁目第 4 団地建設に伴う事前調査』国分寺市遺跡調査会
- 上敷領久 2007『平成 16・17 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 上敷領久他 2013『武蔵国分寺跡発掘調査概報 38：昭和 54～60 年度僧寺寺院地内等の調査』国分寺市遺跡調査会
- 上敷領久他 2014『平成 24 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 上村昌男 1979「武蔵国分寺跡（第 48 次）」『日本考古学年報』30（1977 年度版）日本考古学協会
- 上村昌男 1982『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報 VI：国分寺市公共下水道南部地区 15 号工事に伴う調査』武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 上村昌男 1986「第三章 弥生・古墳時代 第二節 古墳時代」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 上村昌男・上敷領久 1990『武蔵国分寺跡発掘調査概報 XVI：国分寺市公共下水道面整備南部地区 18 号工事に伴う調査』国分寺市遺跡調査会
- 上村昌男他 2002『武蔵国分寺跡発掘調査概報 26 ー北方地区・平成 8～10 年度 西国分寺地区土地区画整理事業及び泉町公園事業に伴う調査ー』国分寺市遺跡調査会
- 上村昌男他 2003『武蔵国分寺跡発掘調査概報 29 ー北方地区・平成 11～13 年度 西国分寺地区土地区画整理事業及び泉町公園事業に伴う調査ー』国分寺市遺跡調査会
- 国武貞克 1999「VI. 調査成果 1. 旧石器時代」『武蔵国分寺跡北方地区 日影山遺跡・東山道武蔵路ー西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園跡地）住宅市街地総合整備支援事業に伴う発掘調査報告書』西国分寺地区遺跡調査会

- 黒尾和久・小林謙一・中山真治 2004 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3ー勝坂から曾利へー発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- 黒坂禎二他 1985 『北塚屋（Ⅱ）国道140号バイパス関係（寄居町・花園町工区）埋蔵文化財発掘調査報告ーⅣー』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 合田芳正 2005 『武蔵国分寺跡発掘調査概報30ー北方地区・（仮称）国分寺プロジェクト計画工事に伴う調査ー』国分寺市遺跡調査会
- 甲野 勇 1950 「武蔵国分寺跡附近の竪穴住居（豫報）」『武蔵野』第31巻第3・4号 武蔵野文化協會
- 甲野 勇 1952 「国分寺の史跡を訪ねる」『武蔵野』第32巻第3・4号 武蔵野文化協會
- 甲野 勇 1960 『武蔵野を掘る』雄山閣出版
- 小金井市史編さん委員会 2019 『小金井市史 資料編 考古・中世』小金井市
- 小葉一夫他 1993 『多摩ニュータウン遺跡 平成3年度（第3分冊）』東京都埋蔵文化財センター
- 国分寺市史編さん委員会 1986 『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 国分寺市史編さん室 1993 『ふるさと国分寺のあゆみ』国分寺市教育委員会
- 小林謙一 2017 『縄文時代の実年代』同成社
- 小林達雄・小川忠博 1988 『縄文土器大観2 中期Ⅰ』『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 小林達雄 2008 『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 齋藤 忠・吉川逸治 1970 『原色日本の美術 第1巻 原始美術』小学館
- 佐藤敏也・上村昌男 1986 「第三章 弥生・古墳時代 第一節 弥生時代」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 迫 和幸他 2000 『神奈川県厚木市恩名沖原遺跡発掘調査報告書』恩名沖原遺跡発掘調査団
- 新藤康夫他 1982 『神谷原Ⅱ』梶田遺跡調査会
- 島田智博他 2019 『平成29年度国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市教育委員会
- 島田智博他 2020 『平成30年度国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市教育委員会
- 滝口 宏 1974 『武蔵国分尼寺』早稲田大学出版会
- 滝口 宏 1986 「序章ー地と人とー」『国分寺史 上巻』国分寺市
- 竹田 均他 2009 『梶谷遺跡（八王子市No.49 遺跡）新滝山街道整備事業に伴う埋蔵文化財調査』東京都埋蔵文化財センター
- 立川明子 2008 『平成18年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 立川明子 2009 『平成19年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 立川明子 2010 『平成20年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 立川明子 2011 『平成21年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 館（坪田）弘子他 2001 『南八王子地区遺跡調査報告 総括編』八王子市南部地区遺跡調査会
- 坪田弘子 2010 「土壙墓に埋納された石匙ー関東・中部地方の縄文前・中期の事例からー」『比較考古学の new 地平』同成社
- 坪田弘子 2017 「土坑墓に埋納された土器ー南西関東における縄文前期末から中期初頭の様相ー」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀考古学の現在』六一書房
- 坪田弘子 2018 「縄文時代のヘラ状垂飾」『神奈川を掘るⅡ』玉川文化財研究所研究論集2018 玉川文化財研究所
- 坪田弘子 2019 a 「勝坂式期における土器・粗製石匙副葬の様相ー小田原市天神山遺跡第Ⅲ地点の分析を中心にー」『神奈川を掘る』Ⅲ 玉川文化財研究所研究論集2019 玉川文化財研究所
- 坪田弘子 2019 b 「縄文時代中期前半における土器副葬ー五領ヶ台・勝坂式土器分布圏での様相』『古代』第145号 早稲田大学考古学会
- 坪田弘子 2019 c 「土坑墓」『第2回研究会発表要旨 縄文時代葬墓制研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 坪田弘子 2021 「勝坂期の人骨を伴う土坑墓」『神奈川を掘るⅣ』玉川文化財研究所研究論集2020 玉川文化財研究所
- 戸田哲也他 2017 『天神山遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 中野 純 2023 「国分寺市の発掘調査・文化財と3D」『多摩のあゆみ』191: 14-23
- 中山真治 2020 「小型異系統土器を埋納した土坑についてー中部高地・関東西南部における縄文時代中期初頭～前半の類例』『東京考古』第38号 東京考古談話会

- 中山真治 2022 「多喜窪タイプ」の系譜『東京考古』No. 40 東京考古談話会
- 中山真治 2023 「野川流域の旧石器・縄文時代」『歴史講座「武蔵国分寺の成り立ちと武蔵国分寺跡」記録集』国分寺市教育委員会
- 野口 淳 2020 「三次元データの可能性－活用と課題－」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 2』奈良文化財研究所研究報告 24: 59-70 <http://doi.org/10.24484/sitereports.69974-11964>
- 野口 淳 2023a 「文化財 3 次元データ概論 2022」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 5』奈良文化財研究所研究報告 37: 59-70 <http://doi.org/10.24484/sitereports.130529-120077>
- 野口 淳 2023b 「文化財・歴史資料を 3D で記録する」『多摩のあゆみ』191: 4-13
- 野口 淳・斎藤あや 2018 「東京都大田区久ヶ原遺跡採集弥生土器 2 例－3D 計測による博物館収蔵標式資料の再記載－」『大田区立郷土博物館紀要』22: 72-85
- 野口 淳・藤森英二 2021 「栃原岩陰遺跡出土資料の 3D 計測とデジタルアーカイブ化－縄文時代早期深鉢形土器と骨角器を対象とした試行－」『北相木村考古博物館研究紀要』2: 17-28 <http://doi.org/10.24484/sitereports.91482-14963>
- 早川 泉 1979 「武蔵国分寺跡（第 41 次）」『日本考古学年報』30(1977 年度版) 日本考古学協会
- 坂野普鏡他 1999 『武蔵国分寺跡北方地区 日影山遺跡・東山道武蔵路－西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園跡地）住宅市街地総合整備支援事業に伴う発掘調査報告書』西国分寺地区遺跡調査会
- 平田貴正・高橋和恵 1982 『武蔵国分寺遺跡調査会年報 II 第二分冊：昭和 51～53 年度寺地・僧寺寺域確認調査』武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 福島宗人他 2003 『武蔵国分寺跡遺跡 北方地区－西国分寺地区土地区画整理事業に伴う調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告 136 集
- 福田信夫 1997 『武蔵国分寺跡IV 平成 7 年度発掘調査概報』国分寺市教育委員会
- 福田信夫他 2003 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 28（多喜窪遺跡の調査）』国分寺市遺跡調査会
- 府中市 2019 『新 府中市史 原始・古代 資料編 1 考古資料』
- 増井有真 2016 『平成 26 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 宮里学他 1993 『はらやま－都営調布柴崎一丁目第 2 住宅建て替えに伴う発掘調査－ 下巻』調布市原山遺跡調査会
- 御堂島正・藁科哲男 2012 「関東地方南西部における縄文時代中期遺跡出土黒曜石の原産地分析（3）」『神奈川考古』第 48 号 神奈川考古同人会
- 山内清男・甲野 勇・江坂輝弥 1964 『日本原始美術 縄文土器』講談社
- 吉田 格 1952 「東京都国分寺町中期縄文式堅穴住居趾調査概報」『武蔵野』第 32 巻第 3・4 号 武蔵野文化協会（後、吉田格 1973 『関東の石器時代』考古学選書 8 雄山閣出版に採録）
- 吉田 格・土井悦枝 1986 「第二章 縄文時代 第二節 市内の遺跡」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 吉田 格 1992 「来たし考古学の路」『武蔵野の考古学 吉田格先生古希記念論文集』吉田格先生古希記念論文集刊行会
- 領家玲美 2014 「勝坂式土器文化期における土坑墓の様相（1）－南関東を中心として－」『縄文時代』第 25 号 縄文時代文化研究会
- 領家玲美 2015 「勝坂式土器文化期における土坑墓の様相（2）－南関東を中心として－」『縄文時代』第 26 号 縄文時代文化研究会

抄 録

ふりがな	たきくぼいせきはつくつちょうさほうこくしよ
書名	多喜窪遺跡発掘調査報告書
副書名	武蔵国分寺跡第758次調査－西元町二丁目分譲住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査－
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂詰秀一・依田亮一・中山真治・富田陽子・野口 淳・津田富夢・上山淳史・足立とも与・新免歳靖・株式会社パリノサーヴェイ
編集機関	国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会
所在地	〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内
発行年月日	令和6年(2024)3月31日
規格/部数	A4版横組1段 46文字×34行 160頁/300部
資料の保存 問い合わせ先	国分寺市教育委員会 教育部 ふるさと文化財課
	〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内
	TEL 042-300-0073 FAX 042-300-0091 E-mail bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' "	° / ' "			
たきくぼいせき 多喜窪遺跡 むさしこくぶんじあと 武蔵国分寺跡 第758次調査	とうきょうと こくぶんじし にしもとまち 東京都 国分寺市 西元町	13-214	11・19	36° 18' 17"	140° 12' 06"	20200616～ 20200728	56.06	分譲住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
多喜窪遺跡 武蔵国分寺跡	集落跡	旧石器・縄文・ 奈良・平安・ 中世・近世	竪穴建物(SI827J) 土坑(SK3524J) 各1基	縄文時代中期の 土器・石器

特記事項	調査地点は多喜窪遺跡・武蔵国分寺跡として二重に周知された一帯にあり、縄文時代中期(勝坂式期)の竪穴建物・土坑が各1基検出された。竪穴建物からは多量の土器・石器が出土し、とりわけ覆土下層には遺存状況の良好な深鉢・浅鉢類が数個体廃棄されていた。竪穴建物の床面では複数時期の柱穴のほかに、人為的な構造物かは不明であるが杭状の小穴が多数見られた。周辺は戦後間もない頃から縄文時代・古代の竪穴建物が発見されてきたが、学史的な検討を踏まえて、過去の調査成果を累積しながら、本調査地点は南側に土壇墓群を配する環状集落に含まれる場に当たることを想定した。
------	---

※文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なくこの報告書の一部を複製して利用することができます。なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

多喜窪遺跡発掘調査報告書 (武蔵国分寺跡第 758 次調査)

—西元町二丁目分譲住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行日	令和 6 年 (2024) 3 月 31 日
編 集	国分寺市教育委員会 国分寺市遺跡調査会
発 行	国分寺市教育委員会 〒 185-0023 東京都国分寺市西元町 1-13-10 (武蔵国分寺跡資料館内 ふるさと文化財課)
印 刷	株式会社アトミ

©Kokubunji City Board of Education 2024. Printed in Japan

表 紙	アートポスト	菊版	125kg
本 文	マットコート	A判	57.5kg

令和6年(2024)7月8日 デジタル版作成